真・恋姫†無双Withパワーアップキット

ブドウの村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双Ｗｉｔｈパワーアップキット

【Ｎコード】
Ｎ８８１６Ｓ

【作者名】
ブドウの村

【あらすじ】
神に違う世界に送られた少年。
与えられた能力は人のステータスを見る事が出来るというもの。
そんな少年が戦ったり、頭使う物語です。

神に送られて（前書き）

今言える事はスーパー不定期更新です。

神に送られて

少年は白い空間にいた。

いや、漂っていたの方が正しいかもしれない。
その空間には上も下もなく、時間の感覚もない。
身体も動かず漂う事しかできない。

だから少年は混乱していた。

寝て覚めたらこんな場所にいたのである。
いくら寝る前の事を思い出しても特に変な事は起こってはいなかった。

誰だって混乱するだろう。

ちなみに少年は見た目は１５、６歳で黒い学ランを着ている。
見た目と服装から学生という事が予想できる。

『少年、聞こえるか？』

「……」

少年が漂い始めてからそれなりの時間が経つと、突然誰かの声が聞こえた。

頭の中で直接響いているのか、空間に響いているのかわからないが、ともかく姿が見えない誰かの声が聞こえる。

だが少年はそんな突然の声に驚かなかった。

正確には状況の変化に頭がついていけないだけなのだが。

『ふむ。驚かぬか』

だが声の主にそれはわからなかったようだ。

『私は神だ』

（……俺ってこんな夢を見るくらい厨二病を患っていたんだな……）

とりあえず少年はこれを夢だと思うようにしたようだ。当たり前の判断だが。

『回りくどいのは嫌いだから単刀直入に言う。お前にはとある世界に行ってもらう。もちろんお前が昨日までいた世界とは別の所だ。以上。何か質問はあるか？』

「……理由は？」

そこで少年は初めて口を開く。

少年としては夢なら夢で乗ってしまえ、という心境だ。

『私の暇つぶしだ』

「何故俺だ？」

『アミダくじでお前が出た』

「……」

（なんだろう……神らしくないのが逆にリアルだ）

少年は苦笑いをしながらそんな事を考えていた。

「どんな世界だ？」

『行けばわかる。それより質問が多いな。そろそろ切り上げろ』

何故か神はうんざり、といった感じの声をだす。

（……お前、自分から質問を求めたよな……。まぁ、いいか）

「次で最後だ。俺に拒否権は？」

『ない』

「ひどい神だな……」

だが少年はそう言いながら口元が笑っていた。

苦笑いを浮かべた時以外は終始無表情だった彼がである。

『そう言うな。きっとお前はその世界が気に入る。

それにプレゼントも用意した。目が覚めたらズボンのポケットを見ろ。その世界とプレゼントについての説明した紙がある』

「プレゼント……ね」

この時少年はこれが夢がどうか疑問に思っていた。

しかしこれが現実なら現実でもいいかもしれないとも考えも同時に生まれている。

『それではお前の健闘を祈る』

その言葉と同時に、少年は黒い光に包まれた。

黒い光がおさまると、少年は白い空間から跡形も無く消えていた。

賊に襲われて

少年は森の中にいた。

黒い学ランを着て立たずんでいる姿はその場の景色から浮いている。

先程まで白い空間にいたが黒い光に包まれたと思ったら、いつの間にかにここに来ていた。

木々の間から見える空はやけに青々としていて、地面には背の低い草が生い茂っている。

とても静かで時折鳥の鳴き声が聞こえる程度だ。

「あれは夢だったのか……それとも今が夢なのか……」

少年は誰となく呟いた。

少年の記憶する限り、自分の家の周りにこんな森は存在しない。

それに静か過ぎる。

ここがもし彼の世界だとしてもかなり田舎の方だろう。

（……流石にこんな手のこんだどっきり有るわけないよな。有ったとしても俺にする意味ないし）

普通こんな状況になれば慌てるだろうが少年に限ってそれはなかった。

何故か思考が冷静に働いているのだ。

少年自身が驚く程に。

（そういえばプレゼントってやつの説明があるんだったな。……まぁあれが夢じゃないとしたらだがな）

少年は先程の会話を思い出し、自分のズボンのポケットを探る。

案の定、一枚の紙が入っていた。

『こんにちは！！　この紙にはこの世界の事と貴方へのプレゼント

について書いてあります。いきなり違う世界に飛ばされて心配でしょうが大丈夫！！　この手紙さえ読めば（ｒｙ』

「……」

少年は自分に必要な情報が書いてある所まで飛ばすことにする。

「……ここからだな」

全体の三分の二まで行った所で必要な情報が書いてあった。

何故かここからは箇条書だ。

『・この世界は西暦１８０年の中国のパラレルワールドです。

・どう生きるかは貴方の自由です。

・貴方へのプレゼントは人間のステータスが見えるようになる事です。

・見えるのは統率力、武力、知力、政治力、魅力の基本ステータスと武器や軍隊の武装の適性、それから特技です。

・基本ステータスは最高が１００、最低が１、人々の平均値は全て４５です。

・但し、特定の人物は１００を越えます。

・武器や軍隊の武装の適性は最高がＳ、最低がＣです。

・なお見える適性は剣、槍、戟、弓、騎馬、兵器、水軍です。

・基本ステータス、適性は伸びしろがあるもの程青に近い色で、限界に近い色は赤で表示されます。

・特技は基本的に一人一個です。

※これで見れるステータスとは別に熟練度や体調があります。このステータスの数値だけでの判断は止めましょう。

さぁ、ここまで読んだ貴方はもう大丈夫！！　とっても楽しい異世界ライフを楽しｒｙ』

ここで少年は読むのを止めた。

（この手紙が正しいならここは後漢末期。黄巾の乱が起こる二年前か。

ただパラレルワールドというのが気になるが……）

実は彼結構歴史好きで、三国志についてそこそこ知っている。

そのため年号からの判断も直ぐに出来た。

（とりあえずそれは置いといて自分のステータスを見てみるか。書いてはないが自分のだって見れるだろうし。
……どうやって見るんだ？　あ、念じたら出た）

いきなり少年の目の前に表が現れる。
透けていて表の向こう側も見えるので視界の妨げにはならなそうだ。

もちろん他の人間からは見えない仕様だ。

統：７３　武：７２　知：８８　政：９３　魅：９７
剣：Ｂ　槍：Ａ　戟：Ｃ　弓：Ｂ　騎馬：Ｃ　兵器：Ｓ　水軍：Ａ
特技：深謀（計略が強力になる）

（……俺こんなに頭良かったか？）

これが少年の感じた第一印象だ。

彼の学校の成績は中の上。決して人に誇れるものではなかった。

しかし、知力の数値だけ見ると平均値の倍近くある。
しかも知力だけでなく全てにおいて平均を大きく上回っている。

更に魅力以外は緑色をしていた。

赤と青の中間という事はまだ伸びるという事だ。ちなみに魅力はオレンジ色だ。

（神が何か弄ったのかもな。それならこんなに冷静なのも頷ける）

そう考え彼はステータスを閉じる。
これも彼が念じたら閉じれた。

（とりあえず人のいる所にでるか。手紙が本当かどうかも確かめたいし、そうだとしたら言語も確認したいしな）

もしここが古代の中国だとしたら日本語など使われているはずがない。

しかし、パラレルワールドとも書いてあったので、例え日本語でも不思議はないと彼は考えていた。

（そういえば服装が学ランだが大丈夫か？　学ランなんて有るわけないし、変な扱いを受けないか？
……まぁ考えても仕方ないか）

今少年に着替えはない。裸で行く訳にもいかないので着るしかないのだ。

ちなみに荷物にいたっては何もない。強いて言えば手紙があるくらいだ。

（……とりあえず歩くか）

そういう考えに至った少年は、森を歩いて行った。

「オイ、兄ちゃん。珍しい服持ってんじゃねぇか。命が惜しけりゃ身ぐるみ全部置いてきな！！！」

「でなけりゃ痛い目見るぜ！！」

「み、見るんだな」

「……」

少し歩くと武器を持った三人の男達に取り囲まれた。

一人は槍を持った普通の男。

もう一人は異常に小さく、普通の男の半分程しかなく剣を持っているが余り強そうには見えない。

最後の一人は逆に大男だ。手には斧をもちかなりパワーがありそうだった。

（かなりのデコボコなトリオだな……。それにしても何処かで見た事ある気がするんだが……気のせいか？）

そんな状態においても、少年の頭は冷静に働いている。

というよりも何故か余裕があった。

言語は伝わるんだなとか、こんな野党が出るなんてやっぱり後漢なんだなと考えているくらいだ。

「さっさとしやがれ！！　何を黙ってやがる！！！」

ずっと黙っていたのに痺れを切らしたのか小さい男が声をあげる。

「そう言ってやるなチビ。この張燕様に山で出くわしちまったんだ。それくらいの畏縮は当たり前だ」

普通の男が小さい男を宥める。どうやら彼が三人のリーダーのようだ。

（張燕……あの黒山賊の張燕か）

彼には張燕と人物の知識があった。

（たしかかなりの猛将で軍の機敏さから飛燕とか言われていたな）

少年はどのくらいの強さを張燕が持っているのか気になり彼のステータスを開く。

ステータスの表は男の顔の下辺りに表示された。

統：５３　武：６２　知：１７　政：１５　魅：５７

「……うそくさ」

少年は思わず呟く。
熟練度等があるとはいえ、このステータスはないと少年は思った。

（あらかた張燕の名を語ればビビって抵抗しないからそんな風に語ってるんだろうな。
後の二人も武力が小さいのが４７に、でかいのが５０。恐れる程じゃない）

少年は同時に二人のステータスを確認していた。

そしてそれを見て少年は男達はたいしたことないと確信する。

「な、こいつ馬鹿にしやがって！！　デク、やっちまえ！！　相手は丸腰だ！！」

どうやら先程の少年の呟きが男に聞こえたらしく、でかい男に命令をとばす。

「わ、わかったんだな」

でかい男は斧を振り上げ突進してくる。
だがそれはお世辞にも速いとはいえなかった。

（遅いな……）

少年がこう考える余裕がある程である。

実際、少年はいとも簡単に大きな男の一撃をかわし、さらに足を引っ掛けた。

「わ、わわ」

バランスを崩して、男の巨体は前のめりに倒れる。
そして少年は倒れてがらあきになった首の後ろに踏み付けるように蹴りをいれる。

人体の急所に重い一撃を入れられた男は、声すら上げられずに気を失った。

そして少年は今の光景を見て呆然としている小さい男に一気に近づく。

小さい男は一瞬の事で反応ができず、慌てて武器を構えた時には既にに少年は目の前に来ていた。

少年はそのまま渾身の力で男の顎を殴る。
顎を殴られ脳を揺らされた男はそのまま意識を手放した。

「どうした張燕？　たった一人の丸腰相手に三人がかりでこのざまか？」

「クソ……なんだってんだ……」

少年は挑発するように喋りかけるが男は動かない。
流石に今までの流れから少年を警戒しているようである。

（こんな安い挑発には乗らないか……。槍相手に素手で挑んで行くのはきついからカウンターみたいにしたかったんだがな）

（こいつ……何者なんだ？　さっきのデクとチビへの攻撃も正確に急所を狙ってやがった。
姐御ほどじゃないがかなり強ぇ。こちらから動けば確実にやられる！！）

「……」

「……」

お互いの思惑が絡み合い、二人とも動かない。

沈黙が二人の間を支配していた。

「ちょっと待ったぁ！！」

「ん？」

「げ！？」

その沈黙を破ったのは第三者だった。

二人がいがみ合っている近くの木の枝にいつの間にか女性が立っていて、声を発したのだ。

女性は頭に黒い手ぬぐいを巻き、手には細長いこん棒のような武

器を持っている。
目はキリッとしたつり目で、服は胸元とへそが出ているものを着ている。

「とう！！」

女性は枝から飛び降り二人の間に着地する。

それと同時に男は後ずさる。
さらに女性を見て顔を青ざめているのでどうやら男はこの女性を知ってるようだ。

「悪いがこの勝負は預からせてもらう。能面のあんたもそれでいいか？」

女性は少年の方を見ながら言った。どうやら少年に話しかけているようだ。

（……能面？）

「あ、ああ。構わない」

少年は自分の呼ばれ方に戸惑いながらも答える。

「すまないな。……さてと」

「ヒッ……」

微笑みながら少年に詫びた後、女性は男の方を向く。
その時の目つきは厳しく、かなりの殺気が込められていた。

その殺気に押され、男はさらに後ずさる。

「びっくりしたぜ？　俺が山賊から足を洗ったてのにこの辺りじゃまだ張燕が暴れてるって噂がしたんだからよ」

「……」

睨まれている男は何もいわなかった。
いや、全身から感じる殺気のせいで何もいえなかったのだ。
それほどまでに女性の殺気は凄まじく、男の顔は青を通りこして白になっていた。

「それで気になって来てみれば正体はお前だったんだな？　牛角。本当私の名にいろいろ泥を塗ってくれたな、ん？」

「で、でも姐御……」

男は殺気に怯えながらも必死に声を出す。

「問答無用！！　そんな腐った心でこの飛燕、張燕様の名を語るんじゃねぇ！！！！」

しかしそれは女性……張燕の怒りを増長するだけにしかならない。

怒号と共に張燕のこん棒が男に向かって振り下ろされる。

「ヒギャッ！！」

男は反応する事すらできず、張燕に頭をかちわられた。

「「ヒィィィ！！　逃げろぉ！！！！」」

いつの間にか目を覚ましていた男の部下達は、その光景を見て我先にと逃げ出す。

「フンッ！！　覚悟も無しに俺の名を使うなってんだ」

張燕はそれを追わずに見送る。

彼女の足元には男の死体と血だまりが広がっていた。

（これが本物の張燕か強いな。しかし……女性か）

彼の記憶していた張燕は男だった。

だが自ら名乗っているし、あの強さを見せつけられたら少年も信じざるおえない。

（……まさかこの世界は……）

ここで少年の中で一つの仮説が生まれる。突拍子もない仮説だがこの現状では充分にありえるものだった。

（……いや、まだわからないな。結論を急ぐ必要もないし、もう少し考えよう）

とりあえず少年はこの仮説を置いておく事にする。

そして気になったので張燕のステータスを見てみる事にした。

統：８２　武：８１　知：５３　政：４８　魅：６３

剣：Ａ　槍：Ｂ　戟：Ｂ　弓：Ｃ　騎馬：Ｓ　兵器：Ａ　水軍：Ｃ

特技：長駆（騎馬の移動力上昇）

「……強いな」

知力はともかく武力では少年は大きく上回れている。
さらに統率力や武力はまだまだ伸びしろあるようだ。

「お前もなかなか強いと思うぜ？　素手で二人も倒したんだからよ」

「……やっぱりお前最初から見てたろ。俺が奴らに囲まれた辺りにはもう木の上にいたな？」

少年は少々批判がましい目を向ける。

「お、なんでわかったんだ？」

張燕は悪いとも思わずに驚いた顔になる。

彼女は限界まで気配を消して隠れていたため、気づかれるのは驚いていた。

「あいつが自分の事を『張燕』って名乗ったのは一回だけ。しかも俺が切り掛かられる前。つまり最初から見てないとあいつが『張燕』って名乗ってるのわからないからな。

ついでに俺が二人を倒したのも知っていたし」

少年は彼女の気配に気付いていたわけでなく、彼女の言動から推測していた。

だが少年は軽く言っているがこれはなかなか洞察力を持っていないとできない事である。

「へぇー、お前頭いいんだな」

張燕はさっきとは別の意味で感心していた。

戦いぶりから少年の事を武に長ける者と考えていたため尚更だった。

「それより何か言う事があるんじゃないか？」
少年はさらに目を細める。
「それは悪かったって。でもお前なら平気だと思ったんだ。なかなかお前は武があると思ったからな。
……そういえばお前名前なんて言うんだ？」
「……」
ここで少年は黙り込んだ。
勿論少年に名前がないわけではない。
ただその名前は日本名だ。この時代の中国の名前とは全然違う。
「……姓は彰、名は義、字は紅炎だ」
とりあえず彼は偽名を使う事にした。
咄嗟にありそうな名前を言ったため特に意味はない。
「彰義だな。もうわかっていると思うが俺は張燕だ。それでさっきの詫びと言っては何だが街でご馳走させてくれないか？」

「それはありがたい。それにしても意外と律儀なんだな。さっきの感じだとあまり気にしてないような感じだったんだがな」

「サラっと毒吐いたな……まぁいい。それから連れもいるんだが大丈夫か？」

張燕は苦笑いをしながら聞く。

だが彼女はあまりそういう事は気にしない性格のようで、直ぐに普段の表情に戻る。

「大丈夫だ。それでその連れは何処にいるんだ？」

「森を出た所にいる。とりあえず森を出よう」

「わかった」

二人は森の出口を目指し歩き始めた。

「暇だな……」

その森の出口の所に一人の女性がいた。
人一人乗ってもまだスペースが余る岩の上で自らの槍にもたれながら座っている。

容姿は赤い目をしていて青い髪をしている。
白を基調とした裾の長い服を着ていて、裾の先には金色の筋が入っていた。頭には白い帽子をかぶり、もたれかかっている槍は女性の身長くらい長く、先端は赤い。

そんな女性が暇そうな顔をして空を仰いでいる。

「玄鳥め……いくらなんでも時間がかかりすぎではないか？」
その女性は恨めしそうに自分が待っている友の真名を呟く。

少し前に森に入ったきりなかなか戻ってこないのである。

「……少し練習でもするか」

女性は岩の上で立ち上がると懐を探る。
そして懐から一つの仮面を取り出した。

形は蝶をもした仮面のようだが目の周りしか隠せないため仮面としての役割は果たせないだろう。

「フフフ……」

そんな仮面を見て彼女は不適に笑う。

そして素早く仮面を顔に付け、

「美と正義の使者、華蝶仮面推参！！」

と、高らかにポーズをとりながら宣言した。

「……あれがお前の連れか？　もしそうなら飯の話、遠慮していいか？」

「大丈夫だ。あいつは置いていくからな」

「それなら安心だな」

ちょうどその時森から出て来た少年、彰義と張燕はかなり冷たい目をしていた。

（……やはりそうだったか……）

しかし、この光景を見た時彼の中にあった仮説は確信に変わっていた。

（ここは恋姫無双の世界だ）

賊に襲われて（後書き）

感想、誤字指摘等お待ちしています。

食堂に入って

彰義は街の中にいた。

この時代の街は、基本的に四方が城壁に囲まれているものだ。

勿論彰義がいるこの街も城壁で囲まれ、街の中央の大通りを中心に細い道がいくつも伸びている。

細い道はともかく大通りはかなり賑わっていて露店や行商の者も沢山いた。

しかも并州の州勅である丁原がいるため治安もかなり良い。

そんな大通りにある食堂の一角に彰義はいた。

人気のある食堂のようで、昼時という事もあって席は満席に近い。

店内はなかなか小綺麗で、四人掛けの机が十数脚ある。

ウェイターらしき女性が一人忙しそうに店内を歩き回り、店の奥からはいい香りが漂っていた。

彰義達は出入口に近い席をとっていて、彰義の向かい側には張燕が座り、その隣には青い髪の女性がいた。

「ふむ……では彰義殿は異界から来たと？」

青い髪をした女性、趙雲が声を上げる。

先程の蝶の仮面の一件で危うく置いてかれそうになったが、なんとか話しをつけついて来ていた。

「多分な。気付いたらここにいたから正確にはわからないがな」

彼は基本的に全てを話した。

ただ、神の事と自分が知っている三国志の事は話していない。

神の事は異界やらよりも信憑性に欠けるし、三国志の方は、下手に言えばこの世界を混乱させてしまうかもしれないからだ。

その言葉を聞き、趙雲は思案顔になった。真偽の程を考えているのだろう。

「だから変わった服を着ているんだな。手触りも不思議だしよ」

張燕の方は全く疑わずに信じているようだ。
学ランの手触りが面白いらしく、さっきからずっと触っている。

「……いつまで触っている気だ？」

流石に彰義が痺れを切らした。

「いいじゃん。減るもんじゃないし」

だが張燕に離す気は無いらしい。

「それで彰義殿はこれからどうするつもりなのだ？　帰るあても身寄りもないのであろう？」

考えがまとまったらしく、趙雲が話しかける。

「ひとまず仕事を見つける。帰る方法を探すにしても、ここに永住するにしても金がいるからな」

（だが……帰るのはおそらく不可能だろうな。手紙にもそれに関しては何も書いてなかった。ともかく覚悟はしておこう）

そう考えた時彼は自分が元の世界に未練がない事に気がつく。

そして、張燕が賊を殺したのを目の当たりにしても何も感じなかったのも思い出した。

（……これも神が何かしたのか？）

能力の高さもそうだったが、彼は自分が自分じゃないような気がしていた。

（……とりあえず確かめようがないから今は置いておこう）

そこで彼は考えるのを一旦止める。

「仕事なら武官なんてどうだ？お前結構強かったし、それなりに金が貰えると思うぜ」

「ほう……それはそれは……。彰義殿、出来ればこの後手合わせしてもらえますかな？　張燕が褒めるのはなかなか珍しいですから」

張燕はあまり人にお世辞を言うタイプではない。

だからこそ趙雲は彰義に興味を持った。

趙雲自身が彼のたたずまいからそれなりの武を持つ者と気付いて

いたというのもあるが。

だが彼はバツが悪そうな表情をする。

見ただけで乗り気でないのがわかる。

「やめてくれ。流石にあんた程の武なんか持ってない。数合も撃ち合えず負けるのは目に見えている」

彼は既に趙雲のステータスを見て実力差がわかっていた。

統：９１　武：９６　知：７６　政：６５　魅：８１

剣：Ａ　槍：Ｓ　戟：Ｂ　弓：Ｓ　騎馬：Ｓ　兵器：Ｃ　水軍：Ｂ

特技：洞察（敵の計略を見破りやすい）

こんなステータスでは挑む気も失せるというものだ。

（しかも全部限界値じゃない。武力は確実に１００になるだろうな）

「……しかし強者と闘うのも武を磨くのには必要な事だと思うが……」

しかし趙雲は引き下がらない。

彼が過小評価していると思ったためだ。

実際、確かに彼は自身の事を過小評価している。ただ趙雲が思う程ではない。

「だとしても俺には今武器がない。それに俺は武官よりも文官になりたいんだ」

彼は武力よりも知力や政治力の方が高いためそのほうが向いていると思っていた。

「え？」

「なんと……」

彼はさも当たり前のように言ったが二人は非常に驚く。

二人とも完全に武官だと思っていたからだ。

（確かに頭良かったが……。でも武も充分にあったから文官は向い

てない気がするな）

（それとも武以上に高い知謀を持っているのか？　……どちらにせよ面白い）

（そんなに驚く事か？　……そして趙雲。なんだその笑顔は？）

趙雲は顔に掴みどころのない笑みを浮かべ、彰義を見ていた。

（……それにしても恋姫無双か……）

彼は趙雲に見つめられてまた実感する。

（恋姫無双……たしか三国志の有名武将が殆ど女のゲーム）

この趙雲はそのゲームのキャラとして出ていた。

そのため彼はこの世界が恋姫無双のものだとわかったのだ。

（ストーリーは主人公の北郷一刀が現代からやって来て、なんやかんやするゲームだったな。

……ハァ、あんまり詳しくない上にうろ覚えだから曖昧だ……）

彼は心の中でため息をつく。

彼は実際にそのゲームをプレイした事はなく、内容も詳しくなかった。

（キャラすらあと数人ぐらいしか知らないし、確定なのは北郷一刀が蜀、魏、呉のいずれかの勢力に属するってことだな。
……もう一つぐらいあった気がするが気のせいか？　まぁ大筋はこの三つだな。……さて、どうするか……）

当たり前といえばそれまでだが主人公は死なない。
そして何があろうと最終的には勝つ。

だから彼は迷っているのだ。
主人公と同じ勢力につくか、それとも残った二つのどちらかに入るか。

それとも――――。

「お待たせしましたー。炒飯二つに特注メンマ丼です」

そんな事を考えていると注文していた料理が運ばれてくる。
なおメンマ丼は趙雲が注文したもので、メニューに無いものを無理に作って貰っている。
そのため少し値段が通常よりも割り増しだ。

「お、とりあえず飯にしようぜ。腹がへった」

「うむ。玄鳥の奢りで、お代を気にする必要もない」

「……星、お前は自分で払えよ。お前のは特に高いんだから」

二人が今までとは違う名前で呼んでいるがこれは真名だ。
真名はとても神聖なもので、本人の許しもなく呼んでしまえば切り捨てられても文句は言えない程である。
その真名を呼びあっているという事は二人はとても親しい仲だと表しているのだ。

(真名か……俺は日本名を使えばいいな)

彼はそんな事を考えながら炒飯を食べようとレンゲを口に運ぶ。

「ん？」

しかしなにか視線を感じ手を止める。

「……（じー）」

視線を感じた横を向くと赤い髪をした女性がいた。

触角のようなアホ毛があり、顔は無表情。

露出した肩と腹からはタトゥーのようなものが伺える。

「……（じー）」

そして髪と同じような深紅の目は彰義の持っているレンゲにくぎづけだった。

レンゲを右に動かせば彼女の目も右に動き、左に動かせば左に動く。

「……」

「……（ガシッ）」

視線を無視しレンゲを口に運ぼうとすると女性に腕を捕まれる。
しかもその細腕の何処にこんな力が、というぐらい強い力で捕まれ振りほどけなかった。

さらに女性の腹の虫がなり、無言の圧力をかけてくる。

しかし彼とて腹は空いている。
折れるわけにはいかなかった。

「……」

「……（じー）」

「……」

「……（キラキラキラ）」

「……」

「……（キラキラキラ）」

「……」

「……（うるうる）」

「……食うか？」

しかし駄目だった。結局彼は耐えられずに折れてしまう。

流石に涙目になられては無理だ。

「……いいの？」

彼女に表情の変化はないが、何故か彰義には嬉しそうに見える。

いや、嬉しそうにしていると彼は思いたかった。

「あれだけ要求しておいてよく言う……。但し半分だけだ。俺も腹がへっている」

「……（コクッ）」

彼女は頷き、レンゲを受け取ると同時に炒飯を食べていく。

その勢いは凄まじく、半分どころか米粒一つ残らないんじゃと彰義が心配になる程だ。

ただ頬を一杯にして食べ物を食べている姿は小動物を連想させ見てて和む。
これは彰義だけでなく、趙雲と張燕も同じように感じた。

「意外と優しいんだな。能面なのに」
「誰だってあんな見られ方されたら耐えられないだろ。・・・あと能面ってのをやめろ」
あんまり呼ばれ方を気にしない方の彼であったが、流石に能面はやめて欲しかった。
ちなみに由来は張燕いわく、無表情で顔に変化が見られないかららしい。

「それより彰義殿。炒飯がもう殆ど……」
「……ご馳走様でした……」
遅かった。
趙雲が言い終わる前に炒飯は全て彼女の腹の中に収まってしまっ

た。

皿の上には本当に米粒一つ残っていない。

「……」

それを見て、彰義は怒りを通り越して彼女の食欲に呆れを感じていた。

そして口の周りについたご飯粒がなんとも憎めない感じを出している。

「……名前……」

そして固まっている一同などお構いなしに女性が喋り始める。

流石に一単語言われただけでは意味がわからず、趙雲と張燕は首をひねっていた。

「……あぁ、俺の名前か。俺は姓は彰、名は義、字は紅炎だ。お前の名は？」

（（何故今ので伝わる……））

二人は同時に同じ疑問を思っていた。

「……恋は呂布……呂奉先……」

それを聞いた瞬間に彰義は急いで呂布のステータスを開く。

彼の記憶では呂奉先といえば三国志の最強の武将だったからだ。

統：８７　武：１２５　知：２６　政：１３　魅：９６

剣：Ｓ　槍：Ａ　戟：Ｓ　弓：Ｓ　騎馬：Ｓ　兵器：Ｃ　水軍：Ｃ

特技：飛将（自軍の士気を上げ、敵軍の士気を下げる。指揮部隊の能力が上がる）

（本物だな……）

彼は完全に確信した。

彼女が呂布だと。

（武力が限界値を軽く越えてやがる。流石にもう上昇する事はないみたいだが、もう充分過ぎる程に強い）

強さの程を簡単に言ってしまえば一般人と趙雲の差ぐらいが彰義と呂布の間に有るわけである。

「……お詫びがしたい……」

流石に少し負い目を感じているようで、呂布の声の感じは少し低かった。

彼女としても、たかるような真似をする気はなかったが席が一杯のためついしてしまったのだ。

彼女にとって空腹は天敵である。

そんな申し訳なさそうな彼女を見ると彼はそんな武力があるとは到底思えなかった。

「ならなんか仕事ないか？一文無しだから金がいるんだ」

彼はこの際だと言ってみる。

あんまり期待はしてなかったが。

「……それなら……」

だが、意外にも仕事があるようだ。

「……賊討伐……」

この何気ない一言から、彰紅炎の運命は大きく動き出した。

討伐に行って（前書き）

とりあえず指摘にあった三人称と語尾を気をつけてみました。

・・・・なんか『～た』は減ったが、『～る』が以上に増えたな。

あと前話までを若干修正。
大きな変化は呂布の魅力です。

討伐に行って

彰義は城の中にいた。

城は街のだいたい中央にあり、見た目は日本では城と言うよりも要塞といった方がイメージしやすいだろう。

なお、この城は呂布の主であり并州州勅の丁原のものである。

そんな城の廊下を彼は呂布に連れられ歩いていた。

廊下の右手には中庭があり、所々柱があるが壁はなく、廊下から直ぐに中庭に出れた。

外につながっているため日の光が直接廊下に入っていて、時間帯が夕刻のためちょうど夕日が入りかなり眩しそうだ。

中庭の奥には大きめの広場があり、兵士達が数百人程いた。おそらく兵士を訓練する調練場だろう。

「ふむ……流石は丁原殿の軍だな。兵士達にかなり規律がいきわたっているようだ」

「騎馬もいい動きしてるぜ。馬の産地だし、馬の質もいいな」

彰義の両隣には趙雲と張燕が彼と同じように歩いていた。

調練の様子を見て丁原軍の感想を言っている。

二人は呂布が彰義に紹介した仕事に興味を持ち、同行していたのだった。

（……それにしても駄目元で仕事を聞いてみたらまさかの賊討伐。予想外すぎる）

食堂での呂布の一言に彼は正直面食らっていた。

しかも趙雲と張燕がやけに乗り気になってしまい断るに断れなくなってしまい、仕方なく引き受けていた。

（これも経験だと思い諦めるか……。戦場に兵士として出るのも大局を見据えるのに必要かもしれないし）

（フフフ……まさか彰義殿の一言からこのような大事になるとは。将でないのは少々残念だが存分に暴れさせてもらおう）

（いやー、丁原軍は騎兵が有名だったけど噂に違わずいい部隊だったな。いつかこういう部隊の将になってみたいものだぜ）

当たり前だが彼らはみんな一兵士として戦場に出るつもりである。

戦の前にいきなり新しい将に従えと言っても兵士が動揺するだけで得がない。
その将の能力や性格もわからないうえ、最悪敵側という事もある。
だから呂布は特に明言はしていないが三人は兵士だと思っていた。

しかし、ここで彼等に疑問が発生していた。普通兵士になったら調練場、もしくはだいたいその隣に在る兵舎に行くものである。
だが先程からずっと右手に調練場が見えているというのに呂布には曲がる気配がない。

「……こっち……」

しかも階段を上ろうとしている。

「呂布、調練場には二階から行くのか？」

流石に彰義はおかしく思い聞いた。

「……調練場？　……」

それを聞いた彼女は首を傾げた。

彰義はまさか疑問形で返されるとは思わず一瞬硬直する。

だが彼は元から目的地が違ったのだと直ぐに思い至った。

「……質問を変えよう。俺達は今何処に向かっているんだ？」

「……王の間……」

「「「……ハァ！？！」」」

三人は呂布に驚かされてばかりであった。

王の間は彰義のイメージより狭く、学校の教室四個分くらいの広さだった。

充分すぎる広さではあるが。

だが装飾などはかなり凝っていて、厳格な雰囲気をかもしだしている。

壁の彫刻のようなものや、床にしいてある赤い絨毯等はかなり手のこんだ作りのようだ。

部屋の中央には一段高くなっている場所があり、大きな椅子が置いてある。

その椅子には一人の女性が座っていた。

歳はそれなりにとっていそうだが美貌は全く衰えていない。特に長い金髪はサラっとしていて、女性なら誰もが羨みそうな程だ。

衣服は部屋の雰囲気に似合わないような薄い着物のような服を着ていて、さらに簡単な鎧を身につけていた。

彼女こそがこの城の主、丁原である。

彼女のいる一段高い所の前には彰義達が立っていて、その少し後ろに呂布が立っていた。

「――つまり人手が足りないのを客将で補うために呂布に街で強そうな奴を探させていたと言うわけですか。ハァ……」

彰義は丁原の話しを聞きため息をつく。

丁原の話しをまとめると、呂布はもともと将に使えそうな奴を探していたらしく、それで連れて来られたのが彼らだったという事だ。

つまり彼らは兵士ではなく将として誘われていたのだ。

（……呂布の奴、説明を省きすぎだろ。ハァ……いろいろと焦って疲れた……）

（（よっしゃ！！））

彰義は心の中でため息をついていたが趙雲達はガッツポーズをしていた。

彼女らにしたら願ったり叶ったりだ。

「まぁ、そういう事になるわね。それにしても駄目よ、恋ちゃん。こういうのはしっかり説明しなきゃ」

丁原は母が娘に注意するような口調で注意する。

事実、丁原が早々に親を亡くした呂布の母親がわりのような事をしていたのであった。

「……（コクッ）」

（……本当にわかってるのか？）

丁原の言葉に呂布は頷いたが彰義にはかなりあやしいものに見えた。

「それにしても丁原殿程の方の軍が人手不足とは何か一大事でも？」

趙雲自身は将として使ってもらえるのは嬉しかったが、一つ腑に落ちていない。

丁原の軍は武だけを見れば質、量ともにかなり揃っている事を彼女は知っていたからだ。

「実は都の何進大将軍から都に呼び出しがかかったから、行く前にわかっている限りの賊を綺麗にしておこうって事になったのよ」

つまり、この地の賊を片っ端から潰そうという事である。

「だけどわりと賊の根城って離れていてね、なかなか大変なのよね。それなのに時間は限られているからあまりもたもたしてられないのよ。だから――」

「とりあえず手頃な客将を雇い間に合わせようと？」

「そういう事になるわね。あと能力がわからなくても今回の討伐は掃討戦になるから余程の無能じゃない限り問題はないわ。でも――――」

そこまで言って、丁原は一息つき三人の顔を見渡す。

「三人ともなかなか有能みたいね。武もみんな強いみたいだし、彰義君は知力もかなりあるみたいね」

（……今の僅かな時間でそれがわかるのか）

彰義は彼女に心底感心する。

彼はステータスが見れるから強さや頭の良さはすぐ判るが普通はそうはいかない。

（……そういう人を見抜く力が人の上に立つ者には必要なのかもな）

そこで彼は彼女のステータスが気になった。州勅は一体どれほどの能力なのかが。

統：７０　武：７６　知：５３　政：４０　魅：７４

剣：Ｂ　槍：Ｃ　戟：Ｃ　弓：Ｂ　騎馬：Ａ　兵器：Ｃ　水軍：Ｃ

特技…騎将（騎馬が強力になる）

ステータス自体は異常に高いわけではない。
武官、特に騎兵なら強いがそれなら張燕の方が強い。
（つまり名君たるかどうかはステータスではわからないわけだな。
まぁ高い方がいいに決まっているだろうが）

「じゃあ彰義君は軍師をやってもらえるかしら？」
彰義は丁原に話しかけられ我に返った。
彼が考え事をしている間に話し合いが始まっていたのである。
「あ、もしかして話し聞いてなかった？」
丁原は彼の反応から聞いていない事がわかった。年の功というやつである。
「……すみません。それで何の話しですか？」
「軍での立場を決めていたんだ。ちなみに俺は騎馬隊の指揮だぜ」

何故か張燕が答えた。騎馬隊の部分を誇らしげに。

「正確には私の副官としてだけどね。それから恋ちゃんと趙雲ちゃんは歩兵。それで彰義君は軍師でいいかなってなったんだけど……いい？」

「ええ、構いません」

彰義は即答した。

どちらかと言えばインテリな彼にとって軍師はちょうどいい。

「これで全員決まったわね。じゃあ作戦の概要を説明するわ。えっと――」

彼女は懐を探り、木簡を取り出す。

おそらく賊の情報が書いてあるのだろう。

「根城の場所はここから東に向かった所にある廃村。当たり前だけど廃村だから賊以外に人はいないわ。数は３００程。こちらは５００程連れて行くから掃討戦ね」

（かなり戦力差がある戦いになるな。こちらは調練をしたれっきとした軍。しかも将は猛将ばかり。対して相手はただの賊。子供だって勝敗がわかる）

「それで出陣は明日の明朝。……これぐらいね。何か質問はあるか

しら？」
丁原が四人を見るが誰も手を挙げない。
「じゃあ今日はこれで解散！明日の出陣に備えて今日はしっかり休んで。
あ、部隊の方への顔見せだけは今日中にお願いね」
こうして軍議のようなものは終わった。

翌日、丁原軍は出陣した。
特に問題はなく行軍していき、天気もずっと晴れ。
絶好の（？）行軍日和が続いた。

しかし、三日目。
賊の根城を目の前にして問題が発覚する。

「……ごめんなさいね、もう一度言ってもらえる？」

丁原達は攻撃前に斥候を出し、小高い丘で休息をとっている。
そして今斥候が戻り、話しを聞いているが、その情報は丁原は信じきれなかった。

「はっ！　どうやら我々が并州中の賊を一掃しようとしている事を知った奴らが一箇所に集まったようです」

「なんと賊達が……」

趙雲は思わず声を出す。
それほどまでに驚きの事態だった。

「それで数はどうなんだ？」

「目算では１０００はくだらないかと……。しかも騎馬も６００近く確認されました」

『……』

斥候の話しを聞き、全員黙り込む。

敵の数は１０００。単純に考えてもこちらの倍はいる。

そのうえ騎馬が６００近くあるときた。こちらの騎馬は２００。
騎馬隊どうしの戦いの場合は三倍になってしまう。

「……」

彰義は一人歩き始め、丘の見晴らしのよい所に行く。

そこからは辺り一体を見渡す事ができた。

遠目に賊の根城の廃村も確認できる。

根城の周りには荒れ地が広がっていて、地面が所々でこぼこして平野が少ない。

（……手前には森……右手には台地か……？）

そして荒れ地の手前には小さな森があり、森を右に少し行った所に台地のような場所があった。

台地の上は意外に広いようで数百人くらいは軽く登れそうだ。

「……突撃すれば？　……」

その空気の中、呂布が口を開く。

自軍の倍の敵に突撃などふざけて聞こえるが、彼女は大まじめだ。

しかも彼女の言う通り突撃すれば損害は大きいが勝てるだろう。

「それも手だけど、それだと損害が大きく出るのよね……」

「そのうえ相手の騎馬隊は我等の三倍。機動力はあちらの方が遥かに上。なにか策を考えねばなるまい」

呂布の言葉に丁原は渋い顔をし、趙雲は思案顔をする。

「なんだ、それなら策を考えてくれる奴がいるじゃないか」

張燕は彰義の方に視線を向け、他の者もつられて彼を見る。

その彰義はまだ周りを眺めていた。

そのため皆が見ているのは彼の背中だ。

（……騎馬といえど所詮は馬……ならば――火だな）

そして彼の頭の中は凄い勢いで働き、策を考えだしていた。

「おい、能面。なんか策思いついたか？」

「誰が能面だ。……枯れ草を沢山集めてくれ」

彰義の言葉に空気が一変する。

「何か策を思いついたの？」

「ええ」

そこで彼は振り返り皆に向けこう言った。

「俺に策があります」

ここに彰紅炎の初陣が始まろとしていた。

初めて戦って（前書き）

活動報告にあんな事を書いておきながら感想もらってテンション上がってしまい投稿。

・・・・明日英単語の追試あったの忘れてた・・・・

今回は戦闘ですが作者はこういう描写は初めてなのでご指摘を頂ければ有り難いです。

なお策に現実味が無いってツッコミはなしです。

痛い程自分でわかっていますから・・・・

初めて戦って

趙雲は荒れた土地にいた。

地面は所々陥没しており、中には人が何人も入れるような場所もある。

全体的に草木が少なく緑があまり見当たらない。

そんな土地を彼女は馬に乗り一人駆けている。

ただ夕日で出来た影が後ろにぴったりと着いて来ているだけだ。

なお彼女の目的地は先程から視界に入っている廃村。

そこは今賊達が根城として使っている場所だ。

そこに彼女は単身突撃しようとしていた。

廃村の入口には扉がないボロボロの門があり見張りと思われる腰に剣をさした男が二人ほどいた。

二人とも怠そうに立っている。

門を抜けたすぐの所に小屋らしきものがあり中から人の声が聞こえてくる。どうやら中に何人か人がいるようだ。

「ん？　おい、何だアンタは……」

「ハッ！」

「ギャアアァァ！！！」

廃村の入口まで来た趙雲は話しかけてきた男を自らの槍でひとつきにした。

一瞬の叫び声の後男はぴくりともしない。

絶命したようだ。

「な、何なんだキサマわぁ！！」

もう一人の見張りの男が仲間の死に動揺しながらも腰の剣を抜く。

さらに男の悲鳴を聞きただ事ではないと感じた小屋の中の男達が十数人出てくる。

全員手に剣や槍等を持っていた。

「私は常山の趙子龍！！貴様ら悪しき賊共を征伐しにまいった！！覚悟いたせ！！！」

趙雲は高らかに叫ぶ。
その迫力に圧倒され賊達はたじろぐ。

「……ひ、怯むな！　相手は女一人だ！！」

『お、おお！！！』

何とか一人が声を出すと賊達が彼女に武器を掲げ迫っていく。

「ハイ、ハイ、ハイ！！！」

「グギャア！！」

「グッ！！」

「ブハッ！！」

だが彼女は馬から降りる事すらせず賊を貫き、切り捨てていく。
その槍さばきは美しく、例え戦場で出くわしても見とれてしまう程だ。
もっとも、出くわした者にその余裕があればな話しだが。

彼女はその調子で切り伏せていき、実に２０人近くを討ち取った。
しかし地に伏せる屍の数よりも新たに現れる賊の数が圧倒的に多

い。

そしてしだいに彼女に向かって行く者は少なくなっていく。
何も無しに向かって殺せるほどの者ではないとわかったからだ。

「よし、囲め！！　囲んで袋だたきだ！！」

誰かがそう言うと賊達は彼女を円形に囲むように動き始める。

「そうはいかん！　ハアァ！！」

「ウギャ！！」

彼女は完全に囲まれる前に踵を返し後退する。
後ろに回り込もうとした賊を切りながら。

趙雲は賊の囲いを抜けるとそのまま廃村を離れて行く。
しかし仲間をこれだけやられて簡単に逃がす程賊達は甘くない。

「逃がすなぁ！！　追うぞ！！」

三、四十人がその後をすぐに追いかけ始め、残った者は馬の準備を始める。

賊達が趙雲を追いかけ少し進むと、地面に横に大きなひびが入ったような場所に出た。
彼女はひびを挟んで賊の反対側にいて、賊達の方を見ていた。

「今だ、斉射！！」

彼女がそう号令を出すとひびから兵士が百人程現れ、一斉に矢を放つ。

「ふ、伏兵だ！！　うわぁぁ！！！」

いきなり射られた賊達は何十人かはそのまま倒れ込み、あとは廃村に逃げ帰える。

「全員後退！！」

彼女は斉射の後無理に敵を追わずに再び後退する。
兵士達は次々にひびから出て来て趙雲の後を追う。

「チキショウ！　あの女、官軍の将だったんだ！！」

「お、お頭に伝えてくる！！」

兵が彼女の指揮に従っていたのを見た廃村に残っていた賊達は嵌められた事に気がつく。
そしてその内の一人が廃村の中央に走って行った。

そして１０分も経たないうちに廃村の入口にはかなりの数の人が集まった。
騎兵が５００に、歩兵が２００。
賊の全戦力ではないが七割程が集まっている。

「馬に乗ってる奴は俺と先行。歩兵は後から着いて来い。行くぞ！！」

賊の頭自ら馬に乗り先頭をきり、他の騎兵達がそれに続く。

彼等が出発したとき趙雲達はかなり遠くまで離れていたがそこは騎兵と歩兵。
みるみる内に差が詰まっていく。

趙雲達が廃村からは確認出来ないくらい遠い台地の横を通り抜けた頃には差は数十メートルしかなかった。

しかし、彼女達が台地を抜けると台地の上で銅鑼がジャーン、と鳴った。
そして銅鑼がなると同時に兵が出て来て旗を掲げる。

夕日に照らされ上がったのは深紅の『呂』の旗。

「また伏兵だと！？」

彼等は銅鑼と旗に気を取られ、行軍を止めてしまう。

そしてその隙だと言わんばかり兵士達が後ろから人一人分くらいある大きな玉を持ってくる。

それは全て枯れ草で出来ていて１００メートル近くあった台地の端から端まで埋めていた。

「……今……」

将である呂布の号令を聞き、兵達は玉に松明の火を付け台地の坂を転がす。

そして転がっていく間に火が全体に回り、火の玉となった。

「うわぁぁ！　火の玉だ！！」

これにより賊達は混乱する。

実際の所、この火の玉による被害はあまり大きくない。

しかし賊達は火が迫ってくる事実に驚き慌てふためいている。

「うわっ、落ち着……あああ！！！」

特に馬の慌て方は尋常ではなかった。

火の玉が転がってくるのを見て人が乗っているのも忘れ暴れ出す馬達。

馬同士でぶつかったり、馬から振り落とされる者もかなりいた。

しかも歩兵を置いて先行してきたため今この火計をくらっているのは全て騎兵。

混乱はちょっとやそっとでは収まりそうになかった。

「……三、二、一……斉射……」

そこに追い打ちとばかりに呂布の部隊が斉射を仕掛ける。

これにより賊達は完全に統制を失う。

「……突撃……」

「全員反転！！　我等も突撃だ！！！」

更に呂布と趙雲の両部隊が突撃をする。

もともと練度の差があるうえに、この状態ではいとも簡単に賊達は討たれていく。

「ハイハイハイィィィ！！！」

「……フンッ……！」

「ヒィィ！！　何だこいつらわぁ！！」

しかも趙雲と呂布の武は凄まじく、それを見た賊達は畏縮していく。

呂布にいたっては戟の一降りで三、四人の命が狩られていく。
彼女が十回も振ればもう死体の山が出来上がる。

それを見た賊達の士気はどんどん下がっていき、逆に味方の士気は上がっていく。

「クソ！　一度退け！！　火の側から離れろ！！」

このままではまずいと思った賊の頭は退くように命じる。
なんとかそれが全体に伝わると賊達は徐々に後退していく。

（とりあえず火の側を離れれば馬もまた使い物になる。数ではこちらが勝ってるし後ろにはまだ歩兵がいる。これなら勝てる！！）

しかし頭の思い通りにはいかない。
大多数の者が先程の混乱で馬から振り落とされたり自ら下馬したため騎兵は百人も残っていなかった。
そのうえ突撃により半分以上が討ち取られ、数での優位もほぼ無くなっている。

「あっ、お、お頭ぁ！！　あれ見てください！」

「何だと！？　いつの間に！？！」

退くために後ろを見た彼等の目に映ったのは自軍の歩兵が全滅寸前の姿だった。
賊の歩兵を駆逐しているのは騎馬に乗った黒い『丁』の旗を持った兵士達。

「彰義君の読み通りこちらに退いて来たわね。じゃあ挟撃しましょうか、張燕ちゃん」

「了解だぜ！！」

指揮はもちろん丁原と張燕がしていた。
彼女達は火計が始まると同時に台地の反対側にある森から出て来て、騎兵に置いてかれた歩兵達に騎射と突撃を仕掛けていたのだった。

「行くぜお前ら！！　突撃ィィ！！！！」

張燕の後に兵士達がもの凄いスピードで迫っていく。

「みんな、援護するわよ。騎射用意……放て！！！！」

そしてその後の丁原達が馬の上から矢を放ち張燕達の上を抜け賊に降り注ぐ。

「オラオラァァァ！！」

矢を受け隊列が乱れた所に張燕達が突っ込み、叩き潰していく。

「私達も突撃！！」

更に丁原の部隊が突撃し、賊達は大損害をくらう。

それと同時に呂布と趙雲達も再び突撃し賊を挟撃する。

賊の頭は逃げるのに必死でなにも対策が打てなかった。

「……残ったのはこれだけか……急いで根城に戻るぞ……」

なんとか挟撃から逃れた頭は数十人の部下を引き連れ廃村に向かっていた。

しかし彼の声には生気がなく、顔も疲れきっている。

それは周りの者にもいえ、士気は最低だった。

日はもう殆ど沈んでいて辺りは戦いが始まった時よりも暗い。

暗さが彼等の士気をより下げていたのかもしれない。

だが、暗いと言っても充分弓矢で狙う事は出来た。

「三、二、一、斉射」

「ウギャァァ！！！」

射ぬかれた賊の悲鳴が辺りに響く。

地面がへこんだ所や岩陰に兵士達は隠れていてそこから射っていた。

「……もう……勘弁してくれよ……」
賊の頭は半泣きで鼻声になっている。
度重なる伏兵で彼の心は折れていた。

しかし、だからといって手を緩める程この部隊の将は甘くなかった。

「廃村の方に一人でも戻られると後が面倒だ。皆殺しにしろ」

彼、彰義の顔はいつもと変わらず無表情。声にも感情がこもっていない。

地面のへこみから出て来た彼は手に槍を持ち、腰には剣をさしている。
彼は自分の武器を持っていなかったため、一般兵に渡される物を使っていた。

そして彼が出て来ると兵士達も次々と出て来る。数はだいたい50だろうか。

だが、そんな数でも賊達を一掃するには充分……いや過剰だった。

「全員抜刀……かかれ！！」

彼の号令と共に兵士達がときの声を上げながら賊達に突っ込んでいく。

「た、助けギャアア！！」

「嫌だ！　死にたくない！！」

「待ってくれ！　俺だって好きでこんな事を、アアアアアア！！」

「……」

それはもう戦いではない。

虐殺だ。

だが彼は無表情で敵に槍を突き立てていく。

何時もと変わらないように。

「クソガァァァァ！！！！」

せめて一矢報いようと頭が彰義に突撃をする。

さっき矢に当たったらしく彼の左手はだらんとしていた。
右腕だけで剣を振り上げて襲い掛かる。

「……自棄になったらもう終わりだ」

しかし彼には自棄になっているようにしか見えなかった。
彼は頭が振るう剣を簡単に避け、槍の柄の方で足を払う。
そしてバランスが崩れた頭の眉間に槍を突き刺す。

悲鳴すら上がらず彼は死んだ。

その後彼は他の将達と合流して廃村に残った賊達に夜襲を仕掛けた。

相手の不意をつき、戦力も賊達を上回っていたため戦いが終わるまでに一時間もかからなかった。

日は完全に落ち辺りは真っ暗になった。
そんななか兵士達は戦後の処理に追われ、松明を持ちせわしなく廃村の中を歩き回っている。
しかし彰義は兵達に指示を出し終わって暇になったので、廃材の上に座り考え事をしていた。

（今回敵が上手い事策に嵌まってくれたし、廃村の方にも一人も帰さなかったから夜襲も完璧にできた。初陣にしては上出来だな。被害も１００に満たないってさっき丁原さんが喜んでたし。
ただ……）

そこで彼は周りを見渡す。彼がいる場所は廃村の中央にある広場でそこには死体が大量に集めら並べられていた。
殆どは賊のものだが、中には兵士のも混じっている。
そしてその横には仲間の死を悼み涙を流す者や黙祷をしたりする者が何人もいた。

「……すまない」
彼は小さく呟いき、空を見上げる。
空は満天の星空でかなり美しく物だったが、
「ハァ……」
彼は自然とため息をついた。

「お、ここにいたのか」

「……なんだ張燕か」

彼はしばらく物思いにふけていたが、張燕に話し掛けられ中断する。

「なんだとはなんだよ、能面野郎」

「能面じゃねぇよ。それでなにか用があったんじゃないか？」

彼はそう言うと廃材から立ち上がり体を伸ばす。意外と長い時間座っていたため彼の体は固まっていたようだ。

「そうだった。丁原さんがお前の事を捜してたぞ。なんでも話しがあるそうだぜ」

「話しか……まぁ大体想像はつくがな」

彼はゆっくりと丁原のいる本陣に向かって行った。

「彰義君、私に仕えてみない？」

「丁重にお断りさせて頂きます」

彰義は丁原の言葉に即答して頭を下げる。

本陣には彼等の他に趙雲、張燕、呂布がいたがその即答ぶりに二人は驚いていた。

「……（モグモグモグ）」

ちなみに呂布は夕食のお粥のような物に夢中で聞いていない。

なお、彼等がいる本陣は廃村から少し離れた所にあり陣幕で四方を囲んだ簡単な物だ。

中には特に何もなく丁原が座っている椅子ぐらいしかない。

そしてその椅子に座っている丁原は彼の言葉を予想していたのか、やっぱり、と言った感じで苦笑いを浮かべていた。

「よいのか？　彰義殿は金がいると言っておったと思ったが」

「それは今回ので充分だし、今はいろいろと回りたいからな」

（とりあえず未来の三人の王に会いたい。何をするにしてもそれは

大事だろう）

彼はこの時既に元の世界に帰ろうという気持ちは微塵もなかった。
彼がそれに気づくのはもう少し先の事だが。

「それならしつこく引き止めないわ。でもせめて私の真名を受け取ってくれない？　もちろん趙雲ちゃんと張燕ちゃんもね」

「……恋のも……（モグモグ）」

丁原の言葉に食事中の呂布も乗っかる。

「……いいんですか？」

彼はこの世界の生まれでは無いため真名の重要度はそこまで理解していなかったが、かなり大切な物だとはわかっていた。
なのでまだ会って数日で、得体がしれず、士官を断った男に真名を渡す理由がわからなかった。

「もちろん。今回は貴方達がいなければこんな大勝が出来たのよ。そんな人達に真名を渡さないのは失礼に当たるわ」

「……恋は……気に入ったから……（モグモグモグ）」

（……どうでもいいがさっきから呂布はどうやって食いながら普通に喋っているんだ？）

彼は呂布の喋り方が気にはなったがとりあえず置いとく事にした。

「私も彰義殿に真名を受け取って貰いたいものだな」

「それなら全員で交換しねぇ？　なんか一人ずつやるの面倒臭いし」

趙雲も名乗り出たために張燕が案を出す。

「じゃあそうしましょうか。私は丁原。真名は古万（こま）よ」

「……恋は……恋……」

「私は姓は趙、名は雲、字は子龍。真名は星だ」

「俺は張燕。真名は玄鳥（げんちょう）だぜ」

次々と真名を言っていき、最後に彰義が残る。

「姓は彰、名は義、字は紅炎。真名は考輝（こうき）だ」

彰義――考輝の初陣はこうして終わった。

舟に乗って（前書き）

もうテストなんかいいや…

今回酷い心理状況で書いたので内容も文章も何時にもまして酷いです。

あと・・・ではなく…を使い始めました。

舟に乗って

考輝は舟の中にいた。

舟はオールのような物を使って漕ぐ人力のものでなかなか大きい。百人くらいは軽く乗れるだろう。

兵士達が十数人程で漕いでいるがかなりゆっくりと黄河を進んでいる。

日は高く、うっすらと見える川辺には小さく森が確認できた。

舟の中央には屋根があり、そこが大部分を占めている。

ただ壁は後ろ半分しかなく、前半分は柱しかない屋形船といった感じだ。

そしてその舟には丁原軍の全武将が乗っていた。

最強の武を持つ呂布、神速と名高い張遼、陷陣営という異名の高順。

見る物が見れば裸足で逃げ出す集団であろう。

なお彼女達が舟に乗っているのは都である洛陽に行くためだ。都の何進大将軍に丁原軍は召集されたため、こうして黄河を昇ってい

たのだった。

そのような場所に考輝はいた。
なお、星と玄鳥もいる。

丁原軍ではない彼等が何故そこにいるのかと言うと、ただ単に送ってもらっているだけである。

五日前に初陣を終えた彼は古万の仕官の誘いを断った後、直ぐににも旅立とうとしていた。
しかし、「どうせなら都まで一緒に来ない？」と、誘われ彼等は着いて来ていた。

彼がこの話しを受けたのは今都には古万以外の諸侯達も集まっていると聞いたからである。
名門の袁紹を始め、異民族討伐で名を上げる董卓、西涼の馬騰。

かなりの大物が揃っている。

そのような大物達の中でも考輝が一番会いたいのは陳留の曹操だ。
今はまだ一介の県令にすぎないが、いずれは天下の一角を治める程にまで成長する。

彼はそのような者の器を見ておきたかった。

（曹操はたしか恋姫無双にもちゃんとキャラとして出てたよな。容姿とかは余り覚えていないが……たしか百合だったか？　ともかく女なのは確定だな）

彼は本を読みながら曹操についての記憶を思い出していた。
ちなみに今彼が読んでいる本は何故か日本語で書かれている。これもパラレルワールドの影響らしい。

彼が今座っているのは舟の中央に置いてある細長い机の前のこれまた細長い椅子だ。
そして机を挟んだ反対側には星と張遼が座り酒を飲んでいた。

張遼はサラシを巻いた上にマントを羽織るだけというかなり豪快な格好をしていて、酒のせいか少し顔が赤い。

「いや～、アンタなかなかいける口やな」

「こんなの飲んだ内に入りはせぬよ。お主もそうであろう？」

「それもそうやな」

そこで二人は顔を見合わして笑い合う。
わりと気が合ったようだ。

しかし、彼女達はたいして飲んでいないと言っているが周りには

かなりの数の徳利が散乱している。
世間一般的には物凄い量だろう。

「って、何堂々と酒を飲んでいるんですか！！　今、一応仕事中ですよ！！」

その二人の間にオールバックのピッチリとした服を着た男が割って入る。
彼は張楊と言い、丁原軍の文官のトップだ。もとい政務をまともに出来る将は彼ぐらいしかいない。

「相変わらず固いな～。それにウチらの仕事は護衛。今襲撃なんかされとないやん」

「せめて緊張感を持って下さい！！」

「そないな事言ってもな～」

張楊は張遼にいろいろと注意をするが彼女はのらりくらりとかわしていく。
余り効果はなさそうだ。

「第一呂布ちんはどうなるんや？　モリモリ肉まん食っとるで」

「……？」

話題が考輝の隣に座って大量の肉まんを食べていた恋に移る。
当の本人は悪い事という自覚はないようで首を傾げているが。

「あぁ……そんな首を傾げる恋様も素敵でございます……」

そして恋の隣に座り、彼女の事を恍惚の表情で眺めているのは女性は高順と言い、基本的に恋の副将をしている。

髪は金髪のミドルで頬についている傷が目立っている。
黒いジャケットみたいなものを着てかなり動きやすそうだ。

「……もう呂布殿には何を言っても無駄だと悟りましたから……」

そう言って張楊は遠い目をする。
彼は昔の恋に対しての様々な自分の努力を思い出していた。

「……大変そうだな。……それから高順。お前鼻血出てるぞ」

考輝が本から目を離し高順の方を見ると彼女は鼻血を出していて、ツーと、下に垂れていた。
恍惚の表情をしながら。

「……曰くこれは忠誠心。決して鼻血なんて低俗なものなどではない」

高順は慌てて手で鼻を抑え、普段のキリッとした表情に戻る。
（忠誠心……全身の血液が恋への忠誠で出来ているって事か？）
ちなみに曰くとは彼女独特の言い回し。

「って、はぐらかされる所だった。張遼殿はいい加減飲酒を止めてください。今は仕事中です」
最初の目的を思い出した張楊は再び張遼に注意をし始める。
「ホント固いな～。せやけどちゃんと仕事しとる奴他におらへんで？」
「何を言っているんですか。あそこで古万様が仕ご――」
張楊は振り返り舟の後ろにある机に目をやる。
その大きめの机の上には木簡や竹簡が沢山置いてある。
そこにはそれらと格闘している古万の姿が――――なく、彼女は机に倒れ込んでいた。
「って、古万様ァァ？！！」

「速っ！！」

張楊はそれを見た瞬間物凄い速さで彼女の所まで駆けて行った。
それは神速の張遼を唸らせる程である。

「だ、大丈夫ですか！！」

「…ち、張楊……」

彼が揺すると古万は顔だけよろよろと上げる。
彼女の目は軽く虚ろになっていた。

「私……武官なのよ？　なんで……こんな仕事をしているの？」

「ちょ、なんか目が死にかけてますよ！？　……それは貴方が州勅まで頑張って出世したからですよ！　素晴らしい事なんです！」

「……じゃあ私州勅辞めるわ……」

「って、何とんでも発言してるんですか！！」

「……大丈夫なのか？　あんな感じで」

流石に他人事ではあると言っても考輝はいろいろと心配になってきていた。

「問題ないで。いつもあんな感じや」

「曰く、政務部屋での日常」

「……（モグモグ）」

（これでいいのか丁原軍……）

「うぅ……彰義殿は本当に仕官なさらないんですか？　今ならこんな状況だから給金高いですよ？」

最終的に何とか古万を仕事に復帰させた張楊は疲れきったという感じで考輝の隣に座る。

そして時折今のような感じで彼を勧誘をしていた。余程文官が欲しいのだろう。

「善処しよう……」

しかし入る気はさらさらない彼はとりあえずこう答えていた。

「お願いしますよ……この軍本当に武官ばかりでまいってるんですから……ハァ……」

張楊はため息をつき、机に頭をのせる。

（その変わりこの軍の武力は異常だ。張遼は９２だし高順は８８ある。一番弱い文官の張楊ですら７０もある。これに古万さんと恋を足して平均を出すと……約９０。恐ろしいな）

彼は戦慄する。そのありえない武力の高さに。

「なぁ彰ギン」

彼がそんな感じで考えていると張遼が話し掛けて来た。

酒が尽きたのかもう酒は飲んでいない。

「……どうした？」

彼は彰ギンという呼び方には突っ込まない事にした。

「さっきから気になってたんやけど……あれ大丈夫なん？」

「ん？」

張遼に指差されるがままに彼が振り向くと、そこには舟の縁にぐったりと寄り掛かっている玄鳥がいた。

頭と手が縁から飛び出しているので洗濯物が干されているように見える。

「随分と大人しいと思ったらあんな所にいたんだな」

「気付いてなかったんかい……」

考輝の言葉に張遼は肩を竦める。

「そういえばあやつはかなり舟に弱いと言っておったな」

いつの間にか星が近くに来ていて二人の会話に混ざる。

（確かに舟に乗るの嫌がってたな。自分の得物を振り回してでも抵抗してたし）

彼は舟に乗る直前の事を思い出していた。

なお、彼女は結局は恋と星によって無理矢理舟に押し込められた。

「なんだよ。お前舟に弱かったのか？」

「……うっせぇ……今話し掛けてきてるんじゃねぇ……能面野郎……」

「……」

考輝は少しムッとする。

彼としては心配して話し掛けているのでこの返答にはイラッときていた。

「……！」

彼は何か思いついたのか彼女に近付いていく。

ニヒルな笑みを浮かべこれからやる事は間違いなくロクな事ではないだろう。

彼は彼女の直ぐ傍まで来ると足を舟の縁にかけ、舟を揺らし始めた。

「バッ！　……能面てめぇ……何……しやが……る……」

玄鳥の顔がどんどん青くなっていく。

声の方も徐々に弱くなっている。

「ハハハ。聞こえんな、船酔い野郎」

しかし彼は止める気はない。むしろ更に強く揺らしていく。

「……陸地に…着いた…ら…おぼえ……てろ……」

そんな風に騒いでいると恋や高順達が集まって来た。

なお恋は手に今だに肉まんを持っている。ただそれが最後らしく大層大事そうに持っていた。

「彰ギンも鬼畜やな……。普通あそこに追い打ちなんかかけられへんで……」

「彼はいつも玄鳥に能面と呼ばれているから弱みを見つけられて嬉しいのだろうな」

「……顔が青い……」

「曰く、そろそろ限界」

なんやかんや言っているが彼女達は玄鳥を助ける気はない。

むしろ若干楽しんでいる。

「ウッ！！　もう無理だ！！」

玄鳥は口を手で抑えながらいきり立つ。

だがそのときバランスを崩し川の中に落っこちてしまい、更にその時考輝の腕を掴んだため彼も一緒に落ちてしまう。

「何ィ！？　――ブハッ！！」

「……あ……」

ついでにその時考輝の腕が恋の腕に当たり、肉まんも一緒に落っこちてしまう。

「ちょ、ブハッ……俺……ゴホッ……泳げな……」

「てめ、ゲホッ……抱き着いてくんじゃ……俺まで沈むだろ……」

玄鳥は泳げなかったらしく、必死に考輝にしがみついている。

いくら考輝が泳げても、これでは沈むのは時間の問題だ。

「えーい。世話のやける！」

「……」

見兼ねた星と恋が縁に乗り出し川に飛び込もうとする。

「――って、呂布ちんも行くんか？」

「……肉まん……」

「目的違うんかい！！」

「私もお供します！　――あぁ……水中での恋様はどれだけの美しさが……」

二人程目的がおかしいが。

「「ブクブクブク……」」

そうこうしている間に二人は沈んでしまった。

もう水面上からは姿が確認出来ない。

「クッ、待っていろ！！」

最初に星が飛び込み、恋と高順がそれに続く。

「ブクブクブク……」

しかし高順は飛び込むと同時に沈んでいった。
どうやら泳げなかったようだ。

「高順ッチは一体何がしたかったんや！！」

ごもっともである。

星と恋は普通に泳げるようで水の中に潜っていく。
だが、うまく助け出せないのかなかなか上がってこない。

「クッ、しゃあない。ウチも……」

「駄目よ。霞ちゃん」

痺れを切らして張遼が飛び込もうとすると、いつの間にか近くに来ていた古万に止められた。

「なんで止めるや、古万さん！！　まだ誰も上がって――」

「だからこそよ。下手に霞ちゃんが飛び込んでも状況が悪化するだけよ。霞ちゃん一人で何人も同時に助けられないでしょう？」

「ッ……」

その時の古万の目は先程までの死にかけた目ではなく、一軍を司る者の目になっていた。

その迫力に押され、張遼は言い返す事が出来なかった。

「そんな心配する必要はないわよ。みんな強いし、目的地は洛陽だとわかっているわ。直ぐにまた会えるわ」

古万はそう言って微笑みかける。

それは、先程とはまた違う顔だった。

「……せやな」

張遼は納得し、川下の方に目をやる。

ちょうど、少し暖かい風が吹き通った。

丁原軍の舟から少し川下に行った所の川辺に小さい広場のような場所があった。　地面には背の低い草が生い茂っていて、太陽の光を一杯に浴びている。

広さ的にはそこら辺の宿屋の一室と対して変わらないぐらい。
そしてその周りには森が広がり、森の中は少しうっすらとしている。

「……ひどい目にあった……」

その場所に彼等全員は流れ着いていた。

考輝はそう呟くと木まで歩いて行き、もたれかかる。全身びしょ濡れになっていて、歩く度に水が滴り落ちていた。

ちなみに、今彼が着ている服は彼がこの世界に来た時に着ていた学ランではなく、古万から貰ったこの時代の服だ。

「全くだぜ……それもこれもお前が舟を揺らすのが悪いんだぞ」

玄鳥は俯せで寝転がり、考輝に文句を言う。
船酔いも割と回復したようで、普通に喋っていた。

「……元はと言えばお前が船酔いなんかするからだろうが、船酔い野郎」

「あ？　喧嘩売ってるのか？」

彼女は考輝の言葉を聞いて起き上がろうとする。

「止めぬか。今はそれ所ではないだろう」

しかし星が二人の間に割って入り、玄鳥は渋々と言った感じでまた寝転ぶ。

「……肉まん……」

少し恋は落ち込んでいた。余程肉まんの事がショックだったのだろう。

「……」

（水でびしょ濡れになっている恋様もまた……しかも少し下着が透けている……）

高順は再び鼻血――忠誠心を垂れ流していた。

「とりあえず服を乾かすぞ。俺はちょっと向こうに行って来る」

そう言うと考輝は森の中に入っていく。

「ん？　あいつ一体どうしたんだ？」
「お主はアホか。服を乾かすのに服を着たままでは出来ないであろう」
「あ、そういう事か」
玄鳥はそこまで言われて察した。
男女比が１：４だと男の肩身は狭い。

彼は少し歩いて適当な場所を見つけると、焚火を起こすために木の枝を集め始める。
途中で着物が張り付いてきたので彼は上半身だけ脱いでおく。

（――それにしても此処は一体何処なんだが）
彼は木の枝を拾いながら考える。
（下流に流されたんだろうから……あまり地理がわからないな。
ハァ……都に着いたら地理をしっかり学ぼう。――――ん？）
しゃがみ込んで枝を拾おうとした時彼は動きを止めた。

「あれは……人か？」

少し遠くに人が確認できたようだ。

目を細め、誰なのかを確かめようとすると、

「キャーー！！！」

その方向から悲鳴が聞こえた。

「……ハァ」

考輝はため息を軽くついた後悲鳴が聞こえた方に走っていく。

「チッ、賊か……」

近付いて行くと詳細が確認でき、彼は舌打ちをする。

武器を持った男達が数人で二人の少女を囲んでいた。

どうやら男達は身なりからして賊のようだ。

しかし一人の少女は双剣を持ち果敢に戦っている。

腕も素人という訳ではなくそれなりに扱えていて、何人かの賊は切り捨てられていた。

だがもう一人の少女、もとい幼女は戦えないようで少女の後ろに隠れている。

それを庇いながらのため、少女は満足に戦えずに顔をしかめている。このままでは二人がやられるのも時間の問題だろう。

「……」

考輝は走りながら石をいくつか拾う。

彼は武器を今は持っておらず丸腰。

なので石を使おうと言う訳だ。

「……！」

そして石を投げて当てられる距離にまで行くと石を投げる。

「グアッ！！」

『な！？』

「……え？」

石は見事に賊の一人の頭に当たる。
そして打ち所が悪かったのかそのまま倒れた。
それを見た他の賊達は驚愕の声を上げ、少女も小さく声を漏らす。

考輝は声を無視し残った石を全て投げる。
流石にもう存在がばれて急所には当たらないが体の各所に当たっていく。

「ウラッ！」
「ブッ！！」

そして怯んだ所に殴り掛かって剣を奪い、そのまま何人かを切り捨てる。

「……まだやるか？」
「ク、クソ！！　覚えてやがれ！！」
まだ賊は八人くらい残っていたが突然の乱入者に驚いたのかあっさりと退いていく。
（またテンプレな言葉を残していったな……）

彼にはその事を考えられるくらい余裕がある程あっさりとしていた。

「あの……」

「……」

双剣を持った少女が話し掛けて来たので考輝は振り返る。

少女はブロンドヘアーで眼鏡をかけていた。緑の目が印象的で、服がわりと凝っている。お洒落に気を使っているのだろう。

「助かったの。私一人では危ない所だったの」

「別に構わない。それよりお前はこの辺りの人間か？」

彼としては土地の情報が欲しかった。位置が分かれば都までかかる日数もわかるからだ。

なおもう一人の幼女は眼鏡の少女の後ろに隠れている。

「そうなの。沙和は近くの村で義勇軍を率いているの」

「ほう……」

彼は思わず声を漏らした。

義勇軍の隊長とはどれほどのものか気になったからだ。

そして彼が少女のステータスを見ようとした時後ろから声が聞こえる。

「おい！！　この辺りで悲鳴が聞こえたが大丈夫が！！　――って能面？」

その声は彼にとってもう聞き慣れたものだった。

（俺の事能面と呼んでいるし玄鳥か。船酔いはすっかり抜けたみたいだな）

「誰が能面だ。それと悲鳴の件は今――――――は？」

彼は喋りながら振り向いて途中で止まってしまった。

振り向いた先の光景が信じられないものだからだ。

「？　……あ」

玄鳥は最初彼が何故フリーズしたのか分からないようだったが途中で気付き、彼女もフリーズする。

彼女もまた上半身に何も身に付けていなかったのだ。

胸元の二つの丘ももちろん隔てるものがなく露出されている。

筋肉質ではなく意外とすらっとした身体つきをしていた。

「……こ……の……」

いち早くフリーズがとけた玄鳥はワナワナと体を震わしながら自らの得物を振り上げる。

ここで考輝は非常に嫌な予感がした。非常にいや～な予感である。

「いや、待て。これはお前が完全に悪――」

「うっせぇ！！　この変態能面野郎がァァ！！！」

考輝がなんとか弁明しようとするが玄鳥は聞く耳を持たない。

丸腰の彼に対して本気でかかってくる。

「ウオッ、ちょっと待、クッ、ひとまず隠せ！！」

そう。彼女は全く隠さずに暴れている。
そのため他にも暴れている箇所があるのだ。

しかし彼女はそれすら聞かずに暴れている。周りが完全に見えていないようだ。

「「……」」

この光景を少女達は唖然とした表情で見ていた。
呆れ、というよりは状況についていけない戸惑い要素が強いが。

そしてそろそろ避け続けるのにも限界がやってくる。
むしろ彼の実力で本気の玄鳥の攻撃をここまで避けれたのは奇跡に近いだろう。

そして、

「ぬおっ！！」

避けるのに必死になっていたため足元の確認が疎かになり、先程切り伏せた賊の一人に躓き、後ろ向きにこける。

そのまま頭から地面に落ちていくがそこにはさっき賊に向かって投げた石があった。

そして考輝は後頭部を石で強く打ち、気を失った。

（因果…応報……）

意識を失う直前に彼の頭の中にはそんな言葉が浮かんだ。

「って、やべえ!?　やっちまった!!　おい考輝、しっかりしろ!!!」

正気を取り戻した玄鳥が彼に馬乗りになり身体をゆさゆさと揺する。

しかし反応がない。

「ま、本気でヤバイ!!!　お、おい、あんた!　この辺りに医者はいないか?」

流石にマズイと玄鳥は思い、近くにいた少女に尋ねる。

その声は焦りからかかなり早口になっていた。

「は、はいなの！！それなら沙和達の村に――」

「ん？」

途中で少女の言葉が止まり、玄鳥の後ろの一点を見つめる。
それに釣られて玄鳥が後ろを振り向くとそこには――

「まさかお主達がそのような間柄だったとは……。それに玄鳥もなかなか大胆だな」

ニヤニヤした顔の星と、

「……邪魔だった？　……」

何時もと変わらない感じの恋と、

「でも、流石に見知らぬ少女達の前では……」

頬を赤らめている高順がいた。

玄鳥は今の自分の姿と状況と考輝の状況を考える。

（……これ……俺が襲ってるみたいじゃね？）

そう考えた途端、玄鳥から冷や汗が溢れ出始める。

「いや、ちょっ、これは誤解だ！！」

「ほう、何が誤解なのだ？」

「いや、それは……」

玄鳥は必死に弁解するが星では相手が悪すぎる。
何を言っても直ぐに返されてしまう。

「もう、誰か助けてくれーー！！！」

虚空に向かって玄鳥は叫んだ。

なおこの事を宴会の度に星が皆に教え回るのはまた別の話しである。

三羽鳥に会って（前書き）

これからは週に一度、土曜～月曜の更新になりそうです。

三羽鳥に会って

考輝は夢の中にいた。

彼がそれを夢だと自覚出来たのは明らかにこの世の光景ではなく、そして前に一度来た事があったからだ。

白い空間。

彼が恋姫無双の世界に送られる前に神と話した所と一緒の場所である。

ただ、前と違うのは彼が漂っているのではなく、しっかりと二本の足で立っている事だ。

地面が見えないため、傍から見れば浮いているように見えるが。

そして服装は彼が舟に置いてきたはずの学ランだった。しかし彼は夢と自覚しているため、たいして驚かない。

『よう。お前の異世界での奮闘、楽しませてもらっているぜ』

「……神か」

突然、考輝の頭の中に声が響く。

しかしこれも二回目なので、彼は驚かずに普通に言葉を返す。

『そうだ。それよりお前は楽しんでいるか？　なかなか刺激的な世界だろう？』

「まずまずだな……。それよりあの世界は何だ？　何故ゲーム？　そしてお前は俺にあの世界で何を求めている？」

彼は口調を強くして言ったが、雰囲気からして本気で抗議している訳ではないようだ。

無表情ではあるが。

『前にも言っただろう？　俺の暇つぶしだ。あの世界にした理由もな』

神と名乗る方もそれがわかっているのか特に悪びれた様子はない。

「……それで何で俺をまたここに喚んだ？」

『少し褒美をやろうと思ってな』

「褒美？」

その単語に反応して考輝の眉がピクリと動く。

『まぁ、初陣祝いってとこだ。ともかく洛陽に着いたら左慈って奴を訪ねろ。それでそいつから褒美を受け取れ』

「相変わらず投げやりだな……」

彼は心底呆れた表情をする。

『説明するの面倒なんだよ。ともかくまた行ってこい』

その言葉と同時に考輝は黒い光に包まれた。

「……何処だここ？」

考輝が目を覚ますと、彼はベッドの上で寝ていた。

左側には壁があり、残りの三方は天井から吊された白い布によっ

て周りから隔たれている。時折人の影が布に映り、消えていった。

（……何処だかは置いとくにしても、何で俺はベッドの上で寝ているんだ？
眼鏡の奴を助けたところまでは覚えているが……思い出せないな）

彼は上半身を起こして首をひねる。

（とりあえず状況を確認――って痛！！）

ベッドから降りて立とうとした時に彼は後頭部に鈍い痛みを感じた。
しかし痛みの原因も思い出せないので、ひとまずベッドから降りて白い布を持ち上げて外にでる。

その部屋の中央では数人の人達が怪我人の手当てをしていた。
そして隅の方では他にも白い布で隔たれいる場所がある。
布の下からベッドの足も見えた。

（ここは病院か？　……と、いう事は俺は頭を怪我したんだろうな。

さっき頭痛くなったし。場所はまだ分からないが）

「あ、目が覚めたのですか？」

彼が少し考え込んでいると横から声をかけられる。

声の主は銀髪で、全身に沢山の傷跡がある少女だった。目がキリッとしているため、どこか真面目な印象を受ける。

「……ああ。それでお前は？」

「申し遅れました。私は姓は楽、名は進、字は文謙と言います。若輩者ながら、この村の義勇軍の指揮をしている者です」

楽進は礼儀正しくきびきびと言う。

（楽進……か。たしか魏の古参の武将の一人だったな）

彼は楽進のステータスを開く。

統：６９　武：７４　知：４２　政：４１　魅：８５

剣：Ｂ　槍：Ｂ　戟：Ｃ　弓：Ｃ　騎：Ｃ　兵器：Ｂ　水軍：Ｃ

特技：気術（気を扱える）

（余り高くはないが、まだまだ伸びしろがある。未来の名将ってところか。

……気ってのはよく分からないが）

「あの……どうかなさいましたか？　まだ頭に違和感が？」

楽進は少し心配そうな顔をしている。彼に反応が無いので心配になったのだろう。

「いや大丈夫だ。それで俺は姓は彰、名は義、字は紅炎だ。

……そういえば眼鏡の奴も義勇軍を率いていると言っていたが」

彼は先刻の眼鏡の少女との会話を思い出す。

その辺りはちゃんと覚えていた。

「于禁の事ですか？　実はこの村の義勇軍は私と于禁ともう一人、李典という者の三人で率いているのです。
それから先刻は彼女と村の子供を助けて頂き、有り難うございました」

楽進は深々と頭を下げて礼を述べる。
かなり低く頭を下げて、腰は９０度近く曲がっていた。

考輝はそんな光景を見て思わず苦笑してしまう。

「とりあえず頭を上げてくれないか？　流石に周りの視線が痛い」

二人には周りの怪我人や手当てをしていた人達から視線が集まっていた。

村の義勇軍を率いていて、村の中での実力者である彼女が頭を下げているため、周りは何事かと視線を送っている。

「あ、すいません……」

彼女はその視線に気がつくと恥ずかしそうに頭を上げた。

「おぉ、彰義殿。目が覚めていたか」

「……」

ちょうど楽進が頭を上げた頃に星と玄鳥が部屋に入って来て、二人に近付いていた。

ただ玄鳥は頬を少し赤らめて、視線は宙を泳いでいる。

「まぁな。……それで何でそいつは変な様子なんだ？」

「それはもちろん先程の事を……お主、もしかして覚えておらんのか？」

星は目をぱちくりとさせ驚く。それは少し残念そうな表情にも見えた。

「全く覚えていない」

「…それは残念。もう少し玄鳥を弄れると思っ――」

「いいか、さっきは何もなかった！！　お前がこけただけだ！！」

星が言い終わらない内に玄鳥が考輝に駆け寄り早口で言う。

さらに彼の肩を掴み、前後に揺する。

「お、おう」

それには有無を言わさない迫力があった。

「それはそうと楽進殿。先程から村の長老がお主を探しておるぞ？」

星がタイミングを見て言うと、楽進は何かを思い出したかのようにハッとする。

「あ！　話し合いの事をすっかり忘れていました！！　教えて頂き有り難うございます。

……それで皆様はどうしますか？」

「是非とも参加させて貰おう。恋に高順殿も参加するつもりらしいからな」

「心強いです。正規軍の方達にも意見が欲しいですから」

その二人の会話を聞き、玄鳥は考輝を揺らすのを止め、真剣な顔になる。

考輝もまた同じように目を細めた。

「……なんだ？　何か厄介事か？」

「かなり面倒な状況だぜ？　何たって村一つの命運がかかっているんだからな」

玄鳥はどんな状況か既に知っているようで苦笑いを浮かべる。

「詳しくは長老の部屋に向かいながら説明します。こちらへどうぞ」

三人は楽進に連れられ、部屋から出て廊下に出た。

「まずこの村は場所はエン州の東郡のはずれにあります。
普段は余り賊がいないのですが、ここ最近南の陳留や北の冀州、少し距離がありますが西北の并州で大規模な賊の討伐があり残党がこの地に流れ着いています」

廊下を歩きながら楽進が考輝に状況を説明をしていく。
なお話しに出た并州は丁原、冀州は袁紹、陳留は曹操が治めている。

彼等が歩いている廊下はかなり広く、その家の裕福さを醸し出ていた。
廊下の右手には窓が等間隔に並び、日が少し西に傾いていたためもろに日光が入り込んでいる。

「それで賊の被害が拡大しているのか」

「はい。この数週間で近くの村が三つも潰されています。さっきの部屋にいた怪我人も、殆どがその村々から逃げて来た者達です」

考輝はさっきの病院のような場所を思い出す。

彼は布を吊しただけという簡易な造りの合点がいった。

それは怪我人に急に流れ込んできたために、急遽造ったものだからだ。

「それで賊の数は？」

「根城に偵察に行った者と、逃げて来た者達の話しを聞く限りだと１５００人はいるようです」

「この村の戦力は？」

「義勇軍は２００人。戦える者に無理矢理武器を持たせたとしても５００人に届くかどうか……」

「……」

（単純計算で敵はこちらの三倍。しかも義勇軍で正規軍ではない。勝率は限りなく……嫌、０だな。全く、本当に面倒な状況だ）

彼は心の中でため息をつく。奇跡でも起こらない限り、この戦況はひっくり返せないとまで彼は考えていた。

（普通ならここは逃げの一手しかないが、ここは軍ではなく村。
食料の蓄えの問題はあるし、移動のスピードが軍とは違うから賊に追撃をくらい確率もある。下手に逃げる事も出来ない）

彼がそうこう考えている間に、とある扉に四人はたどり着く。
ちょうど廊下の突き当たりにあり、他の扉よりも一回り大きい。
豪華な作りではないが、頑丈そうな木で出来ている。

「失礼します。遅れてすいません。少々話し込んでいました」

楽進はその扉をノックもせずに開けた。

会議室。
端的に言えばそういった感じの細長い部屋だった。そして部屋の中央にある机を囲むように人々が座っている。

中には恋と高順もいて、考輝が助けた眼鏡の少女、于禁の姿も見える。
彼女は考輝の姿を見るとあっ、という感じで口を開けた。

他にも何人か村の有力者であると思われる男性が数人いる。
その内の一人は白髪に白い髭の年輩の老人がいた。

見た目からして、おそらく彼が長老だろう。

「うむ。それでは席についてくれ。御三方もどうぞ、空いている席へ」

四人は長老に促され、席に座る。

「……さて、いきなり本題に入るがの、この村は今重大な選択を迫られておる」

長老は四人が座ったのを確認した後、重苦しく話し始める。
それにより場の空気も変わっていく。

「皆も知っている通り、今この地には賊が大量に集まり、明日の保障もない。
そんな中で我々に出来る選択は、無謀な戦いを挑むか、住み慣れた土地を捨て乏しい食料で逃げる事だけじゃ」

村の者達は皆一様に険しい顔をする。

彼等にとって村は生まれ育った唯一の故郷だ。
それを捨てるのにはかなり抵抗があるし、食料の蓄えも少ない。
かと言って賊に戦いを挑むのは余りに無謀である。

「これはかなり辛い選択じゃが、我々は選ばねばならぬ。例えどちらも上手くいかないにしてもじゃ」

『……』

しかし誰も意見を言わない。この空気の中では当然と言えば当然だろう。

「東郡の太守の軍は当てにならねぇのか？」

その空気の中、玄鳥が口を開くが村の者達の表情は変わらない。それどころか更に顔を険しくする者もいた。

「ふん！　そんなのが当てになるなら賊は最初から集まってこねぇよ！！」

村の者が忌ま忌ましげに言う。その顔は怒りで満ちていた。

「曰く、東郡の太守は無能。古万様も良い印象は持たれていない」

「ったく……世の中腐ってるぜ……」

玄鳥は苦虫をかみつぶしたような顔をする。

「……良い考えがある……」

沈黙していた恋が口を開く。表情とかは変わらないが。

しかし、その場にいた全員は食い入るように彼女を見つめた。

「して、恋。その考えとは？」

「……攻めればいい……」

『……』

瞬間、空気が凍りついた。

「しかし……呂布殿？　戦力差は三倍近くありますが……」

いち早くフリーズから回復した楽進が恐る恐る聞く。

この様子だとただ単に策も無しに突撃とか言いそうだと彼女は感じたからだ。

しかし、彼女の言葉はかなり予想外のものだった。

「……勝つための策は……考輝が考えてくれる……」

（何だと！？？！！）

考輝は思わず叫びそうになるのをぎりぎりで止め、心の中に留める。

「確かにこの前の戦もこいつの策のおかげで倍近くいた敵に完勝できたしな」

（てめぇ、船酔い野郎！！　それは今言う事じゃねぇ！！　他の奴らが変な期待すんだろ！！！）

彼は再び心の中で叫ぶ。そして彼の予想通り村の者達が期待を込めた目で彼を見始める。

そのあまりの視線に彼はたじろいでしまう。

「彰義殿……何か策がおありで？」

長老もまた、期待を込めた目で彼に尋ねる。

「嫌、流石にこの差を覆すのは……」

「策を立てるにもその場所を見ねばなるまい？　賊の根城の地形を見れば彼なら策の一つも思いつくであろう」

（……星……お前もか……）

彼の言葉は星に遮られ、皆に届く事はなかった。

「おお、頼もしい！！　誰か彰義殿を案内してやれ！」

「それなら沙和が案内するの！！」

「ウチも着いてくで！！」

長老の言葉に于禁と紫色の髪をした、関西弁の少女が立候補する。

関西弁の少女は、虎柄の水着のようなものにマントのような物を羽織り、首にはゴーグルをかけていた。

「……」

こんな状況になってしまえば彼は断る事は出来ず、村の者の期待を背負って賊の根城を見に行く事になってしまった。

日は徐々に傾き、もう夕方になっていた。
そんな夕日が差し込む森を三人の人影が移動している。

「そういえばさっきは有り難うなの～。迷子になった村の子供を見付けたと思ったら、あんな事に危なかったの」

「……気にするな――于禁でいいのか？」

考輝の声には元気が無い。于禁の言葉も手短に返す。

（……胃が痛ぇ）

元気が無いどころかストレスで胃が痛くなっている。

「そうなの～。沙和は姓は于、名は禁、字は文則なの～」

彼女はそんな彼の様子を知ってか知らずか、かなり陽気に名を名乗る。

「ちなみにウチは李典や。それにしてもお兄さん凄いんやな～。腕

も立つ上に策まで考えられるなんて、尊敬するわ～」

「沙和もなの～」

二人はキラキラとした目で彼を見る。

「……誇張されすぎだ」

しかしそれは彼の胃の痛みを強くするだけだった。

（それにしても于禁に李典か。こいつも楽進と一緒で魏の古参の武将だな）

彼は二人のステータスを開く。

統：７４　武：６４　知：６０　政：４７　魅：８５

剣：Ａ　槍：Ｂ　戟：Ｃ　弓：Ｃ　騎馬：Ｃ　兵器：Ｃ　水軍：Ｂ

特技：規律（部隊が混乱しにくい）

これが于禁のステータス。

統：６８　武：６７　知：７０　政：６４　魅：８５

剣：C　槍：A　戟：C　弓：B　騎馬：C　兵器：A　水軍：C

特技：発明（兵器等の制作期間が短くなる）

李典のステータスはこうなっている。

（楽進と同じで二人ともまだまだ伸びる要素がかなりある。やはり歴史に名を残すだけの事はある）

彼は胃の痛みも忘れて感心した。

「そろそろだから、ここからは気をつけて行くの」

「せやな」

賊の根城が近いため三人はペースを落としてゆっくりと進んで行く。

彼等が5分程歩くと、森の中に一本の亀裂が現れた。

亀裂はかなり長く、１００メートルくらいはあるだろう。

彼等がその亀裂を覗き込むと、そこには洞窟が広がっていた。

洞窟にはそこを根城にしている１５００人程の賊達がごった返しになっているが、それでもまだ空間に若干の余裕がある。

「こうやって見ると、やっぱり凄い数なの……」

「何とも暑苦しそうな空間やで……」

二人は賊の数をあらためて見て、先程とは打って変わって暗い表情をしている。

「……」

考輝も打って変わって思案顔になっている。

だがその顔には先程までの絶望したような表情は無い。

「……この洞窟には出入口は何箇所あって、ここみたいな大きい空間はいくつある？」

「昔はここは谷だったらしくて、大きい空間はここだけなの」

「出入口は……大きいのが一つに人一人がやっと通れるのが後いくつか――――って、お兄さん？　何処に行くんや？」

考輝は李典が喋っている途中で踵を帰して歩き始めた。

「村に戻るぞ。急いで策の準備をしないとならない」

それを聞いた二人は笑顔を浮かべて彼の後を追う。

「一体どんな策なの～？」

「村で説明する」

「いけずやな～。今説明したって減るもんやないやろ？」

「何回も説明するのは面倒だ」

彼はそんな軽口を叩ける程にまで余裕が出ていた。

（……奇跡がおきそうだ）

考輝は心の中でそう呟いていた。

三羽鳥に会って（後書き）

前回乗せ忘れた張遼と高順のステータスを乗せます

張遼

統：９３　武：９２　知：７８　政：５８　魅：８９

剣：Ｂ　槍：Ｓ　戟：Ｓ　弓：Ｂ　騎馬：Ｓ　兵器：Ｂ　水軍：Ｃ

特技…神速（部隊の機動力が上がり、相手の士気を下げる）

高順

統：８５　武：８８　知：５５　政：４６　魅：８７

剣：Ｓ　槍：Ａ　戟：Ｃ　弓：Ａ　騎馬：Ｓ　兵器：Ｓ　水軍：Ｃ

特技…攻城（城や拠点や陣への攻撃が強力になる）

押し潰して（前書き）

今日中に投稿するために半分で切りました。

先に謝ります。すいません。
今回の戦闘は前回の数倍酷いです。
あとタイトルも酷い。

押し潰して

賊達は洞窟の中にいた。

それは谷の上に屋根が出来ているような形状で、地上から見ると地下の位置にあたる。

形は細長い形をしていて、横幅は車が三台も停まれば、ほぼ一杯になりそうだ。

ただ、長さはわりとあるため総面積は広い。実際、１５００人程の賊達がいてもまだスペースに余裕がある。

壁や地面は岩肌でごつごつしていて、壁の所々で縦に亀裂のような物がはしっている。

それは地上と繋がっているため、賊達は主にそこから出入りをしていた。今はちょうど満月なので、亀裂から月の光が漏れている。

しかしその亀裂はかなり細く、大人の男が横になって歩けばやっと通れるぐらいだ。

東郡の辺境に最近逃げて来た賊達はそんな洞窟を隠れ家にしていた。出入りは不便だが、隠れるのにはもってこいな場所だ。

事実、彼等はここを隠れ家にしてからまだ二週間たらずだが、まだ一度も官軍に見つかっていない。

東郡の太守がまともに捜していないというのもあるが。

ともかく彼等は官軍とぶつかる事が無いためかなり上機嫌だ。
元々いた地の官軍に敗れ、逃げて来た彼等にはかなり嬉しいだろう。

今も所々で酒を飲み、陽気に騒いでいる。

壁際にも沢山の盗品が並べられ、彼等の景気も良い事がわかる。
だが逆に、それはここいら一帯の治安の悪さを示していた。

天井の亀裂から月の光が降り注ぎ、陽気に騒ぐ賊達を照らしている。その姿はまるで祭でもやっているかのようだ。

しかし彼等は知らない。

数時間後の自らの運命を。

「ふぁあ……」

見張りの賊の男は眠そうに欠伸をした。

時効は夜明けの数十分前。かなり眠くなる時間だろう。

辺りは徐々に明るくなっているが、まだ薄暗いと言った感じだ。

見張りの男は目をこすりながら横穴の隣にある岩に座る。

その横穴は洞窟の出入り口の中で一番大きく、正面玄関といった場所で、道路の二車線分くらいの横幅だ。

穴に入ると若干の傾斜があり、洞窟の隅の辺りに繋がっている。

「……ん？」

見張りの男は目を細めながらゆっくりと立ち上がる。

穴がある場所を囲む森の中で、何かの影が動いたように見えたからだ。

しかも一つや二つでは無い。いくつもの影が森の中を動き回っていた。

しかし薄暗いためそれが何なのかの判別が出来ない。

仕方なく男が確認するために男が森に近付くと、

『ウォオオオオオ！！！』

「ヒャッ！！」

大きなときの声が上がる。

そして男はその声に驚き情けない声を出しながら尻餅をつく。

さらに声と同時に森の中で沢山の旗が上がる。明確な数は分からないが、かなりの大軍のようだ。

旗の文字は『曹』。それを見た男は南の陳留の太守が逃げて来た者を追って来たのだと悟った。

そして男の顔が青ざめる。

（とうとう官軍に見つかった！！！）

彼は本気でそう思い、転げ落ちるように洞窟の中に駆け込む。

斜面を下りきると彼は大声で叫んだ。

「た、大変だぁあ！　官軍が……官軍の連中が攻め込んで来たぞ！！　凄い数の旗が周りを囲んでやがる！！」

それを聞いて大半の者が飛び起きるが、寝ぼけてまともに動けない者も多く、昨夜呑んだ酒がまだ抜けていない者も多い。

まさしく右へ左への大混乱になっていた。

「うろたえんじゃねぇ！！　武器を持って向かえ打つぞ！！」

賊の中にもしっかりした者がいるようで、混乱を修めようと必死に声を上げるが全く聞き入れられない。

ならば自分達だけでもと、武器を持って出入口に向かおうとするが、洞窟内はなんせ何百人もの人が混乱してごった返しになっている。

そんな中でしっかりと進める訳がない。

「考輝殿の読み通り完全に大混乱しておるな」

賊達が慌てて何も対処が出来ない内に正面口から星、玄鳥、恋、高順が入って来る。
しかし賊達はそれにすら気付かないようで今だに右往左往していた。

「……こんなんだとなんかやる気がなくなるな」

「曰く、まさしく弱い者イジメ」

自分達にすら気付かない賊達を見て玄鳥はつまらなそうにため息を吐き、高順も便乗する。

「……行く……」

しかし恋はそんなの関係ないかのように切り込んで行く。

「……フンッ……」

「ギ、ギャァアア！！」

彼女程の武を持つ者からしたら普段の戦いすら弱い者イジメのような感じのため、敵がどうであろうと関係ないようだ。

「――では我々も行くか」

そんな恋に続き、他の三人も切り込む。

武力平均約９７。混乱してまともな対応が取れない賊達に彼女達を止める術はない。

そうやって切り込まれている内に若干賊達は冷静になり始めた。最低でも、寝ぼけている者はもういない。

しかし、それでも賊達は切り捨てられていく。

数の理は有っても、狭い洞窟内では取り囲む事が出来ないため、自らの理を活かせないでいた。

そして彼女達はお互いに余り離れないようにしているので尚更である。

そんな状態で切り進む内に彼女達の後ろと洞窟の入り口との間にスペースが出来る。足元は骸の山だが。

そしてそのスペースがある程度出来るのを待っていたかのように入り口から兵士達が入り込む。その中には考輝と楽進の姿もあった。

「……楽進、火矢だ」

「はい！　しっかり狙え……今だ、打て！！」

考輝が楽進に促すと、彼女はきびきびと号令を出す。
そして弓を持った兵士達が火の点いた矢を放っていく。

しかしその狙いは賊達ではなく、壁際に置いてある盗品だった。
置いてあった盗品は殆どが食料だったので各所で火が引火し始める。

だがその火は余り大きい物でないので、人を焼いたり等はなさそうだ。
落ち着いて消そうとすれば、叩いただけで消えそうなレベルである。

「火があがったぞ」

「まずい、洞窟の中だと焼け死ぬ」

「急いで逃げろ」

そんな火だというのに、賊の至る所でこういった声が上がる。

「正面は駄目だ。官軍がいる」

「他の出口から逃げろ！！」

一人の賊が壁の亀裂から逃げだそうとする。
そして一人が逃げ始めれば後はなし崩しだ。

星達がいる辺りの者達はともかく、後ろの方にいた者達は我先にと亀裂に押し入る。

しかし亀裂は男一人がやっと通れるぐらいの広さしかない。
そんな場所に何十人、下手をすれば何百人もの男が一気に詰め寄ればどうなるだろうか？

「オイ、退け！！　俺が先だ！！」

「うるせぇ！！　俺の方が先にこの亀裂に辿り着いたんだ！！」

「お前ら早くしろ！！　火が迫ってくるだろ！！！」

もちろん争いが起こる。
そして酷い所では殴り合いが始まり、無理に二人で通ろうとすれば詰まってしまう。

そしてその後ろにいる者達は業を煮やして無理に押し込もうとしたり、自らも無理に通ろうとするがそれは詰まりを更に酷くするだけである。

「ば、馬鹿、押すな押すな！！　前が詰まってる！」

「痛い痛い痛い痛い痛い！！！！！」

そして詰まりはどんどん酷くなり、やがて圧力が生まれる。
その圧力は後ろが押してくる度に強くなっていき、とうとう人など簡単に死ぬ程に大きくなる。

人の波の中で、物言わぬ死体が徐々に増えていく。

最初の方に逃げ始めた者達は自分達の過ちに気付き始めたがもう遅い。
前には狭い通路で人が詰まり、後ろからはどんどん人が詰め寄って来る。進退窮まった状態だ。

「や、止めてくれぇ！！！　潰れちまう！！」

そうやって叫ぶ者もいたが、戦場の怒声や騒音によって掻き消されてしまう。

ただ賊達は気付かぬ内に自らの手で仲間を殺していった。

「……恐ろしい光景だ……」

前線で指揮をしていた楽進は賊達の状態を見て思わず呟く。

助かりたいと思うが故に前の者を押し込み殺し、いずれは自分も押し殺される。

人が作り出した地獄絵図。

端から見るとまさしくそんな状態だった。

（……真桜と沙和はこの場にいなくて良かったかもしれない。多分二人にはこの光景はキツすぎる）

楽進は自分と共に義勇軍を指揮している二人の少女について考える。

ちなみに二人はもしもの為に洞窟の外で待機していた。

実はこの配置は楽進と同じように、二人にはキツいと考えた考輝

なりの配慮だったりする。

（……それにしても彰義殿とは一体に何者なのだろうか？　あれだけの指示でこの状況を的確に作り出す所、ただ者ではない）

実は考輝が指示した事は三つしかない。

大量の旗と非戦闘員まで使ったときの声でこちらを大軍のように思わせる事。

武力が高い者達で切り込み、スペースを作った後に兵士達が火矢で周りに影響が出ない程度に火を起こす事。

最後にあらかじめ賊に潜り込んでいた義勇軍の者に騒がせて賊達に出口に逃げるように仕向ける事。

この三つの事だけで考輝はこの惨状を作り出していた。

（下手をすれば彼はいずれは天下に名をはし、この乱世を……しかし賊相手とはいえ、こういった冷酷な策を平然と使うあたりもしかしたら味方ですら――――）

「おい、楽進」

「ひ、ひゃい！！」

ちょうど考輝の事を考えている時に後ろから声をかけられ彼女は声が裏返ってしまう。

「？　……まぁいい。とりあえず仕上げに移る。

詰まった連中は置いといて、まだ戦う気がある奴らに降伏を勧告する。それで降伏した奴らは外の李典達に回して一カ所に集めさせとけ」

「わ、分かりました……」

楽進は自分の考えに気付かれなかった事に内心で胸を撫で下ろし、賊達に振り返る。

彼女は自身の鉄甲を強く握り直し、賊達に向かって行った。

戦闘は昼前には終わりを告げた。

賊は４００人程が討ち取られ、約２００人が投降した。たが１００人くらい上手く逃げたようだ。

そして残りは圧迫死、もしくは詰まって動けなくなった所に火を付けられ焼死した。

村の者達や義勇軍はその後話し合い、賊は太守に引き渡し、盗品は潰された村の復興に使う事にした。

そして現在盗品を洞窟から運び出す作業をしている。

「それにしてもこの賊達もよくもここまで溜め込んだものやで」

「そうなの。食料だけでも沙和達の村の三年分はあるの……」

李典と于禁はどんどん運び出される盗品に唖然とする。

しかも中には数匹だが馬や牛等の家畜の姿すらあった。もはや賊達に対する呆れが生まれる。

「まぁ１０００人を越す大所帯ならこれくらいはあってもおかしくないがな」

「あ、趙雲はんに張燕はん」

唖然としている二人の後ろから星と玄鳥が歩いて来た。

「確かに沙和達の村も大きいけど千人はいないの」

「そういえば他の皆はどうしたんや？」

「恋達は長老の所にあの馬を貰えないか相談しに行ってる。洛陽までの道のりを此処から徒歩で行くとかなり時間がかかるからな」

当たり前だが、車等がないこの時代で馬は貴重な移動手段だ。荷物も大量に運べるし、自分で歩く必要も無く、なにより速い。上手くいけば洛陽まで二週間以内に着くだろう。

「じゃあお兄さんは？」

「考輝殿の事か？　実は我々も彼がここにいると思って来たのでな」

「あれ～おかしいの。さっきから凪――楽進ちゃんが会いに行ってから戻って来てないの」

そこで李典が何かを思い付いたような顔をする。

頭の上に電球のような物も見えた。

「……まさか……凪がお兄さんに変な事をされてて……」

そうは言ってはいるが本気で言っている訳ではなさそうだ。目が明らかにふざけている。

「いや、能面に限ってそれはねぇな。あいつ女に興味なさそうだし」
「「……プフッ！！」」
李典達は能面の部分で同時に吹き出す。
どうやらがツボに入ったようだ。

「此処におられたのですね」
「……楽進？」
考輝が振り返るとそこには楽進がいた。
彼が今いるのは最初に李典達と賊の偵察に来た洞窟の真上の場所。
そこにまさか人が来るとは思わなかった事と、探していたような口調から彼は怪訝な顔をする。
「……私の話しを聞いていただけないでしょうか？」

その時の彼女の顔は真面目な彼女が彼に見せてきた表情の中で一番真剣なものだった。

押し潰して（後書き）

感想やアドバイスをいただけると泣く程嬉しいです。

覚悟を決めて（前書き）

難産……

とりあえず遅れてすいません

覚悟を決めて

考輝は森の中にいた。

時間帯はちょうど真昼頃のため、太陽が真上から木々を照らしている。木はかなり生い茂っていて日を遮り、そのため森は少々鬱蒼としていた。

森の中で一部地面に細長い亀裂の入っている部分があり、かなりの長さに広がっている。

その亀裂は先日まで賊が根城にしていた洞窟の天井に走っているもので、考輝が偵察に使った物と同じ物だ。

そして亀裂からはうっすらと煙りが上がり、肉の焼ける嫌な臭いが漂って来る。

この下にはもう生者はいないだろう。

そんな亀裂を背に、考輝は立っていた。

いつもと変わらない無表情で少しけだるそうだ。彼の視線の先には楽進が彼とは正反対に背良く立ち、かなり真剣な表情をしている。

何とも不釣り合いな二人だが、考輝もまた楽進と同じように真剣

だった。

（話し……か。大方あの策の不満ってとこか？　一番効率が良かったとはいえ、余り褒められたものではないからな。
まぁ何か言われる覚悟はしてたし、驚く程の事でもないか）

何も考えていないような、掴み所がない無表情だが彼はしっかりと物事を考えている。
それも常人では到底追い付けないスピードで。

「……別に構わない」

彼は楽進が話して来るであろう話題の一応の予測を立ててから彼女の問いに答える。

「有り難うございます。では……」

楽進は軽く礼を述べた後、一呼吸おく。まるで自分の考えをよりまとめる為のように。

「貴方は……どうして村を救ってくれたのですか？」

楽進に問われ、考輝の表情に動きが出る。

と言ってもあかさまに分かるものではなく、頬が少し動いた程度だ。

（何故私は今更気付いたのだろうか？　彼には戦う理由が無いと。我々は自らの故郷を守る為に戦った。言わずもがな戦う理由がある。

呂布殿達は官軍の将。戦う理由にはそれだけで充分だし、もはやそれが仕事だ。

趙雲殿達は己の正義感に従って戦っている。余り会話をしていないがその志は伝わってきた）

楽進は皆の戦う理由を考えていく。全員理由は違えど、しっかりとした自分の意志を持っている。

（しかし、彰義殿は？

よそ者で、何処かの軍に所属している訳でもない。……失礼だが正義感に溢れている訳でもない。

なのに、この人はあの絶望的な状況の中で我々と同じように立ち向かった。私はその理由が知りたい）

彼女がこう考え始めたきっかけは考輝の考えた策だった。

最初彼女はあの策に驚き、平然とやってのける彼に恐怖をした。そして彼の事を考えている時に気が付く。

関係がない彼があの場にいる異様さに。

（……これまた意外な質問だな。疑問に思って当たり前と言えば当たり前事だが……それにしても理由か。深く考えていなかったな）

考輝は顎に手を当て考え始める。

自分でもそんなものを考えていなかったからだ。

（正義感？　違うな。そんな感情で俺は動かない。

金の為？　古万さんの時はともかく、今回は正規軍ではない。そんなの期待出来たものじゃない。

自分の能力を試したかった？　……否定できない。少なからずこの理由はあるな。

……でも、一番はやっぱり――――）

「単なるエゴ――自己満足だ」

彼は手を腰に当て、空を見上げ気味になりながら呟く。

エゴを言い直したのは楽進に伝わらないかもしれないと思ったからだ。

（所詮俺は生きていた時代が違う。だからきっと無意識の内に人の

死とこの乱世に抵抗があるんだろうな。
いくら賊を殺したといえ、いくら人を大量に殺す策を考えたといえ、早々納得できるものではない。――特に心の奥底では）

そう考えると、途端に彼は悲しくなってきた。
肩に何か重い物が乗っている気がしてきた。手に大量の血が付いてるように思えてきた。

しかし、彼は無表情のまま。
まるで感情が外に出ないかのように。
まるで何か面が着けられていて、外から感情が見えないように。

「それは…人を死なせたくないという事ですか？」
そんな考輝に楽進は更に質問をする。
彼女は人を助けたいと思う事を正義感ではなく自己満足と言う事に疑問を持った。
まるで自分は偽善者と言っているようで。
「……正確には理不尽な死が気に食わないだけだ。特に時代に殺さ

れるようなのがな」

「時代に？」

考輝の答えに楽進は間髪入れずに疑問を投げかける。

「ああ――この乱世という時代では人が次々に死ぬ。
それは人に殺されたから死ぬんじゃない。食べ物が無いから飢え死にするんじゃない。
全てはこの乱世という名の狂った時代に殺されてる」

彼は何時になく饒舌だった。
それは胸の奥深くにあった気持ちを暴露しているからかもしれない。ともかく彼はかなり気分が昂揚していて、一気に喋っていく。

「その乱世を創るのも人だが、それは一人じゃなくてましてやこの時代の人間じゃない。いろんな理由が重なり続けて乱世になるからな。
でもそのツケに苦しみ、時代に殺されるのは今を生きる人間達。こんなの理不尽だと思わないか？」

「……」

楽進はただ黙って聞いている。
正直なところ、彼女に難しい事は分からない。

彼女が戦うのは正義感や目の前の人を助けるため。いちいち時代がどうだとか考えていない。

しかし、最後の彼の言葉には深く共感ができた。

（今の時代の人間が理由も無く殺される理不尽さ。この憤りは私にもある。

……最初は彰義殿を冷酷な人間だと思ったが、実は違うのか？

もしそうなら、私は――――）

彼女の中の考輝のイメージが徐々に変わり、ある決意が生まれる。

その決意は以前から彼女の中にあった憤りを糧にどんどん固く、大きくなっていく。

「……」

「……」

二人の間を沈黙が支配していく。どちらも両者を見つめて動かない。

それは話す事が尽きたのではなく、楽進の中の決意を完全に固めるための間。

そうした彼女の心中を知ってか知らずか考輝も何も言わない。

時折風が吹いて木を揺らし、ガサガサと葉が擦れる音が聞こえる。

「……もう一ついいですか？」

「ああ……」

楽進の覚悟は固まった。後は最後の確認だけである。

「貴方はこの理不尽な乱世で一体何をしますか？」

この質問の答えで彼女の人生は変わる。

そう感じとった考輝は慎重に言葉を選んでいく。

それこそ単語の一つ一つまで気を配るように。

「……正直な話し、俺はこの乱世で何をしたいのか分からなかった」

彼は嘘偽りなく話す。

表情は何時もと同じ無表情ではなく、心底真剣なものだと判る。

「最初は何処かに仕えようかと思った。
この乱世はいずれ誰かの手によって治められる。だから俺がそこまででしゃばる必要は無いと思ったからだ」

そこで彼は目をつぶる。
浮かび上がって来るのは彼が殺した賊、戦いにより死んだ兵士の亡きがら、賊に村を潰された命からがら逃げて来た村人。

「でも、それじゃ駄目だと気が付いた。
俺がそうやって人任せにしている間にも世界では理不尽な事が続いている」

それは彼が元々いた世界でも起こっていた。

だが彼にとってそれはテレビの向こうの話しであって、関係があるわけでもなく、それを救う力もなかった。

（だが今はどうだ？
関係ない遠く離れた地の出来事ではなくて、それは今ここで起きている。そして今はそれを救うだけの能力が俺にはある。だから――――）

「俺は人の上に立つ王になる！　そしてどれだけ血を流そうとも、どれだけ非難を浴びようとも、俺がこの乱世を最も効率良く終わらせる！
――それが俺の乱世で行う事だ……」

言い切った後、考輝は少々息をきらした。

そして柄にも無い事をしたと内心苦笑いをする。

しかし、その言葉は楽進の心に届いていた。

彼女は考輝に臣下の礼をとり、平伏する。

「それだけの覚悟と能力、感服いたしました。どうか私を戦列にお加えください」

彼女に迷いは無い。
長年思ってきた天下大平をこの男は成し遂げると信じているから。

「……俺は姓は彰、名は義、字は紅炎。真名は考輝だ。楽文謙、お前を我が戦列に加える」

考輝にもまた迷いは無い。

この乱世を終わらせると誓ったのだから。

「有り難うございます！！
改めまして、私は姓は楽、名は進、字は文謙。真名は凪と申します。
我が持てる武を全て貴方様に捧げる所存です」
楽進――凪は平伏しながら考輝に忠誠を誓い、真名を渡す。
こうして彰紅炎に初めての部下が出来た。

しかし問題はここからだった。
彼等が村に戻り、凪が村の者達に考輝についていく旨を伝えていくと混乱が起きた。
村の義勇軍を指揮していた者が急に出て行くとなれば混乱するのも当たり前だ。
さらに李典と于禁までついて行くと言い出しとうとう収拾がつか

なくなってしまう。

彼等はなんとか場を収めるが今度は村の長老が、「どうせなら他にもついて行く者を募ってみるかの」と、言い出し簡単な募兵が始まり再び村は大騒ぎになってしまう。

後に、あれは長老の嫌がらせだったと考輝は話す。

そして集まった数はなんと約３００人。この村の義勇軍と対して変わらない数である。

義勇軍の者でついて行く者達もいたが、一番は村を賊に潰されてこの村に逃げて来た者達が多かった。

ともかくそんな数が集まり考輝は唖然とする。　その表情は常に無表情の彼がするとは思えないもので、星と玄鳥はそれを見て爆笑していた。

しかしそんな数が集まれば食料や物資に困るのは当然。

村の蓄えにも余裕がなく、もちろん考輝に充分な金があるわけでもない。

だが彼等の目の前には賊が貯めに貯め込んでいた物資があった。
このままだと官軍に没収され、どうせ無能な太守の私腹を肥やすのに使われるだけだと半分程を村から譲って貰り受ける。
それでも彼等の軍が一年近く持つ量はあるが。

そしてその後村が無事だった事と、出立する者の門出を祝って大宴会が行われた。
それは村を上げてのとても大きなもので、全員がこの世の苦しみを忘れて飲み食いをした。
ただ、恋には食事制限が付けられたりしていたが。
そして夜はふけ、出立する予定の朝になる。

「――それにしても良かったんですか？　義勇軍の将を全員連れて

行って」

出立する時になり、考輝は長老と話していた。

彼女達三人は優秀だ。それゆえ彼女達が抜ける穴は大きい。

考輝はそれを心配した。このまま彼女達を連れて行って戦力不足の村が壊滅でもされたら彼にとって目覚めが悪い。

「心配なさるな。対策はある。――まぁワシにとっては娘が三人嫁入りするようなものじゃがの……」

そう言って彼女達を眺める長老の目は淋しげだ。

おそらく幼少の彼女達を見守ってきたのだろう。

彼女達は村の者達と別れの挨拶をしている。

中には涙ぐむ者もいて、必死に彼女達に村に残るように説得したりしていた。

殆どが男だが。

「お～い、能面！　恋達がそろそろ行くってよ」

そんな雰囲気の中、玄鳥が大声を上げて近付いてくる。

「空気読めよ……まぁ分かった。すぐ行く」

考輝は長老に軽く会釈をしてから玄鳥の後について行く。

「じゃあな恋。……まぁ二ヶ月もすればまた会えるがな」

「……（コクっ）」

考輝の別れの挨拶に恋は軽く頷く。

彼女と高順は馬を買い、一足先に洛陽に向かう事にしていた。
彼女達は丁原軍の将。あまり軍を離れる訳にもいかず、早めに戻る事にしたのだった。

「高順も元気でな」

「……曰く、驟雨（しゅうう）で構わない」

考輝が高順にも挨拶をすると彼女は名前を訂正した。
おそらく彼女の真名であろう。

「……俺は考輝だ。じゃあな驟雨」

「曰く、さらば」

彼は名前を訂正して、改めて挨拶をした。

「……それから星もな」

「本当に行っちゃうのか？　洛陽ぐらいまで一緒に行こうぜ」

更に、星ともここで別れる事になった。

彼女はどうせここに流れ付いたのならばと、ここから徐州の方に行く言い出した。

徐州は都と反対側のため、必然的にここで別れる事になる。

ちなみに玄鳥は考輝達と一緒に洛陽に行く事にしている。

「そう言うな。これが今生の別れでもあるまい。だからそんな顔をするな」

悲しそうな顔の玄鳥とは違い、星はいつも通りだ。

旅を長くしていればこういった別れも沢山経験しているのだろう。

「そうだぞ。人は別れた人の最後の顔を次会う時まで覚えているという。だからお前も笑っとけ」

考輝自身これを何処で聞いたか覚えていなかったが、この言葉は印象に残っていた。

「へー、そういうもんなのか。……ってかお前が言える事か？」

「どういう意味だ、コラ」

「なら、私もいい笑顔を……（カッ！！」

星は飛び切りのいい笑顔（？）を創る。

その笑顔（？）の素晴らしさは考輝達を一歩引かせる程だった。

「……たしかにこれなら忘れたくても忘れなそうだな」

「もはや夢に出るぜ……」

二人の顔はかなり引き攣ったものになった。

こうして三人を見送った後、彼等もまた村の者達に見送られて洛陽に向かっていく。

この軍が後に『晋』という国を創る程に成長していく事をこの時点では一人を除き、誰も思っていなかった。

褒美を貰って

皇帝は洛陽の中にいた。

しかし漢帝国の皇帝と言っても、今では政治の能力は全くと言っていい程無い。

現在実際に政治を動かし、権力を握っているのは外戚（皇后の親戚）の何進である。

彼女は皇后の妹であり、たったそれだけで大将軍の地位まで上りつめ、権力を我が物顔にしていた。

だが、外戚が権力を持つ事に張譲を始めとする宦官（皇帝の身の回りの世話をする者）は快く思っていない。

朝廷内には非常に不穏な空気が漂い、何進ら外戚と張譲ら宦官の権力争いが水面下で行われていた。

政治がそんな状態のため都である洛陽の治安は余り良くない。碁盤のように整備された大通りは今でも沢山の露店や客で賑わっているが、裏路地は酷いものだった。

そこでは飢えと貧困が溢れ、死が蔓延している。
盗賊まがいの連中も住み着いているため略奪も日常茶飯事だった。

そして今の政治の状況を示すものがもう一つある。
それは洛陽の郊外に駐屯している軍隊だ。

都の近くに近衛兵以外の軍がいるのは基本的に戦時しかないが、
今は戦時という訳ではない。
ただ単に何進が宦官への威嚇や自身の警護のために呼んでいた。

これもまた政治が腐っているから起こる事である。

そんな何進に呼ばれた軍は大小合わせて１０近くあり、一番大きいのは袁紹軍であった。軍旗にも『顔』『文』『張』『田』『荀』等の袁紹配下の猛将に智将が集まっている。

後の軍はだいたい同じ大きさだが曹操や丁原、董卓や馬騰と言った名高い者達が多い。

そんな軍勢の中で、一際小さい軍が一つあった。
その軍は『張』『楽』『李』『于』といった無名の将達から成り、軍のトップである『彰』という旗にも丁原軍を除き、誰も覚えがなかった。

その軍の一角の陣幕に無表情の男が座っている。
彼は黒い学ランを羽織っていて、この時代には何とも不似合いだった。

彼は姓は彰、名は義、字は紅炎で真名は考輝。

彼こそがこの無名の義勇軍を率いている隊長である。

そんな彼の目の前には彼とは正反対に楽しそうにニコニコと笑みを浮かべている金髪の女性が座っていた。

彼女は丁原こと古万といい并州州勅――今は役職名が変わり州牧だが、ともかく并州のトップの女性である。

そのような女性が何故無名の義勇軍の陣幕にいるのかというと、考輝や将の一人の張燕こと玄鳥と個人的な知り合いだからだ。

一週間程前に考輝達は洛陽に到着したが、恋達から彼が軍を率い

てくるとあらかじめ聞いていた古万はいろいろと準備をしていた。
まず彼等がここに駐屯出来るように何進に働きかけ、物資や金銭等の援助もしている。

実は彼等が今いる陣幕も丁原軍の古い物を譲って貰った物だ。考輝からしては何故そこまでやってくれるのか疑問だったが、有り難く援助を受けている。

余り義理堅くない彼だがこればっかりは感謝せずにはいれない程だった。

「それにしても考輝君には本当に驚かされるわね。
あんな舟から落ちる程度では死なないとは思ってたけど、まさか義勇軍の隊長になって戻って来るなんて夢にも思わなかったわ」

古万はおもむろにに考輝に話しかける。そして陣幕の入り口から外を見ると、そこでは兵士達が調練をしていた。
将の指示に従い陣形を整えている兵達の練度は高い。それはもう義勇軍の動きのレベルを越え、正規軍にも匹敵する程だ。

「糞虫共！　さっさと亀みたいに遅い足を動かしてさっさと鶴翼の

陣を作るの！！」

『サーイエッサー！！』

「声が小さいの！！　そんなやる気のない貧弱野郎共は家に帰ってセン〇リこいてろなの！！！！」

『サーイエッサー！！！！』

「沙和……一体何がお前をそこまで駆り立てる……」

調練方法は普通ではないが。

于禁こと沙和はその細身の何処から出ているのかという程の大声で兵士達を罵倒しながら指示を送っている。

そして隣にいる全身に傷がある銀髪の少女は、自分の親友の一人の豹変ぶりを嘆いていた。

「……なかなか変わった子達も見つけたみたいだしね」

古万はその光景を見て苦笑いを浮かべる。始めて見た時は彼女はもっと驚いていたがもうだいぶ慣れていた。

「……俺もまさかこんな風になるなんて夢にも思いませんでしたよ……」

考輝は軽くため息をつき、古万と同じく調練風景を眺める。

実は沙和にあの訓練方法を教えたのは考輝だ。しかし彼は冗談のつもりだったが、予想外に彼女が気にいってしまい、今にいたる。

しかもかなり効率が良いのか兵の練度の上がり方は右肩上がりだ。

そうなっては、今更直せとも言えない。

余談だが、あの訓練方法を沙和がするようになった後彼女のステータスは統率力が5も上昇していた。

さらに凪と真桜の能力もかなり伸びている。

真桜は都の様々な本を読んで知識を深め、自らの槍をドリルのように改造をしていた。そして考輝が洒落のつもりで言った仕込み武器まで完成させた。

凪は気をかなり扱えるようになっている。前々から扱えはしたようだが、今では戦闘に使える程にまで成長した。

気弾で人を吹き飛ばしてからまだ数日も経っていない。

そして二人も沙和のように能力が上昇していた。凪は武力、真桜は知力が5ずつ上がっている。どうやら三人の得意分野が上昇しているらしい。

（……三人の成長スピードには本当に驚かされる。俺もうかうかしてられないな）

考輝は調練風景を見ながら自身の能力を上げる方法を考えていた。

「失礼します」

考輝と古万が二人でいろいろと話していると兵士が一人陣幕に入って来た。格好からして考輝の軍の兵士のようだ。

「隊長にお客様がいらして――す、すみません……」

考輝は伝えに来た兵士を軽く睨む。軽くと言っても彼の無表情が加わりかなりの迫力だった。

伝えに来た兵士は圧倒され一歩後退りながら謝罪する。

考輝からしたら恩人と楽しく話している中で邪魔をされたので不機嫌だ。それを見て古万は苦笑いをしながら席を立つ。

「じゃあ私はそろそろおいとまさせてもらうわ。意外と長い時間話してたみたいだしね。

――それから身内にあんまりそういう目をしない方がいいわ。子供が見たら泣くわよ？」

「……肝に命じておきます」

考輝は普段の無表情に戻る。彼でも古万に言われると弱い。

「それから募兵に関しては私から何進に言っておくわ。安心してね」

古万は睨むのを止めた考輝にウィンクをしながら帰り支度をする。

当たり前だが都でいきなり募兵をすれば様々な問題が起こってしまう。

朝廷が何を言ってくるか分からないからだ。

しかし、考輝は黄巾の乱が起こる前にもっと戦力を集めておきたかったので、頭を悩ましていた。

そこで彼は何でも頼むのは悪いと思いながらも古万に相談した所、彼女は二つ返事で引き受けてくれた。

実は今日話していた事も大半は募兵に関してだったりする。

「本当に何から何まですいません。こんなに援助までしていただいて――」

「はい、そこまで」

考輝が謝罪すると古万が手を前に出して静止させる。

顔には優しい微笑みを浮かべていた。

「別にいいのよ。貴方みたいな才能を持った人間を埋もれさせるのはもったいないもの。それじゃあ募兵頑張ってね」

「……有り難うございました」

古万は悠々と陣幕を出て行く。

去り際に客が来た事を伝えに来た兵士にも、お勤めご苦労様、と声をかけていたのが考輝には印象的だった。

「……それで客ってのはどんな奴だ？」

古万が出て行くのを見届けた後、考輝は兵士に客が誰ではなく客の様子を聞く。

というのも実は彼に客の心当たりがなかったからだ。まず彼はこの世界に来てから日が浅いため知人が多くない。

唯一訪ねて来そうなのは古万とその配下の将、恋や張遼や驟雨くらいだ。

しかし古万は今の今まで話していたし、配下の誰かにしても来るなら古万と一緒に来る。

そう考えていくと彼に心当たりは全くなかった。

「左慈と名乗る目つきの鋭い男です。なんといいますか、妖術士のような格好をしていまして……追い返しましょうか？」

兵士としてはそんな得体の知れない怪しい男を考輝に会わせたくはない。さらに左慈の上から目線で高圧的な態度も兵士に悪い印象を与えている。

しかし、考輝はその左慈という名前に聞き覚えがあった。

『洛陽に着いたら左慈って奴を訪ねろ。それでそいつから褒美を受け取れ』

以前村で見た夢での神との会話。

洛陽に着いてから忙しかったため彼はすっかり忘れていたが、左慈という名前を聞いて思い出していた。

「いや、会おう。通してくれ」

「は、はい……」

すっかり追い返すものだと考えていた兵士は少し動揺しながら返事をする。そして彼は客人を呼びに陣幕から出て行く。

それから呼んで戻って来るのに5分もかからなかった。

「お前が彰紅炎か」

陣幕に入って来るなり左慈は挨拶もせずにそう言った。もし考輝の軍の誰かがいればその無礼な態度から口論になるかもしれないが、今陣幕には考輝と彼以外誰もいない。

（……神の話しを聞かすのはまずいと行った人払いが意外な所で役にたったな）

考輝は心の中で苦笑する。実際凪あたりがいたら喧嘩になっていたかもしれない。

なお左慈は白い装束を身に纏い、額と目の下に赤い化粧のようなものをしている。この時代ならそれだけで怪しいと言われ役人に突き出されても文句は言えないだろう。

「そうだ。それにしてもそっちから来るとは予想外だな」

考輝は言うと同時に左慈のステータスを開く。

初めて会った者のステータスを開くのはもはや癖になっていた。

統：１１０　武：１１０　知：９０　政：９０　魅：６０
剣：Ａ　槍：Ａ　戟：Ａ　弓：Ａ　騎馬：Ａ　兵器：Ａ　水軍：Ａ
特技：管理人（外史において全てが優遇される。ただし直接干渉する事は基本的に出来ない）

（……どんだけチートだよ……流石は神からの使いってとこか？）
考輝はとりあえずそう納得する事にした。管理人や外史等気になる単語はいくつかあったがあえて触れはしない。

「ふん。俺も訪ねてやるつもりは無かったがお前があまりにも遅かったからな。ほら、受け取れ」
左慈はぶっきらぼうに布に包まれた平たい丸い物を投げる。
考輝はそれをキャッチして布をとると一枚の銅鏡が出てきた。

「……これは？」
考輝はこの銅鏡の意図が分からなかった。
確かに銅鏡はとても貴重な物だ。しかし神が渡す物にしてはおかしく感じた。

「詳しくは俺も知らん。取り扱い説明書があるそうだからそれを見ろ」

考輝が投げられた布をあさると冊子が一冊出てきた。

表紙には「パワーアップキットの使い方――君もこれでチートになろう！！」と書いてある。

（……胡散臭ぇ……）

考輝は何よりもまずそう感じた。

「質問はもう無いな。なら俺は帰らしてもらう」

左慈は一言そう言うと考輝に背を向け陣幕の外に歩いて行く。

「わざわざすまなかった」

考輝も興味なさげに声を発し、視線を冊子に落とした。

『～はじめに～

異世界に来れたのはいいけど、その世界は争いが多くて命の危険も多い。そんな事ってよくあるよね！！
でもこのパワーアップキットがあればもう安心。
これさえあれば念願のチートになれてハーレムでウハウハな――――』

前の手紙と同じで余計な内容が大半を占めていたので考輝は流し読みをしていく。

（……まとめると、
・この銅鏡の名前はパワーアップキットと言って、ステータスを上げるための道具
・コマンドってのがあり、それを実行すると能力が上がる
・コマンドには回数制限がある
・真名を知っていれば他人にも使える
って事になるな。
……とりあえず一回試してみるか）

彼は冊子の指示に従って銅鏡の後ろの真ん中にある珠を軽く押す。
すると、カチッと音がして鏡の部分に文字が浮かび上がる。

統＋５（低）×５
武＋５（低）×５

知＋５（低）×５
政＋５（低）×５

剣適性Ｃ→Ｂ×５
槍適性Ｃ→Ｂ×５
戟適性Ｃ→Ｂ×５
弓適性Ｃ→Ｂ×５

（……これがコマンドみたいだな。冊子によると×５は残り回数で、（低）ってのはステータスが７０未満の奴に使えるコマンドか。
……俺が使えるコマンド一つしかないじゃん……）

彼の今のステータスは基本的に７０を越えて（低）は使えず、適性においても戟適性Ｃ→Ｂが使えるだけだ。

考輝はがっくりと肩を落とし、コマンドがこの状態から増えないか冊子を読み返してみる。

「……あった」

意外にもそれは早く見つかった。

『・コマンドの増やし方

コマンドを増やすには神を楽しませるしかありません。いろいろと

派手な事をしてみましょう』

（つまりあいつの気まぐれで俺にはどうしようも出来ないと……）

彼は思わずため息をついた。

褒美を貰って（後書き）

基本的に管理人の方々はその世界においてテラチートです。
特技の管理人の効果により外史では全てにおいて補正されます。

許可を貰って（前書き）

完全にキャラ崩壊です。

許可を貰って

考輝は陣幕の中にいた。

椅子に一人座り、目の前にある机の上をじっと見つめている。

そこには昨日神から褒美として貰った銅鏡、パワーアップキットが置いてあった。

それは彼の無表情な顔を写していて、普通の鏡とたいして変わらない。

しかしこれはただの鏡ではない。

人の能力値を簡単に上げる事を可能にする夢の道具だ。

「……」

だが、そのような物を手に入れたというのに考輝の顔は嬉しそうではない。それどころか時折ため息をついている。

実は彼はまだ一度もパワーアップキットを使っていない。

何故なら彼は何の代償も無しに、能力を上げられるという事に疑

念を持っていたからである。

（……能力を簡単に上げられるのは確かに魅力的だ。しかし、おいしい話には裏があるのが世の常。副作用の一つや二つあってもおかしくない）

考輝は副作用を非常に恐れていた。

急に武力が上がれば身体がおかしくなるかもしれない。急に知力が上がれば性格や考え方が変わってしまうかもしれない。

副作用はいくらでも考えられる。

（副作用の恐れがある内は凪達には使えない。誰かに試すにしても古万さん達は論外。俺もそんなリスクは負いたくない。

しかし真名を知っている者になると限られてくるんだよな……）

パワーアップキットを他人に使う場合はその者の真名を知らなければならない。そのため見ず知らずの他人に試す事は出来なかった。

それに試せるなら誰でも良いわけではなく、考輝としては試す者の能力が低い方が良かった。

その方が上がり方が分かりやすいし、後々の心配も少ない。

考輝は何度目か分からないため息をつき、椅子に持たれて上を向く。

（……どっかに真名を教えてくれる低能な奴がいねぇかな……）

この彼の願いは案外早く叶う事になるが、それはもう少し先の話しである。

「隊長～、お客さんが来てるで～♪」

考輝がパワーアップキットについてあれこれ考えていると真桜が陣幕に入って来た。

顔はニコニコと笑い、妙にテンションが高い。よく見ると目の下にクマが出来ている。

どうやら徹夜明けでテンションがおかしくなっているようだ。

「また客か……。それからお前また徹夜して何か作ったのか？　あれだけ止めろと言っておいただろう」

考輝は少し呆れ気味だった。

真桜は発明に没頭すると周りが見えなくなるようで、声をかけても気づかなくなる。それだけならまだ良いが、流石に食事や睡眠まで忘れるのはまずい。

彼や凪も何度か注意をしているが余り効果は無いようだ。

当の本人は悪びれず、今もニコニコと笑っている。

「かんにんしてや～♪　でも隊長が言っとった連弩の試作品が出来たで」

それを聞き考輝は表情にこそ出さないが驚く。

連弩は弩を改良した物で、弓を連続的に放つ事が出来る兵器だ。

それはこの時代でも確かに製作可能であるが、彼が真桜に弩の話しをしたのは二日前。

たった二日で口答で説明したものを形に持っていくのは普通出来ない。

「飛距離は若干あれやけど連射に関しては問題はない。後で確認の方を頼むで～♪」

「ああ。それで客ってのは古万さん達か？」

（……真桜ってある意味チートなんじゃ……）

考輝は平静を装ってはいるが内心はかなり動揺していた。

「違うで。なんでも何進大将軍の使いらし――」

「馬鹿！　それを先に言え！！」

考輝は何進という単語に反応して椅子から立ち上がる。
彼は用件の方はだいたい想像出来ているし、いずれ来る事はだいたい予想出来てはいた。

しかし今の政治の実権を握っている者の使者が来たというのに真桜が動揺も無く言ったのでかなり慌てている。

考輝は急いで兵達に準備をさせ、真桜には休息を取るように言う。
兵達の頑張りもあり、準備が整うまでに5分もかからなかった。

やって来た使者は女性――いや、少女だった。水色のパーカーを着て、ズボンを履いている。薄いブロンドのような髪で、ネコ耳フードを付けているのがかなり印象的だ。

そして考輝が一番気になったのは彼女の目。
ライトグリーンの瞳は彼をまるで汚物を見るかのように見ていた。

「大将軍からの言伝を伝える。彰紅炎に洛陽の街での募兵を許可す

る。以上」

少女は早口でメッセージを話す。まるで用事を早く終わらせて一刻も早くこの場所から立ち去りたいように。

その態度と視線に考輝はかなりイラッとする。

しかし使者に向かって無礼な態度をとるわけにはいかない、と自分に言い聞かせて心の内に怒りを留める。

それで名前くらい聞いておこうと考え、礼を言うと同時に尋ねようとするが、

「有り難うございます。それで貴方のお名前は――」

「生憎あんたなんかに名乗る名前は持ち合わせていないわ」

という感じで一蹴される。

考輝に額に青筋がたつ。

初対面で名前すら知らない相手からこんな扱いをされれば誰だって怒るだろう。

「……それが初対面の者に対する態度か？　躾がなってないな」

考輝はもう敬語を使っていない。そのうえ目つきも厳しくかなりの迫力が出ている。

しかし少女は全く動じずに鼻をならす。

「フン！　男みたいな汚らわしいケダモノに礼儀なんか必要ないわ」
「偏見だな。男にもいろんな奴がいるぞ？」
無表情だが考輝は結構頭に血が昇っていた。
少女の方も表情に嫌悪感を丸出しにしている。
「皆同じよ。男なんて全員穴に入れる事しか考えてないんだから」
「酷い言われようだな……昔犯されでもしたか？」
「そんな身の毛がよだつ事言わないでくれる？　私は男が猿みたいに年中発情している所が嫌いなのよ」
どちらも言い争っているにしては冷静だった。
しかし次の考輝の一言で空気が変わる。
「お前みたいな幼児体型に発情する奴はごく一部だから安心しろ」
「なっ！？」
少女は目を見開く。
よほど頭にきたのか顔が一気に真っ赤になった。
「誰が幼児体型よこのデクノボウ！！」

「デ、デクノ……何だとこの糞ネコ耳！！」

「うっさい、顔面無機質！！！」

「やんのかコラァ！！！」

こんな感じ論戦は一気にヒートアップした。

二人とも口で言い争うだけだが、手が出ないのが不思議なくらい加熱していく。

しかし、何故かしだいに話の焦点がズレていった。

さっきまで罵りあっていたのに今では政治や軍事関係の話しをしている。勿論喧嘩腰だが。

ちょうど今は考輝の書いた簡単な洛陽周辺の地図を元に伏兵に関して話している。

「何でそんな所に伏兵を置くのよ！！　下手したら力ずくで洛陽まで攻められるじゃない！　普通ならここに配置するわ！！」

少女が地図の一点を地図で叩く。その場所は考輝が言った場所よりも洛陽から離れていた。

「馬鹿が。そんなありきたりの場所では読まれるだろうが！　他人

が考えないような事をしてこその奇策だ！！」

「フン！！　奇策も成功しなければただの奇行よ！」

「……」

「……」

とうとうお互いに何も言わなくなる。

ただ、どちらも敵意を持った視線で相手を見ているため、どちらかが納得したわけではなさそうだ。

「ハァ……」

少女は軽くため息をつく。

そして考輝も近くにあった椅子に腰掛ける。

その時の二人は先程のような剣幕は無い。頭が冷えたのだろう。

「なんであんた男なのにこんな優秀なのよ……」

少女は自身と論戦でわたりあった男の存在に驚いていた。

この世界は女尊男卑。

パワーバランスはかなり女性に傾いている。
事実、歴代の皇帝や王達も殆どが女性だ。
だから少女は男を見下す節があったし、その事が彼女の男嫌いを助長していた。

しかし今彼女の目の前にいる男は明らかにただ者ではない。
街の噂では考輝が自身の倍以上の敵をほぼ損害無しで殲滅したとか、違う世界から来たとか言われていたが彼女は信じていなかった。
噂は誇張されるものだと考え、気にもとめていない。

（……でもあながち噂も嘘八百じゃないのかしら）

少女の目は先程までの汚物を見るような目から好奇心が混じった目に変わっていく。

「男が優秀じゃ悪いのか。それよりもいい加減名前を名乗れ」
考輝に促され少女は自分が名乗っていなかった事に気付く。
「……そういえば名乗ってなかったわね。私は姓は荀、名はイク、字は文若よ」
それを聞くと同時に考輝は荀イクのステータスを開く。

彼の記憶が正しければ彼女もまた後世に名を残す名将の一人だ。

統：５２　武：１４　知：９６　政：１０５　魅：８３

剣：Ｃ　槍：Ｃ　戟：Ｂ　弓：Ｂ　騎馬：Ｃ　兵器：Ｂ　水軍：Ｃ

特技：言毒（毒舌。論戦に強い）

（流石は『王者を補佐する才』だ。政治力が限界を超えているし、知力もかなり高い。特技の方はピッタリって感じだな）

考輝は一人何かに納得していた。

「知っていると思うが俺は彰義だ。……荀イクって事はお前袁紹軍の軍師か？」

考輝はこの地に駐屯している軍を既に調べていて、各軍の将ぐらいは把握していた。ただ曹操軍と董卓軍はかなり警備が堅く、おおざっぱにしか把握していないが。

そのため荀イクが現在袁紹軍に所属しているのは知っているし、彼女がその才覚に見合うだけの地位に就いていない事も知っていた。

そして荀イクは目を丸くする。
まさか自分の事を知っているとは思わなかったからだ。

「……よく知ってたわね。私自身あまり名前は知られていないと思っていたのだけど」

彼女の袁紹軍内での地位は低い。
更には献策すらもまともに見てもらっていないのが現状だ。
そんな扱いだからこそ、彼女はわざわざ義勇軍ごときへの使者として派遣されていたのだった。

「一応他の軍の将は隅から隅まで調べてあるからな。……勿論お前がその才能を腐らせていると」

その言葉を聞き荀イクは若干顔をしかめる。

「ふーん。あんたは随分私を買っているのね。会って間もなくて口論しかしてないのに」

「だからこそだ。あの口論だけでもお前の非凡はわかる。
どうだ？　俺の所に来ないか？　義勇軍とはいえまだましな待遇になるぞ」

ストレートな引き抜きの誘い。
それに対して荀イク即答だった。

「お断りよ。いずれ袁紹の所なんか出て行くけど男に仕えるなんて論外ね」

「それは残念だ」

そう言う考輝の顔は残念そうには見えない。彼女の答えは予想していたのだろう。

「私の答えぐらい分かってたくせに。……まぁいいわ、もう帰らせて貰うから」

荀イクは目を細めながらそう言うと、出口に向かって歩いて行く。

「心変わりしたら何時でも来い。歓迎するぞ」

「……記憶の片隅ぐらいには留めといてあげるわ」

荀イクは短くそう言うと陣幕を後にした。

荀イクが帰った後、考輝達は大忙しだった。
募兵の許可が出たため、兵を集めて調練をどんどん行っていく。
一ヶ月後には総兵力は千を越し、もうすぐで千五百に届くという所にまで達する。更に丁原軍からの依頼という事で何回か実戦を賊達と行い、着実に力をつけていった。

そうした状況の中で、彰義軍に激震が走る事が起こる。
それは一枚の手紙から始まった。

何気なく兵士から渡された手紙を考輝が開くとこう書いてあった。

『何進大将軍がお呼びである。至急参上せよ』

許可を貰って（後書き）

桂花ってこんなんじゃないような……

しかも荀イクのイクが変換出来ない。

宮廷に行って

考輝は宮廷の中にいた。

草木も眠る丑三つ時。空には太陽ではなく月と星が輝いている。

そんな時間の中、ろうそくを持った女官に連れられて、考輝は宮廷の長い廊下を歩いていた。

壁には左右にそれぞれ等間隔で小さいろうそくが並べられているものの、それでもまだ暗い。女官のろうそくが無ければ足元がおぼつかないだろう。

ろうそくの明かりは床の大理石や壁を照らしているが、余り豪華な飾り等は見当たらない。

そして明かりは考輝の顔も照らしていて、彼はいつもと変わらず無表情。

しかし内心はかなり穏やかではなかった。

（あの手紙を運んで来た者は正式の使者ではなかった。そして指定された時間はこんな真夜中。きっと人目に付くのはまずいような内容なんだろうな……。

……なんか腹痛くなって来た）

彼は何進に呼ばれた理由はさっぱり分からなかったが、面倒な事になるのは予想していた。

そして相手は時の権力者。
下手をすれば彼の首など瞬く間にとんでしまうだろう。

そのプレッシャーが彼の胃をキリキリと締め上げていた。

「こちらです。どうぞ」

考輝が胃の痛みと格闘している間に目的の部屋に着いたようだ。
女官はある扉の前で彼に部屋に入るように促す。

彼は痛みを表情に出さないように気を付けながら扉に手を掛けた。
その部屋はそれほど大きく無く、飾りや家具もいたって質素だ。
おそらくあまり身分が高くないものが使う部屋なのだろう。

部屋の中央には机があり、それを挟むようにソファのような椅子が二つ置いてある。

その椅子には一人ずつ女性が座っていて、一人は位置的に背中しか見えないが、もう一人の顔が見える女性は考輝がよく知っている者だった。

「あ、考輝君。遅かったわね」

彼女は考輝の恩人と言っても過言でない女性、并州の州牧の古万である。

彼女はニコニコと笑いながら考輝に手を振っている。

考輝としては何故彼女がここにいるのか等いろいろ質問したい事があったが、彼の第一声は自然と出てきた。

「……とりあえず、なんでこんな所で酒飲んでいるんですか？」

彼女、いや彼女達は明らかに飲酒をしていた。

片手には酒が入っているであろう徳利を持ち、頬はほんのり紅い。

机の上には徳利やツマミが乗った皿が散乱し、どんな馬鹿でも酒を飲んでいる最中だとわかるだろう。

考輝は何か重い話をするものだと考えていたので、この状況は予想外だった。

せっかくして来た彼の正装もこの状況では浮いて見える。

「そなたが来るまで酒を飲んで時間を潰そうと思ったら予想外に盛り上がっての」

そう言って背中しか見え　なかった女性が振り向く。

彼女は長い銀髪を簪で纏め、肩と胸元がまるで遊女だと言わんばかりに大きく露出した服を着ている。

そんな服もあってか、彼女は歳など関係ないように妖艶な雰囲気をまとっていた。

そして彼女の紫色の瞳はまるで面白い物を見るかのように考輝を見ていた。

「……それで貴女は？」

考輝は大体の予想はついている。

しかし彼としてはその予想は外れて欲しかった。

（呼び出し本人があんな格好で酒を飲んでいるんじゃあれだけ緊張していた俺がアホみたいじゃん……）

「妾は何進じゃ。ほれ、そんな所に立ってないでこっちに来て酒を飲まぬか」

しかし彼の予想はことごとく当たってしまう。

彼女こそが今の政治の実権を握る大将軍の何進であった。

しかもその大将軍が自分の隣の席をポンポンと叩き彼を酒に誘っている。

そのような普通は体験しないような事態に遭遇し、考輝はとうとうフリーズしてしまった。

そんな固まった考輝を見て彼の心情を察したように古万はため息をつく。

「青楼（せいろう）、からかうのはその辺で止めときなさい。貴女は冗談のつもりでも普通の人には心臓に悪いわ」

それを聞いて真名で呼ばれた何進はフッ、と笑う。

「分かっておるよ、古万。

では、彰紅炎。本題に入るゆえ座ってもらえるかえ？」

何進は後半から真面目な顔になって言う。

それを聞いて考輝はフリーズ状態からいつもの無表情に戻る。

彼は古万の隣に座り何進の話しを聞いた。

「……つまり賊の討伐に行く袁紹殿に従軍して援護をしろと？」

考輝は一通り何進の話しを聞いた後に全体を纏めた質問をする。

「そういう事になるの」

何進は酒を飲みながら答えた。

話しの最中も何回か酒を飲んでいるため彼はもう別段気にならなかった。

何進の話しを要約すると、先日彼女への献上品を運搬している４００人程の部隊が賊に襲われ、献上品を奪われてしまった。

普通なら直ぐに討伐しに行く事なるのだが一つ問題がある。それはこの件に宦官が関わっている可能性がある事だ。

いくら無法者の賊とはいえ、大将軍の『何』の旗を持つ部隊を襲撃して強奪など普通はしない。

宦官が何かを狙って襲撃させたと考えるのが一番しっくりくる。

そんな宦官達が何か企んでいる状態で洛陽を手薄にするわけにもいかないため、袁紹軍だけで賊を討伐する事になったのだが、何進は異常にそれが心配だった。

なので考輝の軍に袁紹軍の援護をして貰いたいと頼んだのだった。

「……」

しかし考輝はあまり乗り気でない。

何故なら下手をすれば宦官達を敵に回す事になるからだ。官職や領地を持たない今の考輝達がそうなるとかなり厄介な事になってしまう。

「……いくら宦官が関わっている可能性があるとはいえ、賊くらい袁紹殿だけでどうにか出来ないんですか？」

「出来るには出来るであろうな。だからそなた達は万が一の時の保険という事になるの。

なんとか頼まれてはくれぬか？　袁紹は自身の能力を過信しすぎておる。だからあやつは今回危険なんじゃ」

「……」

考輝としたら大将軍からここまで頼まれては断りにくい。

だが彼としてはメリットが欲しかった。
宦官と対立してでも得になるメリットが。

「青楼、考輝君にもなにか得になる事が無いと駄目よ？　そうしないと交渉なんて上手くいかないわ」
考輝の隣で何進が話している間終始口を閉じていた古万が口を開く。

ここで考輝が欲していたものを言う辺り、彼女の器量は相当なものだ。

「ふむ、それもそうじゃうの……なら賊を討伐したならば妾が非公式ではあるがそなたの軍の援助をしよう」

それを聞いて考輝は目を見開く。
何進が非公式に彼らを援助したとしても、その効果は恐ろしく高い。武装は官軍と対して変わらなくなるだろうし、馬も数を揃えられるようになるだろう。

今の彼にとってこの上ないメリットである。

「……分かりました。引き受けさせて頂きます。それで出立する日にちは決まっていますか？」

彼は結局引き受ける事にした。そして善は急げと言わんばかりに予定を聞く。

「とりあえず、一週間以内には出る予定じゃ。詳しくはすぐに正式な使者を出すゆえそれまで待っておれ」

「分かりました。それでは準備がありますので失礼させていただきます」

考輝はそう言ってお辞儀をして部屋を出た。

部屋を出ると彼を連れて来た女官が外で待っていたようで、扉の横に立っている。

彼は再び女官について行き宮廷を出た。

「それにしても一体どういう風の吹きまわしかしら」

考輝が部屋を出た後も古万と何進は酒を飲み続けていた。

そして古万は唐突に何進に話しかける。彼女の表情はさも意外そうだ。

「妾が彰紅炎に援助をすること？　それともあんなに袁紹を心配した事かえ？」

反対に何進は笑っている。普段彼女が宮廷では見せないような表情だ。

「どっちもよ。麗羽ちゃんはあんなんだから心配するのは分かるけど、考輝君の方は疑問ね。あそこまで太っ腹にならなくても私は良かったと思うわ。

……あ、もしかして惚れちゃった？　彼結構カッコイイしね」

古万がニコニコと笑い始める。

何進の方はからかわれているのが分かっているためか別に何も反応しない。それどころか逆にニヤニヤし始める。

「確かに妾が後五歳若ければ仕掛けてたかもしれぬの。

……まぁ、あやつにあれだけ破格の条件を出したのは、その方が確実に引き受けてくれると思ったからじゃ」

前半は古万に乗っかったようだが後半は本音のようだ。笑うのを止め、何進は真剣な表情になる。

しかし古万はまだ納得していない。
彼女にはまだ何進が袁紹をそんなに心配する理由が分からなかった。

「それが分からないのよ。袁紹軍には文醜ちゃんや顔良ちゃんがいるわ。余程の事がない限り麗羽ちゃん自身に危険が及ぶとは思えないんだけど」

確かに袁紹自身は優秀とは言えないが、配下には猛将や智将が揃っている。それに兵力も多く、かなり強力な軍だ。

だから古万は袁紹軍がそう簡単に崩れるとは思ってないし、何進がそこまで心配する理由が分からなかった。

「確かにその通りじゃ。じゃが、ただ……」

「ただ？」

何進はやけに真剣、いや憂いを持った顔をしている。

「――ただこの戦、袁紹軍だけで行くのは危険だと直感的に感じたんじゃ」

何進の特技は『小心』。

それは臆病者ゆえに危険を察知できる能力。

この時、彼女の持っている特技が遺憾無く発揮されていた。

考輝は陣幕に戻った後に仮眠として、しばらく寝ていた。そして起きると早速賊討伐の話を話し、出立の準備を始めている。

兵糧を準備し、装備を整え、荷物を纏める。

いまだ移動日数等が分からないため大まかにではあるが。

そして準備の指示をした後、考輝は袁紹軍の陣幕に向かう。

今回の討伐に関して挨拶をしておこうと思ったのだが――。

「まぁ、せいぜい我が袁家の精鋭部隊の足を引っ張らないようにお願いしますわ！　オーッホッホッホッ！！」

（……今度は頭痛くなってきたな……）

考輝は早速引き受けた事を後悔し始めていた。

それから少し後の事である。

とある賊の根城の一番高い所に、一人の少女が立っていた。

その根城は山を上手く使った天然の要塞となっており、一番高い所は山の頂きのため周りの景色をよく見渡せるようになっている。

しかし少女はそんな景色など興味無いように空を見上げていた。

彼女は黒いシルクハットのような帽子を被り、帽子の間から金髪が見えている。

首には朱い首輪をはめていて、黒いベストに紺のスカートを履いていた。

腰の辺りには大きい青色のリボンが結び、彼女の好みなのか全体的に暗い色が多い。

顔にはまだ幼さが残っていて高くても十代前半ぐらいだろう。

しかし彼女の落ち着いた雰囲気は完全に大人のものだった。そんな少女の真っ黒な瞳は何処となく空を眺めている。

「お姉ちゃん……」

少女は小さい声で呟く。

それは周りの風の音に掻き消されるくらい小さい声だった。

彼女の表情からは悲愴が溢れている。

「報告します！　洛陽からこちらに向かって来ている軍があるそうです」

そんな中、少女に一人の男が後ろから話しかける。

男は身なりからして賊だろうか？

最低でも真っ当な人間でない事は彼の衣服にこべりつき、黒く固まった血が物語っている。

「分かりました。それで来ているのは読み通り、袁紹軍ですね？」

少女が振り向いた時には先程まで表情は消えていた。

「はい！　それから大体千五百人程の義勇軍も来ていとの事です」

「義勇軍ですか……」

少女は義勇軍と聞き意外そうな表情をする。

大して名も無いような軍が袁紹軍と共に来る可能性は考慮していたが、義勇軍が来るのは予想外だった。

しかし少女は意外そうな表情から口元をつりあげた笑みに表情を変える。

「クスクス。何にせよ我々の目的は変わりません。予定通り、おごった山猿をぶち殺します」

かなり物騒な事を言いながらも、少女はクスクスと笑い続けた。

本当に心の底から楽しんでいるように。

「それでは全員に手筈通り進めるように伝えて参ります。――――司馬懿様」

「頼みましたよ」

司馬懿は男が離れたのを確認した後再び空を見上げた。

その表情はまた悲愴だ。

しばらく空を見上げてから司馬懿は山を降り始めた。

自らの策を成すために。

宮廷に行って（後書き）

文章の書き方がまだよく分からない……。

ちなみに何進はアニメ版な感じです。

策がめぐって

考輝は野営の中にいた。

その野営は彼の軍の野営ではなく、名門豪族の袁紹軍のものだ。

兵は全部で約二千。その全てが金の鎧を着て、最高レベルの装備を身につけている。

装備だけでなく馬や兵糧、更には衣服にいたるまでが、しっかりと金をかけられているようだ。

ただ、兵の士気や練度はあまり高くない。

故郷から遠く離れた土地まで半強制的に連れてこられれば、やる気も無くなるのは当たり前だ。

そんな軍の本陣に考輝はいた。

「……」

彼はこめかみに指を当て目をつぶっている。

心なしか、彼の何時もの無表情もどこか疲れてそうだ。

その原因は彼の目の前とある人物だった。

「だから私は　『米が無ければお菓子を食べればいいんですわ！』
と言ってやったのですわ！！　オーッホッホッホッホッホッ！！
！」

この耳障りな高笑いをしている女性の名は袁紹。
一応この軍の大将であり、実質冀州のトップである。

金髪のドリルのような髪型に、現在でも充分ナイスバディと言える
肉体。
他の兵達よりも金の純度が高そうな鎧に赤いマント。

外見や装備は一流だが、残念な事に中身はそれに追いついていない。

今回考輝は大将軍何進より、袁紹と共に討伐が命令されていた賊の
根城が近くなったため、それに対する軍議をしに来ていた。
この賊は堅固な山城を根城にしているため、迂闊に攻める事はでき
ない。

そのため軍議で何か対策をとる必要があるのだが、いつの間にかに

袁紹の自慢（？）話しになってしまっている。
考輝が疲れるのも当然だろう。

「ハァ……」

考輝は彼自身ですら本日何回目か分からなくなったため息を小さく吐き、　袁紹のステータスを開く。

統：１３　武：１９　知：５　政：１２　魅：９２
剣：Ｂ　槍：Ｃ　戟：Ｃ　弓：Ｃ　騎馬：Ｃ　兵器：Ｃ　水軍：Ｃ
特技…名声（噂が広がりやすい。兵が多く集まる）

（相変わらず酷い数値だ……。
　初めて見た時は声を上げそうになって大変だったな。恋とは逆の意味で衝撃的で）
考輝は初めて見た時の事を思い出し、心の中で苦笑する。

（でも数字の色は伸びる余地がある事を示す青色。多分それなりの努力をすればかなりの名将になるだろうな）

考輝としてはここまで自らの才能を無駄に出来る事が不思議でならない。

ちなみにその原因は幼少の頃より甘やかされて育てられた事だったりする。

「そしたらそのブ男ったら……」

考輝のつくため息など気付かずに袁紹は自分の話しを進めていく。

そんな彼女だから、自分の後ろにいる顔良が乾いた笑みを浮かべているのにも、文醜が話しに飽きて寝ている事にも気付かない。

「その時の私の優雅さときたら……ちょっと、文醜さん」

「……ふぇ？」

だが、文醜が大きないびきをかき始めると、流石の袁紹も彼女が寝ている事に気が付いた。

「せっかく私の武勇伝を語っている時に、グーグーと大いびきをかくとはなかなか度胸がありますわね！！」

袁紹は自分の右斜め後ろにいる文醜を睨む。
彼女は自分の話しの最中に寝ている事にご立腹のようだが、当の文醜はどこ吹く風だ。
眠そうに欠伸をする余裕まである。

「ふぁ～……だって姫の話し長いんですもん。それにあたい達は何度も聞いた事があるから飽きますよ……」
文醜はまだ眠いと言った感じで目を擦る。
彼女の髪は緑色で、藍色のリボンを鉢巻きのように結んでいる。
髪と同じ色のスカートを履き、やはり金の鎧が印象的だ。
考輝はそんな眠そうな彼女を見ながらステータスを開く。

統：７８　武：８４　知：２５　政：１５　魅：８５
剣：Ｓ　槍：Ａ　戟：Ｃ　弓：Ｂ　騎馬：Ｓ　兵器：Ｃ　水軍：Ｃ
特技…博打（自軍の損害が２５％の確率で半分。もう２５％で二倍。残りの５０％で変化無し）

（何とも恐ろしい特技だ……。敵にしても味方にしても厄介すぎる）

考輝は博打やらギャンブル等は嫌いだ。
そのため戦場でこんな恐ろしい能力を使って欲しくなかった。

「フン！！　私の話しが何度も聞けるのだから光栄にお思いなさい！！」

「あの～姫？　そろそろ軍議を始めませんか？　彰義さんがさっきからずっと待ってますけど……」

そう言う顔良は何故か申し訳なさそうだ。
おそらく考輝をかなり待たした事に負い目を感じているのだろう。

顔良は藍色のおかっぱのような髪にこれまた藍色のスカートを履いている。
やはり彼女も金の鎧を付けていた。

考輝は彼女のステータスも開く。

統：７９　武：８２　知：５７　政：５２　魅：８５

剣：Ａ　槍：Ａ　戟：Ｂ　弓：Ｂ　騎馬：Ａ　兵器：Ｃ　水軍：Ｂ

特技…後処理（戦や騒動の後処理が早くなる）

（顔良はなかなかバランスがとれた将なんだよな。その代わり、袁紹や文醜みたいな能力の伸びは期待出来そうにないが、充分有能だ。
……あと武官なのに文官みたいな特技を持っているのは、袁紹に振り回されてばかりで自然と上達したからか？）

そう考えると、考輝は何だか顔良がかわいそうに思えてきた。
雰囲気的に苦労人っぽいのもそれに影響しているかもしれない。

「……もちろん今から軍議を始めるつもりでしたわ。
では顔良さん。賊の情報を報告しなさい」

袁紹は顔良に促され軍議を開始する。
彼女は口ではこう言っているが、目が明らかに泳いでいる。嘘なのは明確だ。

（（（絶対嘘だ……））））

もちろんこの場にいる三人は誰も信じていない。

「ハァ……分かりました。えっと……」

顔良は軽くため息をつきながら懐を探る。
そして竹簡を一つ取り出すと広げた。

「賊の数は三百程。こちらの数は彰義さんの軍も合わせて三千以上はいるので数の上ではかなり有利です」

考輝は三百という数字に反応して、顎に手をやる。
その顔は何か思案している顔だ。

「ただ、知っての通り賊はこの近くのかなり堅固な山城に立て篭もっています。これがかなり厄介ですね」

これを聞いて袁紹を除く三人は苦い顔をする。
それ程までにこの山城は堅固だった。

「あっ、あとそれからですね」

竹簡を見ていた顔良が思い出したように付け加える。

「なんでもこの前の襲撃の時に、貂蝉という踊り子が賊に捕まったらしいので、救出して欲しいとの事です」

考輝は貂蝉という単語を聞いた時、何故だか分からないが漠然と嫌な予感がした。
まるで彼の全身に悪寒が走る程の嫌な予感だ。

「貂蝉って踊り子の話しならあたいも聞いた事があるぜ」
貂蝉という単語に文醜もまた反応をする。
「確か洛陽の一部でかなり人気のある踊り子で、その舞の素晴らしさは三日は夢に出るんだってよ」
（また大袈裟な……。やはり噂はかなり誇張されるんだな）
この時考輝は文醜の言った事を信じていなかった。
しかしその噂の真偽を彼は自分自身の身で体験する事になる。
なお、結果だけ先に書くならば、彼は五日間素敵な夢を見る事が出来た。

「……とりあえずその踊り子の事は置いといて、賊に対してどんな策をとりますか？　本初殿？」
なにやら話しが脇道に逸れていたので、考輝が無理矢理本題に戻す。
しかし、このタイミングで袁紹に話しを振ったのは完全に失敗だった。

「そのもの必要ありませんわ」
袁紹はさも当たり前のように言う。
それどころか、何故そんな事を問われるのかが分からないかのにキョトンとしている。

「……は？」
考輝は一瞬フリーズした後思わず声を出してしまう。
山城に対して敵軍の十倍は自軍がいるとはいえ、策も無しに突っ込めば悪戯に損害を増やすだけだ。
そんなものは正しく愚の骨頂。

だからいくら袁紹が無能とは言え、何かしろの策ぐらいは考えていると考輝は思っていた。
それだけに彼女の言葉を考輝に、頭をハンマーで殴ったような衝撃を与えている。

「……たかが賊ごときに策など必要ありませんわ」
袁紹は考輝がそこまで意外な態度をとったのが気に入らなかったのか、少し不機嫌そうだ。
少し目を細め、若干口を尖らせている。

「「ハァ……」」

文醜と顔良が同時にため息をはく。

そのため息は呆れではなく、諦め。

彼女達の経験上、袁紹は不機嫌になると意地でも自分の意志を曲げない。

それはつまり、山城に対して策無しで突っ込む事を示す。

「三百程度の賊など我が袁家の精鋭部隊が直ぐさま片付けて差し上げますわ！！　オーッホッホッホッホッホッ！！！」

呆然としている考輝、諦めたような表情をしている文醜と顔良。

その三人の事など全く気にならないように、袁紹の笑い声は野営の中に響いた。

それから少し後。

彰義軍の陣幕の中、考輝は椅子に座って外を眺めていた。
視線の先にあるのは山。
その山は二刻後に攻撃する予定の賊が立て篭もっている山城である。
高さ的にはそれほど高い訳ではない。
しかし、山の四方は切り立った崖になっており、素手で登る事はまず不可能だろう。
唯一の登る手段はいくつかある山道を登るしかない。
だが、その道は道幅がかなり狭いため一気に大勢登る事が出来ず、数の利を上手く活かす事は出来ない。
攻めずらく、守りやすい。
その山は正しく天然の要害だった。

「さてと……どうしたものか」
考輝は椅子にもたれながら、頭の後ろで手を組む。
体制を変えながらも、彼の視線は山を捉えている。

（あの山城を無理矢理攻めるとなると、かなりの損害が出る。しかも袁紹があんなんじゃ、この先も策を施すなんてしないだろう。
……やはり敵の策を逆手に取るのが一番効率的だな）
考輝は山を見る目を一瞬細めた。

「おい、能面。お前に客が来てるぞ」

考輝が山を見ていると張燕こと玄鳥が陣幕の中に入って来て客が来た事を告げる。

「誰が能面だ、コラ。
……それからあれは全部設置したか？」

考輝は喋りながら玄鳥に近付いて行き、最後の言葉はかなり小さい声で言った。
おそらく他人に聞かれるとマズイのだろう。

「……今凪が仕上げをやってる。それにしても何であんな所に置くんだ？　敵は山にいるんだろう？」

玄鳥は考輝の意図を察したのか、彼女もまた小さい声で返す。

そして彼に言われた時から疑問に思った事を聞く。
彼女達が仕掛けた場所は袁紹がいる陣の裏手の森。

もちろん仕掛けている最中袁紹軍の兵士に怪しまれたが、警備のためと言い張っていた。

ともかく、そんな味方の陣が近い場所にあれを仕掛ける意味が玄鳥には分からなかった。

（真桜が開発したあれは結構広範囲に効果が及ぶんだよな。
それをあれだけ仕掛けたんだ。……事故で袁紹軍が半壊する可能性もあるぜ）

玄鳥自身あれの原理はよく分かっていないが、破壊力と恐ろしさは充分に理解している。
彼女は下手をすれば最悪、袁紹軍は壊滅する程の威力を持っていると推測していた。

「……敵の策を利用するためだ」

「利用？　てか敵が何か策を仕掛けて来るのか？」

考輝は先程よりも更に小さい声で答える。
玄鳥は以外な答えに驚くと共に、敵が策を仕掛けて来るという予想に驚いた。

敵は賊。
いくら武装しているとはいえ元は農民。個々の能力はたかが知れているし、兵法に通じている筈もない。
だから玄鳥は賊が策を考える等信じられなかった。

「おそらく賊は後方から別動隊による本陣への奇襲を仕掛けて来る

わね。そして山の賊も討って出て、包囲って所かしら？」

彼女の問いに答えたのは考輝ではなかった。

玄鳥が直ぐさま声が聞こえた後ろに振り向く。

するとそこには先程客として訪ねて来た、ネコ耳フードを被った少女がいた。

「まぁ敵の考えはそんな所だろう。……そして何故お前がもうここにいるんだ？　荀イク？」

「余りにも呼ぶのが遅いからこっちから来たのよ」

荀イクは勝手に陣内に入って来たというのに悪びれた様子は無い。

悪びれるぐらいなら最初からやらないという考えもあるが。

「……とりあえず、何で二人とも本陣を奇襲して来るって分かるんだ？」

玄鳥が話しについていけず、頬を掻きながら尋ねる。

「……先に言っておくけど、最初に気付いたのは私じゃなくてこいつよ。私はこいつに少し言われて気が付いたんだから」

荀イクは考輝を指差しながらため息をつく。

考輝に先に気付かれた事が少しショックのようだ。

玄鳥もその指先に合わせて考輝を見て、教えて欲しいと言わんばかりの視線を送る。

「……まず前提がおかしいんだ。何進の献上品を護送していた兵の人数を覚えているか？」

考輝は少し考えて思考を纏めると、玄鳥に質問をする。

「……確か四百人くらいじゃなかったか？」

「じゃあ山に篭っている賊の数は？」

「それは三百……あ」

ここで玄鳥は気が付いた。

三百程の賊が、四百もいる官軍を蹴散らせる訳がないと。

「気が付いたようだな。いくら朝廷が腐っているとはいえ、大将軍の直属軍が自分よりも少ない賊なんかに敗れはしない」

「だから山に篭っている奴ら以外に賊が沢山いると分かったわけだな！」

玄鳥が合点がいったように右の手の平をポンと叩く。

しかしその後、玄鳥の顔が曇り始める。

「……それってつまり、こちらの情報が敵に撹乱されているって事か？」

戦において情報は命だ。
敵の事をどれだけ知っているかによって対策や戦法、戦術すらも変わる。
なのでその根本になる情報が弄られていたという事は、戦において既にかなり不利となる。

しかも今回は一番大切と言っても過言ではない兵数の情報が弄られている。
これはかなりの痛手だ。

「きっと敵に優秀な軍師がいるんでしょうね……」

「……賊にか？」

玄鳥は荀イクが言っている事が俄に信じられなかった。
先程も書いた通り、賊は元が農民だからだ。

「……おそらくそいつは賊じゃないだろうな」

考輝は静かに呟く。

「……これほどの事をやってのける人材……是非とも欲しいものだ」

考輝は玄鳥と荀イクにも聞こえないように呟いた。

それから二刻後、山城への攻撃が始まった。

全兵を大体千ずつにわけ、三ヵ所からの同時攻撃を試みる。

二つは袁紹軍で、残りの一つ全て彰義軍の兵士で構成されている。

三つに分けたても一部隊が当たる賊の数は百程度なのだが、やはり地の利はあちらにある。

四日経っても思うようには進軍出来ていなかった。

「クスクス、クスクスクス……」

山城への攻撃が始まってから四日目の夜。
とある森にて、司馬懿がクスクスと笑っていた。
その日は新月のため月明かりが無く、彼女の表情はよく分からない。
しかし余り良い雰囲気ではない事は確かだ。

「さて……潮時ですね。予定通り、本日奇襲を仕掛けます」

すると、彼女の言葉に反応して周りの茂みがガサガサと動き始める。
その正体は今までずっと伏せられていた賊の伏兵だった。

「クスクス、これで詰みですよ？　袁紹さん♪」

彼女はこれから殺す相手の名を楽しそうに呟く。
その光景は少し狂気じみている。

「今の貴女に、この二千の伏兵を敗る術はありませんから」

フラグを立て

袁紹は討伐軍の本陣にいた。

時効は日が落ちてすぐ。
空に星は輝いているが月はない。今夜は新月だからだ。

そのような薄暗い中、本陣では袁紹軍の兵士達もまた暗い表情をしている。
皆疲れていて、あちこちからため息が聞こえてくる。

見張りの兵も必要最低限……いや、それ以下の兵しかいない。

それほどまでに袁紹軍の兵士達は疲弊し、元々低かった士気は更に下がっていた。

そんな本陣の中央に袁紹がいる陣幕があった。

金の刺繍や大きな絵が書いてある豪華絢爛な見た目。
いかにも派手好きな袁紹が好みそうな外観をしている。

そして彼女はそこで例年稀に見る程イラついていた。

（一体どういう事ですの！！！）

袁紹は心の中で叫びながら、鎧を乱暴に脱ぎ捨てる。

その金の鎧は何度か使われた跡があるが、血で汚れている個所は一箇所もない。

それは壁にかけられている彼女の無駄に装飾が付いた剣も同じだ。

袁紹軍と彰義軍が賊の根城である山城を攻め始めてから既に四日。

十倍近くの兵力差があるというのに、たいした戦果も上がらず、山城は一向に陥落する気配が見えない。

その事が、早く討伐して都に帰りたかった袁紹をイラつかせていた。

最も、山城含め要塞というものはそう簡単に落ちるものではない。

しかも彼女は何の策も無しに突っ込むだけで、何か特別な事をしている訳ではない。

そう考えると時間がかかって当然なのだが、そんな事に気付く袁紹ではなかった。

彼女にとって戦は数。
確かにそれは正しいのだが、練度や城攻めというかなり大事な部分が抜けていた。
それは彼女が知らないのではなく、ただ単に忘れているだけである。

「袁家の精鋭たる者達がたった三百の賊程度に遅れをとるなど情けないですわ！！　そのうえ損害を多大に出すなど以っての外ですわ！！！」

袁紹は普段着を身につけながらも大声で文句を言う。

この四日間で袁紹軍の被害はかなり大きくなっていた。
取り分け袁紹自身が指揮する部隊が一番被害が出ているのは言うまでもない。

そんなこんなで、今日もストレスと被害を大きくした袁紹は、少し早いが寝る事にしたようだ。
陣幕の外にいた侍女に怒りが篭った声で寝る用意をするように伝えている。

するとガタガタと何か慌てたような感じで侍女が走って行く。
今の袁紹をあんまり待たすのは、自身が危険（貞操的な意味で）になると感じたんだろう。

そんな事などいざ知らず、ため息をつく彼女に地面に投げ出されている鎧が目に入る。
そこで彼女は自分が鎧を脱ぎ捨てたままにしている事に気付いき、慌てて鎧を拾う。

その時、鬨の声が陣幕の外からあがった。

そのあまりの大きさと突然さに驚き、袁紹は手にしていた鎧を落としてしまう。
落ちた鎧が地面に当たると、ガチャンと言った感じの鈍い音がした。

そしてそれが皮切りだったかのように、声の合間から金属がぶつかるような音が聞こえ始める。
あがっていた鬨の声は、次第に暴言と怒声に変わり、あちこちで悲鳴や断末魔が響く。

「い、一体……何ですの……？」

袁紹はいきなりの状況の変化についていけず、そう呟く事しか出来なかった。

今の不安な表情を隠す事なく浮かべ、おどおどしている彼女からは、普段の無駄に自身のある様子は微塵も見受けられない。

「ほ、報告いたします！！！」

そんな彼女の元に一人の兵士が駆け込んで来る。

息が上がり、顔だけでもかなり汗を掻いているところを見ると、かなり焦っているようだ。

「賊と思われる軍勢二千程が我等の後ろから奇襲！！　更に山に篭っていた賊達も正面から攻撃を仕掛け、我が軍は大混乱をきっしております！！」

「な……な……」

袁紹は報告に対してまともに喋る事が出来なかった。

後ずさりしながら意味が分からない事を呟いている。

本陣には袁紹軍しかいない。
袁紹が何の官職も無い考輝の軍と同じ陣にする事を嫌ったからだ。
そのため彰義軍は山を挟んで袁紹軍の反対に配置されているため、救援はまず期待出来ない。

つまりこの状況を袁紹軍だけで何とかしないといけない訳だが、現在兵力は千五百程。しかも混乱真っ最中である。
対して敵は二千五百近く。

いくら袁紹が無能とは言え、以上の事から直ぐに『自らの敗北』という答えを導き出す事ができた。

「ただ今文醜将軍と顔良将軍が応戦しておりますが、なかなか混乱した兵を纏め、ウギャア！！！」

「ヒッ！！」

報告に来た兵がいきなり断末魔をあげ地に伏した。
彼の鎧が薄い脇腹部分には剣が刺さっていて、そこから泉のように血が溢れ出ている。

袁紹は短い悲鳴をあげながら後ずさる。

そして倒れた兵の後ろを見ると、何人か男が立っていた。
服装は全員バラバラだが、共通して言える事は全員服装がボロボロで、一人を除き血で汚れた凶器を持っている事。
そして全員が袁紹に殺意を持った眼差しを向けているという事だ。

「だ、誰か出て来なさい！！！　賊ですわ！！」

流石の袁紹も彼等を見て命の危険を感じた。
狂ったように辺りを見回し叫ぶが、彼女の願いに反して誰も出て来ない。
ただ怒声と悲鳴が響いているだけである。

「ど、どうして……」

「無駄だ」

狼狽する袁紹に賊の一人がニヤつきながら話しかける。
彼は報告した兵士に刺さっている剣を抜き、血まみれの刀身を袁紹に向ける。

「こんな状態で、お前みたいな駄目君主を命懸けで護ろうとする物好きはいねぇよ」

「ひっ、ヒィィィィィ！！！！」

剣を向けられた袁紹は情けない声を出しながら地面にへたりこむ。
腰が抜けたのか、そこから動かない。

そしてそれを見て切っ先を向けた男は更にニヤつき、他の男達もげらげらと笑う。

死の恐怖。

戦場に出る者が、よほど特殊な者でないかぎり、皆等しく感じるもの。

それを袁紹は、この時生まれて始めて感じた。

彼女はその恐怖の為に青ざめ、ガタガタと震える。

しかし、それで状況が変わる訳ではない。

男がニヤつきながら剣を振り上げる。

狙いはもちろん袁紹だ。

「イヤァァァァァァァァ！！！！！」
袁紹は絶叫しながら目をつぶる。
無意識に手を前に出して頭を庇うが意味はない。
袁紹に剣が振り下ろされ始めた。

「……？」
しかし、いつまで経っても彼女に剣が届く事はなかった。
不思議に思った袁紹が、恐る恐る目を開けると、先程までニヤついていた賊はいなくなっていた。
正確には、賊『だった』物が地面に仰向けに倒れていて、血溜まりを作っている。
彼の胸には短刀が刺さっていた。

「何だテメェは！！！」

他の賊の怒鳴り声にビクリと反応した袁紹はゆっくりと顔を上げる。

そこには残りの賊達と彼女の間に、一人の男が背を向けて立ち塞がっていた。

その男は白い鎧を身につけ、手には少し小さめの槍を持っている。

「……大丈夫ですか？　本初殿」

それはいつもと変わらない無表情な顔の男、彰紅炎こと考輝であった。

所変わり、袁紹軍の本陣の外れ。

そこでも戦闘が続けられているが、一人戦場に不似合いな人物がいた。

黒いシルクハットのような帽子を被った少女。
明らかに場違いな風貌だが、腰には剣が一本下げられている。
それだけが唯一彼女から戦場を連想できる物だ。

「……馬鹿な」

そしてその少女、司馬懿は目の前の光景を見て呆然とした感じで呟く。

彼女の目の前では、袁紹軍に策通りに奇襲を成功させた、彼女が指揮する賊達が戦っている。

ここまでは、彼女の策通りに事が進んでいるが、その戦っている相手は彼女の予想から大きく離れていた。

彼等が戦っているのは白い鎧を身に纏った兵士達、彰義軍だった。

（いくらなんでも彰義軍の対応が早すぎる……。襲撃の報を聞いた後から準備するとしても、この部隊の展開の早さは異常。
……まさか策が読まれていた？）

司馬懿はここが戦場だという事も忘れ、長考し始める。
そして策が読まれた可能性がある事に気付くと、奥歯を強く噛む。
その表情は怒りに満ちていた。

しかし、彼女は直ぐに冷静な表情に戻る。
彼女な軍師に怒りや仇といった感情は一番必要ないと心得ているからだ。

（……とりあえず、ここは撤退ですね。完全に負け戦ですから。
見たところ、彰義軍は弓隊と騎馬が主力のようですから、森を抜けるのが一番安全ですね）

司馬懿は彰義軍の練度や士気の高さから、勝つ事は不可能だと判断し、撤退を決意する。

なお、彼女が弓隊を主力と考えたのは連射のスピードが異常に早かったためである。
騎馬にいたっては、玄鳥が自ら調練して指揮しているため、練度も強さも並の諸侯が顔負けのものになっている。
他の隊も練度が高く、袁紹軍なんかとは比べものにならないレベルだ。
ちなみに、袁紹軍で戦っているのは文醜と顔良の直属部隊くらいし

かいない。
それ以外の大多数は討たれたり、逃げ惑ったりしている。

（……それにしても、私の策を見破ったのは彰紅炎なのでしょうか？）

司馬懿は冷静な表情から一転、クスクスと笑い始める。

（クスクス。彼の情報はかなり少ないので正確には分かりませんが、なかなかに興味が……）

「司馬懿様！！　後ろです！！」

長考していた司馬懿に後ろから、彰義軍の兵士が剣を振り上げながら迫る。

それを見て近くの賊が叫ぶが、もうその時には真後ろまで近付かれていた。

戦場で長い間じっと考えていればこうなるのは当然。

そして武官でなく軍師である彼女にこれを回避する事は普通ならば不可能。

普通ならば。

「！？」

司馬懿は賊の声に素早く反応して、腰の剣を抜きながら振り向く。
そしていとも簡単に兵士の一撃を受け止めた。

兵士には予想外の出来事だったため、動揺して一瞬隙を作ってしまう。
司馬懿はその隙を見逃さず、素早く剣を操る。

次の瞬間には、兵士の背中から剣が生えていた。

司馬懿は軍師でありながら武を持っていた。
もちろん猛将に対しては相手にならないが、そこら辺の兵士に遅れをとりはしない。

「そこの貴方」

「は、はい！」
司馬懿は剣を抜きながら、先程兵士の接近を教えた賊に話しかける。

「ひとまず撤退します。森に入って後退するので他の者に伝えて下さい」

森の中では騎馬は木が邪魔で、全速力で走る事は出来ない。
弓にしても、木があるために上手く狙う事は出来ない。
彼女は彰義軍の主力を封じながら逃げようと考えていた。

「あ、それから全員には伝えないようにして下さい。彼等には盾になってもらいますから」

司馬懿はそれをまるで何でもない事のようにサラっと言う。
彼女は大のために小を切り捨てる事に躊躇はない。
そういう性格だった。

しかし彼女は知らない。

先日、その森に彰義軍の兵士が入り、何かを仕掛けて行った事を。

場所は戻り、袁紹がいる陣幕。

そこでは考輝が袁紹を狙った賊達をちょうど全員始末し終えたところだった。

「……立てますか？」

「……はい……」

「……怪我はありませんか？」

「……はい……」

（……何だこれ？）

考輝はいつもと変わらない無表情で袁紹に手を貸し立たせたが、内心かなり焦っていた。

何故なら袁紹の様子がかなりおかしい。
いつものような自信に溢れた表情ではなく、どこかボッーとしている。
視線も考輝の顔をじっと見たまま、ピクリともしない。

考輝は袁紹に会って間もないが、それでも明らかに様子が変だと分かる。

（……恐怖のあまり頭がおかしくなったのか？　さっきもかなり情けない声出してたし。
……まぁ俺には関係ないな）

彼はとりあえず袁紹に関して考える事を止めた。
そして最初に殺した賊から短刀を回収する。

この短刀は真桜が仕込み武器として改造したもので、考輝の腕の鎧の内側に何本か仕込まれている物だ。
これによって、何もないと思わせながら短刀を取り出したり、離れた相手にいきなり投げ付ける事もできる。

生粋の武人が見れば卑怯だと言うだろうが、考輝は武人ではない。
卑怯やらどうだとか、彼は別段気にない。

「……では私はまだやる事があるので失礼します」

「……はい……」

「……」

最後まで変な袁紹を疑問に思いながら考輝は陣幕を後にした。

そんな彼の後ろ姿を、袁紹は見えなくなるまでじっと見つめていた。

「姫！？　大丈夫ですか！？！」

考輝とちょうど入れ違いぐらいのタイミングで、文醜が陣幕の中に駆け込んで来る。

最初は袁紹が無事である事に安堵した彼女であったが、直ぐに袁紹の様子がおかしい事に気付く。

どんなに罵倒しても褒めちぎっても、殆ど反応が無いのだ。
そんなの普段の袁紹からは全く考えられない。

「猪々子……」

そして文醜が何か新種の病気にでもかかったんではないかと、疑い始めた時、袁紹が文醜の真名を呟く。

しかし喜ぶのもつかの間、彼女は更なる袁紹の言葉によって再び混乱する事になる。

「……運命って……本当にあるのですね／／」

「……はいぃ？」

その時の袁紹は、目がうっとりとしていて、頬はほんのり紅かった。

フラグを立て（後書き）

作者の脳内

脳内B「馬鹿！　なんでこんな所できったんだ！　まだ書くべき所があるだろ！」

脳内A「そしたら分量が多くなるだろ！！　ただでさえ俺の文章読みにくいのに」

B「じゃあこの話しで何話使う気なんだ！　読者飽きるぞ！！」

脳内C「A、お前は明日部活の大会だから早く寝たいだけだろ！！」

A「C！　裏切ったな！！」

B「とりあえず対策を打たねば！！」

脳内会議の結果、次話を出来るだけ早く更新することになりました。物語のテンポが悪くてすみません。

実験を始めて（前書き）

とりあえず先に謝ります。
すいませんでした。

今回作者がいろいろとおかしいです。

実験を始めて

司馬懿は燃え盛る森の中にいた。

月すら出ないような暗い夜だというのに、その森周辺は昼間のように明るい。
炎はパチパチと音を出して森を包んでいる。

司馬懿は森の中でも木の少ない、比較的開けた場所にいた。
そこはまだ余り火が回っていないが、その周りは完全に炎に囲まれている。
まるで炎によって壁が作られているように。

その壁によって、司馬懿は燃える森の中に取り残されていた。

「全く……やってくれましたね、彰紅炎……」

司馬懿はため息をつきながら剣についた血を払う。
よく見ると、服の至る所にも血が付着している。

そして彼女の周りには、彼女が切り殺したであろう死体がいくつも転がっていた。
それは全て賊で、数刻前まで彼女の駒であった者達だ。

（まさか森に逃げるのまで読まれていたとは……。どういった物かは詳しくは分かりませんが、何か発火する、もしくは炎を広げやすくする罠を仕掛けていたようですね。
　でなければ、ここまで炎の回りが早いなんてありまえせんし……）

彼女が賊達をまとめ、一部を囮に残して森に逃げると、直ぐさま火が放たれた。

しかし彼女はそれは予想しており、慌てずに迅速に森を抜ければ逆に炎が邪魔になるため、簡単に追っ手を巻けると考えていた。

だが問題は火の回るスピードだった。
明らかに通常とは桁違いの早さで火が回り、あっという間に炎に囲まれてしまったのだ。

それは彼女の予想通り、彰義軍の仕掛けた『火種』が原因である。
火種は火薬が詰まったサッカーボールくらいの大きさの物で、少し火がつけば広範囲に燃え広がる兵器だ。
もちろん真桜お手製である。

元々は、爆弾を作ろうとした際の失敗作なのだが、その火の及ぶ範囲に考輝が目をつけ兵器化した。

今回実験的な意味も含めて使用されたのだが、予想以上に火の勢いが強く、追撃部隊を出す事が出来なくなってしまう程の効果が上がっている。

ともかく、司馬懿はその兵器によって炎に囲まれ、身動きが取れないでいた。それでも、彼女がいまだに炎にのまれず、生きているのは彼女の逃げるルートが良かった為だ。

実際、彼女と別に逃げた賊は、かなりの数が焼け死んでいる。

ただ、一緒に逃げた賊達も司馬懿に切り殺されている。

と言うのも自らの最後を悟った賊達が最後くらい楽しもうと彼女に襲い掛かったのだ。

結局、彼等は自らの手でその人生に終止符を打つ事になった。

「……結局のところ、私は始めから彼の手の平の上で踊らされていたのですね……腹立たしい事です」

口では怒りの言葉を発しているが、司馬懿の口角はニヤリと吊り上がっている。

彼女は楽しんでいる。

今までまともに味わった事がなかった敗北感を。

完全な敗北から来る屈辱感を。

そして、いかにしてこの雪辱を晴らすかを考える事を。

「……クスクス。仕返しする時が今から本当に楽しみですよ……」

炎に囲まれながらも、クスクスと笑う少女は狂って見える。

服に血が付いているので尚更だ。

その夜、森が一つ消えた。

「……お姉ちゃん、ゴメン……」

その森の中で呟かれた、少女の心からの本心を聞く者は誰もいない。

森の跡地には、灰と燃え残りが広がっているだけである。

その後、森の跡地及びその周辺では、賊の残党狩りが彰義軍によって行われた。

袁紹軍はどうしたのかと言うと、かなりの大きさの被害を受けたため、まだ混乱が抜けておらず、しっかりと機能していない。

そのため、彰義軍単体で残党狩りを行っている。

残党狩りと言っても、余り規模は大きさないため彰義軍だけで可能なレベルだ。

なお、袁紹軍が受けた被害はまだ正確には分からないが、最低でも持って来た兵糧の半分近くはいらなくなっただろう。

「……」

考輝は残党狩りを先頭で指揮しながら、一人思案していた。
その表情は、昨日の大勝が嬉しくないと言う程に固い。
実際は跳んで喜ぶ程に嬉しいのだが、彼には一つ引っ掛かる事があった。

（……結局、賊の指導者を見つける事は出来なかったな。
奇襲を撃退するのと同時進行で山城を攻めていた凪と沙和もそれらしい人物はいないと言っていた。そして捕虜の中にもいない。
と、すると、死んだかもう逃げたかだな。……惜しい事をした。
かなり優秀そうだったんだが……）

考輝が心の中で落胆している間も、残党狩りはどんどん進められる。
尤も、余り残党に出会う事がないが。

「隊長、この辺一帯の捜索は終わりました！」

それから少ししして、凪が考輝に報告をする。

彼女は真面目で、こうやって報告する時は、背筋を伸ばしてきびきびと話す。

これが沙和や真桜だとこうはいかない。

「分かった。……それにしても作業がかなり早いな。何かあったのか？」

考輝は冷めた口調で話すが、内心わりと驚いている。

彼はもう少しかかると踏んでいたためだ。

「いえ、特には……あ、ですが将でない者数人に部隊を預け、捜索範囲を広げました」

「……そうか。変な事を聞いてすまない」

（だとすると、部隊の指揮を経験した事無い者がこの短時間で終わらせたのか。

……そういう奴らがいるなら副官の仕事を作った方がいいかもな）

考輝は自陣に戻りながらも副官について考える。

後に二人ほど副官クラスの将が選ばれるがそれはまた別の話。

それから数日後、彰義軍と袁紹軍は洛陽に戻って来た。

洛陽を覆う巨大な塀を見た時は、彰義軍だけでなく道中足が重かった袁紹軍も湧く。
それはもう出陣してから一番士気が上がったんじゃないかってぐらいに。

洛陽に到着すると、考輝達はまた陣を張り直したり、何進に報告したり、戦後の被害の確認等、雑務が山のように待っていた。
ちなみに何進からの援助は正式に決まり、彰義軍には次々と物質が運ばれている。

だがそれと雑務が重なり、書類仕事が恐ろしい事になってしまう。
何よりも問題だったのが、彰義軍の文官である。数は少なく、それも殆どが元農民。
考輝がステータスを見て政治力が高めだった者に仕事を割り振っていたのだが、流石に限界が来る。

正式に文官なのはトップの考輝だけである。
しかもトップとしての仕事もあるので異常に忙しい。

帰ってから数日は、考輝にとって書類地獄だった。

しかし、そんな忙しさも三日が経ち徐々に落ち着いてくる。
何とかあらかたの仕事は終わり、一息つく余裕が出て来た。

そしてすっかり落ち着きを取り戻した本日、考輝はとある屋敷にいた。

それは名門袁家の屋敷。
家を囲む塀ですら、材質と造りに金がかけられているのが分かる。
無駄に大きい門は、来る者を皆威圧するかのようだ。

そんな屋敷の小部屋（あくまでもその屋敷の基準で）に考輝はいた。
一体そこで何をしているのかと言うと、本を片手に勉強を教えている。

「……そこの字が違う。正しくはこうだ」

「は…はい……／／」

考輝に指摘され、勉強を教えられている者、袁紹は言われた個所を頬を紅くしながら直す。

ちなみにこの紅さは、間違っているのを恥じている訳ではない。

そして彼女は直した後、再び自分の記憶を頼りに四書の一つである論語を紙に書いていく。

そんな様子を見た考輝は椅子に深く座り直し、天井を見上げる。彼は洛陽に帰って来て直ぐの事を思い出していた。

『袁紹ちゃんに勉強を教えてあげてくれない？』

『……袁紹って…あの袁紹ですか？』

若干申し訳なさそうに言う古万に対して、考輝は目を見開いて答える。

考輝は最初自分の耳を疑った。

恩人である古万がこの半端なく忙しい時だとしても、頼み事をしてくるのはまだいい。

実際彼はこの面会の為にかなり無理して時間を作っている。

しかし、彼は『あの』袁紹に勉強というのが信じられなかった。

『そう、あのお馬鹿で派手好きで、おまけに高笑いが煩い袁紹ちゃんよ』

（……何気に酷い事言ってない？）

考輝は少し同情したが、全て事実なので仕方がない。

『そんな彼女だけど、今回の戦は堪えたみたいよ？　賊相手に兵士の半数近くが討たれたし、自らも危険を味わって意識が変わったみたいね』

確かに考輝と共に行った賊討伐は、袁紹にとって悪夢のような結果

になった。
洛陽にいる全ての兵を連れて行ったいた訳ではないが、それでも被害が大きい事には変わらない。
更に自分自身も命の危険に曝されれば、考え方も少しは変わってくるというものだ。

『もちろん、今直ぐにって事じゃないわ。考輝君達が落ち着いてからで一向に構わないし、道具とかも全部向こうで用意するらしいわ。
それから袁紹ちゃんはかなりやる気になってて、今直ぐ行っても準備万端らしいわよ』
古万は苦笑いをしながら、手に持っていたお茶をすする。

『……』
対して考輝はいつもの無表情で喋らない。
彼としては恩人である古万の頼みを簡単に断る事は出来ない。
しかし、今は恐ろしい程忙しい。
ある程度落ち着いたとしても、トップが不在になるのはマズイだろう。

彼の頭の中では、板挟みになっていた。

『……分かりました、引き受けます。でもそんなに長くは教えられませんよ？』

結局彼は教える事にした。
内心ではため息をつき、これからの仕事量を考えると、仕事をする前から疲れそうだ。

『うん！　それで全然大丈夫よ！　いろいろ頑張ってね♪』

考輝の返答を聞いて、古万はいつになく上機嫌になる。
自分自身は関係ないと言うのに。

（……いろいろ？）

考輝はそれよりも古万が強調したように言った言葉が気になっていた。

「ハァ……」

考輝は数日前の事を一通り思い出した後、小さくため息をつく。
古万の真意が薄々分かってきたからだ。

（『いろいろ』ってこういう事かよ……。本当に人が良いって言うか、お節介って言うか……。
まぁ、あの人らしいっちゃらしいがな）

考輝は鈍いわけでなければ、異常に鈍感というわけでもない。
だから袁紹が自分と話す時に頬が紅くなっているのも気付いているし、今も時々チラッ、と見てくるのも知っている。
もちろんその真意も。

（どちらにせよ、今の俺にはそんな事どうでもいいがな）

考輝は別に男好きという訳ではないが、今女にうつつを抜かすつもりは一切ない。

乱世を終わらす。

これが成功しない限り、袁紹の思いが考輝に届く事は確実にないだろう。

「あ……」

「ん？」

そんな事を考えながら考輝が袁紹を見ていると、彼女が視線を向けた時に目が合ってしまった。

お互いに数秒間止まった後、袁紹は慌てて下を向く。

そして先程とは桁外れのスピードで紙に文字を書き付けていく。

その時の彼女は耳まで真っ赤だった。

（……意外にうぶだな）

考輝はだんだんと彼女の反応が面白くなってきていた。

その夜、考輝は自分の陣幕の中で、パワーアップキットを手に持ち見つめていた。
もちろん陣幕の中には彼以外誰もいない。

「……悪いが試させてもらうぞ」

考輝はそう呟くと、パワーアップキットを起動させる。

実は、彼は今日の帰りがけに袁紹と真名交換をしていた。
余談だが、その時の袁紹…麗羽はガチンガチンに緊張していて、まるで作りの悪い機械のようになっていた。

そして考輝は起動させた後、コマンドの中から知＋５（低）を選択する。
今教えているのもあり、分かりやすいというのが理由だ。

コマンドを選択すると、次は真名が沢山並んでいる画面に変わる。
五十音順なんだろうか、玄鳥、古万、沙和と言った感じで並んでい

る。

そのため、『麗羽』も直ぐに見つかった。

「……」

考輝は無言で『麗羽』と書かれたところを押す。

『コマンドを実行しますか？　Ｙｅｓ　Ｎｏ』

すると確認のような文章が出て来た。

彼は迷いなくＹｅｓを押す。

『コマンドが実行されました。反映されるまで、数分かかる場合があります』

この文章を見た考輝は、パワーアップキットを机の上に置き、寝る支度を始める。

彼にしては珍しく、その日はなかなか寝付く事が出来なかった。

「ゴホ、ゴホ……ほ、本日も、わざわざ、ゴホ…起こし頂き……」

「……」

次の日、考輝が昨日と同じように袁家の屋敷を訪ねると、麗羽は風邪を引いていた。

辛そうに咳込み、顔も昨日とは違う意味で赤い。

目も心なしかボッーとしている。

しかし、それでも彼女は考輝に勉強を教えてもらおうと準備をしている。

もちろん目的は勉強自体ではないが。

彼はその行為に執念すら感じながらもステータスを開く。

確認の為である。

統：１３　武：３１　知：１０（＋５）　政：１２　魅：９２

考輝はそこでステータスを閉じる。
知りたい事はあったからだ。
ちなみに、数字の後ろの（＋）は前回見た時からの上昇値を示す。

（とりあえず、パワーアップキットは本物だな。麗羽の知力が、しっかりと5だけ上昇している。
……それから風邪は副作用か？　随分と辛そうに見えるんだが……）

考輝は意外にも軽く罪悪感を感じていた。
もし副作用が原因ならば、真名を預けてくれた麗羽の気持ちを踏みにじる事になる。
それでも彼は実験を止める気はないが。

（まぁ副作用かどうかは何回か試して確かめるしかないな。
あとこいつ休ませないと。何が原因だとしても、無理するのは良くない）

「……今日は無理しないで休んんだ方がいいぞ？　見ているこっちも辛い」

考輝は無表情だが、若干心配の色が浮かんでいる。
口調も若干違うような気がする。

「いえ…ゴホ、私は全然…ゴホ、ゴホ……大丈夫です……」

しかし袁紹は引かない。
辛そうに咳込みながらも、無理に笑顔を作りながら大丈夫だと言う。
無理をしているのは一目瞭然だ。

しかし考輝としては麗羽には休んで欲しかった。
自分の事をそこまで思ってくれているのは嬉しいが、原因は彼自身にある。

そんな後ろめたさもあり、彼は無理をさせたくなかった。

（でも意志固そうだし、どうしたものか……。……ハァ、仕方がないな）

「……こんなに熱いのに平気なのか？」

「へ？！／／」

考輝はおもむろに麗羽の額を触る。
やはりなかなかに熱い。

そして麗羽はそれだけだと言うのに、過剰に反応する。
目は見開かれ、顔もどんどん紅くなっていく。
まるで茹蛸のようだ。

さらにそんな状態の麗羽の額に、考輝は彼の額を合わせる。
「ほら、温度差もこんなにあるぞ？」
「は…はひ／／」
麗羽は考輝の言葉をまともに理解していない。
そんな状態になるまで彼女の頭の中はぐるぐると回っていた。

（こ、考輝様のお顔がこんな近くにあって、本当に目と鼻の先で、
考輝様の香りがして……）
とうとう麗羽は目が回り始めた。
もちろん風邪だけが原因ではない。

少し額を合わせた後、考輝はまた元の姿勢に戻る。

「分かったら今日は休め。いいな？」

考輝の言葉に麗羽はコクコクと凄い勢いで首を振る。
もう麗羽は顔から煙りが上がりそうだった。

（休んでくれたのはいいが、まさかここまで凄い反応するとは……
……）

そんな麗羽を見ながら、考輝は何か面倒な事になる予感がしていた。

結果を言えば、麗羽の風邪は副作用だった。

急に風邪を引いた事もそうだが、何より次の日には何事もなかったかのよいに、けろりとしていたのが決め手になった。

考輝は一日で治る事に幾分か安堵し、また麗羽にパワーアップキットを試していく。

そして麗羽に勉強を教え始めてから一週間程が経った夜、考輝は陣幕でパワーアップキットの副作用についてまとめていた。

（……とりあえず、副作用について分かった事は、

・パワーアップキットを使うと確実に副作用がある。

・武力や適性ならば筋肉痛など肉体的に問題が出る。

・知力関係ならば風邪や頭痛など疾患が起こる。

・副作用は一日で完全に治る。

こんな感じだな。

……やっぱり副作用があったんだよな。一日で治るのが分かっているのが救いだが、そう多用出来る物じゃない）

考輝はパワーアップキットを忌ま忌ましげに見つめる。

コマンドを使用すれば、何かしろの問題が起こりその者は一日近く仕事が出来なくなるだろう。

そうなると、複数人に同時に使うのは好ましくないし、連日使うの

も良くない。

しかもコマンドには回数制限があるので、本当にいろいろな事を考えて使わなければならない。

確かに便利な物ではあるが、かなり厄介な物だった。

（副作用もかなり面倒だが、回数制限も厄介だな。麗羽に使ったコマンドも使い捨てだしな。

ひとまず、どうにかしてコマンドを増やす方法を考えないと……

……）

「あの……隊長…失礼します……」

考輝があれこれ考えていると、凪が陣幕に入って来た。

しかし、どこか様子が変だ。

何時ものような、きびきびとした感じがなく、どこかおどおどしている。

そして顔も若干青い。

「……どうした？」

考輝はその様子に疑問を持ちながらも、まず要件を聞く事にする。

「えっと……隊長にお客様が参られているのですけど……会われますか？」

「……せっかく来てもらったんだ、会おう。
それで客って誰だ？」

考輝は凪が客を合わせたくないように言っているように聞こえた。
しかし、ちゃんとした理由も無しに客を追い返すのは問題がある。
彼は誰だとしても会うつもりだ。

そして凪はその言葉を聞いてがっくりと肩を落とす。

「……はい、分かりました。連れてまいります。
それから客は貂蝉という踊り子の方です。何でもこの前のお礼が言いたいとか」

凪にそう言われ、考輝はこの前の山城の時に貂蝉という踊り子が捕まっていた事を思い出す。

そして彼の記憶が正しければ、貂蝉とは絶世の美女だったはずだ。
何故か漠然と嫌な予感がしていたが。

そしてその予感は数分後に見事に的中する。

「い～～んやん♪　意外にもなかなかかわいいわねん♪」

「……は？」

考輝に客として通された者は明らかに常人ではなかった。

通常の人の倍はあるんではないだろうかと言う背丈。
全身余す事なく鍛えぬかれた筋肉。

そして何よりも普通でないのが、服装。
まさかの水着姿。
しかも男性であるというのに女性用で、ほぼ紐のよあな物の。

この姿で現代の街中を歩けば１００％通報されるレベルの変人っぷりだ。

考輝はそれを見て開いた口が塞がらず、呆然としていた。
そして警戒のためか、貂蝉の横には得物を持った玄鳥が立っている。
その目は下手物を見るかのような目で彼（？）を見ていた。

「いやん♪　可愛いからってそんなに見つめられると困るわ♪」
考輝が唖然としていたのを勘違いしたのか、貂蝉は恥じらうように身体をくねらせる。

「……とりあえずその吐き気を催す動きをやめろ。それ新手の公害か何かか？」
考輝は正気を取り戻した後直ぐに目を細める。
誰だってオッサンがうねうねしている姿は見たくない。

そしてそんな事を言いながら考輝は彼（？）のステータスを開く。
特に他意がない行動だったが、それを見てさらに驚愕する事になる。

統：２００　武：２００　知：２００　政：２００　魅：－１００

剣：S　槍：S　戟：S　騎馬：S　兵器：S　水軍：S

特技…漢女（外史において全てが補正される。ただし、深く関与する事は出来ない）

（……よし、ひとまず落ち着け）

考輝は貂蝉のステータスを見た後、驚きが一周して逆に冷静になっていた。

容姿や行動も半端じゃないインパクトがあったが、このステータスはさらに凄い物だ。

上限にも下限にも数値が限界突破している上に、全適性がS。

おそらく、こんなめちゃくちゃなステータスを持った者など短い一生の中では普通会えないだろう。

「だぁれが、見れば三日は嘔吐が止まらず、有機水銀も裸足で逃げ出す有害物質ですってぇ！！！」

「そこまでは口に出していない。それと顔が近い」

どう聞いたらそんな風に聞き間違えるんだというレベルで聞き間違え、貂蝉は身を乗り出す。
かなり顔が近い所まで来たため、考輝は少し引く。

「……」

よく見ると玄鳥は無言で貂蝉の首筋に得物を押し当てている。
確かに明らかに今のは不審行動だろう。

しかし貂蝉は気にするそぶりすら見せず、ゆっくりと元の姿勢に戻る。

「で、お前は何をしに来た？　出来れば一秒でも早く終わらせて帰れ」

考輝が貂蝉に問うがその口調は辛辣だ。
表情もかなり恐い。

「もう！　せっかちさんね！！　もう少し気は長い方がいいわよ？
それで予定ってのは助けてくれたお礼をしに来たのよ。お・れ・い♪」

「いらん。よし、じゃあ帰れ」

考輝は貂蝉の口調に寒気を感じながら、出口の方を指差す。
その顔には一切迷いがない。

「照れ屋ねぇ♪　でも良いわ、私の……」
「「？」」

しかし出口に向かわず貂蝉はその場で屈む。
疑問に思った考輝と玄鳥が覗き込むと……

「私の熱い抱擁を受けとってえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

「……はい？」

オカマが飛び出て来た。

「あああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

その日、彰義軍の陣幕の中で一人の男性の悲鳴がこだました。
それは彼の生涯の中で一番大きい声だった。

「ちょ、考輝！！　しっかりしろ！！」

玄鳥が考輝を揺するが、彼は泡を吹いて倒れたまま動かない。

「やべえ！　ピクリともしねぇ！！
てかお前何しやがるんだ、コラ！！！」

「あら、ちょっと力強すぎたかしら？」

玄鳥が貂蟬を睨むが、彼（？）はまと外れな事を考えている。

そして、そんな風なやり取りをしている横の机の上で、パワーアップキットが光を放っていた。

もちろんその光は考輝にしか見えないし、鏡に写っているこの文字を読める者も考輝だけだ。

『新しいコマンドが追加されました。既存のコマンドの回数も追加されます』

オリキャラ一覧（前書き）

感想にあったオリキャラ一覧を作ってみました。

しかし急造の上、私自身が余りこういった者を作った事がないためかなり穴があります。

一応今回は今出てる主要なキャラだけですが、徐々に増えていきます。

もちろん訂正もガンガンしていくつもりです。

あと『これを書いた方がいい』というのが会ったら、どうか教えて下さい。

オリキャラ一覧

オリキャラ一覧

姓：彰　名：義　字：紅炎　真名：考輝

容姿

年齢は１５、６。身長はやや高め。
短い黒髪で常に無表情。
その無表情さからいろいろ誤解を受ける事が多い。

一応顔は整っている方で、本人も最低限の身嗜みは気にしている。
なので毎日風呂に入れないのが悩み。

性格

一言で言えば現実主義者。
効率が悪い事や意味の無い行為を特に嫌っている。

そのため時に残酷で冷酷。
目的のための手段は選ばないし、敵に容赦はない。

彼自身に命を奪う事に罪悪感はなく、命に対しての感覚がかなり狂っている。

しかし人情がない訳ではなく、いろいろと支援をしてもらっている丁原に恩義も感じている。

戦う理由も乱世を効率良く終らせて、平和をもたらすという意外にも普通の理由。

彼自身気付いているが、恋姫無双の世界へ送られる前に、神に性格を大幅に弄られている。
そのために常に冷静沈着で冷酷。

丁原に恩義を感じたり、平和をもたらしたいと思うのは、彼の元の性格の名残である。
現代人としての彼は、心優しいいたって普通の少年だった。

それを思わす行動に、時折洛陽の街で子供の面倒を見ていたりする。

能力

策略、内政、更には指揮等多才。
更に武力もそれなりに持っていて、一般兵ではまず相手にならない。

特に戦略を考える事に長けていて、火計を好む。
理由は火だと敵を一掃するのに使えるし、死体の後始末の心配もないからとか。

ステータス（洛陽を去って）

統：８２　武：７５　知：９８　政：９９　魅：９７

剣：Ｂ　槍：Ａ　戟：Ｂ　弓：Ａ　騎馬：Ｂ　兵器：Ｓ　水軍：Ａ

特技…深謀（計略が強力になる）

姓：張　名：燕　字：？？　真名：玄鳥

容姿

背丈は彰義より少し小さいくらいで、歳は十代後半から二十歳ぐらい。

つり目で、露出が少しある服を好む。頭には黒い手ぬぐいを巻いているが、常に巻いているわけではなく、ちょくちょく外している。ちなみに髪は黒くてボサボサした感じ。

胸はそこそこの大きさがある。何よりもスタイルがいい。

于禁によると、出る所は出てしまる所はしまっているとか。

性格

基本的におおざっぱで、余り深く物事を考えない。
そのため思った事はストレートに言う。

騎馬に関してはうるさく、騎馬隊の資金を巡って彰義と言い争いをする程。

他にも血気盛んであったり、酒豪だったりと彰義軍の揉め事の中心にいる事が多い。

だがわりと仲間思いで、楽進の相談に乗ったり、発明三昧の李典を気遣ったり、于禁と買い物に行ったりと面倒見がいい。

兵士の中にも姐御と呼んで慕っている者がいるとか。

彰義とも喧嘩や言い争いが多いが何だかんだ言って慕っている。
貂蝉が来た時も心配して一人で彰義の陣幕に行ったりしていた。

能力

根っからの武人であり、その能力も高い。現状彰義軍の中での最強の武将である。

騎馬戦が得意で、それは大陸の五本の指に入る腕前。
馬の上での戦いなら呂布（全力ではなく力を抑えているが）にも引けを取らない。

ステータス（洛陽を去って）

統：８８　武：９４　知：５６　政：５２　魅：８６

剣：Ａ　槍：Ｓ　戟：Ｂ　弓：Ｂ　騎馬：Ｓ　兵器：Ｃ　水軍：Ｃ

特技…長駆（騎馬の移動力上昇）

姓：丁　名：原　字：？？　真名：古万

容姿

まず目立つのが長い金髪。
かなり手入れがされていて、男女問わず美しく感じるだろう。歳はそれなりに取っていそうだが、まだまだ美貌は衰えていない。

なお実際の歳は誰も知らない。
触らぬ神に祟り無し。

服は和服のような物を着ている。
波模様がお気に入りだとか。

性格

面倒見が良く、いろんな人を助けている。
自らの後輩や部下にも評判も良い。袁紹や曹操とも顔なじみで、彼女達もお世話になったりしている。
更に大将軍の何進と親友だったり顔も広い。

実は生れつき子供を産む事が出来ず、そのため伴侶はいない。
だが呂布を小さい頃から我が子同然に育てており、他の将達も丁原にしたら子供のようなものだ。

能力

現在は并州州牧だが元は武官であるため強い。
騎馬の腕が高く、騎射の狙いも正確。

ただ政は余り得意ではない。
州牧でありながら政務室を度々抜け出している。

彼女自身は自分は武官だから州のトップなんか合ってないと言っており、本気で辞める事も考えている。

ステータス（未来を話して）

統：７１　武：７６　知：５３　政：４０　魅：８８

剣：B　槍：C　戟：C　弓：B　騎馬：A　兵器：C　水軍：C

特技…騎将（騎馬が強力になる）

姓：スイ　名：固　字：白兎　真名：因幡

容姿

ワイシャツにスカートと言った、一見現代の女学生のようにも見える服装。

ただ帽子にはウサ耳が付いていて、そこがかなり目立つ。

更に肌が白く、目も赤いためかなり兎みたいに見える。

性格

単純でかなり悪乗りするタイプ。

だが彼女自身がアホで天然のため余り憎めない。

張燕とは彰義軍に来る前からの知り合いだったらしく、彼女に副将に推挙された。
そのためか、彼女の事を姐御と呼ぶ。

適当そうに見えて、彰義の事はしっかりと尊敬している。
同じ副将のためか、徐栄と絡んでいる事が多い。

能力

戦闘能力は高め。
特に陸戦ではオールマイティに部隊の指揮が出来るため重宝されている。

ただアホ。
知力もほぼ限界のため、彰義も無理に伸ばそうとはしない。
副将どまりなのもそれが原因。

ステータス（洛陽を去って）

統：７７　武：８０　知：１９　政：７　魅：７６

剣：Ａ　槍：Ａ　戟：Ａ　弓：Ｂ　騎馬：Ａ　兵器：Ｂ　水軍：Ｃ

特技…不屈（指揮している兵士の数が少ない程損害が少なくなる）

特技２…待伏せ（伏兵が強力になる）

姓：徐　名：栄　字：？？　真名：大宛

容姿

身長が高く、かなり引き締まった体をしており、非常に男らしい。しかも顔も中性的で、胸も小さいので、初めて会う人は性別を間違えるかもしれない。

一応記述すると女性。

服にも余り興味が無いらしく、鎧姿でいる事が多い。

性格

かなり真面目。
楽進といい勝負だが、口調のため厳格な雰囲気を纏っている。

口数が少なく、何故か漢字しか喋らない。
一応のコミュニケーションは取れるが、誤解される事も多い。

実は将の中で最も彰義に心酔しており、忠誠心もべらぼう高い。
同じ役職のためか、スイ固と一緒にいる姿がよく見かけられる。

能力

馬の扱いが上手く、騎馬隊では張燕についで地位が高い。
有能だが張燕を超す事が出来ないために、副将に甘んじている。
しかし彼女の特技はかなり貴重の物で、彰義はかなり重用している。

ステータス（洛陽を去って）

統：８４　武：７８　知：６２　政：４８　魅：６８

剣：Ｂ　槍：Ｂ　戟：Ｂ　弓：Ｃ　騎馬：Ｓ　兵器：Ｃ　水軍：Ｃ

特技：疾走（騎馬で突撃した時敵陣を乱す）

姓：司馬　名：朗　字：伯達　真名：鈴蘭

容姿

見た目は普通の幼子。

身長も高くなく、年齢より幼い１０歳前後の感じがする。

髪は金髪でショート。

胸が小さいのが悩みだったり。

服は丁原から貰った着物が気に入っているらしく、よく着ている。

ただ彼女はかなり突飛な服を好む。
着物をよく着ているのも珍しいからだろう。

性格

基本的には真面目だが、気が弱い。常におどおどしている。
たが物事を一度決めたら譲らない頑固さもある。

かなりのシスコンで妹の事を本当に可愛がっている。
ただ人目がある所では恥ずかしがって、それを思わす行動をしない。
そのためその事を知っている者は数少ない。

余談だが彼女は重度の方向音痴。
洛陽の街で人狩りに捕まったのもそれが原因だったりする。

能力

統率力や武力が低く、戦場に出るタイプの将ではない。

しかし知力や政治力が高く、軍師や文官としては有能。
特に雑務や建設の仕事が得意で、そのスピードは彰義も脱帽する程。
建設においては、堤防や堀の設計から建設の監督まで全てこなす事が出来る。

ステータス（洛陽を去って）

統：４８　武：２３　知：８９　政：９０　魅：８３

剣：Ｂ　槍：Ｃ　戟：Ｃ　弓：Ｂ　騎馬：Ｃ　兵器：Ｂ　水軍：Ｃ

特技…築城（建設、土木関係の指揮をすると効率が上がる）

未来を話して（前書き）

今回から少し書き方を変えてみました。
意見等頂けると幸いです。

未来を話して

考輝は宮廷の中にいた。

それは前回のように非公式で呼ばれたものでなく、正式に使者を遣わされて来ていた。
そのため前のような小さい部屋でなく、かなり広い部屋に通されている。

もちろん装飾類も豪華で、絨毯や壁等は色彩豊かだ。

その部屋の奥の方に、床から一段ほど高くなっている場所がある。
その上には机が一つ置かれていて、周りを四本の柱に囲まれ、正面以外は簾のような物が降りている。

誰が見ても偉い人が居そうだと何となく分かるだろう。

その場所に一人女性が座っているが、それは大将軍の何進。
やはり偉い人だった。

彼女は机の上の丸まった竹簡を目をやりながら、段差の下にいる臣下の礼を取っている三人を見つめている。

その三人の一番左に考輝はいた。
なお彼が臣下の礼を取っているのは礼儀上問題があるからだ。決して配下になった訳ではない。

そして彼の直ぐ隣には同じように臣下の礼を取っている麗羽がいる。
何時もの金色の鎧に身を包んでいて、大将軍が目の前にいるというのいたって普通の様子だ。

内心では直ぐ隣に考輝がいる事に動揺しているが。

そしてそんな麗羽の左隣にも女性……いや、少女がいる。

麗羽よりも深い金色の髪をしていて、髑髏の髪どめで左右に分け、カールさせている。全体的に青色が目立つ服を着ていて、身長は余り高くない。

彼女の名は曹孟徳。

いずれ覇王と呼ばれ、この大陸にその名を轟かせる少女だ。

「では今回お主らを呼んだ訳を話す」

唐突に何進が喋り始める。
机の上の竹簡を広げ、読み上げるように話す。

「今、この洛陽の街では人身売買が横行しておる！　しかも裏には宦官共も絡んでいるという話じゃ！！」

何進は宦官という部分をさも嫌そうに言う。
何を隠そう、彼女はこの世の中で宦官と猫が一番大嫌いなのだ。
だから意識しなくともつい忌ま忌ましく言ってしまう。

「そこでお主らには人身売買を行う者共を一斉に検挙し、さらに宦官との繋がりの証拠も押さえてもらう！！
人を買った者達の把握も忘れるでないぞ！　おそらく宦官に繋がっている者もおるはずじゃ！！」

『はっ！！』

何進の命令に、三人は同時に返事を返した。

所変わり、袁紹軍の陣幕。
そこでは麗羽、曹操、そして考輝の三人が軍議を行っていた。
内容はもちろん何進からの命令に関してだ。

「……何進からの情報だと、かなり売買に関わっている場所が多いうえに、離れているわね。全部一度に攻撃を仕掛けるのは難しいかしら？」

「……確かに兵力的に少しきついだろう。だがのんびり一カ所ずつ攻撃をしていれば他の場所に情報が回り、完全に検挙するのはきつくなるな……」

曹操と考輝は陣幕の壁に貼ってある洛陽の地図を見ながら顔をしかめている。

地図には赤い印しが付いた場所が十ヶ所近くあり、その場所は全て人身売買に関わっている場所だ。
その全ての場所で取引が行われている訳ではなく、売られる人の監禁場所や人狩りの拠点も含まれている。

（……おそらく場所をこんなに増やしたのは襲撃をされる際に的を増やすためだろうな）

（そうすれば一カ所当たりの兵力は減り、逃げやすくなるものね。……宦官達もいろいろ考えているのね）

（（なら手は一つ……））

二人は同時に同じ事を考え、似たような対策を考え出していた。

しかし、その策を考えついた者はもう一人いた。

「そうなると、重要な場所から狙っていくのが無難ですわ。まず監禁場所、そして取引の記録がある取引場、あと人狩りの拠点も早めに対処した方がいいですわね」

その者は麗羽だった。

地図で言った場所を指していく姿は正に一軍を率いる者の姿だ。

そして曹操はこの光景に目を丸くする。それはもう信じられないような物を見たかのように。

彼女の知っている麗羽ならば、全ての場所を無理矢理攻撃すると

言い出しても不思議でない。
むしろ、そう言う確率の方が高いぐらいだ。

（……これ実は偽者なんじゃないかしら……）

曹操がそう疑うのも無理はないだろう。

統：４２　武：５１　知：４７　政：４２　魅：９３

（……ステータスのアップの効果が顕著に現れ始めたな。……まぁ、まだお世辞にも優秀と呼べるレベルではないがな）

考輝は麗羽のステータスを開き、彼女の成長を感じ取っていた。

勉強を行い始めてからまだ数日しか経っていないが、もともと才能があり、その上パワーアップキットも加わっているので凄い早さで成長している。

しかも恐ろしい事にのびしろの限界がまだ見えていない。
彼女はまだまだ成長するだろう。

「そ、そうね。あとこの件首謀者の家も狙った方がいいわ。きっとそいつが宦官と深く関わっているでしょうし」

曹操はまだ少し動揺しながら麗羽の策に付け足しをする。

その後、時間を始めるや誰がどの場所を攻撃するのかを話し合い、軍議は終了した。

「こ、考輝さん……この後一緒に昼食などいかかでしょうか……／／」

「悪いが用事があるから遠慮させてもらう」

終わりがけにこんな会話があったとか。

考輝は袁紹軍の陣幕を出て軽く昼食を取った後、とある茶屋に来ていた。
洛陽の表通りにあるその店は、なかなか人気があるらしくかなり混んでいる。

見たところ満席のようだが、彼は構わず店の中に入って行く。
そしてある人物を見かけると、そこに向かう。
どうやら待ち合わせをしていたようだ。

「……いきなり呼び出して何のようだ？　曹孟徳」

「とりあえず席に座って何か注文したら？　ここの団子はなかなか美味しいわよ？」

そこには未来の覇王が一人で団子を食べている姿があった。

「それで聞きたいのは麗羽の事か？」

席に座り、店員に注文をした考輝がおもむろに問い掛ける。

その言葉に曹操は、ピクリと反応した後団子を口に運ぶ。

「分かっているなら話しは早いわ。貴方が麗羽に勉強を教えてるっていうのは、本人から聞いていたけど、あの変化は異常よ？　一体どんな妖術を使ったのかしら？」

曹操からしたら、あの変化は信じられなかった。
だからこそ、こんな風にわざわざ呼んで確かめるつもりだった。
実際の目的はもう一つあるが。

彼女は団子を飲み込み考輝を見つめる。
それは別に睨まれている訳ではないのだが、何故か迫力がある。
普通の人ならば萎縮し、何も喋れなくなるんじゃないかという程だ。

「……別に変わった事は何もしていない。ただあいつにそれだけの才能が眠っていただけだ」

しかし考輝はその視線に動揺すらせず、先に店員に出された熱いお茶をすする。

もちろん彼はパワーアップキットの話をするつもりはない。
今までも誰にも話していないし、これからも誰にも話す事はないだろう。

「……じゃあ、貴方は麗羽の中に眠っている物が分かっていて勉強を教えていたの？」

「さぁ？」

考輝ははぐらかすように短く返す。

彼はステータスが見える事も、パワーアップキット同様話すつもりはない。

そうやって話していると、店員が考輝の注文していた団子を持って来た。
ちなみに一番安い物だ。

「……上手いな」

何気なく団子を口に運んだ考輝は、思わず声を出してしまう。
余り甘い物が好きな彼ではないが、それほどまでに上手い団子だった。

「フフ、この私が認めている茶屋なんだから当然よ」
曹操は自信満々といった感じで笑う。
かなり舌に自信があるようだ。

そして考輝は今更ながらそんな彼女のステータスを開く。

統：９８　武：９４　知：９９　政：９５　魅：１００
剣：Ｓ　槍：Ｓ　戟：Ｓ　弓：Ａ　騎馬：Ｂ　兵器：Ｂ　水軍：Ｃ
特技…覇王（全部隊の士気上昇。自身の能力値が高くなりやすい）

（……流石覇王だな）

彼女のステータスを見た考輝は真っ先にこの言葉が浮かんだ。
能力値の平均値が約９７。
正に覇王と呼ぶに相応しいステータスである。

考輝がそういった感じで考えていると、曹操は笑い顔から表情を一転させる。
それは真剣な表情そのものだ。

「実は麗羽の事以外に話しが……」

「却下だ」

だが考輝はそんな表情の曹操に即答する。
最後まで聞いてすらいないというのに。

「……まだ何も本題を言ってないんだけど」

曹操はさも不機嫌そうだ。
しかし雰囲気からして怒っている訳ではないようだ。
おそらく彼女はこの答えをある程度予想していたのだろう。

「内容ぐらい簡単に予測出来る。大方自分の軍門に下れとかそんな感じだろ？　第一お前は俺が拒む事くらい分かっていたはずだ」

「……」

曹操は何も言わない。
そしてそれは考輝の言っている事を肯定する事になる。

彼女が返答が分かっていながら聞いたのは確認の為だ。
考輝の器と意志の。
そしてこれから聞く事も分かりきった答えの確認にすぎない。

「そこまで頭が回るなら分かっているでしょ？　この先の大陸の未来を。そして私が生き残る事も。
それなのに何故私の誘いを断る？」

曹操は軽く睨みを効かせてきた。
それは覇気が溢れ、有無を言わさない迫力がある。

端から聞けば曹操の言っている事はよく理解出来ないだろう。

しかし、聞く者が聞けば大きな意味を持つ言葉だ。

大陸の未来とは乱世から来る群雄割拠。
そして生き残るとは大陸を統一するという事。

つまり彼女は『何故天下を統一する自分の誘いを断る？』と言っているのだ。

考輝は、その真意を正確に理解した上でこう返した。

「だからお前だって分かっているだろ？　俺も生き残るつもりだ」

考輝は立ち上がりながら言う。

そして彼のこの言葉は覇王曹孟徳に対して、『自分も天下を統一するつもりだ』と喧嘩を売っている事に等しい。

しかし曹操はそんな事を言われながらも笑っている。
彼女はずっと待ち望んで来たのだ。
自らの覇道を阻む、ライバルとも言えるような英傑の存在を。

そして、それは今日見つかった。

あの麗羽の才能を見抜くだけの眼力。
彼女の覇気にすら怯まない精神力。
彼女の言葉から真意を読み取る知力。

（やっと……やっと、一人見つかった……）

曹操は自然と拳を握りしめていた。それは怒りや憤りから来る物ではなく、歓喜から来ていた。

「私の真名は華琳よ」

「俺の真名は考輝だ」

唐突に真名交換をする二人の間に不思議な空気が流れる。

ただ一つ言える事は、明らかに真名交換をする空気でない事だ。

「……いずれ戦場で会うかもな、華琳」

「ええ。そしてもし会うなら、それはそう遠くない未来でしょうね、考輝」

二人の間にはこれ以上言葉はいらない。

これでお互いにお互いの事を自らの道を阻む『敵』と認め合った事になる。

そこまで言った考輝は華琳に背を向け茶屋を後にした。
机の上に置かれていたお茶は、いつの間にかすっかり冷えていた。

時は移り、夕方。
考輝はとある屋敷の近くに兵と新たに副将になった二人を連れて来ていた。

その屋敷は人身売買の首謀者の屋敷で、袁家の程広いとは言えないが、いろいろ隠すには充分な広さだろう。
情報によれば、売買記録のいくつかと、首謀者の気に入った者が売られずに、捕らえられているとの事だ。

その屋敷の近くの路地に考輝達は身を潜め、様子を伺っている。
おそらくこれと同じような光景が他の彰義軍の者や曹操軍、袁紹軍によって洛陽のあちこちで見れるだろう。

「……因幡（いなば）、兵達の準備はどうだ？」

「抜かりないッス。何時でも行けるッス」

なかなかに特徴のある話し方で返した彼女は、姓はスイ（口＋圭）、名は固、字は白兎、真名は因幡である。

先日彰義軍の副将になった者だ。

白いワイシャツのような物を着て赤いリボンのようなネクタイをして、黒い短めのスカートを履いている。

さらに黒い帽子を被っているのだが、何故か兎の耳の作り物が付いている。

しかも目も赤く、肌も白いので、かなり兎を連想させる。

「……主……」

「大宛（だいえん）か」

今度は長身の女性が考輝に話し掛ける。

彼女は徐栄と言い、彼女もまた副将になった者だ。

なお大宛は真名。

長身でかなり引き締まった身体をしていて、金髪に所々黒が混じっている。

顔はかなり中性適で、考輝も最初会った時は男かと間違えそうになった程だ。
更に今は鎧を着ている為に尚更男らしく見えてしまう。

「……裏口…兵、配置…完了。……敵、逃走…不可能」
そして何故か彼女は漢字しか喋らない。
一応大体の意味は伝わるが。

「ご苦労……合図だ。行くぞ」
考輝がそう言うやいなか、因幡が兵達に指示を出して、屋敷の門に向かわせる。
門は閉まっていて、それなりに大きいが、大の男が数人がかりなら楽に開けられそうだ。

ちなみに考輝が確認した合図は袁紹軍の陣幕から上がる赤い煙だ。
他の場所でもちょうど突入が行われているだろう。

「……因幡は俺と突入だ。ただ抵抗する奴でも出来る限り捕えろ。何か情報を持っているかもしれん」

「了解ッス」

「大宛は入り口で待機。敵を逃がさないだけでなく、部外者も入れるな」

「御意……」

屋敷の門をこじ開けた後考輝は副将達に指示を出し、素早く行動に移る。

制圧すべき場所は他にも沢山あるためスピードはかなり大切だからだ。

屋敷のあちこちが騒がしくなっている中、考輝は兵士を二人程連れて、廊下を歩いている。

何故かその廊下は異様に静かで、先程まで現れていた召し使いや用心棒達すら現れない。

「……こっちで合っているな？」

「はっ！　屋敷の者の話しですとこちらに隠し部屋があるそうです！」

考輝の問い掛けに兵士はきびきびと答える。
きっと凪の影響だろう。

今彼等が目指しているのは屋敷の主、つまり人身売買の首謀者がいる部屋だ。
屋敷の召し使いに金をちらつかせ聞き出したところ、今首謀者は隠し部屋にいると分かった為、そこに向かっている。

もちろん隠し部屋というぐらいなので、人に見せられないような物が大量にあるようだ。
考輝からしたら目的の物が一カ所にいて好都合だ。

「……ここのようです」

兵士は廊下の曲がり角の部分で止まる。
そして壁を軽く二回押すと、カチッと何かが外れるような音がして、壁が扉のように開いた。

「……」

「これは……」

中の光景に考輝は何も言わなかったが、兵士は思わず声を出す。

隠し扉の向こうも薄暗い廊下が続いているが、左右に牢屋のような物があり、中には何人もまだ少女といった感じの女子がいた。

皆、ボロボロの衣服を纏い、首には鎖で壁に繋がれている首輪が付いている。

そして全員生気が感じられないように俯いていて、考輝達が入って来た事にも気付いていないようだ。

「……お前らは牢をこじ開けて中の奴らを出してやれ」

「「は、はい」」

考輝はそれだけ言うと薄暗い廊下を進む。

後ろでは兵士達がガチャガチャと牢を開けようとしている。

「……」

少し無言で進むと、廊下が木の扉で終わっていた。かなり簡単な作りで素人が作ったような感じだ。

そして首謀者はこの中にいるのか、小さいながら物音が聞こえる。

考輝は迷いなく扉を乱暴に蹴り開け、中に入った。

そして絶句した。

首謀者がいなかった訳ではない。
それと思われる中年の太った男は、薄暗い部屋の中央で椅子に座っている。

しかし、彼は下に何も履いていない。

しかも、彼の足の間には衣服をなにも身につけていない、金髪の少女がひざまづいている。

まだ行為を行っている訳ではないが、次に何をしようとしているかは、ある程度知識があれば簡単に分かるだろう。

「な、何だ貴様、ギャアアアアアア！？！」

男が何か言ってこようとしたのを考輝は鎧に仕込んだ短剣を投げて遮る。

短剣は右肩に当たり、男は痛さで床をのたうち回っている。

その動きが不快だったのか、考輝は思っきり腹に蹴りを入れる。

すると男は少し吹き飛んで動かなくなった。

どうやら気絶したようだ。

「おい、悪いがお前らでこいつを縛ってくれ」

「あ、分かりました」

考輝は牢屋を開ける作業を中断させ、兵士に男を縛らせる。

兵士達は縛る前に何か履かせようか迷ったが結局止めた。

誰も好き好んで野郎の着替えなんかしたくないだろう。

余談だが、その男は最終的にそのまんまの格好で、宮廷まで連れて行かれる事になった。

「……」

「ふ、ふぇ……」

兵士が縛り始めたのを確認すると、考輝は少女の方を見る。
少女はいつの間にか部屋の隅に移動し、ガタガタ震えながら考輝を見ていた。

（……流石にあの格好のままにしておくのはマズイよな……）

そう考えた考輝は、とりあえず近くのベッドにあったシーツを裂いて少女に投げる。
無駄に良い素材が使われているようなので、少女もそこまで嫌ではないだろう。

「ふぇぇえ！！　すみません、すみません！！！」

シーツを投げたら何故か錯乱する少女。
シーツの中で暴れ回り、何か新種の生き物のように見える。

そんな少女を見て、考輝は軽くため息をつく。

「落ち着け、別に取って食いはしない。俺は官軍のものだ」

「すみま……か、官軍ですか？」

官軍という言葉に反応して少女は暴れるのを止める。
そしてもぞもぞと動き、シーツから恐る恐る顔だけ出す。
その表情は酷く怯えたものだった。

「ああ、だから安心しろ。お前を助けに来た」

この時の考輝はいつもの無表情ではなく、ニッコリと笑っていた。
それも作り笑いや愛想笑いではない、心からの笑顔。

そしてそれを見て、男を縛っていた兵達は縛るのを中断し、まるで雷に打たれたかのように口を開け、呆然としている。

彼等、いや彰義軍の誰しもが考輝が笑ったところを見た事が無いため、かなり衝撃的な映像だった。

もし玄鳥が見ていれば、天変地異の前触れだと騒ぎ出すんじゃないだろうか。

「は、はい……」

そんな事を知ってか知らずか、少女の表情は少し柔らかくなった。

「……それでお前の名前はなんて言うんだ？」

表情が柔らかくなったのを確認すると、考輝は名前を確認する。
いろいろ話した方が安心するだろうという彼なりの配慮だ。

「えっと、私は……」

「司馬朗と言います」

未来を話して（後書き）

司馬朗って読者の方で知らない人多いでしょうか？

多分三国志が好きな方は分かると思いますが……この話しで説明付けた方が良かったのか……。

一応次回説明するつもりです。

文官を加えて（前書き）

ま、纏めすぎた……。
途中で切るべきだった……。

最近文が無駄に長くなるのが悩みです。
読む方はもっと短い方がいいですか？

それからまた書き方変えました。

文官を加えて

考輝はとある屋敷の中にいた。
更に言うならば、その屋敷の隠し部屋の中だ

そして窓からの夕日に照らされながら、部屋の隅でシーツに包まっている少女を見つめている。

その少女、司馬朗はまだ表情に怯えが残っているが、先程までのような錯乱はしていない。
だんだんと落ち着いて来たようだ。

「……つまり妹が失敗した為に、人質として囚われていたお前は宦官共に売られたと？」

「は、はい……」

司馬朗の顔に陰がかかり、俯く。

彼女の話をまとめるとこうだ。

彼女は自らの見聞を広めるため、妹と共に旅をしていて、先日洛

陽にまで辿り着いた。
しかし運悪く、彼女は人狩りに捕まってしまい、ある建物に監禁されていた。

その事に気付いた彼女の妹、司馬懿は噂で人身売買に宦官が関わっている可能性があると聞き、そのため官軍を警戒してたった一人で姉の所在を捜したらしい。

そしてとうとうその場所を見つけ、単身切り込み姉を救う事に成功する。

しかしそんな事をすれば、裏で糸を引いているであろう宦官達が黙っていないのは明白だ。

そこで彼女達は逆に自ら宦官の所に出向き、彼女達を逃がすように交渉した。　交渉は主に司馬懿が行っていたので司馬朗は細かく内容を知らないが、その交渉は成功。

そして司馬懿が交渉内容を実行している間、司馬朗は人質として宦官の元にいたのだが、司馬懿はそれに失敗。
結局彼女は売られる事になってしまった。

なお司馬懿は行方不明の上、生死不明。

これが司馬朗の現状である。

「……」

頭の中で状況を整理し、少し引っ掛かる事があったが、彼はそれは一先ず置いておく事にした。

そして今度は司馬朗という人物自体について考えてみる。

（司馬朗と言えば司馬八達の長男……ここでは長女か。どちらにせよ、優秀な事に変わりない筈だ）

統：２０　武：２１　知：８４　政：８７　魅：８３

剣：Ｂ　槍：Ｃ　戟：Ｃ　弓：Ｂ　騎馬：Ｃ　兵器：Ｂ　水軍：Ｃ

特技…築城（建設、土木関係の指揮をすると効率が上がる）

そこまで考えた考輝は彼女のステータスを開く。
戦闘はからきし駄目だが、文官としての能力は非常に高い。
今彰義軍において最も必要な人材のタイプだ。

「……それで、お前はこれからどうする？　旅の途中だったんだろう？」

考輝は少し考えてから司馬朗に問い掛ける。
そして彼女は力無く首を振って答える。

「……分かりません……妹の安否も分かりませんし……」

司馬朗の声は今にも消え入りそうな物だった。表情も明らかに先程より暗くなっている。

「……当てが無いなら、うちの軍に来ないか？」

「……え？」

考輝の唐突な勧誘に、司馬朗は目を丸くした。

結果を言うと、司馬朗は彰義軍に仕官した。
妹を捜すのを条件に。

しかしきちんと真名まで預け、妹が見つかっても立ち去るような真似をするつもりは無いようだ。

そして人身売買の方は宦官が繋がっている証拠が多数発見され、繋がりがあった者達は袁紹軍や曹操軍に確保される予定だ。

流石にそれに義勇軍を使う訳にはいかない為、彰義軍に出番はない。

しかし調書や報告書等の書類仕事はかなりあり、考輝一人では確実に処理出来ない量があった。

そこで早速司馬朗が役に立ち、オーバーワーク気味だった考輝にゆとりが出て来る迄になった。

更には司馬朗は彰義軍における予算の無駄を見つけ、彼女自らがそれを削除する計画を立てている。

やっとの事でそんな優秀な文官を手に入れた考輝は仕事を早々と終わらせ、そのまま仕事机でパワーアップキットについて紙に纏めていた。

その紙には副作用やその種類、今使用出来るコマンドが書いてある。

これ一つでパワーアップキットに関する情報は全て手に入るだろう。

（とりあえずこの前の……『例の騒動』で手に入ったコマンドを誰に使うかだな。効果の程は麗羽で試してあるし）

『例の騒動』に関して、彼は決して言明しない。

もはやトラウマレベルである。

そして軽いトラウマと共に手に入れたコマンドはかなり有用な物だった。

待伏せ（伏兵が強力になる）×3
金剛（敵の武将よりも武力が高ければ高い程損害が減る）×2
掃討（敵部隊の士気が落ちやすくなる）×3

それは特技のコマンド。
通常一人一つしか持てない特技に二個目を追加する事ができ、既存の特技も消えない。

しかも使用者が限定されないのもかなりのメリットだ。
何の取り柄もない雑兵から一騎当千の武を持つ猛将まで幅広く使用出来る。

しかし回数が他のコマンドより少なく、よりよく考えていかなければならないだろう。

ちなみに金剛のコマンドが2回しかないのは麗羽に使ったから。
もちろん副作用も出た。

（……とりあえず『待伏せ』は小数部隊を指揮するのが得意な因幡あたりか？
『金剛』は武力が高い奴にすべきだから玄鳥か凪にして……。
『掃討』は指揮能力が高い沙和もいいし、騎馬の小回りがきく大宛もありだな）

「能面、ちょっといいか？」

いろいろと悩んでいると、玄鳥が陣幕に入って来た。
すると考輝は素早く紙を懐にしまい、彼等にとってお約束の返答をする。

「誰が能面だ、コラ。
……一応仕事終わって暇だ。で、何の用だ？」

「街に馬を買いに行きたくてよ。お前が一人で街に行くなって煩いから、仕方なくお前を誘いに来た訳だ」

そう言って玄鳥はやれやれという感じで肩を上げる。

なお彼女が一人で街に行く事が禁止なのは、一人で行けば確実に問題を起こすからだ。
喧嘩やら手持ちの金以上に酒を飲む等の前科もある。

「……じゃあ行くか。そういえば鈴蘭（すずらん）も街で欲しい物が有るって言っていたからあいつも連れてくな」

考輝は顎に手を当て、思い出したように言う。
なお鈴蘭とは司馬朗の真名だ。

「……分かった。野営の入り口の所で待ってるから、準備出来たら来いよ」

玄鳥は少しの間の後、そう言って陣幕を出て行く。

「……？」

彼女にしては違和感を感じる間の取り方に考輝は疑問を持ちながらも、鈴蘭を呼びに行く為に自身も陣幕の外に出た。

考輝が鈴蘭のいる陣幕に向かって歩いていると、途中で鬼の形相をしている凪に出会った。

しかも手にはしっかりと手甲が付けられ戦闘体制万全である。

「……どうした、そんなに恐い顔をして？　……まぁ、大方の予想は出来るが、やはり真桜と沙和か？」

考輝がそう聞くと凪はため息をつきながら答える。

「はい……あの二人また仕事をほっぽらかして何処かへ……。すみませんが、隊長が見つけたら隊長から一言言って貰えませんか？」

「分かった。これから街に行くから見かけたら言っておく」

すると凪はお願いします、と頭を下げてからまた二人を捜しに行った。

「堪忍や！　後生やから研究費を削らんといて！！
もし削られたら絡繰人形が買えなく……そうやなくて、新兵器が作れなくなってまう！！」

「沙和の部隊の予算も減らさないで欲しいの！！
じゃないと沙和のお洋服が買えなく……じゃなくて、新兵の調練が出来なくなっちゃうの！！」

考輝が鈴蘭の陣幕に着くと、真桜と沙和が彼女に泣き付いていた。
どうやら予算の事で揉めている（？）らしい。

なお考輝は陣幕の入口の陰に隠れているため三人に見つかっていない。

「えっと……ですが考輝様からは厳しくやれと言われてますし……
……それにお二人の所は予算が他より多いですし……」

泣き付かれている当の本人はおどおどしていて、かなり困っているようだ。
古万から貰った藍色の和服をバタバタさせている。

だが譲歩する気はないらしく、必死に断っている。

「「そこを何とか！！！」」

しかし二人は更に必死だった。
物凄い気迫で鈴蘭に掴みかかるように詰め寄る。

「ふぇぇ～……」

鈴蘭はその気迫に圧され若干涙目だ。

（……そろそろ助けてやるか。……ん？）

助け舟を出そうと思った考輝が動こうとする前に、陣幕の中に一人入って行った。

そして入って行った彼女を見て鈴蘭は表情が固まる。

「……お二人共……う、後ろを気をつけた方が、よろしいかと……」

「「へ？　……っ！？」」

そして後ろを向いた二人も鈴蘭と同じように固まる。

更に冷や汗をダラダラと顔中からかく。

そこにはいい笑顔を作っている凪がいた。

ニコニコと笑ってはいるが、額には青筋が立ち、手甲を付けた手は小刻みに震えている。

「二人とも楽しそうだな？　水を差すようで悪いが今日の仕事はどうした？　まだ沢山残っていたはずたぞ？」

（（あ、これ死んだ））

ニッコリと笑う凪を見て、二人が同時にそう思うまで5秒もかからなかった。

そしてそのまた5秒後には、鈍い音が二回程鈴蘭の陣幕に響いた。

「……まぁ、天罰ってところか」

「あれ？　考輝様？」

その後凪が頭にたんこぶを作った二人を、首ねっこを掴んで引きずりながら出て行ったのを見計らって考輝は姿を現した。

いきなり現れたのに鈴蘭は少し首を傾げていたが、直ぐに普通の状態に戻る。

この切替の早さも彼女が優秀である理由の一つだ。

「また急なお越しで一体何の御用ですか？」

「実は玄鳥と街に行く事になったんだが、お前も街で欲しい物があるって言ってただろ？　だからどうせなら誘おうと思ってな
仕事の方は大丈夫か？」

考輝にそう聞かれると鈴蘭は一瞬顔を輝かせるが、少し思案顔になる。

「仕事の方は大丈夫ですが……私が行ってもよろしいのですか？」

鈴蘭は少し申し訳なさそうに言う。

しかし考輝としては駄目な理由がない。と、言うよりも彼から誘っているので駄目なはずがない。

結局三人で街に行く事になった。

「畜生！　あの店絶対に詐欺だぜ！！　あんな馬にあんなクソ高い値段付けるなんて頭おかしいだろ！！」

洛陽の街の大通りのど真ん中で、玄鳥は叫んでいた。
その大きさは道の両端に露店を出している商人が様子を見るために身を乗り出す程だ。

「どぉどぉ」

「考輝様、それは馬を宥める時のやつですよ……」

考輝が宥める（？）がそれは意味をなさない。
むしろ怒りに油を注いでいる。

本人がニヒルな笑いを浮かべているあたり、それを分かっててやっているようだ。

「ったく、洛陽の街は沢山の物と商人が集まる替わり、詐欺やまがい物が多いから困るぜ！！」

「玄鳥さん……この場でそんな事は言わない方が……。周りの商人の人達の目が怖いですよぉ……」

鈴蘭の言う通り、先程まで彼女に集まっていた視線が鋭くなった。
商人が集まるこの大通りであんな事を言えば当然だろう。

「……この苛立ちを発散出来るいい場所はねぇかなぁ？」

しかし玄鳥がそんな事を言いながら辺りを見渡すと、どの商人も揃って目線を逸らす。

流石世渡りが上手い商人と言うべきか、彼女に力で敵わない事くらい悟ったようだ。

「……頼むから暴れたいからってチンピラに喧嘩売るなよ？」

「大丈夫。もうそんな事やらねぇよ」

考輝が心配そうに尋ねると、玄鳥は笑って否定する。

目が微妙に泳いでいて、漠然と不安を感じるが。

（『もう』って事は昔はやってたんですね……）

思った事を言うとまた玄鳥の機嫌が悪くなると思った、鈴蘭はその言葉は心の内に留める事にした。

「人にぶつかったのにそんな態度はねぇんじゃねぇか！！　慰謝料出せやぁ！！！」

「何よ！！　少し肩が掠っただけじゃない！！」

ちょうどその時だった。

裏路地の方からこんな怒鳴り声が聞こえて来たのは。

その声にピクリと反応した玄鳥は、待ってましたと言わんばかりの笑みを浮かべ、声が聞こえた路地に向かって駆け出す。

「揉め事か！　なら俺が仲裁に入ってやるぜ！！　あくまでも人助けとして」

「嘘つけ！　ただお前が八つ当たりで暴れたいだけだろ！！」

玄鳥の真意を読み取った考輝は大声で制止するが、彼女は聞こえない振りをして走り去る。

そして意気揚々と裏路地に入って行ってしまった。

それを見た考輝は焦り始める。

ここは洛陽。漢の都で朝廷がある街だ。

下手に騒ぎを起こして朝廷に目をつけられるのは義勇軍である彼等にとってはかなりまずい。

大将軍の何進の後ろ盾が有るとはいえそれは非公式の物。

しかし彼は権力を何進と二分する宦官とは敵対するような事ばかりしている。　そこまで考えたところで、考輝は全身から嫌な汗が出てきた。

そして玄鳥を止めるために彼も裏路地へ駆け出す。

「鈴蘭、あいつを止めるぞ！！　誰か殺す前に！！」

「ええ？！　ほっといたら誰か殺しちゃうんですか！？」

「こっちはあんたがぶつかった性で、腕の骨が折れて困ってるんだ！！　つべこべ言わず慰謝料だせや！！」

その頃裏路地では、二人の少女が数人の明らかにチンピラという風貌の男に囲まれている。

男達はナイフを持っている上、体格も良い。

対して少女達は丸腰で、お世辞にも強そうには見えない。
一人は水色の縮れた髪をしていて、いかにも気が弱そうだ。
もう一人は緑の髪に眼鏡をかけ、つり目は気の強そうな印象を与える。

そんな真逆な二人だが、服装は二人とも簡単な作りの物を着ている。

しかし材質はかなり良い物を使っているようで、色合いが鮮やかだ。
きっと結構金を持っているのだろう。

もしかしたらチンピラ達はそれを見越して彼女達に言い掛かりをつけているのかもしれない。

「女と軽く掠ったぐらいで骨が折れるなんてよほど脆い骨だったのね！！　この貧弱野郎！！」

眼鏡の少女が相手はナイフを持っているというのに怖じけずに怒鳴り返す。
見た目通り気が強いようだ。

「え、詠ちゃん……余り刺激しない方が――」

もう一人の少女が弱々しい声で眼鏡の少女に話し掛けるがもう遅い。

その時には男は既に顔を真っ赤にさせ、ナイフを振り上げていた。

「この野郎！！　こっちが下手に出ればいい気になりやがって！！！」

さっきの会話の一体どこで下手に出たのか不明だが、男は眼鏡の少女の言葉に腹を立てたようだ。

逆ギレみたいなものだが。

「っ！！」

「くっ！！」

水色の少女はそれを見て覚悟を決めたように目をつぶり、眼鏡の少女は水色の少女を庇うように前に出る。

「うおらっ！！」

「ぶへぇ！」

しかし男がナイフを振り下ろす前に、いきなり現れた黒い手ぬぐいを巻いた女性は男の顔面を殴り飛ばした。

その時の彼女の表情は清々としていた。

周りはと言うと、いきなりの事で呆然としていて皆固まっている。

もちろん少女達も。

「寄ってたかってか弱い少女を虐めるなんて言語道断！！　天が許してもこの飛燕、張燕様が許さねぇぜ！！」

そしてそんな空気の中、玄鳥は高らかに名乗りを上げた。

それに反応したように、周りはハッとする。

殴り飛ばされた男はまだ困惑しながらも玄鳥に文句を言い始める。

「な、何なんだてめぇは！！　いきなり何しやが――」

「うるせぇ！　黙って殴られてろ！！」

「――ヘブッ！！」

しかし男が言い終える前に玄鳥が再び殴り飛ばす。
男は何度か地面を転がっ後、痙攣をしながら動かない。
どうやら気絶したようだ。

その行動を見て男達は一本引く。
自分達では勝てない上に、話しも通じる相手でないと分かったのだろう。

「……今日はいろいろと上手く行かなくてイライラが溜まっているから――本気で行くぜ？」

玄鳥はそう言い終わると次々とチンピラに殴り掛かる。

もはやそれは喧嘩ではなく蹂躙だ。
ナイフを持って数人がかりとは言え、それだけで彼女を抑えられる訳がない。
男達が逃げ出し始めるまで数分もかからなかった。

「ヒィーーー！！　逃げろぉ！！」

「ば、化け物だーー！！」

「ギャアア！！　本当に骨が折れた！！！」

男達は口々にそう言いながら、ナイフも放って逃げ出して行く。

だが、彼女に逃がす気はないようだ。
後を追うために走り始める。

「逃がすか！！」

「逃がせよ！！」

「痛てっ！？」

しかし走り出した直後、いつの間に現れたのか考輝が玄鳥の頭をひっぱたく。
なかなか痛かったのか、玄鳥はその場にうめき声を出しながらしゃがみ込む。

「って、何しやがるんだ能面野郎！！　痛ぇじゃねぇか！！」　しかし直ぐに立ち上がり、自分の頭を殴った考輝に文句を言い始める。

「黙れ！　あのままほっといたら何仕出かすか分からないだろ！！
これ以上やってたら確実に死者が出てたぞ！！」

だが考輝も必死だ。
こんな事で今までの苦労が水の泡になるなど堪ったものでない。

「……流石にそれはない」

「何だ今の長い間！！　大体お前はいつも問題ばかりお起し――」

結局二人で口論になってしまった。

置いてきぼりなのは助けられた二人の少女である。
いきなり現れた女性に助けられたと思ったら、これまたいきなり現れた男と喧嘩を始めた。

状況が理解出来なくて当然だろう。

「月……これって助かったでいいのよね？」

「う、うん！　……とりあえずお礼言わないと――」

状況はよく分からないが、助けられた事には変わらない。
なので一先ずお礼を言おうとした時、辺りが騒がしくなり始めた。

「――ゆ、月様ーー！！　よくぞご無事で！！」

「あ、月ちゃんに詠！！　やっと見つけた！」

少し離れた所から、戦斧を持った銀髪の女性と、頭に赤いカチューシャを付けた少女が二人の元に走って来た。

そしてどちらの少女も彼女達と面識があるらしく、月と呼ばれた少女は安心したように笑顔になる。

「華雄に乱（ラン）！　一体どうして此処に？　それに仕事はどうしたのよ？」

詠と呼ばれた少女は驚いた顔をする。

お忍びで街に出ていたため、誰にも場所は言っていない。
しかも彼女達は仕事が休みになっている訳でもない。
だから彼女達が現れた事に驚愕を隠せなかった。

「……別に今はそんな事いいじゃない？　それであそこで喧嘩している二人は？」

カチューシャの少女は話しを逸らす為か、考輝達の方を指差す。

「そうだ！　二人が心配で仕事を部下に押し付けた訳ではないから安心しろ！！」

「……」

しかし銀髪の女性の一言にカチューシャを付けた少女はあちゃー、と額に手をやる。

眼鏡の少女はすっと目が細くなったが、銀髪の女性は対して気にしていない。

むしろ気付いていない。

少しして無駄だと気付いたのか、少女はため息をつく。

「……まぁいいわ。その事に関しては後で話しましょう。

それからあの二人は一応助けてくれたんだけど――って、ちょっと月！？　あんまり近づいちゃ駄目よ！！」

三人が話している間に、月と呼ばれている少女は考輝達の方に近づいていた。

胸倉掴み合って今にも殴り合いをしそうな奴らに近づくのは危険だと思った眼鏡の少女は声を上げるが、構わず少女は進む。

そしてある程度近づくと二人に話しかけた。

「えっと……助けてくれて有り難うございました」　少女は深々くきちんと頭を下げる。

歳若くとも、しっかりと礼儀が身に付いているようだ。

流石にそんな中で殴り合いをする訳にもいかないので、考輝と玄鳥は互いに手を離す。

「……まぁ、そんな礼を言われる程の事じゃねぇよ」

玄鳥はバツが悪いといった感じで頬をかく。

目的が目的だし当然だろう。

「この馬鹿がいろいろ迷惑かけてすまない。えっと――」

「そんな迷惑なんかじゃありませんよ。助けて頂いて本当に感謝してます。

それから私は董卓、字は仲穎です」

少女、董卓はニッコリと笑いながら自己紹介をする。

（……は？）

しかし考輝は内心全く笑えなかった。

「ふぇぇ～……。二人とも足速いですよぉ～。一体何処にいるんですか～」

その頃鈴蘭は一人路地をさ迷っていた。

暴君と話して（前書き）

しゅ、宿題が終わらない……。

夏休みだから更新スピード上げられるかと思ったら全然出来ませんでした。

すみません。

暴君と話して

考輝は茶屋の中にいた。

その茶屋は以前彼がある少女と待ち合わせに使ったもので、今も相変わらず混んでいる。

そんな茶屋の一角に、考輝は四人の女性と座っていた。

「わぁ！　このお団子とっても美味しいです！」

考輝の前に座っている水色の髪の少女、董卓が感嘆の声を上げる。

その曇りない笑顔を見れば彼女の言葉が決して世辞でない事が分かるだろう。

「へぇ……結構美味しいわね」

董卓の隣の席には眼鏡をかけた少女、賈駆が座っている。

彼女は意外そうな顔で団子を口に運ぶ。

この店は考輝が紹介した店なのだが、男の彼には余り期待はしていなかったようだが、その分驚きも大きいようだ。

「いやー、この甘さの加減が何とも」
そして賈駆と董卓を挟むようにカチューシャを付けた細目の少女、李儒が座っている。
彼女は細目を更に細めながらぱくぱくと団子を食べている。

そんな董卓軍の主と、二人の軍師が座っていた。
実はさっきまで武官の華雄もいたのだが、仕事の関係で先に帰されている。
つまり董卓軍の幹部とも言える面々が先程までこの茶屋に集結していた訳だ。

「確かにここの団子は美味いよな。俺も紹介されて初めて食った時はなかなか衝撃的だった」
考輝はお茶を飲みながら初めて食べた時の事を思い出す。
実は彼はここの団子にはまり店の常連になっていたりする。

「紹介されたって事はやっぱりお前が自分でこの店見付けた訳じゃ

ないんだな。お前甘味と縁がなさそうだし」

考輝の隣には玄鳥が座り、口一杯に団子を頬張り口をもぐもぐさせている。

更に両手にも団子を沢山持ち、彼女の前には山のような団子が置かれている。

まだまだ食べる気満々のようだ。

「……とりあえずお前はもう少し自重しろ」

考輝は軽くため息をつく。

この団子の代金は助けてもらったお礼という事で、全て董卓達が持つ事になっているが、考輝は素直に受け取れなかった。

なんせ玄鳥が彼女達を助けた理由がただ暴れたかったというものだからだ。

そんなのでお礼を貰ってしまえば負い目もあるだろう。

そのため彼は団子を二本とお茶しか頼んでいなかった。

「いいじゃねぇか。向こうが奢ってくれるって言ってんだし。全く能面はそこんとこが駄目だな」

「……騎馬鹿のお前に遠慮とか言う事自体無駄だったみたいだな」

「「……あぁ？」」

二人は座ったままいがみ合う。
ちなみに考輝が言った騎馬鹿と騎馬馬鹿の略称。

「わ、私達の事は大丈夫ですからどうぞ彰義さんもどんどん食べて下さい」

そんな二人の間に董卓が割って入る。
少しおどおどしているが、喧嘩を止める為に勇気を出したようだ。
その姿はとても健気だ。

統：５２　武：４５　知：６７　政：７２　魅：９７
剣：Ｂ　槍：Ｃ　戟：Ｃ　弓：Ａ　騎馬：Ａ　兵器：Ｃ　水軍：Ｃ
特技…仁者（反乱や謀反が起きにくい）

（……これがあの暴君董卓のステータス、ねぇ……。

特技を見ても暴君の要素なんか全くないし、普通に心優しい少女だよな）

考輝は彼女が『あの』董卓だと信じられなかった。

傲慢、強欲、残虐、無慈悲。

これが歴史を学んだ上で考輝が董卓に抱いたイメージだ。

しかし目の前の董卓と名乗る少女はどうだろうか？

礼儀正しく謙虚で優しく慈悲深い。

まだ会って間もないが、そんなイメージと真逆の印象を彼は持っていた。

更に彼が見たステータスでの特技は暴君とは程遠いもの。

彼はこの世界に来てからのイメージと人物のギャップのでかさに今までで一番驚いていた。

「ほら、本人もああ言ってるぜ」

玄鳥はここぞとばかりにドヤ顔を作る。

奢る本人にあんな事を言われれば強気にもなるだろう。

「それにお礼を遠慮するのはその人に対する侮辱行為でもあるのよ？　しっかり受け取った方がいいわ」

「お金の事なら心配する必要ないですよー。結構手持ちがありますから」

更に賈駆と李儒も声を合わせる。

流石にこんなに言われると考輝も弱い。

「……すみません、追加の注文を――」

結局彼は店員に追加の注文をした。

何も反論せず。

そんな彼の姿を見て、董卓はクスッと笑っていた。

「へぇ、じゃあ三人は幼なじみなのか」

玄鳥がお茶をすすりながら董卓に相槌を打つ。

流石に一言も話さずに団子を食べ続けるなど少し辛いものがある。
そのためいろいろと話している内にお互いの身の上の話しになっていた。

「はい。物心がつく前から三人でよく一緒に遊んでました」

董卓は喋りながらニコニコしている。
昔の事を話すのが余程楽しいのだろう。

「それでそのまま二人共董卓の軍師になったのか。しかもちゃんと努力して」

考輝は感心していた。
ステータスを見る事が出来る彼は、彼女達が決してコネなんかではなく、自分の力で軍師になった事が分かる。

きっと軍師になるためにかなり努力をしたのだろう。

統：７６　武：４８　知：９２　政：８５　魅：８７

剣：Ｃ　槍：Ａ　戟：Ｃ　弓：Ａ　騎馬：Ｂ　兵器：Ｂ　水軍：Ｃ

特技…反計（敵の計略を利用するのが得意）

これが賈駆のステータス。

統：６８　武：２６　知：９４　政：８７　魅：８３

剣：Ｃ　槍：Ｃ　戟：Ｃ　弓：Ｂ　騎馬：Ｂ　兵器：Ｂ　水軍：Ｃ

特技…明鏡（敵の計略を見破りやすい）

そしてこれが李儒のステータス。

これを見たらコネがどうとか言えなくなるだろう。

「そう言ってもらえると助かるわ。中にはいろいろ言ってくる連中もいるしね」

賈駆は言い終わると同時にため息を吐く。

やはり結構コネやらなんやら言われているのだろう。

「そうだよねー。詠は大好きな月ちゃんの側にいくてあんなに勉強したのに、文句を言われるのは筋違いだよ」

「そうそう。大好きな月の側に――って、それじゃあ私が百合みたいじゃない！！」

李儒の言葉に途中まで乗っかった賈駆だったが、途中で言葉の意味に気付き大声で反論する。

だが賈駆本人の表情を見ると満更でもなさそうだ。

「えー、違うの？　でも詠って昔から大きくなったら月ちゃんのお嫁さんに――」

「わーわーわーー！！！」

「――ムググッ」

流石にまずいと思ったのか賈駆が大声を出しながら李儒の側に行き、口をふさぐ。

よく見ると賈駆の顔は真っ赤だ。

「……思われているんだな」

「へぅ……はい……」

苦笑いをしながら玄鳥が問うと、董卓も顔を真っ赤にして頷く。
だが彼女に嫌がっている様子はない。
彼女も賈駆の事が好きなようだ。

「……って事は、賈駆と李儒にとっては董卓が戦う理由なんだな」
そう言う考輝の顔はいつもと同じ無表情だったが、少し優しい感じだった。
と言っても彼をよく知る人でないと分からないぐらいだが。

「プハッ！　……詠は言うまでもないですけど、私もそうですね。少し恥ずかしいですけど」
「……ちょっと。私は言うまでもないってどういう意味よ？」
賈駆から解放された李儒は、恥ずかしそうに頬をかきながら話す。
元の席に戻った賈駆から軽く睨まれているが、余り気になっていないようだ。
その証拠に「そのまんまの意味だよー」とケラケラ笑いながら返答する。
どうやらこんな光景は日常茶飯事のようだ。

「それじゃあ董卓はなんで戦っているんだ？」
玄鳥が店員にお茶のお代わりを貰いながら聞く。
どうやらとことん遠慮する気はないようだ。

「えっと、私ですか？　……上手く言えませんが、少しでも多くの人に幸せになって欲しいからです。
戦えば人は死ぬし、不幸になる人も沢山出ちゃうけど、戦わなかったらもっと多くの人が不幸になってしまいます。
だから私は今まで賊や異民族と戦ってきました」

董卓の目にはちゃんと覚悟が宿っている。
それは王として人を守るための覚悟。

彼女の話しを聞いている内に、考輝の中での董卓の暴君のイメージはなくなっていた。

「っ／／／　え、えっと張燕さんは何で戦っているんですか？」
「ん？　俺か？」
急に自分の言った事が恥ずかしくなったのか、董卓は耳まで赤く

なる。
そして慌てお茶を飲んでいる玄鳥に話しを振った。
「そうだな……前まで深く考えた事はなかったけど……今はこいつの夢のため……かな？」
玄鳥は照れ臭そうに顔を考輝から逸らしながら、横目で彼を見ていた。
この答えに喧嘩をしている所ぐらいしか見ていない董卓達は驚いたが、一番驚いているのは考輝だったりする。
彼は目を見開き、横目で見てくる彼女を見ていた。
「……意外だな。お前の事だから、ただ暴れたいだけなのかと思ったんだが」
考輝の夢とは最も効率よく乱世を終わらし、そして最も長く平和が続く体制を創る事。
つまり粗暴な彼女にも平和に対する思いがあるという事だ。
「お前は俺を何だと思っているんだよ……。俺だって平和がいいと思ってるんだぜ？」
玄鳥は少し睨みをきかす。

その表情は真剣そのもの。
どうやら本当に心の奥底からそう思っているようだ。

「――それに俺は元賊だから、いろいろ思う事もあるしな」

玄鳥は最後に付け足すようにボソリと呟く。

それは隣に座っている考輝でギリギリ聞こえるぐらい小さい声で、董卓達には全く届いていない。

そして考輝には聞こえていたが、彼はあえて聞こえていないフリをした。

「それであんたの夢って何なの？」

賈駆にそう問われると、考輝は少し考えてから答えた。

「乱世を終わらせる事だ。それも最も効率よく、そして最も長く平和が続く体制にしてな」

彼のこの言葉に董卓と賈駆は面食らう。

誰だってこんな大それた事を言われれば驚くだろう。

「……」

ただ、李儒は驚きもせずに無言で黙っている。

そして細目の奥の眼光を一瞬だけギラリと光らせた。

それは誰も気付かないような一瞬だったが、考輝はその一瞬を見逃さなかった。

「……それじゃあいつか戦う事になるかもしれませんねー」

そう言って李儒はケラケラと笑う。

喋り方や笑っている事から端から見れば冗談を言っているように見える。

しかし考輝にはそうは思えなかった。

「乱、そんな冗談笑えないわよ」

「出来れば戦わないようにしたものだぜ」

李儒の言葉を冗談と受けた賈駆はため息をつき、玄鳥は乾いた笑みを浮かべる。

一方、考輝と董卓は黙っていた。
そしてケラケラと笑っている李儒を見つめていた。

時は流れ、夕方になった。

時間も遅くなったので、おしゃべりもお開きになり、彼等は店を出た。

「本日は助けて頂き有り難うございました」

別れ際、董卓は礼を述べながら頭を下げる。
そして董卓の後ろにいる二人も頭を下げる。

「そんな気にする事ないって。人として当然の事やっただけだし」

そう言って玄鳥は笑うが、隣にいる考輝は何か言いたげな視線を送っている。
だが言うのは止めたようだ。

「……まぁいい。ともかくご馳走になった。俺達が洛陽にいる間はまた会うかもしれないが、その時はよろしく頼む」

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

董卓はニッコリ微笑む。
その表情は夕日が当たり輝いている。

そんな彼女の顔を見ながら考輝と玄鳥は三人と別れた。

「いやー、いい奴らだったな。たらふく食ったし。
……いずれあいつらとも戦うのかな……」

陣に帰る途中、玄鳥は少し暗かった。
表情はいつもと変わらないが、声のトーンに元気がない。

「……さぁな。どちらにせよ李儒には気をつけた方がいいかもしれん」

考輝の顔もいつもと変わらなかったが、少し表情が固い。
特に李儒について話している今は。

「李儒？　何でだ？」

「言葉にするのは難しいな……。ともかく直感的にあいつは危険だと感じた。それだけだ」

考輝にしては珍しく、歯切れが悪い感じだ。

それを聞き、玄鳥は顔をしかめる。
それは李儒をどうこう言っているからではなく、彼が直感的に、という言葉を使ったからだ。

考輝は基本的に打算で動く。
そのため勘やら運にいつもは全く頼らない。

だから玄鳥は何だか違和感を感じていた。

（まぁ、いくら考えたって、俺なんかにこいつの考えが分かり訳ないか）

玄鳥はそう納得し、余り深く考えないようにした。

「……それにしても何か忘れてるような……」

ちょうど考えていたため、玄鳥は考輝の呟きを聞く事はなかった。

「じゃあ僕達も帰ろっか」

「……うん」

「はいはーい」

その頃、董卓達も自らの陣に帰ろうとしていた。

しかし、若干董卓の足取りは重い。

「……いつか、彰義さん達とも戦う事になるのかな……」

董卓の顔に先程とは打って変わって陰がかかる。

会って一日とはいえ、知り合いと戦う事に抵抗があるのだろう。

そういう点で、彼女は人の上に立つ者としては優し過ぎるのかもしれない。

「大丈夫よ。あっちもそんな悪い人間じゃないみたいだし、もし戦う事になってもその時いろいろ考えましょう」

「そうだよー。だから月ちゃんは元気を出して前を向いていて。それだけで私も詠も頑張れるから」

「……うん！」

二人の励ましにより、再び董卓の顔に光りが戻って来る。

その事に気を取られたからだろうか。

李儒が冷たい笑みを浮かべながら呟いた事には誰も気付かなかった。

「――それに、あいつらのせいで月ちゃんが前を向けなくなるなら私が消しておく。

だから月ちゃんは安心して前を向いていて」

その呟きは誰にも聞かれる事なく、どんどん暗くなる洛陽の路地に吸い込まれていった。

「……あっ！！」

「うおっ！　いきなりどうした、能面？」

陣を目前にして、いきなり考輝が声を上げた。

玄鳥が驚きながらも訳を聞くと、彼の顔が珍しく青ざめている。

「忘れてた……」

「何か買う物でもあったのか？」

「いや、置いてきちまった……」

「？　……あ」

どうやら忘れた物に玄鳥も気付いたらしい。

アホみたいに口を開け、思わず声を出す。

「ふぇぇ〜〜……」

そんなやり取りをしている頃、洛陽の街の裏路地では着物を着た少女がさ迷っていた。

涙目で。

「考輝様も玄鳥さんも一体何処に行っちゃたんですか〜……。もう日が沈んじゃいますよ〜……」

そう言って、鈴蘭こと司馬朗は彰義軍の陣とは逆方向に歩いて行った。

結局彼女が考輝達に発見されたのは朝日が昇る直前だった。

休日を貰って（前書き）

いつもより少し早めに投稿。
理由は後書きにて。

ちなみに今回無駄なくらい長いです。

休日を貰って

彰義軍は洛陽の郊外にいた。

ここ数ヶ月で大きく成長して、兵も二千五百程になり練度も高い。

更に徐々にではあるが知名度も上がっていて、賊や荒くれ者達の間ではかなり恐れられている。

火計を多く用いたためか、敵対すれば燃やされるという印象がかなり広まっているらしい。

だが洛陽の街に住んでいる者からの印象はわりと良い。そのためそこそこ有名になっていた。

朝廷の方も何進が非公式とはいえ後ろ盾になっているので、摩擦やら何やらは起こっていない。

しかし全く問題が無い訳でもなく、一部を除き諸侯からの視線は冷たい。

いきなり現れた義勇軍にすぎない軍が一気に大きくなったとなれば、周りから見れば面白くないだろう。

それに配下への誘いを断られたとなれば尚更だ。

そして朝廷自体とは問題が無いとは言え、宦官の方はかなり問題だった。

何進からの優遇がばれた訳ではないが、既に宦官の何人には疑われている。

そうでなくても麗羽の救出、人身売買の一斉摘発の協力など敵対するような事ばかりしている。

今は何進の後ろ盾があるので大丈夫だが、もし無くなれば途端に洛陽には居ずらくなるだろう。

そんな状況の中、彰義軍で緊急の軍議が行われる事になった。

それは鈴蘭が召集したもので、上は軍のトップの考輝から下は副将の二人までと、きわめて規模の大きなもの。

つまり、かなりの大きな問題を扱うという事だ。

日が落ち、彰義軍の兵士達も調練を終え、夕食の支度をし始める。
いつも通りその光景は賑やかなものだったが、全員内心不安を抱えていた。

「最近、考輝様が働きすぎだと思うんです」

その頃陣幕では、鈴蘭の発言により軍議の場に変な空気が流れていた。
殆どの者が重要な話だと思って聞いていたのに、いきなりこんな事を言われればこうもなるだろう。

ちなみに今の人の配置は考輝が一段高い陣幕の端に座っていて、彼の前の左右に人が並んで座っている。

そして鈴蘭は考輝から見て右側の一番近い所にいて、発言をしたため立っていた。

そんな軍議の場は何だか微妙な空気になっていたが、それはしだいに変わっていく。

何故なら殆どの者が考輝の仕事の量の異常さに気付いたからだ。

（……そういえば隊長は文官としての仕事は元より――）

（武官としての仕事もしているの。しかも――）

（夜は隠密の指導もしとる……）

（朝から晩まで働き通しッスね……。あれ？　というより大将って何時寝てるんスか？）

（……不眠不休？）

こんな感じで全員の思考は一致していた。

（……俺ってそんなに働いているか？）

考輝本人を除いて。

「……皆さん理解出来ましたか？　考輝様の異常な仕事量に」

鈴蘭は空気が変わり、全員が納得したであろうタイミングを見計らって再び話し始める。

今度は別に変な空気にならず、全員が納得したように頷く。

考輝本人を除いて。

「という事で、急ではありますが明日一日を考輝様の休日にします。異論は無いですね？」

もちろん鈴蘭の案に反対する者はいない。

一人だけ顔をしかめているが。

「……別にお前が休めと言うなら文句は言わない。だが俺が抜けた分の仕事は誰がやるんだ？」

『う……』

考輝のこの言葉に殆どの者が答えに詰まる。

彼の異常な仕事量を考えた後となれば、進んでやろうとする者はいないだろう。

「それなら俺に任せとけ」

そんな中、軍議が始まってから今までずっと黙っていた玄鳥が名乗りを上げる。

「流石に全部やるのは無理だろうが、やらなきゃまずい書類ぐらいは片付けておく。だから一日くらい休んでろ」

玄鳥はそう言うと息を軽く吐きながら肩を落とす。

何故だが考輝はそんな玄鳥が頼もしく見え、一日くらい任せてみるか、という考えが浮かんでいた。

「え？　玄鳥さんって書類仕事出来たの？」

「そんな……隊長の前やからって無理をせんでええんやで……」

「よーし、沙和に真桜。後で陣幕の裏に来いボコしてやる」

玄鳥は拳をパキパキ鳴らしながら二人を睨む。
すると二人は視線を外しわざとらしく口笛を吹く。

（……やっぱり俺は休まない方がいいんじゃないか？）

考輝は胸に一途の不安があったが結局彼は休む事になった。
そして考輝の分の仕事は玄鳥がやる事になり、鈴蘭と凪がそのサポートをする事に決まる。

こうして軍議は終了した。

「……暇だ」

次の日、考輝は一人で洛陽の街をさ迷っていた。
説明するまでもないが、彼はいきなり与えられた休日を持て余している。
彼には特にこれといった趣味はないため、本当にやる事がない。

「しかも鍛練も禁止ってどういう事だよ……。俺別にワーカホリックじゃないんだけどな」

しかも彼が暇があれば行っていた鍛練も禁止されている。
彼はぶつくさ文句を言いながら洛陽の街を歩いていた。

ちなみに彼の一日の平均仕事時間は鍛練も合わせて約１９時間程。
充分過ぎるくらいワーカホリックである。

「……とりあえず本屋にでも行くか」

彼は一応の目標を決め、歩く方向を変えた。

「お、彰義の旦那じゃないですか！　今日はどんな本をお探しで？」

考輝が本屋の前まで来ると、ちょうど店前で客の呼び込みをしていた本屋の主人に声をかけられた。

実は彼は結構大量の本を買っているので、この店のお得意さんだったりする。

「そうだな……何か暇を潰せる本が欲しい」

考輝は少し考えてから答える。

兵法書や儒学の本は既にだいたい読みあさっているので、もうこの店にはめぼしい物がない。

そのためこんなおおざっぱな答えになっていた。

「それなら……少しお待ちくだせい」

主人はそう言うと店の中に入って行く。

店の中には本棚がいくつか有り、これでもかと言わんばかりに本が並んでいる。

下手をすれば千冊くらいは軽く越えているのではないだろうか？

それはこの時代の本屋の平均より全然高い。

その中から主人は目当ての本を探し出すと、数冊抱えて考輝の元へ戻って来た。

「こんなんはどうです？」

「……」

考輝は差し出された本を無言で一冊受け取り、パラパラと頁をめくる。

だが彼は数頁めくった所で本を閉じ、主人の頭に拳を降り落ろす。

「あいた！！」

「……これ艶本じゃねぇか……」

考輝は目を細めながら主人に文句を言う。

ちなみに艶本とは男女の営みを……まぁエロ本である。

「そうですけど……何か問題でも？　旦那だってこういうの好きでしょう？」

主人は頭を摩りながら何故頭を叩かれたのか分からないような顔をする。

彼とてこれが良かれと思い選んだのだ。

「……俺が今求めているのはこういうのじゃないんだ」

「……は！　実は旦那こう見えて男色なん――あいた！！」

主人が天下の往来で変な事を口走りそうだったので、考輝が再び拳を降り下ろす。

言うまでもないが男色とはホモの事だ。

（……やべぇ……最悪な思い出を思い出しちまった……）

考輝は拳を降り下ろしながら、自身のトラウマを思い出していた。

おさげに露出の高い水着、そしてみなぎる筋肉。

『ぶるらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

彼は思い出しただけで吐き気を催していた。

「まいどありー！」

結局考輝は本を数冊買って本屋を跡にした。
もちろん艶本は買っていない。

本を選んでいるのに時間がかかり、太陽は既に真上に来ている。
時間的にもお腹の具合的にももう昼なので、彼は近くにあった点心の屋台に向かう。

それなりに人が並んでいるが、これから新しい店を探すのも面倒なので彼は少し悩みながらも並んだ。

「あれ？　あれって考輝君？」

「ん？」

並んで少しすると、考輝は後ろから聞き覚えのある声に声をかけられる。

彼は咄嗟に振り向くと、そこには見知った顔が二つ程あった。

「やっぱり考輝君だったわね。久しぶり♪」

「……久しぶり……」

ちょうど古万こと丁原に、恋こと呂布が彼の後ろに並ぶところだった。

どうやら買い物の途中のようで、二人ともいくつか荷物を持っている。

恋の荷物は食べ物ばかりだが。

「……お久しぶりです。二人も点心が目当てですか？　……まぁ聞くまでもないですけど」

考輝は苦笑いをしながら恋の方を見る。

昼時に、いくら既に食べているとはいえ、恋が点心の店の前に来る理由など一つしかない。

「……？」

当の本人は何故見られているか分からずに首を傾げているが。

「まぁ察している通りよ。恋ちゃんがこの屋台の肉まん大好きだから、街に来ると必ずここに来るのよね」

古万も困ったように苦笑いを浮かべる。

しかし本心から困っている感じではなさそうだ。

「……肉まん……美味しい……」

恋がともかく主張した方が良いと思ったのか、呟くように言う。

余り表情の変化はないが、心なしか嬉しそうだ。

それほどここの肉まんが好きなのだろう。

「……本当に恋ちゃんってここの肉まん好きよね」

古万はそれを心底ほほ笑ましい顔で聞いていた。

「へい、らっしゃい！　何にします？」

その後雑談などをしながら並んでいると、いつの間にか考輝の番になっていた。

屋台の男は威勢よく考輝に注文を聞く。

「……肉まんを五つ頼む」

考輝は少し間を開けてから肉まんを頼む。

大食いの恋の大好物と言われて興味のでないはずがない。

「あいよ！　――お、兄ちゃん運がいいね！！　ちょうど五つで今日の分の肉まんおしまいだ！」

屋台の男はそう言って笑いながら肉まんの用意をする。

「……」

確かに運の良い事だ。

しかし考輝は素直に喜べない。

なんせ『あの』恋があれだけ大好物だと言っていた物が直前で売り切れたのだ。

しかも自分が買った事によって。

「……（じー）」

後ろを振り返ると、案の定恋が考輝を見詰めていた。
何か言いたげな視線と共に。

（……これってデジャヴュ？　だが今度は負けんぞ）

考輝は彼女と初めて会った時の事を思い出す。
そしてそれと同時にもうあげない決意を固める。

彼だって腹が減っているのだ。
そうそう上げる訳にはいかない。

「……ダメ？」

しかし、そう言って涙目になりながらもの悲しい顔をする恋を見て、彼の中の決意は呆気なく崩れ去った。

「……ありがとう……」

「どう致しまして……」

数分後、がっくりと肩を落とす考輝の前に、肉まんを美味しそうに頬張っている恋の姿があった。

結局彼は負けたのだ。

いろいろなものに。

「ごめんなさいね。考輝君だってお腹が空いていたのに……」

古万は申し訳ないと言わんばかりにため息をつく。

「……まぁしょうがないですよ。俺だって耐えられなかったんですし。

――それにあの顔を見せられちゃ文句も有りませんよ」

考輝はそれに対して苦笑いをしながら返す。

そして彼は恋の方を指差す。

「……」

恋は無言で肉まんをそれは大事そうに両手で持ち、もぐもぐと肉まんを食べている。

その姿は小動物を連想させ、見ていてとても和む。

道行く人ですら足を止め、和んでいる人がいるくらいだ。

ただ口の周りには肉まんのせいでとても汚れているが。

「恋ちゃん……口の周りが汚れているわよ？」

「ん～～……」

それを見かねた古万が懐からハンカチのような物を取り出し、恋の口を拭く。

恋もそれに合わせて食べるのを中断し、拭きやすいように顎を前に出す。

その姿を見ると、まるで本当の親子のように見える。

「……」

そんな二人の姿を見ながら、考輝は無言で目を細めていた。

その表情は少し険しい。

そんな顔をして何を考えているのかと言うと、史実においての丁原と呂布の関係について考えていた。

（……史実では、呂布は金銀財宝に目が眩み、義父であった丁原を殺して董卓に寝返っている。

そしてこの世界でも親子みたいな感じだ。義父ではなくて義母だがな。

……だが俺には恋が古万さんを裏切るようには見えない……）

この世界に来てから、考輝は様々な有名な女体化した武将に出会ってきた。

その中には曹操のようにイメージ通りの中身をした者もいたが、董卓のように予想からかなり掛け離れた者もいる。

ならば『恋』が史実の呂布のように裏切らないという事も有り得る。

むしろ考輝にはその可能性の方が高いようにも思われた。

（……ともかく、古万さんの身に何か危険が及ぶならば、何とか助けたいものだ。是か非でもな）

考輝は二人の姿を見ながらひそかにそんな事を考えていた。

彼は古万には数え切れない程の恩があり、人生の先輩として、そして一軍を率いる者として尊敬もしている。

だから柄にもなくそんな事を考えていた。

「……美味しかった……」

「じゃあね、考輝君。今度会った時は何か御馳走するわ」

「……期待してますよ？　それじゃあまた今度」

あの後、少し一緒に店を回ってから考輝は二人と別れた。

考輝が奢る事が多かったため、彼の財布はなかなかピンチだが、それなりにリラックス出来たので良しとする。

……と言うよりも、そう考えておかないと彼はやってられなかった。

「……帰るか」

まだ日暮れまで時間はあるが、彼は自身の陣に向かい始める。

後の時間は買ったばかりの本を読んで過ごすつもりなのだろう。

「あらん？　そこにいるのは……」

彼が陣に向かって歩を進め始めた直後、左側から（彼にとっては）身の毛のよだつような声が聞こえてきた。

「……」

考輝はそっち側を見ないようにしながら、聞こえないフリをして歩き続ける。

しかし、声の主が彼の前に回り込むスピードの方が速い。

「やっぱり彰義ちゃんじゃない！　お久しぶりねぇん♪」

一言で言えば筋肉ダルマ、二字で言えば化物（ゲテモノ）、考輝的に言えば天敵（ウマ）。

そんな自称漢女の貂蝉が現れた。

相変わらず危険な水着を付け、筋肉ムキムキだ。

「あ、人違いです。それじゃ」

「ちょっとちょっとちょっとちょっとおぉぉ！！！」

考輝はすかさず他人のフリをしてこの場を去ろうとしたが貂蝉がそれを許さない。

再び回り込まれてしまう。

「何よ！！　冷たいわねぇん！！
……はっ！　もしかしてこれってツンデレ？　今流行りのツンデレなのぉん？」

それを聞いて考輝はあからさまに舌打ちをする。
どんなに無視しても無駄だと悟ったようだ。

「うるせぇ、お前と関わりたくなかっただけだ。それで一体何の用だ？
『特に用は有りません』という言葉を用いて十字以内で示せ。なお句読点も一字に入る」

「何それ！？　何でそんなに制約受けなきゃいけないのよぉん？！
しかもそれ条件だけで文字数一杯になるじゃない！！！」

考輝の問い掛けに貂蝉は大声で返すが、それによって周りから注目を集めてしまう。
しかも貂蝉はかなりの巨体なので尚更だ。

流石にこんな天下の往来でこんな奴と関わりを持っている、と周りから思われたくなかった考輝は渋々普通に話しを聞く事にする。

本当に渋々に。

「で、実際のところは何のようだ」
「全く素直じゃないわねぇ……。始めからそうやって聞けばいいのに。
それで用は貴方が私の店の前を通ったから呼び込みしようとしただけよん」
「店？」
考輝が貂蝉が指差す方を見ると、派手な看板を付けた、周りとは雰囲気がかなり違う、大きめな建物があった。
なお、看板には『漢女の広場』と書かれていた。

「……それで何で無理矢理連れ込んだ……」
「ちょうど開演時間だったからよん。それからお代はいらないわ。この前のお礼よん♪」
「……」
そして考輝は貂蝉にその怪しげな店に連れ込まれていた。
武力２００の者に考輝が力で勝てるはずがない。

もちろん隙があれば彼は逃げる気満々だ。

ちなみに『漢女の広場』とは踊りを見せる店らしい。
店内に入ると、いきなり大きな広場になっている。
窓は少なく、まだ昼間だと言うのに薄暗い。
中央には大きなステージがあり、そこで踊りを披露するのだろう。
ちなみに店名からも分かるように踊るのは全員漢女だ。

だと言うのに店内は観客で混み合っている。
明らかにそっち系の人もいるが、意外にも女性も多い。
もちろんいたって普通の女性だ。

「貂蝉さん！　大変です！！」
「あらん？　そんなに慌ててどうしたの？」
考輝が逃げる隙を伺っていると、店のスタッフらしき普通の女性が駆け寄って来た。

何故スタッフだと分かるのかと言うと、漢女と至る所に書かれた羽織りを着ているからだ。

その女性はかなり慌てていて、かなりの緊急事態のようだ。

「実は今日踊る予定の子が急な発熱で来れなくなったと……」

「な、何ですってぇぇぇぇ！！！！」

貂蝉が獣のような咆哮を上げる。

それほどヤバイ状態らしい。

「く……今日の踊りは五人全員揃わないといけないのに……」

「でも休んだのは余り動きがない子だったから、代役を立てても行けます！」

「そうねぇん……何処かにいい代役は――あらん？」

「……は？」

瞬間、貂蝉とスタッフの女性が同時に考輝を見る。

嫌な予感がして、考輝は一歩後ろに後ずさった。

「あらためて見ると、やっぱり彰義ちゃんって美形よねぇん……」

「それに、良い感じに身体も引き締まってます……」

貂蝉と女性がじりじりと考輝に迫って行き、考輝もじりじりと後ずさって行く。

彼の顔はまだ無表情を保っているが、顔はもうかなり青い。

「……褒め言葉として受け取っておこう。

――それで、お前は一体何を持っているんだ？」

「踊り子の衣装よん」

いつの間にか貂蝉が服を持っていて、それを見せつけるかのように広げる。

もちろん普通の服なんかではなく、タイツのような物で出来ていて、もし着ればかなりピッチピチになるだろう。

しかも前面の中央は際どい部分まで縦に裂けていて、靴紐のような感じで止められているため、肌がもろ見える。

一言で言えば武装〇金のパピ〇ンが着ているようなあれだ。
流石にマスクは無いようだが。

「……それで、衣装なんか持って、何をするつもりだ？」
考輝は喋りながらもどんどん後ろに下がって行く。

「それはもちろん衣装は――――」
そしてとうとう背中が壁にぶつかってしまう。
それに驚き、後ろを確認してまた前を向くと――。

「――着せるために在るのよん♪」

一面肉の壁になっていた。

「ぎぃやぁぁぁ

玄鳥の言葉に隣に座っていた鈴蘭が同意する。

彼女とそのまた隣に座っている凪は自身の仕事の合間に玄鳥を手伝っていた。

そうでもしなければ武官の玄鳥では終わらせられなかっただろう。

「でも玄鳥さんのおかげでそれが分かったから良かったじゃないですか。

最初に玄鳥さんが気付いたって聞いた時には驚きましたけど」

凪が書簡を集めながら玄鳥を見る。

「まぁ、たまたまだ。たまたま」

玄鳥はそう言うと、小っ恥ずかしいのか凪から視線を外す。

実は考輝のオーバーワークに最初に気付いたのは玄鳥だった。

このままだと身体を壊すと感づいた彼女は彼を休ませようと考えたが、彼女は口下手だ。

それに上手く説得出来ず考輝と喧嘩をする可能性も高い。

なので鈴蘭と相談し、このような形になった。

「あ、凪さん、悪いですけど考輝様の陣幕まで書簡を運んでおいてくれませんか？　後片付けは私達がしておきますから」

「はい。分かりました」

凪は鈴蘭に促され、玄鳥が処理した書簡を運び始める。

そして凪が書簡を持って陣幕から出て行ったのを確認してから、玄鳥に声をかけた。

「……意外に照れ屋さんなんですね？」

「フン！　そんなんじゃねぇよ！！」

鈴蘭に言われて玄鳥は顔を赤くしながらそっぽを向く。

そんな玄鳥の反応を見て、鈴蘭は小さくクスリと笑った。

「玄鳥さん！　鈴蘭殿！　大変です！！」

二人が後片付けを終え、少し休憩していると、凪が青ざめながら陣幕に駆け込んで来た。

「ど、どうしたんですか？」

そるにただならぬものを感じた鈴蘭は少し動揺しながらも用件を聞く。

玄鳥に至っては既に己の得物を持ち立ち上がっている。

「そ、それが隊長の陣幕に行ったら、もう隊長が帰って来ていたんですけど……何だか様子がおかしくて……」

凪はなんだか歯切れの悪い感じで説明をする。

どうやら彼女自身どうやって説明したら良いか分からないようだ。

「と、とりあえず来てください！！　ともかく様子が変なんです！！」

結局彼女は直接見てもらった方が早いと判断したようだ。
二人は少し首を傾げながら凪の後について行った。

「えぇ？！　ちょ、考輝！？　ど、どうした！！？」

「考輝様！？」

考輝の陣幕に着いて彼女達が見たものは、陣幕の隅に体育座りでうずくまり、壊れたように薄く笑っている考輝の姿だった。

きっと普段の彼を良く知らない者でも様子がおかしいと分かるだろう。

「おい！！　一体どうしたんだ！！　街で一体何があったんだよ！！！」

玄鳥が叫びながら考輝の肩を掴み、揺するが反応がない。
ただ首がグワングワン揺れるだけである。

「な、凪さん！　医者をお願いします！！」

「は、はい！！」

それを見て、鈴蘭は何かの病気と判断したのか凪に医者を呼びに行かせる。

凪もそれを受けて直ぐさま衛生兵がいる場所へ向かう。

「……げ……玄鳥……」

ちょうど凪が出て行った時だった、考輝が言葉を発した。

その様子を見て、玄鳥も鈴蘭も安堵の表情を浮かべるが、それも一瞬。

次の考輝の一言で再び場は混沌とする。

「……俺……今日、人として……いや……男として……大切な物を……失った……」

考輝はそれだけ言うと、首をガクリと垂らし動かなくなる。
念のため言っておくが息はしている。

「え、ちょっ……えっーーーー！！！！！」

そして玄鳥は叫び声を上げる。

「す、鈴蘭！　こ、こ、これって考輝が痴女にて、て、て、て、貞操を――――」

「それは無いと思います」

翌日、正気を取り戻した考輝がパワーアップキットのコマンドが増えているのを確認して、半日落ち込んでいたのはまた別の話。

余談だが、この日の漢女の広場の売上は通常より二割程高かったらしい。

休日を貰って（後書き）

宿題については前回触れましたが、夏休み開け一週間後にテストがあります。

……何このイジメ？

そのため今回から九月中頃まで更新が凄い不定期になります。
下手をすれば出来ないかもしれません。
本当にすみません。

ちなみに洛陽での話しは今回が最後です。
次話からやっと移動します。

洛陽を去って（前書き）

意外にも八月中に投稿出来ました。

今回時間が少し跳びます。

後半からかなりおかしい感じがしますが、ご容赦ください。
いつか修正するかもしれません。

洛陽を去って

朝廷は激しい争いの中にあった。

もちろん実際に戦っているのではなく、外戚と宦官による権力争いだ。

そしてその争いは徐々に大きくなりつつある。

考輝達が洛陽に来た頃、だいたい一年くらい前まではまだ水面下での争いで、表立ってはいなかった。

しかしここ数ヶ月で一気に争いが激化し、何人、いや何百人も人が死んでいる。

外戚の何進は、洛陽近くの港町を焼き払って皇帝や宦官達に無言の圧力をかけ、宦官の張譲は敵味方問わず、邪魔物を次々と暗殺している。

洛陽の街の空気は、いよいよ重苦しいものになり、朝廷はどんどん血生臭くなって行った。

そんな中でも彰義軍は徐々に勢力を拡大していく。

総兵力は三千を越し、何進の援助があるため軍備も揃っている。
将兵もどんどん育っていて、質も申し分ない。

もちろんそんな強大な軍は、どんな諸侯でも喉から手が出る程欲しい訳で、彰義軍はいろいろな所から勧誘されている。
ちなみに一番しつこいのは袁紹軍である。だいたい月一くらいのペースだ。

しかし考輝は誰からでも勧誘を蹴り、金を払えばその分働くという傭兵軍団のようなスタイルをとっていた。

そんな中、考輝の元へ一通の手紙が届く。

それは豫州の汝南太守の袁術からのものであった。
妙に上から目線の書き方の手紙であったが、要約すると仕事の依頼だった。
何でも各所で賊が暴れているので、討伐を手伝って欲しいという事だ。

考輝は最初この手紙を怪しんだ。
何せこんな遠くからの依頼は初めての上、袁術とは今まで接点がまるで無い。
だからどうにも裏があるような感じがしたのだ。

（……だが、そろそろ洛陽を出ても良い時期かもな……）
しかし考輝はこの依頼を受け、豫州へと向かう事にする。
その方が広い範囲で名声も上がるし、思わぬ人材に会えるかもと考えたからだ。

「――という訳で、俺達は洛陽を出て、豫州へと向かう」

そこで彼は直ぐさま軍議を開き、彰義軍の主要人物達の前でその事を告げる。

それにより軍議の場は一瞬騒がしくなるが、また直ぐに静かになる。

考輝の更なる言葉を待っているのだ。

「鈴蘭は兵糧や物資、凪達は兵達の準備を頼む。出発は五日後。他の者もそれまでに各自の準備をしろ」

そしてまた騒がしくなる。

もちろんどれも余計な話ではない。相談等必要な事だ。

「……そういえば、ウチらが洛陽に来てからもう一年近く経つんやなぁ……」

そのさなか、真桜がぼそりと呟く。

その呟きで、軍議の場は少しだけしんみりとした空気になる。

誰だって一年間同じ場所にいれば、思い出の一つや二つは出来るだろう。愛着が湧いても不思議でない。
考輝の場合トラウマも多そうだが。

「……一年前に村を出る時はこんな大きな軍になるなんて思わなかったの……」

「確かに……私達の環境はこの一年で本当に変わったな」

沙和と凪にいたっては、更に前の旗揚げの時を思い出しているようだ。

（……本当に変わったのはお前ら自身だがな）

そんな会話を聞いて、考輝は心の中で苦笑いを浮かべる。

楽進こと凪、李典こと真桜、于禁こと沙和。

この三人はただの村の義勇軍の指導者から、一軍を預かる立派な将となっていた。

統：７８　武：８６　知：６０　政：５８　魅：８５

剣：Ｂ　槍：Ａ　戟：Ｂ　弓：Ｂ　騎馬：Ａ　兵器：Ａ　水軍：Ｂ

特技…気術（気が扱える）

これが凪の現在のステータス。

武力がかなり高くなった彼女は、玄鳥には及ばないものも、相当なレベルの武官となっている。

統：８９　武：７６　知：７２　政：５３　魅：８５

剣：Ａ　槍：Ａ　戟：Ａ　弓：Ｂ　騎馬：Ｂ　兵器：Ｃ　水軍：Ｂ

特技…規律（部隊が混乱しにくい）

これが沙和の現在のステータス。

統率力が高く、いろんな兵装の部隊に対応出来る彼女はオールマイティな武官になっている。

統：７５　武：７８　知：８３　政：７２　魅：８５

剣：B　槍：A　戟：B　弓：B　騎馬：B　兵器：S　水軍：B

特技…発明（兵器等の発明期間が短くなる）

特技2…工神（兵器の破壊力が上がる）

これが真桜の現在のステータス。

やはり兵器関連が伸びた。更にパワーアップキットによって特技を増やし、兵器の使用能力も高まった。

このように三人とも将としては優秀なレベルだ。

もちろんパワーアップキットのおかげというのもある。

だが三人が元々持っていた才能による伸びの方が大きかった。

（……いつの間にかに立派になったな）

考輝は口に出した事こそ無いが、三人の努力を心の底から称賛していた。

「ではこれで軍議を終了する。出発は予定通り五日後。それまでに準備を終わらせろ」

『はっ！！』

こうして軍議は終了し、彰義軍は豫州へ向けての準備を始めた。

それから五日後、彰義軍が旅立つ日がやって来た。

出発するのはかなり朝早くで、まだ朝日も完全に昇りきっていない。

そのため辺りもまだ薄暗いが、その中を彰義軍の兵士達が動き回っている。

そんな朝早くだというのに、彰義軍の見送りに来る者はそれなりにいた。

時間帯が早いため、野次馬のような者達はいなく、関係が深かった者達ばかりだ。

武器や兵糧を扱っている商人達を始め、行きつけの酒場や茶屋の従業員までいる。

そんな見送りに来ている者の中に一人、とても騒がしい者がいた。

「考輝様ぁぁ！　なんで美羽さんなんかの所にぃ……あんな田舎に行っても何も有りませんわぁぁぁ！！！」

麗羽が考輝に泣きついていた。彼女は顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにし、すがるように考輝に抱き着いている。

朝早くだというのに大声で泣き、ここは荒野だからいいが、もし近くに民家があれば直ぐさま苦情が来ていただろう。

ちなみに彼女はまだ考輝に自分の思いを伝えられていない。どれも彼の前だと緊張して途端に喋れなくなるらしい。

そして麗羽自身はこの思いは相談している者以外は知らないと思っているが、この一年で既に周知の事実になっている。

曹操こと華琳や、大将軍の何進ですら知っているのが驚きだ。

「いや……まぁ……な？　いろいろと事情があるというか……」

そして考輝は麗羽への対応に困っている。表情も無表情が崩れ、普通に困っている顔だ。

考輝は今まで生きていた中で女性に泣きつかれた経験など全く無い。

そのためどんな言葉をかければ良いかも分からなかった。

そもそも考輝は彼女いない歴＝年齢の男である。

女性の慰め方すら微塵も知らないのだ。

「やっぱり隊長も女の涙には敵わないんやなぁ」

「というよりも、あんな状態の女の人に普通に対処出来る男の人はいないと思うの……」

そんな考輝の姿を真桜と沙和は苦笑いをしながら眺めていた。

彼がここまで困っている姿なんかそうそう見れたものではない。
そのため彰義軍の兵士や見送りに来た者などがこっそり見ている者が多い。

誰も助けようとはしないが。

「……」

そんな姿を見て苦笑いや笑みを浮かべる者が大半の中、玄鳥だけはそれを見て、ぶすっとしていた。
口を一文字に閉じ、かなり不機嫌そうに見える。

「？　玄鳥さん、どうかしましたか？」

その表情を見て一緒に出立の準備をしていた凪は疑問に思った。
機嫌が悪い理由が分からないのだ。

しかし彼女達とたまたま同じ場所にいた鈴蘭は理由が分かっているようで苦笑いをしている。

「……別になんでもねぇよ」

玄鳥は短くぶっきらぼうにそう言うと、視線を考輝達から外す。

（……本当に素直じゃないんですから……。いっそ誰かに相談すれば良いのに）

そんな玄鳥を見て、鈴蘭は心の中で小さくため息をついた。

「ハァ……」

考輝は近くにあった木箱に座り、軽くため息をつく。

その顔には疲労の色が浮かんでいる。

麗羽は文醜と顔良が何とか引きはがしてくれたが、もう彼は満身創痍だ。

身体よりも心が疲れている。

「フフ、若いっていいわね」

「古万さん……」

そこに古万がやって来た。やけに良い笑顔をして。

というのも彼女はこういった色話が大好きで、先程の状況も楽しんで見ていたのだ。

ちなみに麗羽の恋愛相談を何回か聞いていたりする。

「……見ていたのなら助け――いえ、やっぱりいいです。なんか言っても無駄な気がしますから……」

考輝は古万に文句を言おうと思ったが彼女の表情を見てやめる。

喜んで見ていた者に助けてと言っても確かに無駄だろう。

「聞く前から分かっているなんて流石考輝君ね。

――それからごめんなさいね。丁原軍から見送りに来ているのが私だけで」

そう言うと古万は表情を一転させ、申し訳ないような顔になる。

確かに古万の言う通り周りを見ても丁原軍の者は誰も来ていない。

どうやら本当に彼女だけのようだ。

「……何かあったんですか？」
考輝の声は少し心配そうだ。
何か事件が起きたのかと思ったのだろう。

「そんなたいした事じゃないわ。
恋ちゃんは寝坊。張遼ちゃんは二日酔いでダウン。驟雨ちゃんはその看病。張楊は私がやり残した政務を徹夜でやってくれたから、まだ寝ているわ」

「……それ四人目は貴方がちゃんと仕事をすれば来れたんじゃないですか？」
考輝は張楊が本当に可哀相になった。
丁原軍の黒一点にして唯一の文官の将。
そのため彼はとばっちりを喰らう事も多い。

「細かい事は気にしないの。
ともかく豫州では頑張ってね。あそこは余り治安が良くないから名を売るには絶好の場所よ。……あんまり好ましい事じゃないんだけどね」

「……何とかやってみますよ。袁術が何考えているのか分かりませんが……」

考輝は顎に指を当てて思案顔になる。

その姿には先程までの疲労の色は浮かんでいなかった。

でも張楊の事が軽く流された事には触れない。

「じゃあ私は他の子の所にも行ってくるわね」

しばらく話した後、古万は他の者に挨拶しに行った。

「……」

考輝はその後ろ姿を見てやけに不安になる。

それは男の丁原の末路を知っているからかもしれない。

だとしても彼は何だか不安だった。

（……一応の保険をかけておくか）

そう考えた考輝は筆と紙を取りに行った。

「という訳でこの手紙を袁紹に渡してくれ、荀イク」

「いや、どういう訳よ？」

見送りに来ていた荀イクは、いきなり考輝に手紙を頼まれて顔をしかめていた。

いきなりこんな事を言われれば誰だって困惑するだろう。

「第一あんたが自分で渡せば良いじゃない？　目と鼻の先にいるわよ？」

「……さっきので察してくれ」

考輝は視線を横にやりながら答える。

彼の言うさっきのとは麗羽に泣きつかれた事だ。

今行けば同じ事が繰り返されるのは確実だ。

「あー……分かったわ」

そして王者を補佐する才はそれを察し、手紙を受け取った。

「……そういえば男嫌いなお前が来ているなんて意外だな。明日雨でも降るのか？」

「あんた私を何だと思っているのよ？　確かに男は嫌いだけどあんたの旅立ちくらい見てやるわよ」

荀イクはそう言って軽くため息をつく。

実は彼等はこの一年で結構仲良くなっていた。

考輝が袁紹軍を出入りする事が多かったといのもあるが、実は荀イクの方から彼を訪ねた事も仲良くなった理由の一つだ。

「冗談だ。冗談」

「……そんな能面顔でも冗談言うのね」

「……どういう意味だ、おい？」

会う度に口論ばかりしているが。

「そのまんまの意味よ。理解力ないわね」

「……本当に毒舌だなお前。そういえば袁紹軍を抜けようとしているって本当か？」

考輝はふと思い出したかのように言う。

噂の域を出ない話だが、本人が目の前にいるなら聞くのが一番早い。

「ええ。そうよ。しかも次行く所はもう決めてあるわ」

どうやら本当のようだ。しかも次に仕官する所は決めているらしい。

「……あぁ……曹操様ぁぁ……」

もう何処だかは分かったが。

どうやら曹操の事を考えるだけで彼女は悦に入れるらしい。

顔を紅くして何か妄想している。

「……」

考輝は若干引いた。

「隊長〜！　準備完了なの！！」

ちょうどその時沙和が大声を出して考輝を呼んだ。

そして荀イクもそれに反応してこっちに戻って来る。

「……じゃあな、荀イク。また――」

「桂花で良いわ」

別れを言おうとした考輝を荀イクは遮る。

そして考輝は面食らったような顔をする。

それは彼女の真名だと知っているからだ。

「……いいのか？」

「フン！　私が良いって言ってるんだから良いに決まっているでしょ！！　ほら、真名を渡したんだからあんたの真名を渡しなさいよ！！」

叫びながらも荀イク、桂花の顔は紅い。

始めて自らの意思で男に真名を教えて少しながら緊張しているようだ。

「……俺は考輝だ。それじゃあな桂花」

「フン！」

桂花は返事もせずに横を向く。

それでも目だけは横目で考輝を見ていた。

「これより我々は豫州へと向かう！！　行くぞ！！」

『応っ！！！』

こうして彰義軍は洛陽を去った。

様々な思いが渦巻きながら。

そして、物語は確実に前に進んでいる。

黄巾の乱勃発まで、残り約一年。

袁家の者達（前書き）

テスト中の為短めです。

次回からはいろいろ元に戻ります。

それからサブタイがどうしても思い浮かばないので今回はこんな感じです。

袁家の者達

麗羽は自らの屋敷の中にいた。

今彼女は自らの部屋に引きこもり、ベッドの上で力無く横たわっている。

理由はもちろん考輝が洛陽を出て行ってしまったからだ。

彼が洛陽を出てから既に三日。その間彼女は満足に食事や睡眠も取らずに部屋にいた。

しかも最初の二日程は一日中泣き続けているような有様で、重臣である文醜と顔良さえ近付く事が出来ないでいた。

今はやっと気持ちの整理が出来たのか、ただ天井を見上げ、ボッーとしている。

彼女のベッドは壁際にあるため、ベッドより少し上に窓がある。その窓から日の光が入り込んでいて、そんな麗羽を照らしていた。

「……」

彼女はおもむろに寝返りをうち、ベッドが置いてある側の壁と反対側の壁を見る。

そこには彼女の鎧があった。

それは金の鎧であり、実用性よりも見た目が重視されている。装飾も美しく、まるでインテリアのようだ。

そして傷はおろか汚れすら無く、本当に戦場で着ているのか疑わしくなる鎧――――

――だった。一年前程までは。

今では無駄な装飾は外され、少々重いがかなりの防御力を誇る鎧となっている。

傷も至る所についていて、赤黒く汚れている部分もある。

もちろん戦場で彼女自身が前線で戦う事はまずない為、殆どの傷は日々の鍛練でついたものだ。
つまりその傷は、麗羽の努力と成長の表れだった。

「……ハァ……」

しかしそんな鎧を見て、麗羽はため息をつく。

もうどんなに頑張って書を読んでも、どんなに一生懸命鍛練をしても、褒めてくれるあの人はいないのだ。

もちろん、だからと言って怠けるつもりなど彼女には毛頭ない。
上手く思いを伝える事が出来ず、面と向かってまともに喋る事すら出来ない彼女は、それこそが彼を振り向かせる手段だと考えていた。

最低でも、馬鹿でまともな武も持たないようでは相手にすらしてもらえないと麗羽は考えている。

しかし、それでもモチベーションは上がりにくいだろう。何せ振り向かせたい当の本人がいないのだから。

（……そういえば、こうやって一人だけでのんびりするの凄い久しぶりな感じがしますわ）

ボッーとしている中で麗羽はその事に気がつく。

確かにここ一年程は、押し付けてばっかりいた仕事をしたり、まともにした事無かった鍛練をやったり、触れる事すら無かった書を読んだりと、彼女は多忙だった。

一昔前までは、何かと暇な時間があり、いろんな所をほっつき歩いていたが、最近はまずそんな事など無かった。

せいぜい文醜や顔良と買い物に行くくらいだ。

こうして思い返すと、彼女は自分がただ成長しているだけでなく、価値観や考えた方が変わっているのに気付き始める。

――この名門である私がたかが賊ごときに負けるはずありませんわ！　オーッホッホッホッ！！！

そして身震いをする。嫌悪感が生まれ、愚かとしか言い表せなかった。

自身の過去が。

（……我ながらよくあれで軍をまとめられていたものですわ……）

麗羽は再びため息をつく。もはや一年前までの事は彼女にとって黒歴史と化していた。

そして湧き上がる嫌悪感とは別に、考輝に対しての感謝が生まれてくる。

理由はどうであれ、彼女が変わるきっかけとなったのは彼だ。

きっと彼が存在し、麗羽を変えたというだけで、救われた命も沢山あるだろう。

「今度会う時は、感謝の言葉を……言わないと……いけませ……ん……」

言いながら、麗羽はうとうとし始める。

時間は日が既に傾き始める午後三時程。窓から入ってくる柔らかな光が彼女に眠気を誘っていた。

そうでなくとも三日近くちゃんと寝ていないのだ。そろそろ限界だろう。

そして彼女は5分も経たない内に小さく寝息を発てはじめる。

その表情は、非常に安らかだった。

それから暫くして、麗羽の部屋に客人がやって来た。　麗羽はまだ寝ていたが、客はそれに構わずに枕元に近づく。

「ハァ……。全く手間を取らせないでよね」

そして彼女の顔の横に一通の手紙を置き、客は直ぐさま踵を返す。そしてそのまま部屋を出て、屋敷を出た。

少し速足だった為か、道中歩く度に彼女が被っているネコ耳フードが揺れていた。

洛陽を出立してから数ヶ月後、彰義軍は豫州の汝南に到着した。

如南を治める袁術の役職は一介の県令に過ぎないが、現在事実上豫州を取り仕切っているのは彼女である。

兵力、財力、そして袁家の名声。更には利害関係から傘下に入る豪族達。

袁術軍はいまや豫州においての最大勢力となっていた。

しかし軍が強大だと言う事と、それを率いる人物が立派だと言う事は全くの別の話。

勿論それは比例関係である事が多いが、今回の場合反比例していた。

「ふむ、そなたが彰紅炎か！　くるしゅうない、面を上げい！！」

「……」

汝南の謁見の間に通された考輝を出迎えたのは、金髪の幼子だった。

彼女こそが如南太守の袁術であり、幼い歳ながらも一郡の太守となっている。

ただ優秀と言うわけではなく、金と名声でなったようなものだ。

容姿はどこか麗羽に似ていて、従姉妹である事を思わせる。

乱暴に言えば、麗羽を小さくして目つきが柔らかくなった感じだ。

そして中身は非常に残念な感じだ。歳の事を考えたとしても。

これも一年前まで麗羽に似ているかもしれない。

（……なんか一年前のあいつを思いだすな……）

だから考輝はしみじみとそんな事を感じていた。

損得を巡って（前書き）

テストがやっと終わりました。

しかし１１月まで学校行事が多いので不定期になるかもしれません。

損得を巡って

彰義軍は汝南郡の中にいた。

と、言っても洛陽にいた頃と変わらず、汝南の街の近くにある荒野に野営を張っているので、基本的な生活は変わらない。

ただ洛陽と違い、割と近い所に森が多くある。山も遠目で見る事ができ、どこか長閑な印象を受ける。

まぁ、政治の中心地で人の往来が多い洛陽と比べてしまえば何処でもそんな印象を受けるだろう。

そんな場所に彼等は野営をとり、次々と陣幕を張っている。

直ぐにまた出立する可能性もあるため、陣幕の数は必要最小限しか準備されていない。

「あ、沙和さん！　すみませんが、あちらで凪さんの仕事を手伝って頂けませんか？　どうも手間取っているようなので」

「因幡さんは周囲の警戒をお願いします。流石に街の近くなので大丈夫だと思いますが、万が一という事も有りますので」

そして野営の中心部では鈴蘭が忙しそうに声を挙げ、どんどん指示を出していた。

これは本来考輝の仕事なのだが、彼は依頼主である袁術に会いに城に行っている。そのため鈴蘭が変わりに指揮をしているのだった。

彼女は指揮能力が高いというわけでは無いが、少しでもそういった経験を積まそうという、考輝の思慮から指揮を任されている。

確かに武を持たず、兵の指揮も上手く出来ない軍師など、戦場では格好の的だろう。

「玄鳥さん！　自分の仕事が終わったからって酒を飲むの止めて下さい！！　まだみんな作業をしているんですから！！」

「ま、真桜さん！？　いきなり実験用の火薬を広げないで下さい！！　危ないですよ！！」

なかなかに個性的な彰義軍の面々に苦戦はしているが、それでも彼女はしっかりと全員を立派にまとめていた。

「司馬朗様、大変です！！　馬が何匹か逃げ出しました！！！」

「ふ、ふぇぇぇ！？！」

……立派にまとめていた。

（帰りてぇ……）

鈴蘭が四苦八苦して指揮をしている頃、城に向かった考輝は一人そんな事を考えていた。

彼が謁見の間に通されてから約十分。彼は何度こう考えたか分か

らない。

そんな事を考える原因は、言うまでもなく目の前に人物だ。

「――だから妾は言ってやったのじゃ！！　『水が飲めないなら蜂蜜水を飲めばよいのじゃ』と！！」

このどこかで聞いた事のあるような自慢（？）話をしている少女こそが、袁術。幼くも汝南郡を治めている太守だ。

しかし能力的には低く、まだ子供という事もありかなり我が儘だ。仕事の話をしに来た考輝に対して無理矢理自分の自慢（？）話をする所からも器が知れる。

だが朝廷の官職はそれなりの地位にあり、無官である考輝は強く反発する事が出来ないでいた。

確かに皇帝の威厳は失われ、朝廷の力は弱まってはいるが、それでも官位の力は絶大だ。

ほぼ形だけの物になったとは言え、この地は今だ『漢帝国』の『豫州』の『汝南郡』なのだ。

決してもう滅んだ訳ではない。

統：１１　武：８　知：９　政：３　魅：８５

剣：Ｃ　槍：Ｃ　戟：Ｃ　弓：Ｃ　騎馬：Ｃ　兵器：Ｃ　水軍：Ｃ

特技…無し

「……」

だからこんな彼女の能力値がこんなだとしても、黙って聞いているしかなかった。

ちなみに能力値の伸びに関してはまだ分からない。

子供だと、どれも伸び率が高いのでどこまで成長するのかよく分からないのだ。

「さっすが美羽様♪　水さえ買えない庶民にそれより高価な蜂蜜水を勧めるなんて、普通の常識を持っている人じゃ言えませんよ♪」

「そうであろう？　もっと褒めてたも！」

（……それ遠回しにけなしてないか？　まぁ本人が気にしていないなら別にいいが）

さらに考輝を悩ませているのは側近の張勲の存在だ。

彼女は袁術が何を言ってもおだて（？）、袁術を助長させてしまう。

これがもし麗羽の所にいる顔良のような者だったら彼自身どれほど楽か。

張勲はまるで現在のバスガイドのような服を着ていて、服の上からでもスタイルの良さが伺える。

そして袁術の傍らに立ちニコニコと笑っている。

そんな彼女の袁術を見る目は主君を見る目と言うよりは、まるでかわいらしい小動物を見るような目だ。

統：６８　武：５８　知：７１　政：５４　魅：８３
剣：Ｂ　槍：Ｃ　戟：Ｃ　弓：Ｂ　騎馬：Ｂ　兵器：Ａ　水軍：Ｃ
特技…車軸（兵器の移動力が上がる）

しかし張勲自体のステータスは決して駄目なものではない。むしろ兵器の観点から見れば優秀な部類にも入るだろう。

（……性格とステータスは別って事なのか？　……そういえばパワーアップキットを使っても誰も性格は変わらなかったしな）

考輝は張勲のステータスを見ながら仮説を立てていく。

実際彼の考えは正しく、性格とステータスは関係がない。
張勲の場合、性格と言うよりかは価値観に置いて袁術が何よりも上にあるので、このような現状になっている。

その結果重税を課される民としては、はた迷惑な話だ。
何せ張勲の性格が少しでも違えばもっと生活が楽になったのかもしれないのだから。

そんな事を考えている考輝とは別に、袁術はやけに楽しそうだ。張勲に褒められて（？）気を良くしたのだろう。

「そちは運が良いのう。今日は妾の機嫌が良いからもっと妾の武勇伝をしてやるのじゃ！！

……あれは確か三年前の――」

――間。

「――それではそろそろ仕事の説明に入りま～す♪」

「……どうぞ」

袁術の話は軽く二時間は続き、その間考輝は適当に相槌を入れて凌いでいた。

彼の声から疲労が伺えるのは決して気のせいではない。

そして、やっと張勲から仕事の詳細を話して貰う段階に到る。

「……もう飲めないのじゃ……」

ちなみに袁術はずっと話をして疲れたのか、張勲の膝の上でぐっすりと眠っている。

余程熟睡しているのか、むにゃむにゃと寝言を言っているくらいだ。

「♪　え～とですね……」

張勲はそんな袁術を見て微笑みながら懐をあさる。

彼女を起こさないためか、やけに動きがゆっくりだ。

そして彼女は書簡を取り出すと、少し小さめの声で読み上げた。

「実はですね、最近美羽様の領内で賊達が暴れていて大変なんです

よ～。
そこで彰義さん達にはいくつかの賊の集団を討伐して貰おうと思います」
「……討伐する集団の数は？」
そう言う考輝の声には既に疲労の色は無く、表情も何時もと変わらない無表情だ。

「大小合わせて十個程。数は多くても千ぐらい。
彰義さん達なら問題無い数ですよね？」
対して張勲はニコニコと笑っている。
至って普通の笑顔なのだが、どうも考輝は違和感を覚えた。
――まるで何か隠し事をしているような感じで。

「じゃあ詳しい場所とかは後で野営地に届けさせますから、早速準備をお願いしま～す。
別に賊の頭の首とかはいいんで、景気良く燃やしちゃって下さい♪」
「……それでは失礼します」
考輝は軽い違和感と疑惑を覚えながらも、謁見の間を後にした。

その日の夜、考輝は張られたばかりの陣幕の中で、机の上に置かれた汝南郡の地図を睨みつけていた。

その地図には鈴蘭がせっせと賊の場所や数などの情報を、届けられた書簡を元に書いていっている。

そして鈴蘭が情報を全部書き終えると、ちょうど凪がやって来た。

「失礼しま――そんな顔をされてどういたしましたか？」

「凪か。ちょうど良い、これを見て見ろ」

やって来た凪に、考輝は机の上の地図を見るように促す。

「？　……！」

凪は一瞬訳の分からないような顔をしたが、地図を見てすぐに何かに気付いたような顔になる。

「……賊に襲われている村が少な過ぎませんか？」

「ああ、そうだ」

凪の質問に考輝は頷く。

どうにも賊に襲われている村の数が少ないのだ。
最低でも領内に十個以上の賊の集団があると言うのに、ここ一月で襲わた村の数は十に満たない。

しかも壊滅したり、壊滅寸前まで破壊された村や町も無い。

賊達も生きている以上食べなければいけない訳で、それは奪うしかない。

なのでこの状況は少々異常だ。

「しかし、袁術の元へ税や献上品を輸送している者達はよく襲われているんですよね……」

「あ、本当だ」

そして鈴蘭に言われて凪もそれに気付く。
村とは逆に袁術の輸送部隊はよく襲われていた。

本来、これも余り賊がしない事だ。
何せ下手に輸送部隊に手を出せば、完全にその太守と敵対する事になり、賊としてはデメリットの方がでかい。

特に袁術のように、政を私腹を肥やす為にしている者ならば尚更だろう。

しかし、今回の場合まるで挑発するかのようにそれが行われている。明らかに普通の行動ではない。

「……つまり、今回の相手の中には義賊がいるいう事ですか？」

「おそらくはそうだろな」

考輝は何時もと変わらない無表情でそっけなく答えた。

義賊とは言葉の通り、義の心を持った賊だ。普通の賊のように民達から奪うのではなく、力ある悪党を相手にする。

この場合は間違いなく悪党は袁術だろう。

「……」

それを聞き、凪は顔をしかめる。

正義感が強い彼女にしては、義賊と戦うのが嫌なのだろう。

「……そういえば凪は何か用があって来たんじゃないか？」

そんな凪の心情を悟った考輝はあえて話を変える。

すると凪は思い出したかのようにハッとして、用件を伝える。

「あ、そうでした！　すみません。

実は隊長にお客様が来ています。トウ当という方で、どうしても話したい事があるそうですが……どうしますか」

「……分かった、直ぐに会おう。通してくれ」

考輝にはトウ当という名前に心辺りがなかったが、ひとまず会う

事にする。

何がどういう方向に転ぶか分からないからだ。

「夜分遅く、急な訪問にも関わらず、お会いして頂き有り難うございます。

私はトウ当。若輩者ながら長沙にて役人をしております」

そう言うとトウ当と名乗った女性は深々と頭を下げる。

今のやり取りから分かるように彼女は礼儀正しく、更に顔も美人の部類だ。

ただ彼女の目はかなりきついつり目で、初めて会った者は少なからず萎縮してしまうだろう。

服はチャイナドレスのような物を着ていて、髪は黒くてポニーテールのような感じだ。

なお人払いをしているので陣幕の中にいるのは彼女と考輝だけだ。

「長沙？　なんでまたそんな遠い所の役人が？」

そして考輝は長沙という言葉に反応して怪訝な顔をする。

長沙とは豫州ではなく荊州にある郡で、ここから一人で移動しても一ヶ月以上かかる場所だ。

そんな所の役人がいきなり訪ねて来たとなれば疑問にも思うだろう。

ちなみに現在長沙は太守ではないが、事実上孫堅が治めている。

「この地には義妹の帰郷の付き添いとして来ました。なので、今回の事は役人としてではなく、個人的にやって参りました」

トウ当は頭を上げると、素早く理由を説明する。

「……それで何の用だ？」

「実はお耳に入れておきたい情報と折り入っての頼み事がございまして参上致しました。
おそらく貴方様に討伐依頼が出ているであろう賊達は本当は――――」

「義賊だと言いたいのだろう？　もしくは貧しい者による反乱か？」

考輝は無表情のまま次にトウ当が言うであろう言葉を先に言う。

そしてそれは当たっているようで、彼女は一瞬呆気に取られたような顔をする。しかし、直ぐさま表情を戻し、再び話し始める。

「……そこまで分かっているなら話は早いです。
その者達を見逃しては頂けませんか？　彼等には罪は無く、悪いのは袁術です。
それに今荊州の方に奪った献上品を持って向かっていて、それを糧にその地で一生静かに暮らすつもりです。なので――」

「悪いがそれは無理だ」

考輝はトウ当が言い終わる前にきっぱりと断る。

その声は冷たく、何時も以上に無表情だ。

「……理由を伺っても？」

トウ当はそれに納得がいかないといった顔で食い下がる。

しかし彼女も本心では理由など分かっていて、こうなる事も薄々感づいてはいたのだ。

それでも彼女は納得出来ない部分がある。目の前の人物は罪の無い人間を助けるのを断ったのだから。

「お前だって分かっているだろう？　もしそいつらを見逃した事がばれれば俺達は確実に袁術を敵に回す事になる。そんなの損にしかならない。

悪いが俺はそんな危険を冒してまで人を助ける程出来た人間じゃない」

考輝は眉一つ動かさず淡々と理由を述べる。

考輝は血も涙も無いような人間という訳ではない。
彼だって出来れば助けたいし、見逃してもやりたい。
しかしこれは彼だけの問題ではない。彰義軍のトップである彼は、軍の全ての部下の命を背負っているのだ。
確実なメリットも無しに、危険を冒すわけにはいかない。

「……貴方は損得で人の命を捨ても拾いもするのですか？」
トウ当は目つきを鋭くして考輝を睨む。その鋭さは人を殺してしまえそうだ。

「するね。俺はお人よしでも仁者でもない。
だからそんな損しか生まれないような事はしない」
「……」
しかし考輝はそんな視線に動じる事なく堂々と自分の意見を述べる。
その姿に、トウ当も黙るしかなかった。

「……ではそうする事で大きな得が生まれれば、見逃して貰えるという事ですか？」

暫く陣幕を沈黙が支配し、重苦しい空気になった中でトウ当が口を開く。

その表情は何か覚悟を決めたような顔だ。

「それならば迷う事なく助けるな」

考輝はそれに対して即答する。彼も出来れば見殺しになどしたくないのだから。

「……ならばもし見逃して貰えるならば私の義妹を貴方に仕官させましょう？」

「義妹？」

「はい。それにこの話は彼女が義賊の中にいる知り合い達を死なせたくなかったのが発端。きっと救う為なら喜んで仕官するでしょう」

「……そいつは優秀なのか？　袁術を敵に回す危険性を背負う程に」

「優秀です。武に関しては私が責任を持って保証しますし、まず間違いなくいずれ天下の名将になるでしょう」

「……」

考輝はそれを聞いて黙り込む。

その人物に関して誇張があるのは明らかだし、実際の程は分からない。

しかし彼は人のステータスを見る事が出来る。どれくらい優秀なのか一目見れば分かるのだ。

結論として会って決めようというもの到るのに、対して時間はかからなかった。

「……」

対してトウ当は内心穏やかではなかった。

あんな口先だけの事を言っても信用してもらえるはずが無いのは当たり前だ。

しかも彼女自身の望みとは言え、義妹の人生に関わる事を交渉の道具に使った事は、トウ当の良心を蝕んでいた。

「……ひとまず会って決める。それでそいつの名は？」

考輝がそう言うと、トウ当は安心半分、後悔半分の気持ちになるが、彼の気が変わらない内にと素早く答える。

この時点では、この出会いが考輝の人生の中でもかなり重要なものになる事は誰も知らない。

「分かりました。それで私の義妹の名前は姓は呂、名は蒙、字は子明と言います」

「……」

この時考輝が絶句していた事は言うまでもない。

軍師が入って（前書き）

すみません、今回ノリと勢いだけで書いたのでいろいろ酷いです。

それから最初の方の話を大幅に修正中です。
変わっているのは内容でなく、書き方ですが。

軍師が入って

鈴蘭は森の中にいた。

その森は汝南の近くにあるもので、そこまで鬱蒼としているわけでもなく、範囲も余り広くない。

森と言うよりかは、林といった感じだろうか。

ともかくそんな森を、鈴蘭は凪と二人で歩いていた。

「ふぇぇぇ……。一体お馬さんは何処に行っちゃったんですかぁ……」

鈴蘭は歩きながら泣き言を言って俯く。そんな彼女の後ろ姿からはどんよりとした陰すら見えてきそうだ。

「だ、大丈夫ですよ！　きっと見つかりますって！！」

そんな鈴蘭を見て凪は励ましの声をかけるが、効果は薄そうだ。

その証拠に鈴蘭の周りの空気はまだどんよりとしている。

今の会話から簡単に分かるが、彼女達は今、馬を探している。

昨日鈴蘭が野営を張る指揮をしている中で逃げ出した馬がまだ見つかっておらず、こうして探しているのだった。

だが狭いとはいえ森。二人だけで森の中から一匹の馬を見つけるのは大変難しいだろう。

実際、彼女達はもう既に二時間近く探して森を歩き回っているが、一向に見つかる気配はない。

なお何故二人だけで探しているのかと言うと、考輝にばれないようにするためだ。

実は考輝にはまだこの事は伝えられておらず、鈴蘭は知られる前に対処するつもりだ。

伝わって、自身の評価が下がるだけは彼女は避けたかったからである。

そのため大勢で探すと考輝に感づかれる可能性があるので、二人

で探していた。

しかし、それでも見つからなければ意味がない。

見つからなかったり、見つかったとしても、考輝が馬の事を気付いた後では手遅れだ。

おそらく普通に白状した時よりも更に評価が下がるだろう。

その事が鈴蘭を焦らせ、不安に陥れていた。

「ハァ……きっと榕ちゃんなら見つけだす良い方法を思いつくんだろうな……」

鈴蘭は今度はため息をつき、歩くペースを下げる。

「……それって誰かの真名ですか？」

聞いた事の無い名前に凪は首を傾げる。

最低でも彰義軍にいる者ではない名前だ。

「はい、妹です。彼女は私なんかより全然優秀なんですよ」

鈴蘭は短く返すが、妹の自慢している時の顔はどこか嬉しそうだ。

一方凪は鈴蘭に生き別れになった妹がいて、仕事の合間に探していた事を思い出す。

「……その子って一体どんな子なんですか？」

鈴蘭が妹の話をしている時は少し元気になったのに気付いた凪は、もう暫くこの話題を続ける事にする。

そして狙い通り彼女は元気にはなったが、答えはなかなか衝撃的だった。

「う～ん……一言で言うなら他人を虐めるのが大好きな子です。
もし怪我をしている人がいたら、笑顔で傷口に塩を塗り付けるくらいに」

「……」　余りにも予想から掛け離れた答えに一瞬硬直する凪。

いくら何でも、こんな常におどおどしていて、気の弱い鈴蘭の妹がそんなんだとは夢にも思わないだろう。

そんな凪の心情を悟ったかどうかは分からないが、鈴蘭は慌てて弁明を始める。

「あ、でも本当に優秀なんですよ？　それなりの武もあるし、知なんか考輝様に匹敵するぐらいだし……。

軍略においても相手の弱点ついたり嫌がらせみたいな謀略が得意だったり――」

「……後半から人を虐めるような要素が出てますけど……」

どうやら逆効果のようだったが。

「やっぱり見つかりませんね……」

「はい……」

その後も探す事二時間、つまり計四時間探し続けたが、一向に馬は見つからなかった。

既に日は傾き始め、後一時間もすれば空の色もオレンジに変わり始めるだろう。

電気や明かり等がないこの時代は、暗くなったら基本的に出掛けない。夜は賊やら猛獣やらが出て危険だからだ。

よって帰る時間を考慮すると、彼女達の探索もそろそろ打ち切るべき時間という事になる。

「……そろそろ帰りますか？」

凪は控えめに尋ねるが、やはり鈴蘭の周りは暗い。

「ふぇぇ……なんて申し開きをすればいいか……」

まだ野営に帰り、考輝に会ったわけでもないのに既に鈴蘭は涙目だ。

それほど怖いのだろう。

「だ、大丈夫です！　きっと隊長なら――あれ？」

再び凪が励まそうとすると、彼女は途中で目を細めて遠くを見る。

「ふぇ？」

それにつられて鈴蘭も凪が見ている方に目を向けると、遠くで人影が歩いていた。

かなり遠いので顔での識別は不可能だが、身につけている服から彼女達は誰だかを把握する。

何故そんな遠くから分かったのかと言うと、それは彼女達が毎日見ている人物だからだ。

「……隊長？　一体何故こんな所に？」

その人影はどうやら考輝のようだ。そして凪はいる理由が分からず顔をしかめる。

「ま、まさか――――いえ、何処か目的地があるようですね」

鈴蘭は一瞬最悪の事態を想定して青ざめるが、直ぐに冷静な表情になる。

目的地でもなければ、森の中をあんな脇目も振らずに歩けないと判断したからだ。

「……どうします？」

「着いて行きましょう。幸い、我々はまだ気付かれていないみたいですし。

――それに、万が一考輝様が馬を発見しても、その方が対処しやすいですから」

凪の問いに鈴蘭は即答だった。

こうして二人は考輝に気付かれないように距離を保ちながら、後に着いて行った。

後を追い始めて五分程たっただろうか。

考輝はとある大木の前で立ち止まる。

勿論、鈴蘭と凪も気付かれないようにしっかりと後を着いて来ていて、今は近くにある草むらに身を隠し、様子を伺っていた。

考輝がいる大木の周りは草が低いため、見失う事もないだろう。

「……それにしても隊長は何をしにここに来たのでしょうか？　別に周りに何かあるという訳ではないようですが？」

その疑問に凪と鈴蘭は二人して首を傾げる。

「さぁ……一番考えられるのは誰かと待ち合わせしているという事ですが――――あ、誰か来ました」

まるでその話をするのを待っていた、というぐらいのタイミングで、女性が二人鈴蘭達がいる草むらと反対側からやって来た。

一人は黒髪でチャイナドレスを着ていて、かなりきついつり目だ。
もう一人も色違いのチャイナドレスを着ていて、髪は茶色で後ろで結っている。
そして彼女もまた目つきが悪く、眉間にシワが寄っているほどだ。

しかしそんな目つきをしているが、彼女の顔はかなり青い。顔の至る所からも脂汗をにじませている。

そして凪は黒髪の人物に見覚えがあった。

「あれは……トウ当殿？」

「知り合いですか？」

鈴蘭の問い掛けに凪は軽く首を横に振る。

「いえ、ただ昨日彼女が隊長を訪ねて来た時に一言二言話したくらいです」

そう言われ、鈴蘭も昨日彼女のような人物が来た事を思い出したようだ。

「あー……そういえば来ていましたね。でも――」

「あ、何か話し始めました」

そう言われ、鈴蘭は話すのを止めて耳をすませる。

「――それでこちらが、義妹の呂蒙です」

「りょ、呂蒙と言います！　あ、余り頭はよくありませんが……
……え、えっと……それを補えるくらいの武は有りますので、……よ、
よ、よろしくお願いします！！」

トウ当に促され、呂蒙は自己紹介を始めるが、ぎちぎちに緊張し
てしまっている。

所々言葉が詰まり、噛みかけている部分も多い。

しかしそれも当然だろう。　今、彼女の肩には故郷の知り合い達

の命がかかっているのだから。

呂蒙はトウ当から仕官の話をされると、二つ返事で了承した。

彼女自身そろそろ何処かに仕官したいと思っていたので、ちょうどよかったのだ。

勿論、早々に両親と兄を無くした自分を面倒を見てくれた、兄の嫁、トウ当と違う軍というのは残念だったが、彰義軍もそこそこ有名なので嫌ではない。

彰義軍の噂は洛陽から遠く離れた長沙にも聞こえていたし、こっそりと軍の様子を見に行ったが、練度もべらぼうに高い。

そのため彼女は仕官する先としてはとても良い軍だとだと考えていた。

しかし失敗した時の代償がでか過ぎる。

いや、失敗しなくても自分が袁術と敵対する可能性を背負ってでも欲しい人材でなければ意味がない。

もしそうでなければ、故郷の知り合いが沢山いる反乱軍が、皆殺しになるのだから。

それに彼女自身が元々自分に自信を持っているタイプではない。そのため思考は悪い方にばかり傾き、正常に頭が働いていない。

（えっーと……えっーと……えっーと……あぁ！！　何話そうとしてたのか忘れちゃった！！）

しまいには、昨日必死に考えてきた自分をアピールする言葉を忘れてしまう始末だ。

「……」

そんな呂蒙の姿を、横にいるトウ当はそれはもう心配そうに見ていた。

そして考輝にこの話を持ち掛けた事を後悔し始める。

（私とした事が……。人と話すのが苦手な亞莎なら、こんな事になるぐらい直ぐに分かったはずなのに……）

トウ当は自分の考えのなさを呪った。

このままでは仕官して、知り合いを救うどころか、彼女がトラウマを抱える可能性があるからだ。

呂蒙は心優しい。だから失敗すれば必ず自責の念にかられ、まず間違いなく苦しみ事になるだろう。

トウ当は彼女にそんな事になって欲しくなどない。

しかし、こんなガチガチに緊張した状態では本来の力など出せないだろうし、余り良い評価もされないのは目に見えている。

トウ当には呂蒙の苦しむ姿が目に浮かぶようで、苦虫を噛み締めたような顔になっていた。

「俺は姓は彰、名は義、字は紅炎、そして真名は考輝だ。これからよろしく頼むぞ、呂蒙」

「……え？」

「……はい？」

だから、考輝がいきなり真名を渡してきた事に、二人は一瞬反応が出来なかった。

特に当の本人の呂蒙は、まるで狐に化かされたような顔をして完全に動きが止まっている。

それこそ本当に心臓が動いているのか心配になる程だ。

「――――！　お、おい亞莎！！」　そのため先に正気に戻ったトウ当が呂蒙を軽く揺すり、声をかける。

「――っ！　え、えっと……わ、私は亞莎と言います……はい……

……」

すると呂蒙はハッとなり、自身も真名を返すが、まだどこか呆然としている感じだ。

「じゃあ亞莎、これから頼むぞ。それで――」

「……申し訳ありませんが、彰義殿。少々よろしいでしょうか？」

呆然としている呂蒙――亞莎をよそに、話を進めようとする考輝をトウ当は遮る。

その表情は、どこか晴れないものだった。

「……いいぞ」

「有り難うございます。

……ひとまず、亜莎を採用して頂くのは痛み入ります。しかし、私としてはその理由が気になるのです。差し支えなければ、教えて頂きたいのですが」

トウ当は目を細め、真剣な表情をつくる。

正直な話、彼女は亞莎が採用して貰えるとは思っていなかった。

まともに喋れてはいなかったし、顔も緊張で酷いものだったのだ。

それをあんな感じに能力を見る事すら無く、簡単に決めてしまっては確かに疑念も湧くだろう。

トウ当は考輝が自分達をおちょくっているか、亞莎の見た目だけで決めているような気がしてならなかった。

「……別にただ優秀だと思ったからだ。確かにあんなあっさり決めたら疑問にも思うだろうが、それ以外意味はない。

別に顔がかわいらしいからとかそんな馬鹿げた理由ではないから安心しろ」

――これでも人を見る目には自信がある――

と、最後に付けたし、考輝はまるでトウ当の心をさとしているかのように喋る。

彼の場合、ステータスや成長率を見る事が出来るので、優秀かどうか直ぐ分かるだけだが。

統：７６　武：７２　知：４２　政：３８　魅：８７

剣：Ａ　槍：Ａ　戟：Ｂ　弓：Ｃ　騎馬：Ｃ　兵器：Ｃ　水軍：Ａ

特技…火攻（火計が強力になる）

だから彼女のステータスも手に取るように分かる。

今はただの武官だが、知力や政治力の伸び率が麗羽並にある事も気付いていた。

麗羽の場合は、４０以上伸びてもまだ伸び率があった。つまり亞莎はしっかり育てれば、知力９０は軽く越えるという事だ。

そんな逸材ならば、考輝はこちらから頭を下げて自陣に迎え入れたいくらいだった。

「……それは信用しても？」

「それはお前が決める事だ。最低でも義賊の事は約束通りだ。荊州に行くのは黙認しよう」

「……分かりました」

まだ若干言いたい事があるような顔をするが、トウ当は大人しく引き下がる。

流石に義賊の事を出されれば弱いのだろう。

「……それでお前はいつまで呆然としているつもりだ。いい加減目を覚ませ」

トウ当がため息混じりに注意をすると、亞莎はやっと意識を覚醒させる。

「……え？　あ、はい！　よ、よろしくお願いし致します、考輝様！！」

そして慌てたようにお辞儀を考輝にする。

こうして彰義軍に、未来の大軍師が加入した。

「……で、お前らはいつまで見ているつもりだ？　凪に鈴蘭」

「ばれてましたか……」

「う、流石です……」

考輝に促され、凪と鈴蘭は草むらか出て来る。どうやら既にばれていたようだ。

「えっと……貴方達は……一体……？」

いきなり現れた二人に驚き亞莎は困惑するが、トウ当にはそんな様子はない。

きっと凪と昨日会ったのを覚えていたのだろう。

「私は楽進。彰義軍の武官です。それでこっちが――」

「姓は司馬、名は朗、字は伯達です。一応文官をしています」

「あ、私は姓は呂、名は蒙、字は子明です。今日から彰義軍に仕官致しますのでよろしくお願いします」

これから自分の同僚になる者達だと分かると、亞莎は慌てて名乗って頭を下げる。

一方トウ当は不思議そうな顔をしていた。

「しかし、何故こんな所に彰義軍の将が？」

彼女の疑問ももっともで、この森のこの場所を会うのに選んだのは人が来ないからだ。

勿論袁術の手の者に極力知られないようにするための措置だ。

そうやって選んだ場所に、いきなり仲間内とはいえ人が現れたとなれば疑問にも思うだろう。

「……え……いや……その……」

流石に正直に訳を話すわけにもいかず、鈴蘭は口ごもる。冷や汗も顔中からかき、誰がどう見ても隠し事をしている顔だ。

「……まぁ今はいい。後でじっくり聞かせてもらう。

それより鈴蘭、凪。少し状況が変わった。急いで陣に戻って戦略を立て直す」

じっくりの部分をかなり強調していたが、とりあえず今は問い詰めないようだ。

鈴蘭達も話が真面目なもの変わったのに感づき真剣な表情になる。

「では予定通り、私が荊州に帰りながら彼等を案内します。彰義殿も袁術にお気をつけて下さい。

それからくれぐれも亞莎を頼みます」

「分かっている。お前こそ気をつけろよ」

トウ当は深々と頭を下げると、早速出立する。

亞莎に別れも言わず、顔を背けるようにしながら。

「……良かったんですか？　別れの挨拶もせずに」

トウ当が見えなくなってから、凪が尋ねる。

彼女は亞莎とトウ当の関係は知らないが、それでも親しい仲である事が分かっていた。だから挨拶もせずに別れた事が疑問だった。

それは鈴蘭も同じのようで、不思議そうな顔をしている。

「はい……。別れの挨拶はもう散々しましたし、大丈夫です。それに……お義姉さん意地っ張りですから」

亞莎はトウ当が去って行った方向をじっと眺めている。

彼女の目には、うっすらと涙が溜まっていた。

「……」

その日、ある森の中で、黒髪のチャイナドレスを着た女性が木に寄り掛かっていた。

右手を目全体を覆うようにして、何も言わずに固まっている。

そんな彼女の頬に、一筋の涙が流れていた。

それは沈みかけの陽に照らされて、オレンジ色になっている。

今夜は長い夜になりそうだ。

「……で、鈴蘭達はこんな森の中で何をしていたんだ？」

「えっと……た、宝探しを……」

「――あ？」

「す、すみません！　嘘です！！　だからそんな顔で睨まないで下さい！！」

……今夜は長い夜になりそうだ。

刮目して見て（前書き）

ちょっとテンション上がる事があったので早めに投稿。

今回かなり超展開です。多分。

刮目して見て

凪は戦場の中にいた。

彼女自ら前線に出て、激をとばし、指示を出し、人を殺している。

また一人鉄甲で殴り飛ばし後、彼女は拳を前に出して名乗りを上げる。

「我こそは楽文謙！　彰義軍の先槍なり！！　か弱き民達を虐げる賊共よ！！　我が名を胸に刻み、冥土の土産にするがいい！！！」

名乗り終えると、彼女は直ぐさま拳に気を溜める。

そして賊達に放つと、軽く数十人が吹き飛ぶ。

遠目で見ると、まるで人混みの中で爆弾が爆発したようだ。

その光景を見て賊達は怯み、彰義軍の兵士達は士気を上げていく。

どちらが優勢かは、火を見るよりも明らかだった。

そんな戦場の遥か後方の彰義軍の本陣に考輝はいた。

何故戦場からそんなに離れているのかと言うと、実は彼は今回の賊の討伐戦には、指示を一切出していないからだ。

どうしてかと言うと、たかが四百程度の賊に、自分の千近くいる軍が、敗れる事などないと信じている――いや、分かっているためだ。

そのため部隊の指揮は凪と沙和に任せ、自分は後方で今後の事について考えていた。

ちなみに他の将達も、別の場所で賊達と戦っている。

兵力は各千程。それでもどんな場所でも賊の数の二倍はいるが。

「……これで最後か」

考輝は目の前の机に置いてある豫州の地図に、筆を持って書き足していく。

書き足していくと言うよりかは、地図に元からあった×印を塗り潰していく感じだ。そしてその×印の場所は彼等がいる場所とだい

たい同じだった。

その地図には他にも塗り潰してある個所がいくつもあり、×印に丸が付いているのもある。

地図の×印は袁術に討伐を依頼された賊の場所で、塗り潰しは討伐を終えた事を示す。

丸が付いたものは義賊がいた場所で、既にトウ当によって荊州に逃げている。

なお、戦闘が続いているのに考輝が印を塗り潰したのは、戦況をから判断して、彼の中で勝敗はもう決まったからだ。

彼は後五分もすれば、賊は総崩れになるだろうと見立てていた。

「さて、袁術の目眩ましも終わったし、一旦汝南に戻るか……」

考輝は筆を置き、空を見上げると、小さく呟いた。

当たり前の話だが、討伐を依頼された賊の全てが義賊という訳ではなかった。

なんせ義賊などそうそういるはずがない。

なので考輝はそいつらを利用し、袁術の目を引き付ける事を考える。

そうすれば義賊達は楽に荊州に行けるし、彼も袁術に見逃した事を知られる危険が減るからだ。

そのため彼はわざと軍を分けて大きく動いたり、汝南の近くでは大規模な火計を用いて袁術の目に止まるようにした。

更には袁術の側近に賄賂を渡し、都合の悪い情報は出来る限り揉み消させる。

その成果か、袁術は豫州から荊州に千人単位で移動した事など全く知らないようだ。

二週間近く賊と戦っている中で、袁術からなんの動きがない事が何よりの証拠だろう。

結果として、考輝は罪の無い義賊達を逃がし、有能な人材を手に入れるという万々歳なものとなった。

「……そろそろ亞莎の強化を始めるか……」

考輝は顎に手を当てて、思案顔になる。

どのように強化するかを考えているのだろう。

パワーアップキットを使ってしまえばそれまでだが、それには回数制限も副作用もある。

考輝としては、本人にかなりの伸び率があるうちは、極力使いたくはなかった。

そうこう考えている内に、前の方から歓声があがる。おそらく勝鬨だろう。

その時、考輝が×印を塗り潰してからだいたい五分が経っていた。

「――という訳で、亞莎には本を沢山読んでもらう」

「……どういう訳かいまいち良く分からないんですけど……」

考輝の陣幕に呼ばれ、いきなりそんな事を言われた亞莎は困惑していた。

賊を討伐してから数日後、考輝は汝南に戻り、各地に戦いに行っていた彰義軍の将達が続々と集まっている。

全員が一様に戦後の様々な雑務で忙しい中、考輝は亞莎を強化する為に、自分の陣幕に読んだ。

そして開口一番にさっきの事を言い、今の状況に至る。

亞莎としては何故いきなりそんな事を言われるのか分からなかった。

彼女は武官で、頭も余り良くない事は彼女自身良く身に染みている。

そう考えている彼女なら、困惑するのも当然だろう。

「どういう訳かと言うと、文官の数を増やす為に、お前を教育しようと思ってな。
分かっているとは思うが、今この軍に正式な文官は俺と鈴蘭しかいない。そこで新たに入って来たお前に白羽の矢が立った訳だ」

考輝は先程の言葉で省いた部分を説明していくが、亞莎はまだ納得していない顔をしている。
武官である自分をわざわざ文官にする意図が分からないからだ。

「……では、どうして私何ですか？」

「お前は文官――いや、軍師として優秀な存在になると思ったからだ。これでも俺は結構お前に期待してるんだぞ？」

この考輝の答えに亞莎は唖然とする。

彰義軍に入ってから約二週間、彼女はそんな評価をされているなど夢にも思っていなかった。

そして過大評価も甚だしいと思うと同時に、その期待に応えたいという思いが生まれる。

「とりあえず読む本はあそこから持っていけ。俺がもう読み終わった本だ」

そう言って考輝は陣幕の一角を指差す。

そこには机の上に本が文字通り山積みにされていた。軽く百冊くらいはあるだろうか？

「……あ、あれを……全部ですか？」

予想を遥かに越える量に、亞莎は先程とは違う感じで唖然とする。

いきなりあんな量を言われるとは、誰だって予想出来ないだろう。

だが考輝も、最初からあんな量を読ますつもりはなかったようだ。

「流石にいきなり全部とは言わん。――まぁ最終的には全部読んでもらうが。

……とりあえず、『五経』、『孟子』、『荀子』、『戦国策』、『呉子』、『孫子』あたりから読んでみろ。上の方にあるはずだから直ぐ見つかるだろう」

そう言われ、亞莎は安心したような顔をして山積みの本に近づく。

すると言われた本のいくつかは一番上にあり、簡単に見つかった。

「とりあえず今言った本を読んで、その後から他にも手を出してみろ。
あと本を読んでて何か分からない事があったら、鈴蘭に聞いてみろ。悪いが俺は忙しくてなかなか対応できない」
考輝がそう言いながら別の机に近づくと、そこにはこれまた山積みにされた書簡が置いてあった。戦後なので、やはり雑務が多い。
確かにこれでは亞莎の質問に答える事など出来ないだろう。

「わ、分かりました。……自分の陣幕に持って行っても構わないでしょうか？」

「ああ。だが余り大量に持って行くなよ。多くとも一日に読める量にしておけ」

「はい。では何冊か持って行きます」

亞莎は軽く頭を下げると、先程考輝に言われた本を抱え自分の陣幕に向かう。
決意と不安を抱きながら。

その姿を確認した考輝は、自分も仕事に取り掛かり始めた。

三日後、戦後の雑務を殆どの者が終えて、彰義軍の野営の中には普段の雰囲気が戻ってきた。
考輝も大体の仕事を終えて、陣幕の中で休憩している。

そんな中、鈴蘭が自分の背丈ぐらいの高さもある大量の書簡を持って来た。
どうやら他の者達が処理をした書簡のようだ。

彼女は若干ふらふらしながらも、考輝の机に書簡を置く。

「ご苦労様。全部処理済みの書簡か？」

「はい。何人かまだ出してない人がいますが、九割は終わりました。後で確認をお願いします」

そんな感じのやり取りをしていると、考輝は亞莎の事を思い出す。

彼はこの三日間は仕事三昧だったので、彼女の事を気にかけられていなかったが、そろそろ様子を聞こうと考えた。

「――そういえば亞莎が質問をしに来たか？」

「そ、そうなんです！　亞莎さん凄いんですよ！！」
考輝は何気なく聞いたつもりだが、鈴蘭はやけに興奮して話す。
いつも大人しい彼女にはかなり珍しい様子だ。

「……それでどんな様子なんだ？」
対して考輝は冷静だった。
たった三日とはいえ、彼女なら少なからず伸びていると思っていたからだ。

「それがしてくる質問がどんどん高度になってくるし、理解力も高いんです！　『論語』なんかばっちり理解しているみたいですし」
（……『論語』？　なかなか読むスペースが早いな）
目を輝やかして喋る鈴蘭の言葉に、考輝は一つ引っかかった単語があった。
確かに『論語』もかなり有名な本で読むべき本だが、彼は最初に掲示はしていない。
つまり亞莎は彼に奨められた本を三日で全て読み、別の本を読み始めたわけだ。
そしてそんな事を考えながら本を置いていた方を見ると、考輝は愕然とした。

なんせ置いてあった本の半分近くが無くなっているのだ。

（……仕事中は気付かなかったが……まさかあれだけの本を読んでいるのか？）

半分――つまり五十冊近くを三日で読むという事は、一日十六冊ぐらい読んだという事だ。

流石に考輝も一日でそんなに読めないだろう。

「……そんなに変わったなら会ってみるか」

「はい。じゃあその間に私が書類を纏めておきます。会ったら本当に驚きますよ？」

ニコニコと笑う鈴蘭を残し、考輝は亞莎の陣幕に向かう。

その五分後だった。

顔を真っ青にした玄鳥が考輝の陣幕に駆け込んで来たのは。

統：７８　武：７２　知：６２（＋２０）　政：５８（＋２０）
魅：８７

剣：Ａ　槍：Ａ　戟：Ｂ　弓：Ｃ　騎馬：Ｃ　兵器：Ｃ　水軍：Ａ

特技：火攻（火計が強力になる）

「えっと……どうされましたか？」

亞莎は心配そうな顔をして考輝に尋ねる。

上司が自分を訪ねて来て、会った瞬間に硬直したのだ。心配にもなるだろう。

「……いや、大丈夫だ。それで本が半分近く無くなっていたんだが、持って行ったのは亞莎か？」

考輝は少しの間固まっていたが、またいつもの無表情に戻る。

「あ、はい。読み始めたら面白くなってしまいまして……迷惑でしたでしょうか？」

「それならいいんだ。じゃあ俺は仕事に戻る。読者の邪魔をして悪かったな」

「いえ、そんな事は……」

そこまで言うと、考輝は背を向けて自分の陣幕に戻って行った。

そんな彼の後ろ姿を見て、亞莎は何だか違和感を感じる。

だがまだ付き合いが短い彼女は漠然とした違和感しか感じられない。

もしもこれが付き合いの長い玄鳥や凪達だったら、彼が例年稀に見る動揺をしていた事に気付いただろう。

「――男子、三日会わざれば刮目して見よ……か」

陣幕に戻る途中、彼は周りに聞こえないぐらいの声の大きさで呟く。

この言葉は史実において、呂蒙が呉の軍師の魯粛に言われた言葉だ。

簡単に言えば、男は三日あれば生まれ変わる事が出来るというものだが、亞莎は史実通りそれを体言していた。

この場合は女だが。

（まさかたった三日で知力と政治力が２０も伸びるとは……。とんでもない人材を手に入れたものだな……）

考輝は、今だかつてこんな短時間でここまで能力値が上がった者を見た事がなかった。

麗羽ですらこんな事は流石に無理だろうし、パワーアップキットを使っても駄目だろう。

「……まぁ、味方なら頼もしい限りだな」

考輝はそう考えを纏めると、ひっそりと自分の陣幕に戻った。

「考輝！！　ヤバイ、これは本当に大変な事になった。ぐずぐずしている暇はない！！　急いで洛陽に戻るぞ！！！」

「……一体どうした？」

考輝が陣幕に戻ると、血相を変えた玄鳥がいた。
そして彼を見るやいなや、直ぐさま駆け寄って来る。

考輝は状況がさっぱり飲み込めなかったが、一年近くの付き合いで、彼女がここまで取り乱すのを見るのは始めてだった。
なのでかなりの異常事態である事は理解している。

玄鳥の後ろにいる鈴蘭も顔が真っ青で明らかに普通の状態でない。

「……と、とりあえず話を聞いても驚くな。冷静でいろ。それでこそお前だ」

「分かったからさっさと言え。てかお前が落ち着け」

「じ、実は……丁原さん……古万さんが――――死んだ」

「……は？」

瞬間、考輝の周りの時が止まり、周りの色がどんどん白くなっていく。

そんな錯覚を起こさせる程、彼女の言葉は彼に衝撃を与えた。

命を散らして

時は遡り数週間前、古万は何進の屋敷の中にいた。

外は既に夕日に染まり、紅い色をしている。人々は早足で家へと向かい、空では烏が鳴いている。

そのような時間帯に何故彼女が大将軍の屋敷にいるのかと言うと、ただ単に酒盛りをしていた。

大将軍と州牧と身分にこそ差はあるが、彼女達は旧友であり、親友であり、そして飲み友達であった。

それも愚痴を言い合える程仲が良いくらいの。

「全く権力争いなどろくなものでないのう……。心労で胃に穴が空きそうじゃ」

「そうよね。おかげで宮廷どころか洛陽の空気も最悪。おまけに人もかなり死んでるわ」

何進と古万は屋敷の客間のような部屋で酒を飲み、愚痴り合っていた。

その部屋はそれなりに大きく、乗用車がゆうに八台くらい入りそうだ。

大将軍の屋敷だけあって、装飾品や家具も一級品しかない。
今彼女達がツマミを置くのに使っている皿の一枚でさえ、普通の農民なら一生かかっても買う事が出来ない程の値段だろう。

そんな皿が置いてある机を挟んで、何進と古万は向かい合うように座っていた。

「……それは遠回しに妾を非難しておるのか？」

何進は先程の古万の発言に眉を潜める。そういう意図がなかったとしても、言われて嬉しい言葉ではないだろう。

「さぁ？　別にどうとってくれても構わないわ」

一方古万はどこ吹く風だ。
おそらく大陸広しといえど、時の権力者にこんな態度を取れるのは彼女くらいしかいないだろう。

「……お主なら分かっていると思うが、妾だって好きで人を殺しているのではない。牙を向けてくる宦官共に対してのしょうがなくの措置じゃ」

そこで何進は杯を口に持っていくと、遠い目をする。いろいろと思う事があるのだろう。

「……権力と金があれば楽に暮らせると思いきや、そうではないのう。まさかこんな風にいろいろと頭を悩ませ――――何が可笑しいのじゃ？」

ため息混じりに愚痴を言っていると、何進は途中から古万がニコニコと笑い始めているのに気がつく。

「……今の言葉、昔貴女がまだただの肉屋の娘だった時、よく言ってたな、って思ってね」

古万はやけにゆっくりと喋る。

まるで昔を思い出すかのように。

昔、まだ若い頃、何進は普通の平民で朝廷とは何のゆかりもない

肉屋で働くただの少女だった。
普通に貧しい暮らしをして、普通に兄弟がいて、普通に一生懸命働く。そんな少女だった。

しかし彼女は事ある事に金持ちと結婚して、楽に暮らしたいと言っていた。
結果的に金持ち、どころか皇帝と結婚したのは彼女の兄だったが。
ちなみにその二人の結婚の理由は皇帝側の一目惚れらしい。

そして古万はこの頃から何進と仲が良く、そのため彼女のこの言葉を聞いていた。
なので先程の彼女の言葉からふと昔の事を思い出したのだった。

「……そういえばお主は昔に比べて随分丸くなったのう。
あの時は大人も手をつけられない札付きじゃったのに、人とは変わるものじゃなぁ……」
何進は空になった杯に酒を注ぎながら、古万の昔の事を思い出していた。

何進が肉屋をやっている時、古万はかなりの不良だった。
町一番の悪として有名で、因縁を吹っ掛けられないように誰しも顔を背ける程だ。

何進の目には、彼女と一緒に大通りを歩いた時、まるでモーセの如く人波が古万を避けて別れた光景もまだ真新しい。

「……まぁね。やっぱり子供が作れないって聞いたら嫌でも変わるわよ」

「……」

この時何進はしまったと心の中で思う。明らかにこれは触れてはいけない部分だ。

古万は生れつき子供を産む事が出来ない。
どんな医者もこればっかりはどうしようもないのが現状だ。
おそらくこの時代の医療ではどうする事も出来ないのだろう。

「やだ、そんな顔しないでよ。私なら大丈夫。例え自分で生めなくても、私にとって子供同然の子は何人もいるもの」

古万は何進の心中を察し、慌てて言う。

しかし、それは何進を安心させるための嘘偽りなんかではなく、彼女の本心だ。

恋や張遼達は、古万にとっては単なる部下なんかではない。

大切な自分の子供の一人だ。

「……そうだったのう。

――そういえば、呂布の誕生日に何か贈り物をしたいと言っておったがそれはもう決まったのかえ？」

少しばかりしんみりとした後、何進は思い出したかのように喋り始める。

「勿論よ！　張楊にもう準備してもらってるし、明日にでも渡せるぐらいよ。

しっかり時間をかけて選んだし、きっと恋ちゃんも喜んでくれるわ！」

古万はウィンクをして語調を強める。

それ程自信があるのだろう。

「で、それは一体何なの――」

「秘密よ。まだ張楊しか知らないんだから、言うわけにはいかないわ」

何進が聞こうとするが、言い終わる前に古万は断る。教える気は全く無いらしい。

何進としてはそれが不快で、不満の一つでも言ってやろうとすると、古万は何かを思い出しかのように立ち上がる。

「ごめんなさい、青楼。そういえば私この後麗羽ちゃんと約束があるから、このあたりで失礼するわ」

古万は言いながら身支度を整えると、早足に出口へと向かい始める。

「……最近やけに袁紹と一緒にいる事が多いのう。一体何を話しておるのじゃ？」

何進の言う通り、古万は最近麗羽と一緒にいる事が多い。

時期的に言えば、考輝が洛陽を去ったあたりからだ。

話の内容を聞かれた古万は、出口の前で振り返るとやけに顔がニヤついていた。

「勿論、恋愛相談よ♪」

「古万さんんん！！　一体私はいつになればこの思いをぉぉぉ！！！！」

洛陽のとある酒場で、古万は麗羽に泣きつかれていた。
麗羽の顔は真っ赤でかなり酔っているようだ。

「おお、よしよし。辛い時は思い切り泣きなさい」

そしてそれを古万は優しく抱き留め、まるで親が子をあやすような声を出している。

勿論最初からこんな状態な訳ではない。
初めの内はちゃんと相談をしているのだが、どうも麗羽は泣き上戸らしく、酒が入ると何時もこうなってしまうのだ。

そのため冀州の州牧が并州の州牧に泣きついているというとんでもない状態なのに、酒場の常連や店員は全く動じていない。

三日に一度くらいのペースで見れる光景だからだ。

麗羽と共に来ている顔良も乾いた笑みを浮かべるだけで止めようとはしない。
文醜に到っては主君そっちのけで酒をがぶがぶ飲んでいる。

こんな異常な光景が普通になるまで、麗羽が古万と一緒にいるのには実は訳がある。

恋愛相談も決して嘘という訳ではないが、古万の護衛というのが主な目的だ。

きっかけは考輝が麗羽に宛てた手紙だった。

その手紙には考輝が古万の身を心配する旨が書かれていて、最後

にはそれなりに気をつけて欲しいというものだった。

しかしその手紙を読んで、麗羽はいてもたってもいられなくなる。彼女自身、古万にいろいろ恩義があるからだ。

だからこうして出来る限り古万の側にいて警戒しているのだ。

「うぅ……ヒック！　どうして考輝様は、ヒック！　……よりにもよって美羽さんなんかの、ヒック！　所にぃぃ……」

「大丈夫、その内また会えるわよ」

当の本人は今酒で理性がぶっ飛んでいるが。

「おややー？　そこにいるのは丁原さんと……袁紹さんではありませんかー？」

文醜が酔い潰れ、顔良が介抱の為に店の外に出た頃、古万達は後ろから声をかけられる。

ちなみにまだ麗羽は古万に抱き着いた状態のままだ。

二人がその声の方に振り向くと、そこには金髪でカチューシャを着けた細目の少女がいた。

古万はその少女を見て少し考えると、直ぐに何か思い出しような顔になる。

「貴女もしかして李儒ちゃん？　董卓軍の軍師の」

古万は非常に顔が広い。

なので董卓とも顔見知りで、李儒とも一回か二回くらい会った事が会ったのだ。

「はい、そうです。

……それにしても今一体何をなさっているんですかー？」

「恋愛相談ですわ！」

李儒の問い掛けに麗羽はキリッとした表情で答える。

だが李儒はそれでも状況が理解出来ず困った顔をする。一体何処の世界に人に抱き着いてする恋愛相談があるだろうか。

「そういえば李儒ちゃんは今日はどうしたの？」
そんな李儒の心情を察して、とりあえず古万は話をふる。話題を変えようとしたのだ。

「実は注文していたお酒が届いたと言われましてー、取りに来たわけです。
――どうです？　一杯いかがですか？」
そう言うと同時に李儒は懐から徳利を取り出し、手近にあった杯に中身を注ぐ。
そしてニコニコと笑いながら杯を二つ差し出した。

「……じゃあ頂こうかしら」
古万は最初貰うのは気が引けたが、ここまで用意してもらって断るのも悪いと考え、そのまま受け取る。

「いただきまひゅ！」
麗羽は全く遠慮が無いようだが。しかも呂律が回っていない。

「あら、結構美味しいわね。これってどんなお酒？」

差し出された杯を一口飲んで古万は驚く。予想以上に美味しかったのだ。

注文していただけあって、かなりの名酒なのだろう。

「……」

麗羽なんかは何も言わずに一心不乱に飲んでいる。

「はい。少しばかり特殊なお酒なんですよ……」

そんな古万達に対し、李儒はニッコリと微笑んでいた。

その後、李儒は直ぐに帰り、古万達は数時間近く飲んでいた。

しかし、とうとう麗羽も潰れてしまい、お開きとなる。

だがまだ文醜も回復しておらず、顔良は二人も運ばなければなら

なくなり、古万にも手伝ってもらっていた。

なお顔良は三人の中で一番酒に強く、古万に到っては恋が食べる量くらい酒が飲めるので、まだまだ平気だ。

そしてやっとの事で麗羽の屋敷まで着き、二人を屋敷の召し使い達に預けていた。

「すみません……こんな夜更けに二人を運ぶのを手伝ってもらって……」

門の前で送る段階になって、顔良は申し訳なさそうな顔をして頭を下げる。

もう日はとっくに沈み、満月が人々の真上で輝く時間帯になっている。

申し訳なくもなるだろう。

だが古万は別に気にしてないと言わんばかりに笑う。

「いいのよ。流石に一人で二人を運ぶなんて大変でしょう？

――じゃあ私はそろそろ帰るわ。じゃあね」

古万はそう言うと自分の野営に向かって歩き始める。

顔良はしばらく門の外で見送っていたが、思い出したかのように声を出す。勿論少し離れた古万まで聞こえるような声で。

「誰か護衛をつけましょうか？」

顔良は麗羽が何故こんなに古万と一緒にいる理由を知っている。いつもだったら麗羽が自分で送っていくのだが、今日は無理だろう。

「大丈夫よ！　じゃあ麗羽ちゃん達によろしくね」

古万はそれをやんわりと断り、また歩を進め始める。

そんな彼女の金髪は満月に照らされて溢れんばかりに輝いていた。

古万は洛陽の街を一人を歩いている。

こんな夜更けに他に人もおらず、政治の中心地とは思えない静け

さに包まれていた。
ただ彼女が歩く度に腰に着けている剣がカチャカチャと音が響いていた。

「……あら？」

そんな静けさの中、路地裏の方から女の子の泣き声のようなものが聞こえてくる。
啜り泣きのように小さい声だったが、古万の耳にはしっかり届いていた。

古万は性格上それを無視出来ず、路地裏に入って行く。

声を頼りに狭い路地を進んで行くと、うずくまっている白髪の少女がいた。顔はよく見えないが、泣いているのは確かだろう。

古万は近づいて声をかけようとするが、寸前で違和感を覚える。
彼女が着ている服は高価なものではなさそうだが、余りにも綺麗過ぎる。路地裏での生活の汚れが全くないのだ。
そして彼女の白髪にも見覚えがあり、古万の脳内にはある人物が浮かんでいた。

「……こんな所で一体何をしているのかしら？　趙忠ちゃん」

彼女がそう言うと、少女は泣くのをピタリと止める。
そしてため息混じりに立ち上がると、古万の方をじっと見つめる。
彼女の丸い目は涙で濡れてなどいなかった。

「やっぱり演技って難しいな。張譲みたいに上手くいかないや」

「……それで何の用かしら？　まさか演技の練習に十常侍がわざわざこんな所に来るわけないわよね？」

古万は少女を睨む。喋り方も彼女にしては珍しく敵対心が表れている。

この少女の名は趙忠。
十常侍の一人で、宦官勢力のＮｏ．２。
つまるところ、何進側にいる古万の敵という事だ。

「何の用かって？　そんなのもう分かっているでしょ？」

趙忠が指を鳴らすと、彼女の後ろや古万の後ろから続々と男が現れる。二、三十人はいるだろうか？

全員武器を持ち、下卑た笑いを浮かべている。

狭い路地は、あっという間に男達でうめつくされた。

「暗殺、ねぇ……。それにしても作戦を間違えたんじゃないの？こんな狭い路地じゃ多人数は意味無いわよ？」

そんな状況でも古万は冷静、いや余裕があった。

なんせ狭い場所では大人数の利は無い。一斉に襲う事が出来ないからだ。

実際この路地では同時に三人くらいで襲うのが限界だろう。

だが趙忠もまた余裕の笑みを浮かべている。

「それはどうかな？　間違えたかどうか確かめてみて――よ」

彼女の言葉と同時に、古万の前にいる男と、後ろにいる剣を持った二人の男が襲い掛かる。

すると古万は冷静に剣を抜く。

そして男達が剣を振り下ろすとしゃがんで避ける。

標的を失った剣は互いにぶつかり合い、鈍い音が辺りに響く。

そのまま古万は前の男の足を払い、同時に後ろ向きのまま背後の男に剣を突き刺す。
どうやら内臓が傷ついたらしく男は吐血し、剣を抜くとうめき声を挙げながら倒れる。
更に古万は直ぐさま立ち上がり、こけた男の首を素早く切る。

この間わずか五秒。
古万は武力こそ恋や玄鳥に及ばないが、熟練度においては群を抜いていた。

「……まだやる？」
古万はまだまだ余裕そうだ。
確かにこの分なら五十人いても彼女を殺す事は出来ないだろう。
しかし、趙忠はいまだ余裕の笑みを浮かべている。不気味な程に。
「勿論あんたが死ぬまで続けるよ」
「……分からないわね。これじゃあ無駄に――！」
その言葉の途中で、まるで崩れるように古万はがくりと片膝をつ

く。
しかもまるで全身が痺れたような状態になっているのだ。
これでは戦うどころか、立つ事すら難しいだろう。

そんな古万を見て、趙忠は今にも笑い出しそうな顔をしている。
「やっと毒が全身に回ったみたいね。気分はどう？」
「な……」

それを聞いて、古万は驚愕する。

何故なら彼女は毒には警戒していて、ここ最近は信頼における料理人のものしか食べていない。
外食時も何進の息がかかっている店しか行っていないので、そこで毒を入れるのも不可能。
つまり毒を盛る隙など一切なかったはずなのだ。

その時、古万の頭の中にある光景が浮かぶ。

『――どうです？　一杯いかがですか？』

「……あの子もそっち側って事か」

そう呟きながら、古万は剣を杖にしてふらふらと立ち上がる。
その姿は明らかに疲労困憊と言った感じで、立っているのもやっという感じだ。

「――趙忠様。殺す前にやっていいですか？　こいつかなりの上物ですぜ」

そんな姿を見て安心したのか、趙忠の前にいた男がニヤニヤと笑いながら話しかける。
他の男も似たような顔をして、中には武器を下げている者までいた。

「う～ん、そうだなぁ……。ま、別にい――」

その瞬間、趙忠の目の前で血飛沫が上がり、顔の各所に血がつく。
見れば、先程話しかけて来た男の首から上が無くなって血が噴き出していた。

その首を切った古万は、ふらふらとしながらも剣についた血を払う。

「全く……私もなめられたものね」

その声は決して力強いものではない。毒で身体が動かないのを無理して動かしている声だ。

それなのに、趙忠はまるで自分の首筋に剣を当てられているような錯覚に陥り、首に手を当てる。

「毒だかなんだか知らないけど……いい気になりすぎじゃないの？」

それは男達も同じで皆一様に顔が青い。

「私を殺したいってんなら、もっと命懸けで来いよ！！　餓鬼共！！！」

その迫力に圧され、男達は一歩後ずさる。
今の迫力は、明らかに毒で弱った者のものではなかった。

もう既に趙忠の顔からは笑みは消え、冷淡な表情をしている。

「……ゴメン、皆。前言撤回――――直ぐに殺せ」

男達は言われるまでもないとすぐに武器を構え直す。全員目は殺気立っている。

それを見て、古万の口角は軽く上がっていた。

今彼女の中では走馬灯のように昔の記憶が浮かび上がっては消えている。

――何進との幼少時代

――初めて戦場に出た時

――子供に等しい部下達

――急に現れた彰紅炎と名乗る不思議な青年

――そして

（……恋ちゃん……出来れば、死ぬ前に貴女に会いたかった……）

男達の剣が迫る中、古万はうっすら笑いながら空に浮かぶ満月を見ていた。

「古万様！？！！」

明くる日、とある路地裏で丁原軍の唯一の男である張楊は悲鳴に近い叫び声を挙げる。

――嘘であってほしい

現場に走って行きながらずっと考えていたその彼の思いは、まるで積み木の城のように呆気なく崩れさる。

彼より先に来ていた丁原軍の兵士や彼と一緒に来ていた者も、総じて同じような反応をしている。

「い、一体、何が……？」

張楊は顔をワナワナと震わせながら呟く。その表情は今にも泣き出しそうだ。

「……洛陽の見回りの兵が来た時は既に……」

先程の呟きを質問と捉えたのか、近くにいた兵士が答える。その兵士も顔が真っ青になっていた。

「……犯人は？」

張楊は必死に声を絞り出す。
もう軽く鼻声になっていた。

だがその質問に兵士は無言で首を振る。

「クソ……どうしてだ！？　なんで古万様が――」

その時、重たい物が地面に落ちたような低い音がする。

張楊や兵士達が音のした方を見ると、そこには恋が立っていた。
足元には彼女の得物の方天画戟が転がっている。

彼女は目を見開き、口をぽかんと開け、まるで時間が止まったようにじっと見詰めている。

「……お母……さん……？」

身体中に剣を突き刺され、血の池をつくり死んでいる母の姿を。

命を散らして（後書き）

これはシリアスに分類されるんでしょうか？
自分じゃよく分からないです。
でもなんか半端な気がする。

しかも長いしオリキャラが多い。
……なんかいつにもまして上手く書けない……。

母親となって

恋は丁原軍の陣幕の中にいた。

その陣幕の中央にある机の周りには、張遼、驟雨、そして張楊と丁原軍の核とも言える人物が集まっている。

だが恋はその輪には加わらず、一人隅の方で足を曲げて地べたに腰を降ろしていた。

俯いて頭を膝に乗っけているため表情を見る事は出来ない。

だが机の上に置いてある大量の肉まんに、一口も手をつけていない事が、今の彼女の心境を物語っている。

そして陣幕の中の空気は鉛のように重く、静寂が辺りを包んでいた。

「……張楊。古万さんの昨日の足取りは分かったんか？」

その空気の中、張遼が口を開く。

彼女は目が充血していて、頬にも涙の跡が残っている。

「……最後に袁紹殿の屋敷を去った後は全く分かりません。時間も時間なだけに、目撃者などいませんから……」

重苦しい声しているが、張楊の表情は到って平然としている。だが顔全体は小刻みに震え、今にも泣いてしまいそうだ。

「……」

そして驟雨は何も言わず、ただ顔を真っ青にしていた。流れた涙は既に乾いているようだ。

「……誰……？」

また陣幕内が静まり返った頃、恋が小さく一言だけ発する。

たった一文字の言葉だが、その場にいる全員はしっかりとその意味を理解していた。

彼女は自らの母の仇を聞いているのだと。

『……』

だが誰もなかなか答えようとしない。

その言葉がどれだけ重いかは、言わずとも分かっている事だからだ。

「……曰く――――」

そんな中、驟雨が話し始める。

彼女には今の恋を見るに耐えられなかったのだ。

「――証拠こそ有りませんが、やはり一番怪しいのは宦が――――」

「呂布ちん！？」

驟雨の言葉が言い終わらないうちに、恋は立ち上がり陣幕の出入口に向かって駆け出す。

彼女の顔は恐ろしい程無表情で、右手には方天画戟が握られていた。何の為なのかは、容易に想像がつく。

しかし、出入口を目前にして恋は足を止める。

彼女の前には張楊が両手を広げて立ち塞がっていた。

彼は恋がこういった行動をとる事を予測し、驟雨が話し始めた時には既に動いていた。

「……どいて……」

恋の声には一切の感情がこもっていない。その声だけなら、普段と変わらない感じだ。

「駄目です。どいたら貴女は宦官を一人残らず皆殺しにしようとするでしょう？　それだけは絶対に駄目です」

張楊の顔からは小刻みの震えが消え、覚悟を決めたような顔をしている。

「……どけ……」

そんな彼に恋の語調は強まる。方天画戟を持つ右手は、血が噴き出さんがばかりに強く握りしめられていた。

「分かって下さい。そんな事をすれば今度は貴女が死にます。
いくら貴女が一騎当千と呼ばれていようが、数の暴力には敵いませんから」

しかし張楊は一歩も引かない。

「貴女が死ぬ。それは古万様が一番望まない事であって――――」

「いいからどけ！！！」

そんな彼に恋は叫びながら自らの得物をふるう。
その軌道は確実に張楊の首を捉えていた。

張遼と驟雨はそれを見て顔を青くして冷汗をかく。彼女達クラスの武人には、恋が本気で張楊を殺そうとしているのが分かったからだ。

しかし、彼女の戟は張楊の首の寸前の所で止まる。

それは本当に寸前で、彼には首に刃物が当たっている感触があったし、首からは少量ではあるが血も出ていた。
避ける事は出来ないと思い、一歩も動かなかった彼は自分の頬に嫌な汗が流れるのが感じとれた。

「……」

そして恋はほんの一瞬だけ悲しそうな顔をすると、無言で武器を投げ捨てるように地面に置く。

そのまま彼女は陣幕の外に出て行った。

流石にここまでしてまだ殺しに行く事はないと判断した張楊は、もう止めはしなかった。

「ふぅ……」

恋が陣幕から見えなくなった頃、張楊は崩れ落ちるように地面に座り込む。

全身からは冷汗が滲み出ていて、血色も良くない。

「……怪我は？　それにしてもよくあの恋の前に立てたな。ウチなんかおっかなくて無理やったで」

張遼もまだ顔が青く、そう言って盛大にため息をつく。

張楊には悪いが彼女の中では彼の首がとぶイメージが出来ていたし、正直助かるとは思っていなかった。

それは驟雨も同じで、彼女は安堵したような顔をしながら近くの

椅子に座り込んだ。

「怪我はたいした事ありません。……流石に死を覚悟しましたが。
――時に高順殿。少し届け物を頼まれてはくれませんか？」

「？」

まだ顔色が良くない張楊の唐突な頼み事に、驟雨はただ首をひねった。

「……」

恋は野営の外にある岩の上に一人座っていた。
周りは荒野で彼女が座っている岩以外に特筆すべきものは何も無いような荒野だ。
ただ彼女の後ろには、野営の影がうっすらと見る事が出来る。

「……」

そんな場所で恋は無言でただ空を眺めていた。
その行為に特に意味はない。別段したい事という訳でもない。
ただ彼女は今意味のある事など何もしたくはなかった。

いや、もはや彼女にこの世界において意味のあるものなど無いのかもしれない。

「……恋様……」

恋がそこに腰を落ち着けてからしばらく経ってからだった。
驟雨が野営の方から一抱えもある箱を持ってやって来たのは。

「……」

だが恋は彼女の呼びかけに一切応じず、空を眺め続けている。
驟雨が恋の前に回っても、まるで反応をしない。

「……」

そんな恋を見て、驟雨は下唇を強く噛む。それこそ血が出る程に。

彼女は自分が慕い、尊敬し、あまつさえ愛しさえしている恋のこんな姿を見たくなどなかった。

何より自分の声など全く届かない事が、彼女は悔しかった。

「……恋様。張楊からの届け物です」

驟雨は気持ちを切替、恋に持っていた箱を渡す。

だが恋は受け取るために動こうとすらしない。

なので仕方なく驟雨は恋の足の上に箱を置いた。

「何でも、古万様が生前あなたに用意した贈り物だそうです……」

恋は古万という単語に一瞬だけピクリと反応したが、たいした動きはない。箱を開けようとすらしないのだ。

驟雨はしばらく様子を見ていたが、やがて野営へと戻っていく。

一人の方が良い時もあると思ったからだ。

「……」

驟雨が去って、少しの間ぼうっとした後、恋は箱を開け始める。
先程からしきりに箱がごそごそと動いていて、中身が気になり始めたのだ。

「……わっ……」

箱を開けると直ぐさま一匹の子犬が飛び出して来た。
毛は赤く、箱の縁に前足をかけ、身を乗り出している。
外に出れたのが余程嬉しかったのか、短い尻尾を懸命に振り、出た瞬間に一声鳴いた。

「……あ、駄目……くすぐったい……」

恋は少し呆気に取られていたが、その隙に子犬が恋に飛びついて顔を舐め始める。
犬に顔を舐められるなど初めてだった彼女は、戸惑いながらも子犬を抱え、思わず立ち上がる。

すると足に乗っていた箱が地面に落ち、その衝撃で中に入っていた手紙が出てきた。

それに気付いた恋は子犬を地面に置いて手紙を拾い上げる。

その手紙には見慣れた文字で『恋ちゃんへ』と書かれていた。

『ごめんなさいね、恋ちゃん。出来れば直接会って渡したかったんだけど、この手紙を読んでいるって事は出来ていないのよね。

……こんな事ならもう少し計画的に仕事をやっておくべきだったわ。少し溜めすぎちゃった。

――それで恋ちゃんへの誕生日の贈り物は子犬にしてみました。

食べ物でも良かったけど、そしたら恋ちゃん例年のように直ぐ食べちゃうでしょ？　だからそろそろ残る物の方が良いかなって思ったの。

……流石に犬を食べようとはしないわよね？

それでその子犬なんだけど、実は名前がまだ無いの。それからその子のお母さんは産むと同時に死んでしまって母親もいないわ。

だから恋ちゃんがその子犬に名前をつけてお母さんになってあげ

て。
貴女が養って、守って、導いてあげて。
……犬にしては大袈裟って思うかもしれないけど、私は子供を育てるって事は人だろうが犬だろうが変わらないと思うの。
――ともかく、貴女は今日から私の娘ってだけでなくその子の母親よ。
……あら？　これ私おばあちゃんって事？　何か嫌な響きね……。
とりあえず最初はいろいろ心配かもしれないけど、恋ちゃんなら大丈夫。
何たってとっても強くてとっても優しい、私の自慢の娘だもの。
――貴女の母より』

「……涙……？」
ちょうど手紙を読み終えた時、手紙に液体が落ちる。そして頬をさすって恋は初めて自分が泣いている事に気が付いた。
不思議な事に泣いていると自覚すると尚更涙が出てくるようで、ポロポロと頬を流れ続ける。

そしてなお不思議な事に、涙を流すたびに心の中にある悲しみが薄くなっているようにも思えた。

そのうち涙の量が増えるにつれ、彼女の顔がどんどん崩れていき、しまいには大声を上げて泣き始めた。

恥も外聞もなく泣きじゃくり、次から次へと涙が溢れてくる。

そうやって悲しみが薄くなっていく彼女の心は、この世界に新たな意味を見つけていた。

その姿の唯一の目撃者の子犬――後のセキトは、心配そうに鼻で鳴くと、彼女の足に擦り寄っていた。

「で、あんたは一体何をしに来たんや？」

ちょうどその頃、丁原軍の陣幕には一人の客人が来ていた。

張遼、驟雨、張楊が相手をしているが、全員少しピリピリしている。驟雨に到っては殺気立っているくらいだ。

時期が時期だけに、どうにも部外者にはこうなってしまうだろう。

しかし客人はそんなものに一切動じず、元からの細目を更に細める。

「そんな殺気立たないで下さいよー。こんな武人に囲まれて睨まれたら怖いですから。

――それで、私の話を少し聞いてくれませんか？」

そう言って客人――李儒はニッコリと微笑む。

しかし、その細い瞳の奥は、決して笑ってなどいなかった。

悲しみの中で

張楊は洛陽の近くの港の中にいた。

その港は以前何進が焼き払ったものだが、今では舟が出せるくらいに機能が回復している。

だがまだ完全でというわけではなく、所々壊されて廃墟となった無人の建物が残っている。

余り人を見かけないのも今が早朝だからというだけではないだろう。

そんな港に、朝もやが辺りをうめつくす中、張楊は今まさに舟に乗り、出立しようとしていた。

「まさか私だけで帰る事になるとは……洛陽に来た時は夢にも思いませんでしたよ……」

張楊は誰となく呟く。その声は余りにも弱々しい声だった。

古万が死んでから約一週間、トップを失った丁原軍は主に二つのグループに別れていた。

一つは軍を辞め、故郷の并州に帰るグループ。

張楊はこのグループに属し、今ちょうど舟で并州に向かうところだ。

そしてもう一つは董卓軍の客将となり、洛陽に残るグループだ。

これは恋や張遼や驟雨といった丁原軍の大多数からなっている。

何故急に董卓軍の客将になったのかと言うと、李儒がある取引を彼女達に持ちかけたからだ。

『客将になれば、董卓軍は丁原暗殺の犯人の捜索に尽力する』

この取引に恋は直ぐさま飛びついた。

なんせこれならば犯人を捜し、証拠を押さえられる可能性は大幅に上がる。

しかも客将という事は形だけとはいえ丁原軍の形を残せる。李儒は個人単位ではなく、一軍として彼女達を迎えると言ったからだ。

通常軍のトップが死んだ時には新しい代表を立てるのが普通だ。
しかし、丁原軍においての古万の存在は余りにも大きかった。
だから下手に新しい代表を立てたとしても上手くいかず、最悪、空中分解して仲間割れをする可能性すらある。

そのため張遼や驟雨もこの取引に応じ、客将となった。

だが将の中で唯一張楊だけはその取引に応じず軍を辞めた。
彼は正直なところ、話が上手過ぎると感じている。
古万が死んでからそんな体制を整えるまでが異常なくらい早いし、いくらなんでもこちらの利が大きすぎる。

『――それで、私の話を少し聞いてくれませんか？』

そして何より、彼は取引を持ちかけて来た李儒の笑顔を信じる事など出来なかった。
それこそ何か裏がありそうで。

「……私の杞憂だった、っていうのが一番何ですがね……」

張楊は先程とはまた違った感じで呟き、ため息をつく。

去る前に残る者に一応の忠告はした。

軍を離れたのもいざという時に少しでも動きやすくするため。

だがそういった準備も必要なかったというのが一番好ましい。

（……とりあえず并州で一から勢力を作り上げなければ）

そう考えを纏めた張楊は船頭に舟を出してもらうように頼んだ。

張楊が并州へと向かった頃、麗羽は陣幕で顔良と二人で書類仕事をしていた。

朝早く起きて、仕事や勉学に勤しむ事は数ヶ月前から彼女の日課となっている。

ちなみに文醜はまだ夢の中だ。

「……斗詩」

「あ、はい。何ですか？」

途中、麗羽が手を止めて顔良に話しかける。だが麗羽の視線は手元にある書類から動かない。

「あの日の夜……貴女は何か違和感を感じませんでしたこと？」

彼女はやけにゆっくり話し、声からは余り感情が感じられない。

そしてあの日とは古万が死んだ日の事で、彼女は顔良や文醜に何度も同じ質問をしていた。

「……すみません、特には……。それに私、文ちゃんを介抱してたから余り店にいませんでしたし……」

何度も同じ質問をされてるというのに、顔良は丁寧に答える。その顔はどこか申し訳なさそうだ。

「そう……何度も答えてくれて有り難うですわ」

「あ、いえ……」

そして麗羽は再び仕事に戻り、黙々と書類を処理していく。

そんな彼女に顔良は何だか違和感を覚えていた。

（何だろう……。何て言うか……今回姫がやけに落ち着いてるんだよね。

彰義さんの時は洛陽を離れるってだけであんなに泣いていたのに）

顔良が見る限り、麗羽に余り悲しんでいる様子はなかった。

勿論初めて聞いた時は驚いてもいたし、涙も流していた。

だが、それっきりだ。

前のように何日も部屋に閉じこもり、泣く事などない。

最初の一日こそずっと部屋にいたが、それは酒で壊したからだ。

何でも飲み過ぎで身体が痺れたらしい。

（……麗羽様、一体どうしたんだろう？）

顔良は心配そうな顔をしながら、黙って手を動かす麗羽を見ていた。

「……」

そんな事はいざ知らず、麗羽は仕事をしながら、ある事を考えていた。

それは古万が死んだ事に対する悲しみでも、考輝に頼まれた事を出来なかった不甲斐なさでも、最後に会っていたのにという後悔でもない。

（……私……何か大切な事を忘れている気が……）

ただ、本人でも分からない何かを思い出そうとしていた。

麗羽はいつも酒を大量に飲むと記憶が飛び飛びになる。だから古万に泣きついていた事など微塵も覚えていない。

だが、いつもの事と許容出来ないぐらい大切な何かを忘れている気がしてならなかった。

（――それに……次の日の身体の痺れ……あれもどうにも違和感がありますわ）

医者は酒の飲み過ぎだと診断していたが、何故だが麗羽は信じられなかった。

（一体私は何を……。
――でも一つだけ言えるのは――――）

この麗羽の苦悩は、もうしばらく続く事になる。
しかし、この時の麗羽はある覚悟を決めていた。

（――私が……必ず犯人を特定して、仇を取りますわ！）

そう考えていたからこそ、麗羽は無駄に悲しんで時間を浪費する訳にはいかなかった。

それから数週間後、古万の死は豫州にいる彰義軍に旅の商人によって伝わった。
亞莎のような豫州から配下になった者を除き、大多数の者はその報を悲しんでいる。
洛陽から来た者は多かれ少なかれ古万に世話になっている者が大半だからだ。

そしてそれは考輝も例外ではなかった。
むしろ、人にこそ見せないが、一番悲しんでいるようだ。

「……」

古万の死を聞いた日の夜、考輝は一人で草原に立っていた。
新月のため月明かりは無く、星の光と遠くでうっすらと光る野営の明かりぐらいしか光源はない。

そんな草原にいる考輝は、とてつもなく無表情だ。
それこそ普段通りなのだが、右目からはほんの一筋だけ涙が流れている。

彼がこの世界にやって来てから初めての涙だった。

悲しみの中で（後書き）

テンポが遅くてすみません。
本当に上手くまとめられない……。

あと、どうにも風邪気味でして今回いろいろ酷いかもしれません。

荊州に行って（前書き）

完全に風邪引いた……。
喉が痛い……。

そのせいでテンションおかしくて連投。
でもやっぱ所々文が変かもしれません。

荊州に行って

張勲は汝南の政務室の中にいた。

まだ日が完全に昇っていない薄暗い時間帯の中、一本の蝋燭が部屋を照らし、数人の影が壁に映し出されている。

そこにいる者は全員袁術軍の中枢を担う者達だ。

顔ぶれも将軍の紀霊から文官の閻象と幅が広い。

「さて、皆さん。美羽様の説得は私が昨日終えましたから、各自準備の方をお願いします♪」

暗い部屋の中に張勲の明るい声が響く。

そして全員その言葉に頷くと、何人かは部屋を出て行く。

どうやら出て行ったのは全員武官だったようで、部屋には文官だけ残った。

「……孫堅さんから返事は来ましたか？」

武官達が部屋を出た後、残った張勲はその場にいる者に問い掛ける。

若干先程と声のトーンが違い、緊張しているようだ。

「『是非とも参加させてもらう』との事でした。まぁ勢力を拡大したい彼女からしたら当然でしょう。
……それから、彰義軍は一体どうしましょうか？」
「それは良かった♪　心強い限りです♪
それから彰義さんには今日私から言っておくので大丈夫です」
残った文官のその答えを聞き、張勲は安心したようにニコニコと笑い始める。声の感じもいつも通りに戻っていた。

「――では皆さんも、軍事進行の用意をお願いします」
ただ、表情こそ笑っていたが彼女の目は珍しく真剣そのものだった。

「ふむ……」
その日の昼、早めに午前中の仕事を終えた考輝は、陣幕で久しぶ

りにパワーアップキットを弄っていた。
古万が死んだと聞いた後、少し亞莎に使ったきりだったので、大体一ヶ月ぶりに触る事になる。
そして今は現在使用可能なコマンドを見ていた。

武＋５（低）×２
政＋５（低）×１
知＋５（中）×１

諸刃（敵部隊に与える損害が増えるが、自軍の損害も増える）
暗器（暗器の精度が上がる）
強行（行軍スピードが上がるが、士気が下がりやすくなる）

しかし現在使用できるコマンドは数少ない。一年で増えるイベントも沢山あったが、それでも消費の方が断然早かった。
将だけでなく、有能な兵士にも使い始めたからだろう。
そのため現在残っているコマンドは、デメリットがあって使えなかった物や使う対象がいなかった物が多い。
（……あと特技で簡単に使えそうなのは暗器くらいか。あとはデメリットが厄介だからな。

でも普通武官は暗器なんて使わないんだよな。中には不意打ちすら嫌う奴だっているし。
……一応俺と亞莎には付けたがあとは誰に――）

「は～い、失礼しま～す♪」

考輝がパワーアップキットに関していろいろ考えていると、張勲がいきなり陣幕に入って来た。
彼女の後ろでは鈴蘭がオロオロしている。

「……」

そんな張勲の行動に、考輝は眉をひそめる。

いくら義勇軍とはいえ、他の軍の大将の陣幕にいきなり入り込むなど無礼極まりないからだ。
大方鈴蘭はそんな彼女の行動を止められずオロオロしているのだろう。

「……これは張勲殿。本日はどういった用件で？」

しかし考輝は直ぐいつもの無表情に戻り、普通――むしろ丁寧に対応する。
立場上、下手に逆らう訳にいかないからだ。

そんな事を知ってか知らずか、張勲はやけにニコニコしていた。

「そんなに固くならないで下さいよ♪　――今日は依頼をしに来ました」

「依頼？」

張勲の言葉に、考輝は少し意外そうな顔をする。

彼の知っている限り、今袁術の領内に義勇軍を雇ってまでも倒したい敵などいない。

なので人材の引き抜き辺りだと考えていた彼には少々意外だった。

「そうです～。実はですね、後三日程で――――」

「――袁術軍が江夏に一万近くの大兵力で侵攻するだって！？　しかも孫堅軍と俺らに援軍を要請した上で？！」

張勲が帰った後、彰義軍で緊急に開かれた軍議で、考輝から話を聞かされた玄鳥は素っ頓狂な声を上げる。

その場にいる他の主な将達も、声にこそ出していないだけで全員

玄鳥のように驚いていた。

「……それって何かマズイんスか？」

ただ一人、事の重大さを理解していない因幡を除いて。

「……下手をすればこの侵攻が原因で乱世が始まる危険性がある。だから世間一般から言えばマズイ事だ」

考輝はため息混じりに説明する。ちなみに因幡は知力だけなら初期の麗羽と変わらない低さだ。

今、漢王朝は非常に際どい情勢の上に成り立っている。

いつ大乱が起こってもおかしくないし、いつ完全な乱世に突入してもなんら不思議はない。

そんな状態だから、何かきっかけがあれば直ぐさま大陸中を戦火が包むだろう。

だから諸侯達は下手に動かず、黙々と力を溜めている。

何かあってもせいぜい小規模な、小競り合いのようなものがあるくらいだろう。

だが今回の袁術の侵攻は完全に小競り合いのレベルを越えている。
江夏は現在荊州州牧の劉表の勢力下にあり、彼女の戦力から考えても決着はそう簡単につかないだろう。
更に今回は劉表と敵対している孫堅まで巻き込んでの戦い。
乱世の起爆剤としては、充分足りる規模の戦いだ。

「……理解したッス！」

因幡は元気良く言うが実際のところは半分くらいしか理解していない。
それが分かったのか、隣に座っている大宛はため息をついた。
そしてその後小さく一言呟く。

「……時期……尚早……」

「……確かに時期が早過ぎますよね。袁術自身、まだ領内に問題を抱えていますし……」

大宛の呟きに亞莎が同調する。
実際彼女達の言う通り、軍を動かすにはまだ時期が早いと言える。
だからこそ他の諸侯達も大きく動いていないのだ。

しかも袁術はまだ内政を安定させる事が出来ていない。
端から見ればかなり疑問がある動き出しだった。

「……一体袁術は何を考えているのか……」

「実は何も考えとらんで、適当に動いているんやないの？」

「それも有り得るの！」

そう言って真桜と沙和は笑い、凪はそれはないだろうと肩をすくめる。

「……」

しかし、考輝にはそれが冗談でなく、本気で有り得そうな気がして恐ろしかった。

「で、結局俺らはどうするんだ？　三日後出陣なんだし、答えは早めに出した方がいいんじゃないか？」

「ああ……」

玄鳥に言われ、考輝は少し考え込む。

正直な話、彼はかなり迷っていた。

この件でもし乱世が始まるならば、流れに取り残されないためにも地盤を持たない彼等は参加した方が良い。

しかし、一緒に戦うのはあの袁術軍だ。軍のトップがあれな感じの袁術軍だ。

それだけでかなりのリスクを負う事になる。

しかも、袁術が今回の動きがまるっきしノープランの、ただの思いつきだけの動きだったら更に危険だ。　下手をすればこの軍の存続に関わる問題にまで発展してしまう。

そう考えると、考輝は易々と決める事など出来なかった。

「……鈴蘭、亞莎。お前達はどう思う？」

決めかねた考輝がそう聞くと、あらかじめ答えを用意していたのか鈴蘭は即答する。

「我々も参加すべきです。名を上げる良い機会ですし、この手を逃す手は無いと思います」

「えっと……私も同じ意見です。袁術軍はなかなか危なかっしいですが、孫堅軍は信用できまし、何より強いです。
だから危険性もそれなりには抑えられるかと……」

亞莎も鈴蘭の後に続く。まだ自信がなさそうだが、だんだんと軍師が板についてきている。

ちなみに彼女が孫堅軍に関して詳しいのは一時期孫堅が治める長沙にいたし、義姉が現在所属しているからだ。

「……なら決まりだな。全部隊に出陣準備をさせろ。三日後と言わず、もっと早く出られるようにしておけ」

二人の話を聞いた後、考輝は直ぐにそう決断すると、全員に準備を急がせる。

（さて……孫家三代の器、しっかり見させてもらおうか）

考輝は指示を出しながら、ひそかにそう考えていた。

それから五日後、予定より遅れたが袁術軍、彰義軍の両軍は汝南を出立した。
なお遅れたのは袁術軍が出陣準備に手間取ったからだ。

袁術軍一万、彰義軍三千の計一万三千の兵士達の行軍はかなりの迫力が出ていた。

そして行軍を続ける事約半月、予定より遅れたが両軍は孫堅軍との合流地点に辿り着いた。
なお遅れたのは袁術軍の行軍のスピードが異常なまでに遅かったからだ。

そしてそれだけ遅れていれば、勿論孫堅軍は既に野営を展開して待っていた。
若干遅れるという事は事前に人をやって連絡をしていたので、たいした動揺もない。

しかし遅れたのは事実なので、とりあえず考輝は野営の設置を凪達に任せ、一人で孫堅軍に謝罪しに行った。
こういった仕事は、普通彼のようにトップの人間が行くべきでは

ないのだが、正規軍と義勇軍。立場に雲泥の差がある。
これくらいして当然だろう。

だが結局のところ、考輝が孫堅軍の将達のステータスを見たいという理由がでかい。

こうして考輝は孫堅軍の野営を訪ねて行ったのだが――――

「……酒臭っ……」

――何故か孫堅軍は宴会の真っ最中だった。

一方その頃、袁術、孫堅の両軍が攻めて来た事に慌てふためく劉表軍の本拠地、江陵では軍師の蔡瑁は城の外酒屋で一人頭を抱え、酒を飲んでいた。

なかなかの美男子で彼が着ているゴツイ水色の鎧もなかなかに似合っている。

「クソッ……」

彼は思わず酒を飲みながら悪態をつく。

まさか袁術軍がこんなタイミングで攻めてくるなど予想だにしていなかったのだ。

そのため江夏にある備えは少なく、至急救援しに行かなければならないのだが、無策で行けば圧倒的戦力差であっという間にやられてしまうだろう。

だが蔡瑁にはそんな状況をひっくり返す策を思いつく事が出来ない。

だから彼は非常に焦っていた。

（……いっその事見捨てちまうか？）

とうとうそんな考えすら浮かび始めてしまう。

ちょうどその時だった。

「……お困りですか？」

後ろから声をかけられたのは。

蔡瑁は声をかけられた方向くと、フードで顔を隠した子供が立っていた。

顔は見えないが声の感じからしておそらく女だろう。

「……」

年端もいかない子供だと分かると蔡瑁は前に向き直ろうとする。

格好からして物乞いだと判断したのだろう。

「……袁術や孫堅、彰義に勝たせて差し上げましょうか？」

「……何？」

だが思わず蔡瑁は少女の言葉に振り返る。
藁にも縋りたい彼の心境は無理な事だと分かっていても、そういう言葉につい反応してしまう。
例えそれが物乞いの少女の戯言だとしても。

その言を無視せずに聞いた。
これが蔡瑁がこの戦でした一番の大手柄なのかもしれない。

孫堅と会って（前書き）

更新遅れてすみません。

所謂スランプです。

なんか急に書きづらくなりました。

でもなんとか更新頑張っていきます。

孫堅と会って

考輝は孫堅軍の野営の中にいた。

今回孫堅が袁術軍への援軍として連れてきた兵は五千。練度や士気も高く、率いている将も有能な者ばかりだ。

挙兵当初から孫堅に仕える黄蓋、軍師の周瑜、娘である孫策。数え上げればきりがない。

ちなみに次女である孫権と、末子の孫尚香は今回他の将達と留守番らしい。

そんな軍の野営に考輝は訪ねていた。

目的は到着が遅れた事に対する謝罪、そして有能な将達のステータスを見る事。

「――何故こうなった……」

しかし、そんな考輝の考えとは裏腹に孫堅軍は宴会の真っ最中だった。

なんでも袁術軍が来るのはもっと遅くなるだろうと考えていたら

しい。
ここだけならまだ良い。また後で訪ねればいいだけなのだから。
だが、先程のように考輝が言った理由は別にある。

「あら、全然飲んでないじゃないの？　早くしないと無くなっちゃうわよ？」

「……お前と飲む量を一緒にするな。孫策」

帰ろとしたところに、孫策に見つかったのが問題だった。

彼女は彼を見つけると、無理矢理宴会に引き込み、周りで孫堅軍の兵士達がドンチャン騒いでいる中で一緒に酒を飲ませていた。
しかも宴会に用意されている酒の量が半端ではない。
考輝なんかいるだけで酔いそうなレベルだ。

（……俺自身余り酒に強い方ではないからな。なかなかこの場にいるのも辛い……）

彼は既に軽くグロッキー状態になっている。

「そう？　でも母様なんかもっと飲むわよ」
そう言うと孫策は杯に入っていた酒を一気に飲み干す。
けろりと彼女は飲んでいるが、その量もなかなかに多い。

細身の身体に日焼けなのか褐色の肌をしていて、髪は桃色といった感じだ。
今は酒を飲んで笑っているが、動作の一つ一つが彼女が武人である事を思わせる。

そして異様に露出の多い服を着ている。
しかもそれで戦場に出るというのだから驚きだ。

統：９６　武：９８　知：７１　政：４８　魅：９５
剣：Ｓ　槍：Ｓ　戟：Ａ　弓：Ｂ　騎馬：Ｓ　兵器：Ｃ　水軍：Ｓ
特技：勇将（指揮部隊の能力値を上げる）

（――だがステータスは半端じゃない。戦闘に関してなら隙は無い

し、陸戦でも水上戦でも対応出来るのは凄いな。しかもまだ全体的に若干だが伸びしろがある。
……華琳もそうだったが、やはり王になるレベルとなるとステータスが凄まじい。これで後見てないのは孫権と劉備か。かなり高いんだろうな。
――天下を狙うなら、いずれこんな英雄達と戦う必要があるのか……)

考輝はそんな事を考えながらちびちびと酒を飲む。
思案顔をしながら酒を飲むその姿は陽気な宴会の場には不似合いで、かなり浮いている。
だが周りの者は皆酒に夢中で、誰も気づかない。

ただ孫策だけは少し気になったようで、酒を飲むのを中断していた。

「……どうしたの？　そんな怖い顔して」

「……いや、たいした事じゃない。ちょっと考え事をしていた」

考輝はそう言うと、ごまかすように持っていた酒を一気飲みする。

「……」

孫策は無言で彼を少し見た後、何事もなかったかのようにまた酒を飲み始めた。

「――――じゃあその村の長老の一言で、義勇軍を率いる事になったんだ。
それにしてもよく一年でここまで軍を大きく出来たわね。普通難しいわよ？」
「なかなか大変だったがな。でも有能な奴が何人もいたから上手く事が運んだんだ。俺一人じゃあ到底ここまで出来ない」
あの後、考輝は酒を飲みながら孫策にいろいろと質問を受けていた。
酒で酔っているのか、彼はいつになく饒舌になっていて、かなり言葉数が多い。
なので次々と自分の昔話をしている。
「ふ～ん……意外と謙虚なんだ」
「……意外とってどういう意味だ」
考輝は少しむっとしたようだが普段から無表情なので、傍目からは分かりずらい。
だが孫策はその微妙な変化に気付いたようだ。

「冗談よ、冗談」
孫策は悪戯っぽく笑うと酒を飲む。考輝も一応冗談だと分かっていたのか別に咎めたりはしない。
さっきからこんなやり取りが続いていた。

「おいおい、誰か知らねぇ男と飲んでると思ったら客人じゃねぇか。それならさっさと伝えに来いよ」
しばらく先程のようなやり取りを続けていると、何処からか女性が一人肩を竦めながら歩いて来た。

彼女も桃色のような髪に褐色の肌をしている。
服はチャイナドレスを着ているが、服の幅が極端に狭い。そのため彼女の大きな胸は正直隠しきれていないし、太股もかなり見えている。
頭には赤い帽子をかぶり、腰には剣が一本下げられている。

容姿は孫策とかなり似ていて、同じ所より違う所を探す方が難しいくらいだ。
一目見て違うと分かるのは目。孫策よりも細く、よりキリッとし

ている。

そのため印象も違い、彼女は落ち着いた雰囲気を漂わせている。

「あっ、母様」

孫策は彼女に気付くと酒を飲むのを一時中断し、母様と呼んだその女性に向き直る。

（……こいつが孫文台か）

一方考輝は孫策の反応からすかさず彼女が孫堅だと判断していた。確かにかなり似ているし、言われなくても彼女達は親子だと分かるだろう。

ただ、非常に若く見える。

いくら多く見積もっても三十代前半で、とても孫策程の大きさの娘の母親には見えない。

（……古万さんや何進もそうだったが、この世界の女性って本当に若く見えるよな。実年齢なんか見た目じゃ分からないし。

……とりあえず、ステータスを見るか）

考輝は考えるのもそこそこに、孫堅のステータスを開く。

統：１０８　武：９１　知：７４　政：７３　魅：９８
剣：Ｓ　槍：Ｓ　戟：Ｓ　弓：Ｃ　騎馬：Ａ　兵器：Ｃ　水軍：Ｓ
特技：奮戦（敵の兵力が多ければ多い程、敵に与える損害が増える）

（……やはり並のステータスじゃないな。流石にこれ以上伸びる事はまず無いみたいだが）

虎の子は虎。ならばその逆もしかり。
考輝は内心そう思っていた。

「いいじゃない。別に特別急ぎの用件じゃないみたいだし」

「ば～か、世の中には礼儀ってもんがあるだろ。この大陸の何処に来た客を、いきなり宴会に引き込む阿呆がいるんだ。
まったく、冥琳の奴が教えてくれなかったらこの馬鹿娘が、大事な客人を無下に扱うところだったぜ」

「ぶ～、そこまで言わなくてもいいじゃない」

二人のやり取りを見て、考輝は親子というより友達のような印象を受ける。しかも顔が似ているのでさながら姉妹のようだ。

「――で、結局のところお前は何をしに来たんだ？　彰紅炎」

考輝がそんな事を考えながら二人を見ていると、孫堅が急に振り返り、彼に問い掛ける。

宴会の真っ只中だというのに、ここで用件を聞くつもりのようだ。

彼はいきなり話を振られたのに驚きながらも、冷静に口を開く。

「……この場所に到着するのがかなり遅れてしまったので、野営を張る時間を利用して、その謝罪を――――」

「――あー……そういうの別にいいよ。面倒臭ぇし」

しかし、考輝の言葉は孫堅に一蹴されてしまう。

一応、孫堅の表情を見る限りでは、考輝の事が嫌いとかそういう訳ではなさそうだ。

だが、いくらなんでもそんな切られ方をするとは思いもしなかった考輝は、少し呆然とする。

まさか謝らなくていい理由が面倒だからなど、どんな者でも予想

出来ないだろう。

「……母様さっき私に礼儀がどうとか言ってたわよね？」

「うるせぇな。だって謝罪の言葉とか回りくどいくて面倒じゃん。そんな気にしてわけでもねぇし、聞いてて怠い」

半分呆れ顔で言った孫策の言葉も、孫堅には余り意味をなさないようだ。

だが正直、娘が母に言う言葉とは到底思えない。

「――それより良い酒持って来たんだ。俺達の出会いを祝して三人で飲もう」

「……さっき自分の娘に言った事覚えてますか？」

いくら初対面とはいえ、考輝も流石にこれには突っ込まざるを得なかった。

「――私の献策は以上です」

「……」

その頃、江陵にある蔡瑁の屋敷の客間には、一人の男性とフードを深くかぶった少女がいた。

窓から外を眺めながら、少女の話を聞いていたこの男性こそ、この屋敷の主の蔡瑁だ。

彼は神妙な顔つきで少女の話を聞き、話が終わると部屋の中央の少女に向き直る。

「どうですか？　この策なら充分目的を果たせると思いますが」

「……だろうな。だがしかし話が上手過ぎる」

「……」

少女の献策した策は、確かに袁術軍や孫堅軍に攻められているこの状況を、打破出来る確率がかなり高い。

しかしだからこそ蔡瑁は信用ならなかった。

何せこの場面で少女が彼に献策するメリットなど何も無いのだ。
直接劉表に言ったほうが彼女の評価は上がるし、上手くいけば登用して貰えるかもしれない。

それなのに少女が彼に言った条件は『自分も出兵に同行させる事』だけだ。

いくら蔡瑁の方が会って献策出来る確率が高かったとしても、その条件が非常に不自然だ。

「お前は一体何がしたい？　お前に一体何の得がある？　そしてお前は一体何者なんだ？」

最初少女に会った時は酒のせいもあり何にも疑問に思わなかったが、今は違う。彼の頭はしっかり冷静になっていた。
そうなると、少女への懐疑などいくらでもあった。

「……ただ単に、八つ当たりですよ」

少女はそんなに疑われながらも、静かに返答する。
それは蔡瑁が言った後、静かになった部屋に響く。

「私の力量が及ばなかっただけ、だとは分かっているのですが、どうにも納得出来ないんですよ。
だって私が奴に負けたから、私の大切な人は、死ぬより酷い目にあっているんですから」

その言葉も決して大きなものではなかったが、蔡瑁の胸に重くのしかかった。
怒気とも悲しみとも取れるようなその口調は、不思議なまでに彼に耳に残り、反響する。

そして何故か上手く口が動かない。まるで彼女の迫力に圧されているかのように。

「……それで結局お前は何者なんだ？」

そんな中で、蔡瑁はやっとの思いで言葉を口にする。

そして少女はそんな彼を馬鹿にしたのかどうかは分からないが、笑い始める。

「クスクス。確かに顔も名前も分からない相手じゃ不安ですよね？」

少女はそう言って、さっとフードを頭から下げた。

そして少女の顔を見た蔡瑁は思わず声を上げる。

別に彼女の顔に見覚えがあったりする訳ではないし、異常に醜いというわけではない。むしろかなり整っている部類だ。

しかし、何より右の頬の大きな火傷の痕が目立った。
顔には他には無いようだが、首輪の隙間からも火傷の痕が見える。
もしかしたら、服に隠れているだけで他にもあるのかもしれない。

そんな火傷の痕を見て呆然とする蔡瑁とは別に、少女はまだクスクスと笑っている。

「クスクス。やはり目立ちますよね？　ちなみに言っておくと、この怪我も八つ当たりの中に含まれています。
あ、それて私の名前でしたね。私の名は――――」

「姓は司馬、名は懿、字は仲達と言います」
名乗った時も少女――司馬懿は笑っていた。

しかし蔡瑁はその頬に火傷がある少女の笑っている姿を、非常に恐ろしく思った。
そしてそれと同時に、こいつならばと期待感が沸き上がってきた。

孫堅と会って（後書き）

スランプとか以前に司馬懿の事がすっかり忘れられていないか心配です。

酒に飲まれて（前書き）

……どうにも上手く書けません。

酒に飲まれて

亞莎は自分の陣幕の中にいた。

陣幕といってもかなり小さめのもので、天井の高いテントと表現した方が良いかもしれない。
まだ陣幕を張ったばかりだが、既に彼女の私物が置かれ、壁際には大量の本が置かれている。

そしてそこには、今客人が一人来ていた。

「……凄いな。彰義殿に仕えてから、これだけの本を読んだのか？」
そのチャイナドレスを着た客人は、壁際にある亞莎が読んだという本の量を見て唖然とする。

彼女の知っている亞莎は決して頭の良いものではなく、本を読んでいるイメージなどまるで無い。
それなのに、久々に会ってこれだけ読んでいるとなれば驚きもするだろう。

客人の名はトウ当。孫堅に仕える武将で、亞莎の義姉にあたる人物だ。

孫堅軍は現在宴会の真っ最中で仕事がなく、彰義軍も野営の設置が一段落ついたようなので、訪ねて来ていた。

「う、うん……。まだ暗唱出来ないのもいくつかあるけど……」

亞莎はトウ当の褒め言葉に頬を赤らめ、恥ずかしそうに下を向く。

その仕草はトウ当が彼女と別れる前からしているもので、唖然としていたもので、それを見てトウ当はふぅ、と息を吐き、微笑む。

まるで急に変わった義妹の、変わらないところを見つけ安心したようにも見える。

（まったく、恥ずかしがりやは相変わらずか。

……それにしても――）

彼女は再び大量の本を見る。

最低でも百冊は越え、これだけの量をほとんど暗記するなど並大抵の事ではない。かなりの頭脳と労力を必要とするだろう。

（――まさか亞莎にこんな才能があるとは……。恥ずかしい事だが、私は全く気づかなかった。
……彰義殿に亞莎を任せたのは間違いではなかったようだ）

トウ当は、先程とはまた別な感じの安堵の表情を浮かべる。

正直な話、彼女は亞莎を考輝に託したものも、かなり心配していた。
考輝の一介の義勇軍にすぎなかったこの軍を、ここまで大きくした能力の高さこそ理解していたが、人間性的には余り信用出来ていなかったからだ。

何と無くではあるが、どうにも彼自身が何かを偽っている気がして。

だが今の亞莎を見て、彼女のそんな思いは大分薄くなっていた。

「ねぇ……義姉さんは後どれくらい大丈夫なの？」

トウ当が考えをまとめていると、亞莎が遠慮がちに口を開く。

彼女が聞きたいのはトウ当がここにいれる時間。
久々の、血が繋がっていないとはいえ姉妹の再開。

亞莎としては少しでも長く一緒に居たかった。

「……しばらくは大丈夫のはずだ。今孫堅様は宴会を開いているし、急に私が必要となる事も無いだろう」

トウ当は少し考えてから言う。

これは亞莎としては望ましい事なのだが、一つ引っ掛かる事があった。

「……宴会中？　たしか今、考輝様が孫堅さんを訪ねに行っているんだけど……」

「何？」

トウ当は亞莎の言葉に少し目を見開く。

考輝の居場所が意外だったのと同時に、ある光景が頭に浮かんでいた。

「……酔い覚めの薬を大量に用意しておいた方がいいかもな」

「え？」

深刻そうに言うトウ当に対し、亞莎はキョトンとした顔をしていた。

「――さて、何か申し開きはありますか？　蓮薇（れんうぇい）様、雪蓮」

「「何にも有りません……」」

その頃、孫堅軍の野営の宴会をやっているのと別の陣幕で、孫堅と孫策親子が正座をさせられていた。

二人の前には黒髪の女性が仁王立ちしていて、明らかな怒気を放っている。

勿論怒気の行く先は、彼女の目の前で正座している二人だ。

黒髪の女性の名は周瑜。字は公謹。

孫堅軍の現軍師で、孫策と断金の契りで結ばれた仲だ。

彼女の黒髪は腰に至るまで長く、かなり手入れもされているようで、見ただけでもそれを伺える。

聡明そうな顔立ちで、かけている眼鏡がより一層知的な雰囲気を漂わせている。

そして孫堅や孫策と同じように褐色の肌で、これまた同じように服の露出が多い。

胸元から腰にかけてまで大胆に大きく開き、男だったら目のやり場に困るような服を着ていた。

「ハァ……。一体どこの軍にやって来た客人、しかも初対面の者にろくな持て成しもせず、酒を飲ませて挙句の果てに酔い潰す大将が何処にいるんですか……。

正直私は目の前の光景を疑いましたよ？」

周瑜はため息混じりに後ろを向くと、酔い潰れて倒れている考輝がいた。

若干快方には向かっているが顔はまだ赤く、意識も取り戻していない。

そして白い長髪の女性がひざ枕をして、介抱している。

「全くじゃ。昔から堅殿は加減というものを知らん。我々のペースで常人に飲ませれば、こうなると分かっていたろうに……」

その女性も周瑜と同じ心境のようで、呆れたような口調で喋る。

彼女は黄蓋といい、挙兵当時から孫堅に仕える古参の武将だ。

髪は周瑜と同じくらい長く、後ろで結っている長髪。やはり肌は褐色気味で、細めの目が印象的だ。

服は正面からだと普通のチャイナドレスに見えるが、服が前掛けのような作りをしているので背中がまる見えだ。

どうにも江東の者は露出が好きらしい。

「……まぁ、それはあれだな。……なんと言うか、調子に乗ってしまったっていうか……」

「うっかりしてたっていうか……」

孫堅と孫策は目を泳がせながらも弁明する。もとい言い訳だが。

「……お主ら、それでは言い訳と変わらぬぞ？」

「それにいくらなんでも、半ば意識を失いつつある相手に酒を飲ますのはどうかと思います」

「「……」」

そのため周瑜と黄蓋の風当たりは冷たい。

それに周瑜は彼女がここに来た時、意識を失いそうになっている考輝に無理矢理酒を飲ませている光景を見ているので尚更だ。

「と、とりあえず彰義を起こさない？　流石にもうすぐ出陣って時にあのままじゃまずいだろうし」

場の雰囲気が自分達にとって都合の悪いものだと判断した彼女は、何とか話を変えようとする。
ぎこちない笑顔で変な汗をかいているので、その魂胆はまる分かりだ。

周瑜もそれが分かっていたが、彼女の言う事も正論なので、それに同意する。ため息混じりだが。

「……ハァ、確かにそうだな。
それならどうする？　連日の宴会でもう薬は殆ど残っていないぞ？」

周瑜は喋りながら思案顔になる。

実は宴会が続いていたので、孫堅軍の酔い覚めの薬はもう残っていないに等しかった。
全員酒に強いので、元々余り量がなかったのだ。

「そうじゃな……。やはり彰義軍に借りるのが一番良いかのう」

黄蓋が顎に手を充てながら口を開く。

ちなみに袁術軍が頼む候補に入っていないのは、いろいろと面倒だからだ。
主にでかい顔されたり、変に渋られたりするのは目に見えている。

「『貴方の軍の大将を酔い潰したんで薬を貸して下さい♪』……って言うの？」

「そりゃ流石にまずいよな……」

だがそれも必要な理由が理由なだけにまずいだろう。

何せ客人としてやって来た大将を酔い潰したのだ。蟠りが生まれなかったとしても、孫堅軍に対して良い感情が起こるわけがない。

流石に同じ戦場に行く前に、そんな状態になるのは誰しも御免だった。

「そうなるとやはり袁術に借りるしか……」

周瑜の言葉に、孫堅や孫策は露骨に嫌な表情になる。

どうにも彼女達は袁術の事が嫌いのようだ。

周瑜もそれが分かっているのでそれ以上は何も言わない。

その結果、何とも微妙な空気が陣幕内に漂っていた。

「そうだ！　水ぶっかければ起きるんじゃね？」

しばらく全員で考えていると、孫堅が思いついたように手を叩く。

その顔は真面目そのもので、彼女はふざけているつもりなどないようだ。

だが周瑜にはふざけているようにしか聞こえていないらしく、頭を押さえてやれやれと下を向く。

「全く……ふざけてないで真面目に考えて下さい。貴方達のせいでこうなっ――――ちょ！？　一体何をしているんですか！！」

途中で顔を上げて孫堅の方を見ると、彼女は考輝の側まで行き、何故か彼の服を脱がしにかかっていた。

思ってもみなかった孫堅の行動に周瑜は顔を赤らめ、いつもの彼女からは考えられない声を出す。

しかし衝撃を受けているのは孫策と黄蓋も同じなようで、声にこそ出さないものも、唖然とした顔をしている。

「何って……服を脱がしているに決まってるだろ。見て分からないか？」

孫堅は何故周瑜が叫んでいるのか分からないような顔をしている。

「いや母様が彰義の服を脱がしている理由が分からないんだけど……」

そんな自分の母親に孫策は苦笑いを浮かべる。
実の娘ですら、今の彼女の行動の真意が分からなかった。

「……堅殿……まさか……」

そんな中、長い付き合いの黄蓋だけは分かったようだ。
だがそれでも孫策と同じように苦笑いをしている。

「そりゃ勿論水をぶっかけるからに決まってるだろ。起きたとき服が水浸しだったら嫌だろうから脱がしてるんだよ。
さて……これはどうやって脱がすんだ？」

どうやら孫堅は水をかけて起こすという案を実行しようとしているらしい。

「お止め下さい、蓮薇様！」

「ちょ、母様待って！！」

瞬間、周瑜達は面食らったが、直ぐに止めにかかる。
もしこんな状態を他の者に見られたら非常にまずい事になる。

それこそ彰義軍に酔い覚めの薬を貰いに行く以上に。

「？　何だよお前等？　何でそんなに焦ってるんだ？」

「当たり前であろう！　むしろなんで蓮薇はそんなに普通に脱がしているのじゃ！」

「しかもよりによって下から！？」

「絶対狙ってやってますよね？！」

考輝をひざ枕していた黄蓋も、立ち上がって孫堅を止めにかかる。

ちなみに彼女は決して狙ってやっているわけではない。決して。

「……ん……」

そしてその時、考輝はちょうど目を覚ました。

ひざ枕をしている中で立ち上がられて頭を打ち、身体の上でこんなに馬鹿騒ぎをされたのだ。

もう大分回復していた彼はそれだけで目を覚ませた。

「……は？」

「「「あ……」」」

「ん？」

そして自分に起きている光景に目を疑う。

酔い潰れてから目を覚ますと、一緒に酒を飲んでいた女性が自分の服を脱がしにかかっているのだ。しかも下から。

「……マジで？」

そしてまだ酒が完全に抜けていない彼の頭が、その状況から導いた答えは一つだった。

「はっはっは！　いやぁ、悪りぃ悪りぃ！！　確かにいろいろ勘違

いしちまうよな！」

「……もう少しそういう事考えてから行動しましょうよ……」

何事もなかったかのように笑う孫堅に、考輝は疲れたようにため息をつく。

その疲れは、酔いから醒めて直ぐだからという訳だけではないだろう。

さっきのやり取りから十数分後、なんとか様々な誤解を解いた彼等は談笑していた。

何人か非常に疲れを伴ったが。

「ハァ……彰義殿、先程から本当にすまない。宴会に無理矢理引き込んだだけでなく、こんな事にまで発展するとは……」

周瑜は考輝に申し訳なさそうに顔を向ける。

なお既に全員自己紹介は済ましている。

「……そんな顔しないで下さい。俺だって調子に乗って飲み過ぎましたし」

統：９８　武：７８　知：１０７　政：８９　魅：９４
剣：Ｂ　槍：Ａ　戟：Ａ　弓：Ｓ　騎馬：Ｃ　兵器：Ｃ　水軍：Ｓ
特技：火神（火計において全てが優遇される）

（これが赤壁の大軍師か……。なんとも羨ましい特技だな）

考輝は周瑜との会話とは別に、彼女のステータスを開く。
彼女の特技は火計を多様する彼からしたら、かなり羨ましいものだ。

なお知力と魅力はほぼ限界値で、残りは後３か４くらい上がりそうだ。

「優しいのう……。全く、堅殿達の愚行がより申し訳なってくる」

「う……返す言葉もねぇぜ……」

黄蓋のため息混じりの言葉に孫堅はバツが悪そうに視線をそらす。

考輝はそんなやり取りを見ながら黄蓋のステータスを開く。

統：９８　武：１０２　知：６８　政：６６　魅：９２
剣：Ｓ　槍：Ａ　戟：Ａ　弓：Ｓ　騎馬：Ｂ　兵器：Ｂ　水軍：Ｓ
特技：火将（火計が成功しやすくなる）

（……今見たところでは、孫堅軍最強の武将は黄蓋か。まぁ孫策の伸びしだいでは抜かれるかもしれないがな。
だが数値的にはもう限界みたいだ。年齢的にもきついだろうし）

考輝は黄蓋のステータスを見ながら考えをまとめていく。

そして黄蓋のステータスを見た事で、彼は今回来ている孫堅軍の主な将のステータスを全て見た事になる。

（……やはり全員優秀だ。兵の練度もかなり高めみたいだし、恐ろしいな。
性格的には結構イメージ通りだが、孫堅さんは少々勘弁して欲しいな……。この豪快というか、おおざっぱというか――）

「よし！　彰義も目が覚めた事だし、もう一回飲み直そうぜ！！」

「……それともただ単にアホなんですか？」

失礼だとは思いながらも、彼はついつい言ってしまった。

思惑が巡って

蔡瑁は劉表軍の本陣の中にいた。

兵の数は八千。

彼は短期間でなんとかこれだけの数をかき集め、現在江夏の近くの荒野に駐屯している。

これに江夏にいた守備兵二千が加わり、劉表軍が袁術・孫堅連合軍を迎え撃つ数は計一万。

しかし、無理にかき集めたので兵の士気は正直低い。そのうえ数の上でもまだ負けている。

将は張允、黄祖など劉表軍でも屈指の者を連れて来ているが、それでも心許ない。

実際のところ、蔡瑁は彼女達が孫策や黄蓋といった武で有名な者達に、勝てるとは思っていなかった。

しかし、そんな悪い戦況だというのに、蔡瑁はかなり落ち着いていた。

静かに壁に掛けられているこの付近の地図を眺め、立ち尽くしている。

本陣を警備している兵や陣内でいろいろな準備をしている者達は、彼が何か策を考えていると思っているが、実際のところは違う。

彼は今先程までここで行われていた、司馬懿と他の将とのやり取りを思い出していた。

ただ彼女の策を他の者達に説明するだけの事だったが、彼の脳裏にはその時の光景がしっかりと焼き付いていた。

『兵力、士気共に完全に負けている今、正攻法で正面からぶつかっても勝ち目はまず有りません。

しかも兵糧もかなり用意しているようなので、篭城も難しいでしょう。

――なので、奇襲を仕掛けて短期決戦で勝負を決めます』

彼女を疑う視線がかなり集まっている中、司馬懿はまるで意に介していないように話す。

コの字型に並んだ机の真ん中の部分に立って話しているので、どうしても視線が集まってしまうのだ。

当たり前だが、いきなり現れた彼女を疑っている者は少なくない。顔面に大きな傷がある得体の知れない少女を、急に信じろという方が無理だろう。

『確かにごもっともじゃが、それが簡単に出来れば苦労は無いのう……』

黄祖は彼女の言葉にあごひげを撫でながら、馬鹿にしたように反論する。

彼は一番司馬懿の事を疑っていて、蔡瑁が彼女を連れて来る事に最後まで反対していた人物だ。

和服のような物の上に陣羽織を着ていて、髪は白く顎にも白い髭をたくわえている。その姿からは年長者の貫禄が醸し出されていた。

『……やっぱりそうだよね。僕達武官がめちゃめちゃ強くて、孫策なんかも楽に倒せれば話は別だけど……ねぇ……？』

張允は黄祖とは違いバツが悪そうに頬をかく。

彼女は司馬懿に対して比較的友好的で、疑いの視線を全く向けていない。

水色の髪でいくつかアホ毛が立ち、なんだかポヤポヤした雰囲気を纏っている。

蔡瑁と同じように水色の鎧を着ているが、女子だからなのか下はスカートだ。

友好的な彼女ですらこんな態度をするのだ。劉表軍の将達は次々に司馬懿への不満を口に出し、中には嘲笑すらする者もいる。

本陣の中の雰囲気は、どんどん彼女にとって居心地の悪いものになっていく。

『――クスクスクス……』

そんな空気で、突然司馬懿は笑い始める。

その場にいる全員を見下したような、嫌な笑い方だ。

そんな笑いに対して、劉表軍の将達は固まり、全員押し黙る。先程まで嘲笑を浮かべていた者も顔を引き攣らせ、頬を強張らせている。

誰しもが彼女の狂気じみた雰囲気に呑まれ、口を開く事すら出来なかった。

『大丈夫ですよ……。どんな軍でも弱点というものがありますから』

『……弱点？』

司馬懿以外がなかなか喋る事が出来ない中、口を開いたのは張允だった。

彼女は少々怯えながらも首を傾げる。

『はい。袁術軍なら言うまでもなく練度。彰義軍の場合は主力が騎兵に偏っている事。孫堅軍は結束が固い事』

司馬懿は指を折ながら次々と挙げていく。

張允はそれをフムフムと頷きながら聞いていくが、最後の部分で首を傾げる。

『？　結束？　それって長所じゃない？』

こればっかりは張允だけでなく、他の将達も首を傾げる。

ただ蔡瑁だけは腕を組んで静かに見ている。彼は事前に彼女から聞いていたからだ。

『そうです。確かに長所です。

――でも結束が固いって良い事ばかりじゃないんですよ？』

司馬懿の口角がつり上がり、ニヤリと笑う。

ただ笑うだけ。

それなのにその場にいた者の背筋に悪寒がはしる。

その中で蔡瑁は、今まで感じていた恐怖や期待とはまた違うものを感じていた。

「……」

その辺りまで思い出した後、蔡瑁はふぅと息を吐き、近くにある椅子に座る。

「……危険の芽は早めに摘んでしまう方が良いかもしれねぇな……」

彼のその呟きを聞いた者は一人もいない。

それから三日後、既に荊州に入っていた袁術、孫堅、そして彰義の三つの軍は森の中を進軍していた。

普通森の中は進軍スピードが下がり、伏兵の危険性があるので通りはしない。
だが今回袁術が遠回りをするのが嫌だと言い、仕方なく通っていた。

一応伏兵の対策に斥候を放ったりしているが、伏兵を完全に防ぐのは難しいだろう。
何故なら一番警戒して進むべきはずの先頭が袁術軍なのだ。

これまた袁術の我が儘で、何でも自分より官位が低い者に後ろからついて行くのが気にくわなかったらしい。

そしてやはりと言うべきか、袁術は伏兵の対策を疎かにしてしまう。
更に進軍スピードが遅い袁術軍が先頭になった事で、全体のスピードはより一層遅くなっていた。

そんな状態に成りながらも彼等は森の中を進軍し、今ちょうど真ん中の辺りに来ていた。

森の中は木漏れ日で照らされ、若干暖かい。
季節的にはわりと寒い時期なのだが、日光のおかげで大分過ごしやすくなっている。

しかも進軍スピードが遅いため、彰義軍の殆どの兵はかなり余裕があった。

そのため軍が全体的にのどかな雰囲気で、これから戦に行くようなものとは思い程だ。

なので気がぬけている者も少なくない。

「いや～、のどかッスね～……」

「……黙っていろ因幡」

考輝は横でぼけっとしている副将に、見向きもせずに一言いれる。

考輝は軍の中でも中心の辺りにいて、周りを親衛隊で固めていた。
そして、その親衛隊を指揮しているのがスイ固こと因幡と、徐栄こと大宛の二人だ。

彼女達は進軍中や戦中は基本的に考輝の側にいて、主に護衛をしたりしている。
更に考輝の命令を直接受け、状況に応じて動く緊急の遊撃隊の役割もあった。

なお今回の彰義軍の配置は、前から先鋒である第一陣に凪と沙和。第二陣に真桜と亞莎。そして本陣に考輝、因幡、大宛となっている。

玄鳥は騎馬隊を率いて遊撃隊をしているので特に決まった位置にはいない。
だが進軍中は基本的に一番後ろにいて、本陣とその直ぐ後ろの輸送部隊を守っている。

余談だが戦場では余り役に立たない鈴蘭は輸送部隊にいて、兵糧や物資の管理を仕事としていた。

そして肝心の兵力だが、第一陣に千、第二陣に七百、本陣に六百、遊撃隊に七百。このような具合に分けられていた。

遊撃隊は全て騎兵で、この七百という数は、この地方ではかなり異例の数だ。

長江流域は舟が交通に多く利用され、勿論馬も活用されるが極端に値段が高い。
南船北馬という言葉からも、利用頻度の違いが分かるだろう。
そのため戦にも馬が使われる頻度は低く、騎馬をこれほど高い割合で所持している軍は、この近辺ではかなり少ない。
今回一万の兵を連れて来た袁術軍ですら騎馬は千、つまり全体の十分の一だ。
そう考えると、全体の二割近くを騎馬が占める彰義軍はこの地方ではかなり珍しい。
なので水上戦はともかく、陸上戦ならば騎馬隊の分かなり有利に戦いを進められるだろう。
なお騎馬をこんなに大量に集められたのは、ひとえに大将軍である何進のおかげだ。

閑話休題。

「え～、でもこんな陽気じゃ気も抜けるってもんッスよ～。ね、大宛？」

因幡は特に悪ぶる様子もなく、考輝を挟んで隣にいる大宛に話し掛ける。
なお三人とも馬に乗って並走していて、自分では歩いていない。

「……此処、敵地……危険……」

しかし因幡と違い大宛は真面目だった。
彼女は表情すら変えずに彼女の言葉を否定する。

「……味方がいないッス……」

大宛にばっさりと切り捨てられた因幡は落ち込んだようにうなだれる。
そして何故か彼女の帽子についているウサ耳も同時に垂れた。まるで彼女の心情を表現しているようだ。

「……悪ふざけもそのぐらいにして早く気を引き締め直せ。
江夏まで後だいたい三日。もういつ敵に遭遇してもおかしくないんだ」

考輝はため息を一つ吐くと、因幡を注意する。

彼等は三つの軍全体で見ると真ん中にいるため、基本的にいきな

り敵に出会う可能性は低い。
だが先頭は袁術軍。普通に伏兵を見逃したり、奇襲を仕掛けてきた敵に難無く突破されても、なんら不思議な事ではない。

「確かにそうッスけど……でも敵に会う確率なんてあるんスか？戦力差がある以上、篭城すると思うんスけど」

「ほう……」

因幡が首を傾げながら言うと、考輝は驚いた――むしろ感心したような声を出す。
それは大宛も同じようで、声にこそ出さないが、かなり驚いた表情になっている。

因幡は基本的に馬鹿だ。それも超がつく程の。
ステータス的に言うと、初期の麗羽より少し上と言ったところだ。
だから彼女がまともな事を言った事は、考輝達からしたらなかなかに衝撃的な事にだった。

「篭城してくる可能性もなくはない。だが劉表軍は援軍を余り期待出来ないから、短期決戦を仕掛けてくる可能性も充分にある。
……今回指揮している将の性格にもよるだろうが、警戒して損は無いしな。
――そういう事だ。分かったか？」

「……なるほどッス」

若干の間の後、因幡はしっかりと返事をする。
しっかりと理解しているかは別問題だが。

「……主……出陣、許可……？」

漢字しかないが、どうやら大宛は考輝の場合はどうするかを聞いているようだ。
直ぐには意味が分からないような言葉だが、考輝は直ぐさま彼女の言いたい事を理解する。流石に一年近く一緒にいれば慣れるというものだ。

そして考輝は顎に手を当て少し考えるそぶりを見せた後、大宛の方に向き直る。

「……俺なら絶対に篭城は選択しない。援軍が期待出来ず、敵の兵糧も充分ならば、篭城しても無駄に兵を減らすだけだ。だとしたら――――」

「――ならば一か八か、打って出た方が現実的な考えだ。
それにこの一戦で全てが決まる訳ではない。確かに江夏は重要な交通の要所だが、賭けに出る価値は充分にあると私は思う」

同時刻、孫堅軍では周瑜が同じような話をしていた。
彼女の横では孫策が、ふ～んといった感じで頷いている。おそらく彼女が質問したのだろう。

彼女達も馬に乗り、軍の真ん中辺りにいる。
その前には孫堅と黄蓋もいて、ここが文字通り孫堅軍の中心のようだ。

「じゃあ冥琳ならどうやってこの大軍を打ち破る？　流石に正面から戦っても勝てねぇだろ」

今度はそれを聞いていた孫堅が、振り返って質問をする。

それに対して周瑜は考える様子すら見せずに答える。どうやら既に考えてあったようだ。

「奇襲、もしくは夜襲を仕掛けますね。それも兵糧だけに狙いを定めて」

当たり前だが、兵糧が無くては軍が成り立たない。飯を食べれなければ兵は力を出せず、士気も下がっていく。

そして大軍になれば人が多い分、より多くの兵糧が必要になり、兵糧が無くなった時の兵士への動揺も大きくなる。
そのため兵糧を狙う事は大軍を相手にする時のセオリーのようなものだ。

特に今回量、質、そして軍師の知謀において劣っている劉表軍は、兵糧を狙わなければ例え伏兵や奇襲を成功させても、撃退する事は難しいだろう。

「成る程……それでさっきから斥候を放って伏兵を警戒しておるのじゃな？　兵糧の輸送部隊に、いつもより多く兵をつけておるのも、それが理由か……」

周瑜の言葉を聞いていた黄蓋が、納得したような声を出す。

周瑜はそれに頷くと、言葉を続ける。

「そうです。彰義もそれが分かっているようで、斥候を放ったり、輸送部隊に主力である騎馬隊をつけているようですが――」

周瑜はそこで一旦区切ると、盛大にため息をつく。
その時の顔は落胆ではなく、何か呆れているように見えた。

「――問題は袁術です。先頭だというのに、まるで伏兵を警戒していない上、進軍を遅めています。
伏兵を置くにしても、奇襲を仕掛けるしても、絶好の機会ですよ」
周瑜が肩をすくめながら言うと、その場にいた者達全員が納得したような声をもらす。
そしてその後、また全員揃ってため息をついた。

「七乃～、お代わりを持って来てたも～」
「はいは～い♪」
その頃、袁術はやはりと言うべきか蜂蜜水を飲みながらダラダラしていた。
馬が四頭がかりで引いている巨大な馬車に乗り、周りには疲れたような表情の兵士達が、囲むように歩いている。
馬車の中はふかふかのマットやソファー、更には小さめのベッドまで置かれ、普通にここで生活するのも可能なくらいの設備だ。
左右にある小窓からは日の光が差し込み、外よりもかなり暖かい。

外見もきらびやかで、色もピンクのためかなり目立つ。夜ですら直ぐに分かりそうなくらいだ。

しかし、かなり豪華で金がかかっている代物ではあるが、明らかに戦場に行く時に使うものではないだろう。

「はい、美羽様。蜂蜜水ですよ♪」

「待ってたのじゃ♪」

張勲は馬車の奥の方に置いてある箱から蜂蜜水が入っている瓶を取り出し、コップに注いで袁術に手渡す。

袁術はそれを受け取ると両手でしっかりと持って、コクコクと音をたてながら飲み始める。

そして張勲はそんな袁術の姿をニコニコと笑いながら見ている。その目は決して自らの主を見る目ではない。

「――プハッ！　美味いのじゃ！！

……そういえば七乃。例の件はどうなっているかの？」

庶民が一年働いても手に入れる事が出来ないくらいの量の蜂蜜水

を、一気に飲み干した袁術は、ふと思い出したように張勲に問う。
そんな彼女の口の周りは蜂蜜でべとべとになっていた。

「はい♪　万事抜かりなく進んでいます。
それより美羽様～、お口の周りが汚れていますよ～♪」

張勲は質問には適当な感じで答えると、懐からハンカチを取り出して袁術の口元を拭き始める。
その時の彼女の顔は本当に幸せそうだ。

「ふっふっふ～。これで妾に盾突こうとする雷薄と陳蘭らも消せて、新たに領地も手に入って一石二鳥なのじゃ」

袁術は口元を拭かれながらニヤリと笑う。

彼女が消そうと言っている人物は、劉表軍の者でなければ孫堅や考輝の配下の者ではない。

二人とも袁術軍の将で、どちらも軍の中核をなす大事な武将だ。

何故身内である彼女達が袁術に命を狙われているのかというと、謀反を企んでいると密告があったからだ。

普通なら直ぐさま尋問にかけたり身柄を拘束したりするのだが、彼女達の武は袁術軍屈指のもの。下手をして暴れられると苦戦をしいられる事は必須。

なので張勲は戦っている最中に暗殺する事を提案した。

戦場ならば彼女達も敵に気が集中し、まさか味方が自分の命を狙っているなど思わないからだ。

それに戦中には味方の流れ矢で死ぬ事も少なくない。もし失敗してもどうとでも言い訳出来るだろう。

戦っている最中に自軍の中でも指折りの強さの者を暗殺しようなど、正気の沙汰ではないが、所詮は袁術。特に深く考える事もなく張勲の案を鵜呑みにしていた。

それから雷薄、陳蘭の名誉のために言うが、彼女達は決して謀反など企んでいない。

むしろ張勲なんかよりちゃんとした忠義心を袁術に持っている。

彼女に道を外してほしくないために、この状況では命懸けと言える、意見書や政に関する抗議を書いた手紙を渡しているところから、彼女達の忠義の程が伺える。

なおその文章が袁術に届く事はない。

何故なら途中で張勲が全ての内容を確認し、握り潰しているからだ。

「そうです♪　美羽様に逆らう愚か者なんかさっさと消してしまいましょう♪」

張勲はまだニコニコと笑っていて、袁術の口元を拭いたハンカチを懐にしまう。

もはや言うまでもないが、雷薄と陳蘭の反逆など全て張勲のでっちあげだ。

何故そんな事をするのかというと、彼女にとって二人が邪魔になったからだ。

袁術をなんとか良い領主にしようとしている二人は、甘やかしてばかりで彼女を駄目にしている張勲を、側近から無理矢理降格させようという動きすら見せている。

だから張勲は先手を打った。

彼女はそんな動きを見せられて、指をくわえて見ているような人物ではない。

（正直二人の武力を失うのは戦力的に辛いですが、今回は孫堅さんと彰義さんを連れて来ているから大丈夫でしょう。
……出来れば彰義さんを引き入れたいですね。そうすれば二人が抜けた穴を補ってもお釣りが来ますし）

張勲はニコニコと笑いながらも様々な事を考えていた。

だかそれはこれからの事がメインで、今回の戦いに関しては殆ど考えられていない。
彼女の意識は、もうほぼ勝ちが決まっているこの戦には向けられていないのだ。

だから彼女は気付かない。

雷薄と陳蘭を暗殺しようとしている事が、兵の間で少しではあるが噂になっている事に。

そしてその噂を聞いた劉表軍の隠密が江夏近くの劉表軍の本陣に向かった事に。

思惑が巡って（後書き）

……なんか無理矢理な展開ですね。

※１１月１３日に少し修正しました。

攻め込まれて（前書き）

すみません、今までテストで更新出来ませんでした。
……まぁまだ終わっていませんが。

そして相変わらずスランプです。
本当に自分の思った通りに書けない。

攻め込まれて

蔡瑁は森の中にいた。

周りには劉表軍の兵士達や将達がおり、彼の言葉をじっと待っている。辺り一帯真っ暗なのでその表情は見えないが、独特の緊張感が彼等を包んでいた。

時刻で言えばもう十二時を過ぎ、今日ではなく明日の時間帯なのだが、誰一人として松明を持っていない。
唯一の光源は夜空の星明かりだけだが、木々によってかなり遮られてしまっている。

そんな場所に劉表軍の兵士、五千人あまりがひしめき合っていた。

「全隊配置につき終わったか？」

蔡瑁は近くにいた兵士に尋ねるが、かなり小さめの声だ。
兵士は頷くと、彼もまた声量を少なくして返答する。

「はい。黄祖将軍達も準備万端だといましがた連絡がありました。

あと司馬懿も仕込みを終わらせ、既に我が隊の最前列に加わっております」

兵士が司馬懿と言った部分で蔡瑁は若干顔をしかめるが、直ぐに元の表情に戻る。

そしてそのままその兵士を伝令役として他所にやり、彼は剣を抜き周りの兵士達を見渡す。

「皆の者聞け。これより我々は無謀にもこの地を侵す愚か者共と戦う」

別に特別大きい声という訳ではない。

だが力強くはっきりとし、遠くまで響いた。

そしてそれを受け、兵士達の雰囲気は一層緊迫感が増してくる。

「総数では負けているが決しておくするな。我等には必勝の策があり、何より大儀がある！

今宵、外敵を打ち払いこの地に平和を取り戻す！！　進軍開始！」

『応っ！！』

蔡瑁の号令に応じ、兵士達が静かに進軍を始める。

その進行方向の先には『彰』の旗がたなびく野営があった。

「……まだ眠いです……」

その頃、司馬朗こと鈴蘭は目を擦りながらベッドから起き上っていた。

欠伸の一つでもしながら寝間着を脱ぎ、慣れた手つきで枕元に置いてあった着物を身につけていく。

陣幕の中はかなり暗く、彼女が起きて直ぐ点けた蝋燭だけが頼りだ。

鈴蘭の朝はいつも早い。今日のように日が昇る前に起き、空が白くなる頃にはもう仕事や勉強を始めている。

夜も早いのでかなり規則正しい生活だ。

「……よし！」

着物を着て、きちんと身嗜みをを整えた彼女はいくつか書簡と蝋燭を持ち、自分の陣幕を出た。

森の中で野営をしているので、いくらかは切ったとはいえ野営の至る所に木が生えている。
その根や幹に気をつけながら鈴蘭はゆっくりと歩を進め、目的地に向かって行く。

ちなみに彼女の目的地は考輝の陣幕だ。
書簡を届けるのも理由の一つだが、主なものは彼がしっかりと睡眠を取っているか確認するためだ。

洛陽の街でも一時期問題になっていたが、考輝は今や完全にワーカホリックとなっている。
鈴蘭が来るまで文官系の仕事を全て一人でやっていたのが原因らしく、仕事をしていないと落ち着かない、というレベルまで進行しているらしい。

なので彼は平気で徹夜で仕事を何日も続けたりしてしまう。以前最高三日間寝ていない時もあったとか。

そのため鈴蘭は毎朝起きたら直ぐに考輝の陣幕に行き、休んでいるか確認している。
まだ体を壊したりはしていないが、鈴蘭からしたらいつ限界が来

るかとても不安だった。

そして数分歩いて鈴蘭は目的地に着いたのだが、陣幕を見た途端彼女はため息を吐く。

陣幕の隙間からは光りが漏れ、中から微かに話し声も聞こえる。

そして何より警備の兵が鈴蘭を見て苦笑いを浮かべていた。

「ふぇぇ……また徹夜してます……」

鈴蘭は今までの経験から考輝が徹夜をしている事を察し、がっくりと肩を落とす。

そして鈴蘭は警備の兵と軽く挨拶を交わし、恐る恐る考輝の陣幕に入る。

そこでは案の定考輝が起きていて、真桜と普通に仕事の話をしていた。

中央の机を挟んで椅子に座る二人の周りにはいくつもの書簡や木簡が散乱し、熱心に何か話している。

陣幕の隅の方で燃える松明も大分小さくなっている事から、長い間ずっと話していたのだろう。

鈴蘭が陣幕に入ると直ぐに考輝が気付くが、不思議そうな顔して彼女を見ていた。

「……鈴蘭？　一体どうした？　何かあっ――もう日付が変わったのか……」

だが考輝は彼女が来た理由を直ぐに察し、バツが悪そうな顔をする。彼とて他人に心配をかけたい訳ではないのだ。

それは一緒にいた真桜も同じようで、気まずそうに頬をかきながら、わざと鈴蘭を見ないようにしている。

「……そんな罪悪感があるなら、ちゃんと寝て睡眠を取って下さいよ～……。それにここ敵地なんですから休める時に休まないと」

「「申し開きの仕様もございません……」」

鈴蘭のため息混じりの言葉に、考輝と真桜は二人揃って頭を下げる。

こう言われては反論の仕様など無いだろう。

ちなみに鈴蘭はこう言っているが、考輝も真桜も一日徹夜したくらいでは活動に何の支障もない。完全に徹夜慣れしているからだ。

「……それで一体何の話をしていたんですか？」

頭を下げられて気まずくなったのか、鈴蘭は急遽話題を変えた。彼女は人に注意をしたりするのは苦手なので、どうしてもこう言った場面で怒りきれないのだ。

「今日は攻城兵器に関して話してたんや！　流石に江夏攻めまでには造れへんけどな」

そしてそれを幸いとばかりに真桜は直ぐさま喋り出した。よくぞ聞いてくれた、みたいな笑顔を浮かべ、意気揚々と口をあける。

「衝車や塔天車と言った有名な物を始め、更には――――」

しかし、真桜の言葉は途中で遮られてしまう。

何故なら彰義軍の野営に大きな銅鑼の音が響き渡ったからだ。

そしてこれは、彰義軍においての奇襲を仕掛けられた時の合図だった。

「真桜、急いで自分の部隊に戻れ！　鈴蘭はここで待機していろ！」

「了承や！」

「は、はい！」

銅鑼の音と同時に考輝は二人に素早く指示を出す。

真桜も直ぐに反応すると、壁に立て掛けてあった自らの槍を持ち、駆け出して行く。

そして真桜が陣幕を出るのと入れ代わりで、兵士が一人転がり込むように入って来た。

「報告いたします！！　我が軍の左右から劉表軍と思われる兵士が奇襲！　現在張燕将軍と于禁将軍が二手に別れ迎撃しています！

数は暗いため正確には分かりませんが、最低でも我等より多いか

と」

「確認出来る敵の旗は？」

「水色の『蔡』の旗を確認しています！」

それを聞き、考輝は思わず舌打ちをする。

劉表軍に『蔡』がつく者は何人かいるが、斥候や隠密の情報から今回江夏に来た将では軍師の蔡瑁しかいない。

軍師、しかも軍においての主力クラスの将となると、兵の練度も自然と高くなるものだ。

更に数でも負け、奇襲を仕掛けられている。

考輝からすれば、かなり厄介な状況だった。

「前後の袁術軍と孫堅軍の様子は？」

そのため、今回一緒に進軍している二つの軍に援軍を要請したいと考輝は考えた。

だが、どちらにも同じように奇襲が仕掛けられている可能性が高いため正直望みが薄い。

実際問題、義勇軍で戦力が少ない彰義軍より残り二つを狙った方が戦略的に上策だ。

つまり考輝軍が奇襲を仕掛けられている以上、二つの軍にも奇襲

を仕掛けられていると考えるのが普通だ。

なお三つの軍はお互いに少し離れた場所に野営を張っており、彰義軍は二つの軍の大体真ん中くらいにいる。

「斥候達の話によれば、孫堅軍も攻撃を受けているらしいですが、袁術軍は至っていつも通りだと」

「……何だと？」

予想外の答えに、考輝は目を丸くした。

「さぁ戦だ！　夜襲なんか仕掛けて来る、正面からぶつかる勇気のねぇ軟弱な連中を叩っ切るぞ！！
やる事はたいして難しくねぇ！　剣で切り、槍で突き刺し、弓で射ぬてこの地を血で染めろ！！
行くぞ！！　俺に続けェェェ！！！」

『ウォォォオ！！』

所変わって孫堅軍の野営地。

こちらも彰義軍のように劉表軍に奇襲を受けていたが、孫堅自ら軍を纏めて切り込んでいた。

孫堅は兵士達を鼓舞しながら、敵を次々と打ち倒していく。

彼女は剣と拳を使って自在に暴れ回り、死体の山が出来るのに数分もかからなかった。

そして少し離れた場所では娘の孫策と古参の黄蓋が同じように暴れ、前線を掻き回している。

その結果、奇襲を仕掛けて最初攻勢に出ていた劉表軍が、徐々に押され始めていた。

「……妙だ」

しかし本陣にいる周瑜はそんな戦況だというのに、難しい顔をしていた。

最初こそ若干混乱したものも、孫堅達が出てなんとか今は押し返

してはいる。
しかし、周瑜にはどうにも腑に落ちない個所がいくつかあった。

（奇襲を仕掛けて来ている兵が少な過ぎる……。正確には分からないが、多くても四千くらいだろう。
しかし、劉表軍にはまだ余裕がある筈だ。実際、彰義軍の方には我々より奇襲を仕掛けている兵が多い……。
――伏兵か？）

「……前線にいるトウ当殿に伝令。少し前線より下がり伏兵に気をつけろ、と」

「はっ！」

ひとまずは伏兵の警戒をと考えた周瑜は、一気に前線を崩されないために一軍を一時下げる事にした。

近くにいた伝令は直ぐに前線に向かっていく。

しかし、それでも周瑜は何か釈然としなかった。

（……だが、ただの伏兵にしても、敵将は殆ど出て来てしまっている。黄祖に張允の旗も見受けられるし、蔡瑁も彰義軍にいっている。
……本当に伏兵か？
しかも袁術の方には奇襲が一切行われていない……）

周瑜は何故だか劉表軍を相手にしている気がしなかった。
今まで何度か争った事もあったが、こんな変則的な動きは一切見せていない。
まるで指揮している者が違う、それほどの違和感を周瑜は感じていた。

「いいか、全員余り深入りするな！　攻めではなく守備に徹しろ！」
『はっ！！』
劉表軍に奇襲を仕掛けられた考輝は、かなり前線に出て指揮をとっていた。

現在軍を二つに分け、左右から来る敵を迎撃しているが、数ではかなり不利な状態だ。
なので考輝や亞莎も矢面に立ち指揮して戦っている。しかし戦況は芳しくなく、前線は徐々に押され半包囲されつつあった。

数で負けているのもそうだが、森という環境が彰義軍にとっては

最悪であった。
森のため主力である騎馬隊は突進力を活かせず、木が邪魔で真桜お手製の連弩も上手く活用出来ていない。
なので、なんとかぎりぎりの所で押し切られずにいるのが現状であった。

（……まずいな。こんな乱闘になっては策も糞もない。今は何とかなっているが、この均衡がいつまで持つか……）

考輝は表情こそいつもの無表情だが、内心はかなり焦っていた。

数で負けているのに関わらず、ぎりぎりで前線を保っていられるのは兵や将の質で優っているからだ。特に将の質のはかなりの差がある。

しかし、現実には一騎当千の武将などいないし、人間誰しも疲労が溜まる。
個人の武で戦況をひっくり返す事は、基本的には不可能。

それが分かっているから考輝は焦っていた。

（……そうなると、攻められていない袁術軍の援軍を期待するしかないんだが……）

ここで考輝は考えにつまる。
袁術軍だけが奇襲を仕掛けられていない理由が、どうにも彼は気になっていた。

（袁術軍は質はともかく数は俺達の三倍近くある。普通奇襲を仕掛けるならそっちを狙わないか？）

彼の中でその疑問は徐々に大きくなっていく。
しかし結局その答えは分からない。

だがここは戦場。そんなに考えている暇は無い。

彼は思考を切り替えると、剣を片手に前線に歩み出た。

「……何だ？」

考輝が前線に出て暫く戦っていると、奇妙な者を見つけた。
その者は背は低く、全身マントのような物の覆われ、フードを深く被っているため顔も見る事が出来ない。

ただ、剣を腰にぶら下げ、劉表軍の兵士を何人か引き連れている

ところを見ると、どうやら劉表軍の者のようだ。

そしてその人物は真っ直ぐ考輝に向かって歩いて行く。

途中、彰義軍の兵に阻まれたが全て引き連れていた兵士が相手をした。

そしてとうとう二人の距離は五メートルもなくなり、隔てるものは何も無くなった。

「……貴方が彰紅炎ですか？」

それは少女の声。まだ幼い感じが残り、歳は十歳前後くらいであろう。

考輝は予想外のその声に、若干驚きながらも答える。

「……そうだ。それでお前は――――」

一体何者だ、と尋ねようとして考輝は思わず口をつぐむ。

いや、つぐまざるおえなかった。

「……あぁん……」

何故なら、少女がいきなり嬌声のような声を上げ始めたからだ。

しかも肩に手を当て、身体を少しくねらせている。

いきなり喋っている相手がそんな事になれば、流石に黙らざるおえないだろう。

考輝は少女の行動に呆気に取られていたが、当の少女はそんな彼を気にする事なく喋り始める。

「……あぁ……ずっと貴方にお会いしたかった……それこそ身も心も焼き焦がれるくらいに……」

「……お前は俺を知っているのか？」

考輝は少し語彙を強め、睨みを効かせる。

言い方からして向こうは自分を知っている。しかし自分は相手を知らない。

考輝は正直気味が悪かった。

しかも少女の顔が見えないので、ステータスを開く事が出来ない。
彼が豫州に来てから気付いた事だが、人のステータスを開くには、それが誰かと認識出来ないと駄目らしい。

考輝は内心それに舌打ちすると、剣を握る手に力を込める。

「クスクス。そんな事はどうだっていいじゃないですか……。
……はぁ……本当にこの一年の間ずっと夢見てましたよ……。
こうやって貴方にお会いして、こうやって貴方とお話して、こうやって――――」

「貴方を殺したかった」

「！」

その言葉と同時に少女は剣を抜き、一気に考輝に近付く。
その動きはかなり素早く、直ぐに剣の届く範囲まで間合いを詰められる。

だが考輝は既に警戒していたので素早く剣を構え、少女からの一撃を防ぐ。

金属と金属がぶつかり合う音が響き、すぐに収まる。

考輝と少女の距離はもう剣二本分だけなのだが、それでも少女の顔を見る事は出来ない。

「へぇ……予想以上にお強いですね？」

しかし、それでも今少女が笑っている事は彼には簡単に分かった。

策に嵌まって

孫堅は戦場の中にいた。

まだ日が昇っていないため、松明ぐらいしか明かりがなく薄暗い。近くや松明の周りなら問題が無いが、遠くを見ようとなると少し難しいだろう。

しかし視界が悪くとも、鈍い金属音と叫び声、そして時折あがる断末魔がここが戦場だと確かに示していた。

「うらぁ！　死にやがれ！！」

「ギャアアアア！！！」

特に孫堅の周りからは、他より確実に多く断末魔が聞こえてくる。彼女の足元や通って来た跡には、青い鎧を着た劉表軍の兵士が山のようになっており、戦場の中でも特に血生臭い。

そして孫堅自身も彼等の返り血を大量に浴び、全身が血まみれだ。剣や鎧は言うに及ばず、拳や顔にまで血が付着している。

だがそんな状態にも関わらず、彼女はうっすらと笑みを浮かべい

た。

まるで心底今の状況を楽しんでいるかのように。

その姿を見て、劉表軍の兵士達は誰一人として戦うどころか、近付こうとすらしない。誰だって死にたくないからだ。

その結果、孫堅の周りには誰もおらず、あるのは死体ばっかりだ。

「……母様、その姿だけ見てると狂人みたいに見えるわよ？」

そんな母親の姿を見て、孫策は呆れ顔で何処からか一人で近付いてくる。

とは言っても、彼女も手に血が滴っている剣を持ち、孫堅に負けず劣らず血だらけだ。

余り人の事を言えた状態ではないだろう。

「なんだ雪蓮か。てか生みの親に向かって狂人はねぇんじゃねぇのか？」

孫堅はうすら笑いを止め、不服そうに口を尖らす。

二人とも血まみれだというのに、彼女はいつも変わらない口調で話す。食事を取っている時や、談笑をしている時とほぼ同じだ。

生まれてから長い間戦い続けてきた彼女にとって、戦場とはもう日常の一部と大して変わりはしないからだ。

そんな調子で孫堅は続ける。

「それにお前だってあと半刻もすれば、俺より明らかヤバくなるじゃねぇか」

「私がそんな癖を持つようになったのは母様のせいじゃない。小さい時から私を戦場で引っ張り回しといてよく言うわ……」

孫策は溜息をつきながら答えるが、彼女の声も普段と変わらない。しっかり母の遺伝子を受け継いでいるようだ。

ちなみに、孫策は一定時間以上返り血を浴び続けると興奮が治まらなくなるという、少し変わった癖（？）を持っている。

彼女がそんな癖を持つようになった原因は、彼女の言う通り孫堅にある。

幼い頃から孫堅に戦場に連れて行かれ、血を見せられ続けたのが悪かったらしい。

そして驚くべき事に、孫策が初めて戦場に連れて来られたのは、

生後僅か半年後のこと。
獣のように戦う母親に背負われ、彼女は誰よりも早く戦場というものを体感していた。

閑話休題。

「……最近歳のせいか、余り昔の事覚えてねぇんだよなー」
孫堅はあからさまに孫策から視線を外すと、わざとらしく宙に漂わせる。
ごまかしたりするのは余り得意ではなさそうだ。
「ハァ、都合良い時だけ自分を年増に扱わないでよ……」
孫策は溜息をつき、疲れたように文句を言う。

その姿に、孫堅は非常に違和感を覚えた。
「……雪蓮、どうしたんだ？　やけに元気ねぇが、どっか調子悪いのか？」
孫堅は戦場においてこんな暗い様子の孫策を見た事がなかった。

孫策だっていつもは孫堅と同じくらい――いや、それ以上に意気揚々と戦っている。
だから孫堅に先程のような事を言うのも、よくよく考えれば変だ。
孫堅は自分の娘に何だか妙な違和感を覚えていた。

「別に調子は悪くないんだけど……なんか嫌な予感がするのよね……」

何処か曇った表情の娘の言葉に、孫堅は顔をしかめる。

孫策の勘は恐ろしい程の的中率を誇っている。それこそ、勘だと馬鹿に出来ないくらいに。

だから孫堅も娘の勘はそれなりに信用しているし、信頼もしている。
だから確証こそないが、笑って流すような事は出来なかった。

「……じゃあ、とりあえず気をつけて戦っていくか。冥琳にはもう伝えたか？」

普通勘ぐらいで戦闘中に軍を動かしたりする事はないが、孫堅軍は違う。
実際の所、孫策の勘のお陰で助かったという事も何回かあった。

「まだ言ってないけど、冥琳も何か感じてるみたい。さっきトウ当の軍を少し下げてたもの」

「そっか。じゃあ戦局の方はあいつに任せて、俺達は前線に集中するか。

敵さんも出て来た事だしな」

そう言う彼女の視線の先には、今まで誰も近付いて来なかった範囲の中に、二人程入ってくる姿だった。

その二人――黄祖と張允は各々の武器を持ちながらゆっくり歩いて来ていた。

その頃、彰義軍の野営の一角で鈴蘭がやけにそわそわとして、落ち着きなく歩き回っていた。

彼女の周りに兵士が数人いるが、彼等もまた緊張しているようで顔が強張っている。

その辺りに劉表軍の者が来ておらず、まだ戦場になっていない。

だが微かに怒号が聞こえてきている。距離的には余り遠くないだろう。

そんな場所で鈴蘭は行ったり来たりを繰り返し、時折止まっては野営の外の方を目を凝らして見ている。
よく見ると兵士達も全員野営の外の方に意識を向けていて、キョロキョロしている者もいる。

「ふぇぇ、袁術さんの援軍はまだ来ないんですかぁ……」
鈴蘭は立ち止まると、消え入りそうな小さな声を絞り出す。彼女の顔には嫌な汗が流れていた。

今の彼女の言葉から分かる通り、彼女は現在袁術軍からの援軍を待っている。
数で負け、主力の騎馬隊も使えない今、袁術軍からの援軍が彰義軍にとっての唯一の希望だ。

だが救援の要請をしてから大分経つというのに、援軍は今だに到着していない。
援軍を待っている鈴蘭達は、非常に焦燥感に駆られていた。

「あ、司馬朗様！　あそこに松明の光が見えます！」
「ふえっ！？」

そんな空気の中、兵士の一人が遠くに微かな明かりを見つける。
鈴蘭は慌ててそちらの方を見るが、明かりがあるのが分かるだけで、よくは見えない。
しかしその光は次第に近付いて来て、徐々にその姿が見え始める。

金の鎧を身につけ、隊を成してやって来る兵士達。そして掲げる旗は『雷』と『陳』となにより『袁』。
確実に袁術軍からの援軍であった。

それを見て鈴蘭を含め、彰義軍の兵士達は歓喜の声をあげる。
数はまだ正確には分からないが、ざっと三千はいるだろう。
更に、率いているであろう将は雷薄と陳蘭。袁術軍の中でも能力の高い分類に入る将だ。
質、量ともに彰義軍の援軍としては充分のものだろう。

そしてその軍はどんどん近付いて来て、大声を出せば話せるくらいの距離となる。
そこで鈴蘭は自分がまだ伝令を出していない事に気がついた。
彼女は後ろを振り返ると兵士達を見る。
「ハァ……本当に良かったです。ではすみませんが、どなたか考輝様に連絡を――」

鈴蘭はそこから先の言葉を発する事が出来なかった。

何故なら、自身の右肩に鋭い痛みがはしり、その悲鳴を必死に抑えたからだ。

「……え？」

鈴蘭はゆっくりと痛みがまだ続く右肩を見る。

そこには矢が深々と突き刺さり、血で肩の部分の着物が黒く滲みつつあった。

そして更に後ろを向くと、袁術軍の誰かが弓を持ち、彼女に向けている姿がはっきりと見えた。

「グッ！」

考輝はフードを被った少女に非常に苦戦していた。

今も素早く間合いを詰めてきた少女の剣撃を防ぎ、反撃にと剣振るが全く当たらず少女はまた距離をとる。

このように少女は先程からヒット&アウェイを繰り返し、考輝は上手く反撃できずにいた。

見た感じ少女と考輝に武力差は無いが、熟練度に差があるようだ。考輝もこの一年間しっかり経験を積んできたが、所詮はたったの一年。この世界に生まれ、幼少の頃から鍛えている者とはどうにも差がある。

そのため彼は兵士程度には問題がないが、将クラスになるとなかなか分が悪かった。

「クスクス、どうしたんですか？　さっきから受けてばっかりじゃ

ないですか。反撃の一つもした方がいいんじゃないんですか？」

少女は充分な距離を取ると、馬鹿にしたような口調で考輝に話しかける。

彼女は彼が少女の動きについていけず、防御が精一杯だと分かってこう言っているのだ。

少女の性格はかなり悪いらしい。

「……」

考輝はそれに軽く舌打ちすると、少女に突っ込んで行く。

彼にしては珍しく、直先的な動きだ。どうやら先程の言葉が癇に障ったようだ。

「クスクスクス……隙だらけですよ」

しかし直先的な動きは読み易く、まして少女は考輝より動きが速い。

結果的に考輝の斬撃はたやすく防がれ、しかも剣を遠くに弾かれてしまう。これで彼は丸腰だ。

だがそんな状況にも関わらず、考輝は口角をつり上げ笑っていた。

「……お前もな」

その言葉と同時に、彼の鎧の右の裾から短剣が一本出てくる。
どうやら暗器を仕込んでいたようだ。

「な！？」

もう考輝には武器が無いと余裕ぶっていた少女の目が見開かれ、慌てて距離をとる。
武器と言えど短剣なので、間合いをしっかりと取れば別段脅威でないからだ。

考輝はそれに対して取り出した短剣を投げ付け追撃する。

しかし流石にこれは予想していたのか、少女は落ち着いて飛んで来た短剣を剣で弾き落とす。

だがその一瞬の隙に、考輝の先程とは反対の裾から鎖が伸びていた。これも仕込んでいた暗器のようだ。

少女がいきなり鎖が現れた事に驚いていると、考輝が手を振って少女に鎖を投げ付ける。すると鎖が伸びて少女の剣に巻き付く。
鎖の先には分銅のような物が付いていて、そう簡単には取れないだろう。

「！？」

そして考輝が鎖を掴んで思いっきり引っ張ると、少女はバランスを崩してよろける。

そこに考輝はすかさず蹴り込むが、いつの間にかに靴の先から刃物がとび出している。
靴にまで武器を仕込んでいたようだ。

「クッ！」

少女は咄嗟に鎖が絡まった剣を手放すと、直ぐにバックステップでその場を離れる。

それでなんとか刃物が腹に刺さることは防いだが、完全にかわす事は出来なかったようだ。

少女は切られた腹を押さえながらも間合いを取る。傷は深くはないようだが、しっかりと血が流れ出ていた。

「……まさか先程の突進や剣を弾き飛ばされた事が演技とは。しかも貴方一体いくつ武器を仕込んでいるんですか？」

少女は充分な距離を取ると、感情が分かりにくい声で考輝に質問をする。

彼女も簡単に挑発に乗って来たのには違和感があったが、まさかこんなに暗器を持っているとは予想だにしていなかった。

そもそも、この時代にこれだけ武器を隠し持っている将など余りいないだろう。

理由は言うまでもないが、卑怯だからだ。

しかし考輝としては熟練度の低さをカバーするために、暗器という物はどうしても必要だった。

ちなみに暗器を作ったり、鎧や靴に仕込んだのは全て真桜だ。

「……敵にそんな事言う馬鹿はいない。

それからもう降参したらどうだ？　その腹の傷、深くはないにしても浅くもないだろう」

実際この考輝の見立ては正しい。

少女の傷は内臓が傷ついたりはしていないが、血は大量に流れている。今はまだ大丈夫だが、そのうち血が足りなくなってくるだろう。

「クス、お優しいんですね。私ならそんな事言わずに相手をどんどん動かして、血を出させますけどね」

「……俺だってそこまで鬼畜じゃない。人を苦しんでるのを見て楽しむドSでもないしな」

考輝は無表情で言うがこれは本音だ。

彼も人が苦しんでいるのを見ていて楽しい訳ではないし、出来れば人を殺したくもない。

ただそれが顔に出ないだけだ。

まるで表情が動かない、仮面をつけているように。

一方の少女はドSの意味合いが分からず、首を傾げていた。

「？　……まぁいいです。ひとまず、せっかくの申し出ですが降伏はしません。

貴方を殺せなかったのは残念ですが、そろそろ時間ですし、怪我もしてるので引き上げさせてもらいます」

「……それは一体どういう意味――」

「ほ、報告いたします！！」

ちょうどその時、彰義軍の兵士が慌てて考輝の側にやって来る。
余程急いで来たのか、肩で息をし、顔中汗まみれだ。

「……どうした？」

考輝は正面にいる少女に注意しながら、横目で兵士を見る。

すると、余りにも予想の斜めをいく報告がされた。

「え、袁術軍の軍がやって来たのですが、劉表軍ではなく我等に攻撃を仕掛けて来ました！！
数は三千程で次々と各部隊を攻撃しています！　さらに先程李典将軍が負傷し前線から引いたと連絡が――」

「何だと！？？」

考輝はその報告を聞いて、思わず叫び声をあげた。

まさか袁術軍が自分達に攻撃してくるなど、夢にも思っていなかったからだ。

だからその取り乱し方は普通ではなく、伝令役の兵士も始めて見るレベルだった。

「クスクスクスクス……」

しっかりと二人の会話が聞こえていたのか、少女は楽しそうに笑い始める。

それは相手を見下したような嫌な笑いだ。

それだけで、考輝はこの策にこの少女が絡んでいると悟る。

でなければ、こんな明確に馬鹿にしたような笑いをしたりはしない。

「大変ですね……まさか仲間内から攻撃をされるなんて……何か恨みでも買ってたんじゃないんですか？」

「！　……」

そのもの言いに考輝は物凄い怒りを覚えるが、ぐっと抑える。

今はそれより先に確認すべき事があるからだ。

「……鈴蘭――司馬朗はどうした？　あいつには援軍として来た袁術軍を、迎えるように言っておいたはずだ」

考輝は声を震わせながらも、出来る限り普段に近い声で聞く。

そんな風に声を普段通りにする事に集中し過ぎたせいだろうか。

少女が彼の言った単語に反応したのには気付かなかった。

「……司馬朗様は奴らが来たと同時に矢でいぬかれ、現在衛生兵が必死に治療しています。

詳しくは分かりませんが……かなりの重傷だそうで……ただでは……済まない……と……」

兵の報告の最後の方はどんどん声が小さくなっていき、とうとう最後には全く聞こえなくなる。

考輝も考輝で下唇を噛んで、必死に動揺を押さえている。

しかし、この二人より動揺している人物がこの場にいた。

「え……嘘だ……うそ、ウソ……ヤダ……そんなの、嘘……」

フードを被った少女は尋常じゃない程動揺していた。それこそ、仲間であるはずの考輝達以上に。

身体は小刻みに震え、何かを否定するかのように首を振り続けている。

考輝はその動揺に疑問を感じるが、その答えは直ぐに出てきた。

少女が首を振っている内にフードが落ち、少女の顔が現わになる。

その顔は頬に酷い火傷を負い、何よりもまずその跡が目につく。
実際考輝も最初はそこに目がいった。

しかし、今回着目すべき点はそこではない。

「……お前……まさか……」

そして考輝は気付いてしまう。いや、気付いてしまった。
彼女の正体に。

何故ならその少女――司馬懿の顔は、余りにも姉の鈴蘭と酷似していたのだから。

罠に掛かって

孫策は戦いが続く森の中にいた。

先程張允と黄祖の二人を孫堅、孫策親子が打ち破り、劉表軍は半ば瓦解状態にある。

そこを孫堅軍の者達がどんどん押し込み、戦況は火を見るより明らかだった。

それだと言うのに、孫策の表情は険しい。というよりも、何か焦っているように見える。

「……一体何なのかしら……この感じは……」

彼女の呟きは戦場の轟音に掻き消され、誰にも聞こえる事はない。

しかし孫策の頭の中では何度も繰り返され、ずっと響き続ける。

彼女の中にあった悪い予感は、完全に勝っている今も続いている。

むしろ、今の強く感じているくらいだ。

そして取り逃がした張允と黄祖を追って、たった一人で森の中に入った自分の母がとてつもなく心配になっていた。

――ありえない、って事は分かっている。

――あの人は私が思っているよりもずっと強い。

――今頃、張允も黄祖も討ち取っているはずだ。

――でも……。

「母様！！」

孫策はとうとう居ても立っても居られなくなり、森の奥に向かって走り出した。

自らの悪い予感を外させるために。

「そんなの……ウソ、だよ……どうして……お姉ちゃんが、彰紅炎の……なんで……軍にいるなんて……」

「……」

考輝は目の前にいる少女――司馬懿にどう対応していいか、全く分からなかった。

イヤイヤと首を振り続け、剣を落としたまま拾わない事から戦意がないのは分かる。

だが逃げるそぶりも見せず、投降しようという様子もない。

今の彼女はただ年相応に、現実を受け入れられずに駄々をこねている子供だ。

こういう時は優しい言葉の一つでもかけるべきなのかも知れないが、考輝と彼女は今敵対関係にある。

しかも自らの姉を自分で考えたであろう策で瀕死に追いやったとなれば、その心中は計り知れない。

下手に喋りかけない方が良いだろう。

だが考輝としては、いつまでもこの状態でいるわけにはいかない。

「……オイ。自分の行動を悔やむ前に――」

「しょ、彰義様！！」

考輝が司馬懿に話し掛けようとするが、タイミング悪くちょうど伝令がやって来た。

余程の事なのか、伝令の声からはかなり焦りが感じられる。

「……今度は何だ？」

考輝は少しの間の後、伝令の方を向く。

「袁術軍の本隊が動き始めました！！　真っ直ぐこちらに向かって来ています！

数は約七千で先に来た者達も合わせると、総勢一万程になります。

目的は分かりませんが、何の連絡もありませんし、先の部隊が攻撃を仕掛けて来た事を考えると……」

伝令はそれ以上言う事はなかった。この先は誰だって分かる事だからだ。

考輝もしっかりとその先の事を理解していて、彼は短く舌打ちをすると、こめかみに手を当てる。

十中八九、袁術軍は彰義軍を攻撃する為に動いている。
そして兵力差や疲弊の状態を考えれば、今戦って万に一つも勝機はない。全滅は必須だ。

考輝はなんとしてもそれだけは避けたかった。

「……何？」

いろいろ対策を考えながら彼がふと司馬懿の方を向くと、その場には誰もいない。
ただ考輝の左手から伸びた鎖が絡まった剣が落ちているだけだ。

おそらく今の一瞬の間に逃げ出したのだろう。

更にその時、戦場に銅鑼の音が響き渡る。
どうやら劉表軍の合図らしく、その証拠に劉表軍の兵士達は徐々に撤退を開始している。

「……全員これ以上無駄に戦うな！　それより早く袁術軍の方に当たれ！！　急げ！！」

考輝は鎖を鎧の接続部分から外しながら、兵士達に号令をかける。

司馬懿の事が全く気にならない訳ではないが、彼は引き際を間違えるような男ではない。

大軍が向かって来ている以上、逃げる者まで相手にしている場合ではない。

兵士達もそれが分かっているのか戦っていた相手を追わず、直ぐに袁術軍が来ているという方向に向かっている。

まだしっかり統率は取れているようだ。

「……それにしても、何故袁術軍が……」

兵士達が急いで移動する光景を見ながら、考輝は忌ま忌ましげに呟く。

もちろんその呟きに返答はなく、戦場に静かに吸い込まれていった。

東の空は徐々に白くなりつつある。

あと半刻もすれば、太陽が山の間から見え始めるだろう。

ちょうどその頃、彰義軍に迫る袁術軍の本隊の中心部。そこに袁術は側近の張勲や親衛隊に囲まれながら進んでいた。

だが彼女は一人で馬に乗っておらず、張勲の馬に乗っけて貰っていた。

張勲と馬の首の間にちょこんと袁術が座っている形で、張勲がやけにニコニコしているのは言うまでも無いだろう。

そしてそんな張勲とは対称的に袁術はむくれ顔で、眉毛が八の字になっている。

ぐっすりと寝ている時に叩き起こされたというのも機嫌が悪い原因の一つだが、大半は別の理由だ。

「む～、彰義め。妾の安眠を妨害した上に、折角送ってやった援軍に攻撃を仕掛けるとは、無礼にも程があるのじゃ！　妾が直々に征伐してやるのじゃ！」

袁術がこんなにも腹を立てているのは、彼女が送った援軍を彰義

軍が攻撃しているからだった。
送った将は雷薄に陳蘭と、彼女が今回消そうとまで考えている程の者達だが、それでも良い気分はしないだろう。ましてや自分が叩き起こされたとなれば。

そのため袁術は余程腹立たしかったのか、ろくに状況や真偽も確かめずに軍を動かしていた。

「流石美羽様、勇ましいです♪」

張勲はニコニコと笑いながら袁術に合いの手を入れるが、内心では冷や汗をかいていた。

先程も述べたように、今回袁術軍が動く際に一切の情報の確認をしていない。
つまり、彰義軍が問答無用で彼女達が送った援軍を攻撃したという事すら、実際のところ定かではない。

そして彼女が考輝と話して得た人物像は打算で動く人間。
そんな人間がこんな自分の首を絞めるよう真似をする筈がない。

（……もしこれで情報が間違いで、彰義軍に多大な打撃を与えたとなるとマズイんですよね～……。彰義さんの事ですから、何を言ってくるか分かりませんし。
とりあえず、双方に余り被害を出す前に戦いを止めのが一番良い

ですかね……）

「しかし美羽様～。斥候を放ったりして状況を全く確認してないんですけど、良いんですか～？」

とりあえず張勲はいきなり本題に入らなかった。

こんな怒り心頭の袁術に、いきなり戦いを止めようと言っても、聞き入れられる訳ないと分かっていたからだ。

――しかし。

「そんなの出している暇は無いのじゃ！　『疾きこと亀の如し』と言うように、戦は速さが命なのじゃ！」

「流っ石美羽様♪　間違って意味と全く違う事になってるのに、そんな自信満々に胸を張るなんて、美羽様くらい能天気じゃないとできませんよ～♪」

「まっはっはっ！　そうであろう、そうであろう？　もっと褒めてたも～♪」

張勲の弱点。それは能力値などではなく、袁術の言う事に便乗し

てしまい、本来の目的を見失い、とんでもない判断をしてしまう事。

（ま、その時はその時で考えればいっか♪）

だからこう言った判断も、直ぐにしてしまう。

「待ちやがれェェ！！」

「ヒィィィィ！！！」

一方、孫堅軍と劉表軍が戦っている森の中。孫堅に見つかった張允が必死の形相で逃げていた。

追う孫堅の気迫はもの凄く、後ろに虎が見えてきそうな勢いだ。

「死ね！！」

「ウワッ！」

孫堅の後ろからの斬撃を、張允は左へ転がり込むようにしてかわ

す。

しかし孫堅の攻撃は止まらず、体制を立て直したばかりの張允に次々と切り掛かっていく。

張允も両手の双剣でなんとか防ぐが、どんどん後ろに追いやられてしまう。

「あっ！」

そしてとうとう背中に木がぶつかり、これ以上は下がれなくなった。

それをチャンスとばかりに、孫堅は剣を持っていない方の手で張允の顔面に殴り掛かる。

だが張允が咄嗟にしゃがんで避けると、案の定孫堅の拳は木にぶつかった。

しかし手を痛めるどころか、木が音を起てながら倒れていく。人とは思えないレベルの怪力だ。

そしてその隙に張允は逃げ出し、孫堅がそれを追う。

再び張允にとって命懸けの鬼ごっこが始まった。

「相変わらずなんて怪力だよ、この年増ー！！」

「はっ、お前の鍛え方が足りねぇだけだろ。胸もねぇしよ」

「む、胸の事は言うな！！　これでも僕気にしてるんだから！
てかあんたの所の連中の発育が異常なんだよ！！！」

会話だけ聞くと全く命懸けのようには聞こえない。
しかし、今にも泣きそうになりながら走る張允と、狂気じみた笑みを浮かべている孫堅を見れば、納得出来るだろう。

（……何だ、この感じは？）

そんな笑みを浮かべながらも、孫堅の中には一種の不安のような嫌な予感があった。

ちなみに孫堅も孫策ほどでは無いが勘が鋭い。特に一瞬の危険察知に関しては獣並だ。

しかし予感以前に、孫堅は張允の行動に疑問を感じていた。

少しずつ明るくなってはいるが、まだ日が昇っている訳ではない。
そのため辺りは薄暗く、森の中は木が鬱蒼としているので余り光りを通さず、足元すら覚束ない状態だ。

そんな前もよく見えない森の中だと言うのに、張允はさっきから一定の方向を目指しているように見える。

――まるで、どこか目的地が有るように。

「！　危ねっ！」

そんな事を考えながら走っている中、孫堅は何か危険を感じ、咄嗟に跳び上がる。

跳びながら下を向くと、ちょうど足元の辺りに縄が一本真っ直ぐに張られていた。

おそらく劉表軍の者が仕掛けた罠なのだろう。

「皆の者、奴を射殺せい！！」

そして何処からか黄祖の声が響き、草むらや木の陰から次々と劉表軍の兵士達が現れる。待ち伏せされていたようだ。

出て来た兵達の何人かが弓を構え、空中にいる孫堅に容赦なく矢を放つ。

空中で身動きが取れない孫堅は、舌打ちをすると身を翻し、ぎりぎりのところで矢を避けていく。

しかしそれで矢を全てかわせる筈もなく、一本左手に当たってしまう。

だが孫堅はそれに怯まず、着地と同時に矢を抜き、近くにいた兵士に切り掛かった。

「……なかなか数いるじゃねぇか」

近くの兵を切り伏せた孫堅が周りを見ると、彼女の周りには四、五十人くらいの人間がいた。暗くて顔までは見えないが、勿論全員が劉表軍だ。

そして中には張允や黄祖と言った将の姿も確認出来る。

状況を確認して孫堅が面倒だと溜息をつくと、彼女を囲む一角で突然悲鳴が上がった。

驚いてそちらの方を見ると、彼女の娘が兵士を切り倒しているところだった。

「母様！！　無事？」

「……ったく、誰の事を心配していると思ってるんだか」

孫堅は笑いながらそう言うと、彼女と孫策の間にいる兵を切って

いく。
どうやら合流するつもりらしい。

「クッ、もう来おったか……。
張允！　お主は孫堅に当たれ！！　ワシは孫策と戦う！」

「……分かったよ」

孫策を見て苦々しげに怒鳴る黄祖に、張允はふて腐れたように返答する。

だがしっかりと剣を持つ力を強め、孫堅に向かって行く。

そして力で負けているので剣をクロスさせ、渾身の力で切り掛かる。

だが孫堅はそれを剣一本で受け止めると、鍔ぜり合いになった。

「何だよ、そんな顔しやがって。どうやらお前はこの策に、あんまし乗り気じゃねぇみたいだな」

鍔ぜり合いの為顔が近く、暗くともお互いの表情が良く見えた。

確かに張允の顔は無表情で、どこか不機嫌そうだ。
むしろ先程までの涙目になりながら逃げている時の方が、余程生き生きして見える。

「……まぁね。でも、何が大事かくらいは分かってるよ！！」

張允は力強く踏み込んで一気に押し切る。

孫堅はその勢いを使って後ろに下がるが、途中で足元にあった、先程とは別の縄に引っ掛かてしまった。

縄自体は簡単に切れたので転ぶ事はなかったが、木の上から岩がいくつか降って来た。

どうやら罠をあらかじめ仕掛けていたらしい。

「マジかよ！」

孫堅は大仕掛けに驚きながらも難無く岩をかわす。

だが避けた場所に兵士が待ち構えていて、槍を突き出してきた。

孫堅はそれを剣で防ぎ、兵士を殴りとばした。

すると兵士が殴りとばされた場所に罠が仕掛けてあったのか、矢が何本か飛んで来て、兵士に刺さった。

どうやらまだ結構の数の罠が仕掛けてあるらしい。

孫堅はそれを見て冷静に辺りを見るが、まだ暗い為罠が何処にあるかなど全く分からない。

「……こりゃ本当に面倒だな」

孫堅が思わずそう呟くと、彼女の横に孫策がバックステップでやって来た。
彼女の視線の先では黄祖が槍を構えている。どうやら現在進行形で戦っているようだ。

「同感よ。戦いずらいったりゃありゃしないわ」

「なかなか狡猾な手口だな。こりゃ劉表軍の奴が作戦じゃねぇぞ。それにしても何でお前がここにいるんだ？」

「……悪い予感がしたからよ」

「……」

孫堅は思わず黙らざるおえなかった。
彼女の言っている事は、つまるところ孫堅の身に危険が及ぶという事だ。最悪死ぬレベルの。

「……じゃ、さっさと終わらせて、帰るか！」

「ええ！」

孫堅は特にその事には触れず、張允に向かって行く。
それと同時に孫策も黄祖に向かっていく。

「――え？」

孫策は一瞬何が起こったのか分からなかった。
突然左足が地面に沈み、動けなくなったのだ。

直ぐに左足を見ると、その原因は小さな落とし穴だった。
しかも中は泥沼のようになっていて、かなり抜きづらい。

「雪蓮！！！」

「！！」

「もらった！！」

母の声に反応して孫策が前を向くと、そこには黄祖の槍が迫っていた。

――避けられない。

そう感じると同時に、彼女にはどこか納得したものがあった。

（……あの悪い予感……母様じゃなくて……私だったんだ……）

森の中に、絶叫が響いた。

初めて負けて（前書き）

ひ、酷過ぎる……。
文章はおろか話の内容が……。
しかも最後の適当な感じ……。

もしかしたら今回は今までの中で一番酷いかもしれません。

初めて負けて

司馬懿は劉表軍の本陣の中にいた。

殆どの兵が出陣している為本陣には人が数えるくらいしかおらず、非常に静かだ。

日が昇っているわけではないが、既にかなり明るくなっていて、もう松明もいらないだろう。

そんな本陣の中央の陣幕。そこに司馬懿はいた。

彼女は片手を顔に当て、もう片方の手で机に寄り掛かり、明らかに狼狽している。

全身からは暑さとは関係なく汗が溢れ出し、呼吸も乱れ気味だ。

目は見開かれ、何か恐ろしい物を見たような表情をしている。

もし今の彼女を誰かが見たら、下手をすると医者を呼ばれるかもしれない。

それ程までに彼女は動揺していた。

しかしそんな動揺の仕方がずっと続くわけもなく、時間が経つ毎

に呼吸が穏やかになってきた。
汗も一応出るのが止まり、彼女は一度深く目をつぶる。
どうやら落ち着きを取り戻したらしい。

（……ひとまず落ち着いて、状況を整理しないと――）
落ち着いた司馬懿は、今の戦況と自分の置かれた現状の把握をし始める。

まず、彰義軍は彼女の策により袁術軍に攻め込まれ、風前の灯だ。
いくら将兵が有能といえど、連戦で疲れが溜まった状態で、自身の三倍以上いる敵を打ち破る事は不可能だろう。

これによって彰義軍を壊滅させ、袁術軍にも少なからずの被害を与え、孫堅軍の方に兵力を多く注ぎ込み、罠を張り大打撃を与える。
これが今回彼女が思い描いた戦の理想系で、現在まさしくその通りに事が進んでいる。

だが唯一の問題は、今壊滅しかけている彰義軍に、彼女がもう会えないと思っていた姉がいた事だ。
しかも袁術軍に矢を射られ、かなり重傷との事。下手をすると死んでしまう程らしい。

それにもし助かったとしても、彰義軍は壊滅寸前。
完全に壊滅すれば手負いの姉など良くて殺され、悪ければ捕虜になり、最悪の事態が待っている。

（つまり……今私がすべき事は彰義軍の壊滅を防ぐ事……）

司馬懿はそこまで思い至ると目を開く。目には一種の覚悟が浮かび、先程までの様子は微塵も無い。

そこからの司馬懿の動きは早かった。

直ぐさま武器を保管している陣幕に行き、適当に一本剣を取り出し腰に下げる。
更に軍資金として用意されていた金を持てるだけ懐に入れると、本陣の出口に早足に向かう。

（袁術軍の方は私が何とかするから……だから……絶対死なないで、お姉ちゃん！）

司馬懿もまた考輝に切られ、その傷はまだ塞がっていない。
しかし、その思いの強さは切られた痛みを上回っていた。

「何故お前が本陣に戻っている？　お前の策では撤退した後、孫堅軍の方に向かうんじゃなかったのか？」

そうして司馬懿が本陣の出口に着くと、そこには蔡瑁が立っていた。

周りには兵士どころか獣一匹おらず、どうやら一人だけらしい。

そして今の言い方からすると、司馬懿の事をここで待ち伏せしていたようだ。

蔡瑁は司馬懿の事を睨んでいるが、彼女は全く動じない。

「それを言うなら蔡瑁さんこそどうしたんですか？　貴方も孫堅軍に当たる予定の筈ですよね？

それとも兵の指揮をすっぽかして、主将自ら私の素行の悪さを注意しに来たんですか？」

司馬懿の口調は普段と同じ、人を馬鹿にしたような口調だ。

ただ、ほんの少しだけ声が震えている。どうやら完全に動揺が抜けたわけではないらしい。

司馬懿は喋りながらも歩を進め、蔡瑁の横までやって来る。

そしてその瞬間、蔡瑁は素早く剣を抜き司馬懿に切り掛かる。

だが完全な不意打ちにも関わらず、司馬懿も冷静に剣を抜いて彼の一撃を余裕に防ぐ。
まるでこうなる事を予想していたかのような対応の良さだ。

「……流石に分かっていたか」

蔡瑁は舌打ちをすると、苦々しげに彼女を見る。
その時の彼女は身長が低い為に目線は下だが、まるで彼を見下したような目をしていた。

「私は優秀ですから。だから貴方が私を危険視してたのも知ってましたし、隙あらば私を殺そうとしてたのも知ってましたよ。
残念でしたね、三下野郎」

彼女の言葉にあるのは自身への絶対の自信と他者への軽蔑。
それこそが司馬懿の素だった。

だが今の彼女には焦りがあった。
こんな所で時間を浪費している間に、彰義軍――姉にどんどん危険が迫っている。

そう考えると司馬懿は今にも走り出したかった。

――そんな焦りがあったからだろうか。

「……お前の弱点は人を見下し過ぎる事だ」

「な！？」

彼女の後ろの茂みに兵が隠れていて、弓で狙っていた事に気付かなかったのは。

彼女が気付いた時にはもう遅い。

もう既に矢が放たれ、彼女の目の前にまで迫っていた。

司馬懿が本陣で狼狽していた頃、彰義軍では亞莎が声を張り上げて指示を出していた。

「第二部隊下がらせ、第三部隊を間髪いれず前線に出して下さい！！　それから第一部隊に戦闘準備を！」

彼女の指示を聞くと、伝令達が三人程急いで走って行く。
おそらくそれぞれの部隊に向かったのだろう。

亞莎が劉表軍と戦っていた場所は、今は袁術軍に攻められている。
最初はいきなりの事で彼女はかなり動揺していたが、直ぐに切り替えると他の部隊に連絡をするなど、冷静に対応していた。

更に斥候を放ち、袁術軍の本隊が近付いていると知った彼女は、部隊を三つに分けローテーションで敵に当たらせていた。
森なので数に任せた突撃が出来ず、徐々に押されながらも前線を保ち、被害を最小限に抑えている。

そうやって凌いでいる内に、劉表軍が撤退した場所から玄鳥や凪達が援軍として集まって来ている。
まだ考輝は来ていないが、その内やって来るだろう。

（でも……これじゃあそんなに長くはもたない……）

勇ましく号令をかけ、激励をしながらも、亞莎の内心は今にも泣き出しそうだった。

例え彰義軍が全員集まって来としても、数は知れている。
それに今彼女がやっている戦法も悪あがきでしかない。

このまま戦いを続けても、彰義軍には万に一つも勝ちの目は無い。
それが分かっていながら兵士達を死地に追いやっている事が、彼女には心苦しかった。

「やべぇな……流石にこの数は抑えきれねぇ」

ちょうどその時、玄鳥が前線の方から歩いてやって来た。
おそらくローテーションでちょうど前線から退いて来たところなのだろう。
その証拠に、彼女の得物には血がこべり付き、まだ渇いてすらいない。

「はい……おそらく上手く持ちこたえても、後一刻くらいが限度でしょう……」

そんな玄鳥に亞莎は思わず弱音を吐いてしまう。それは、消え入りそうな小さな声だった。

だが、本来兵を指揮する者はこういう事を言うべきではない。
兵に聞かれれば、それこそ士気に関わるだろう。

亞莎も言った後にその事を気付いたのか、しまった、という顔を浮かべ辺りを見渡す。
しかし声が小さかったのが幸いしたのか、玄鳥以外には気付かれていないらしい。

そんな亞莎に玄鳥は微笑みを浮かべる。
彼女を安心させるような優しい微笑みだ。

「そんな心配すんなよ。きっと能面の奴なら何か良い策を考えてくれんだろ。こういう時にこそ頼れる奴だし。
それにしてもこの非常事態にあいつは一体何処にいるんだよ」

普段と変わらない荒っぽい彼女の口調。
だが不思議と亞莎には心強かった。

おそらく、彼女の一切迷いの無い考輝の事を信じている目が理由だろう。

「えっと、考輝様が守っていた場所はここから一番遠い所なので、来るのにはもう少しかかると思います。
――それにしても玄鳥さんって本当に考輝様の事を信頼しているんですね」

勿論、亞莎だって考輝の事を心から信頼している。自分の才能を見つけ、伸ばしてくるた彼の事を。
だがそれでも不安だってあるし、恐怖もある。
だから玄鳥の先の事への恐怖すら無い心が亞莎は凄いと感じた。
ただ単に、玄鳥が何も考えていないだけかもしれないが。

そう言われた玄鳥は急に自分が言った事が恥ずかしくなったのか、頬を赤らめ始めた。
そしてそっぽを向き、目を泳がせる。

「そりゃあ……あいつとは一年半以上ずっと一緒にいるし……こういう時にやる奴だって分かっているし……。
……それに――」

「呂蒙様！　孫堅軍の方へ偵察に行っていた者が帰って来ました！！」

玄鳥が最後に何か付け加えようとした時、ちょうど兵士がやって来た。

玄鳥も別に報告を遮ってまで言うつもりは無いらしく、彼女は口を閉ざした。
それを確認してから亞莎は兵士に問い掛ける。

「それで孫堅軍の様子はどうでしたか？」

「それが……兵が何やら動揺している中で無理に突撃し、伏兵に嵌まり現在大混乱をきっしていると……」

「……」

その報告に思わず考輝は閉口する。

孫堅軍が劉表軍を既に打ち破っていたり、非常に優勢な戦況ならば援軍を要請する事も出来たが、聞いた情報の限りでは難しいだろう。

しかも孫堅軍には亞莎の義姉のトウ当もいる。心配にもなるだろう。

ともかく、これによって彰義軍は正真正銘崖っぷちに追い込まれた。

援軍の望めない今、もう二千にも満たない彰義軍だけで一万の袁術軍と戦わなければならない。

その結果は子供にだって簡単に分かるだろう。

「……いよいよ、腹括らなければならないな」

そんな中、口を開いたのは玄鳥でも亞莎でもなく、いつの間にかに二人の間に立っていた考輝だった。

「って、えええ！？　考輝様！？」

「おまっ、いつの間にいたんだよ！！」

「ちょうど今だ。それにしても孫堅軍に援軍を頼めないのは辛いな……」

驚く二人を尻目に、考輝は冷静に話し始める。

よくよく見ると彼の後ろに兵士達がいて、全員息が上がっていてまだ整っていない。

ちょうど今来たというのは嘘ではないようだ。

「……やはり袁術と直接話をして、攻撃を止めて貰うのが一番良い。おそらくこの襲撃は劉表軍が一枚絡んでいるだろうし、話せばどうにかなるかもしれない」

「……袁術、とですか？　まず話し合いに応じるでしょうか……」

考輝の言葉に亞莎は心配そうに声を上げる。

正直なところ、彼女は袁術が話し合いに応じるとは到底思えなかった。

それに仮に話し合いに応じたとしても、この戦況で兵を退けと言って、実際行ってくれるかどうかも難しい。

「……おそらく袁術は応じないだろう。

だから技だが、こちらから奴に会いに行く」

「……しかしよ、袁術は一万の兵に守られているんだろ？　いくらなんでも突破しきれねぇぞ」

玄鳥がそう言うと、考輝は顔の表情をより一層無くす。ただ目は悲しげで、どこか遠くを見ている感じだ。

それは彼が普段全く見せない表情で、それこそ長い付き合いの玄鳥も初めて見るような顔だ。

「玄鳥……俺の為に命を捨てられるか？」

やっと口を開いた考輝の言葉は重々しく、彼の表情は晴れない。

だがそれも人として当たり前だろう。

そしてそんな問い掛けに、玄鳥は即答だった。

「何を今更聞いてやがる。そんな覚悟、俺だけじゃなくて全員とっくに出来てたらぁ」

彼女はそう言いながら、満面の笑みを浮かべていた。

それから約十分後。考輝は馬に乗り、遠目に最前線を見つめていた。

そしてその後ろには同じく馬に乗った玄鳥と、十数人の兵士達。

全員松明を持ち、考輝以外が首からなにか球のような物をぶら下げている。

そして、全員が覚悟を決めたような表情をしていた。

「……行くぞ」

考輝の短い掛け声を合図に彼等は一斉に馬を走らせる。
森の中で障害者が多く、最高速度を出せるわけではないが、それでも馬のスピードはかなり速い。

その為、直ぐに袁術軍の陣営に突っ込んだ。

最初はまさかこんな突撃をしてくると思っていなかった袁術軍の兵士達は、ろくな対応が取れていなかった。
なので一気に全員で深く入り込めたが、流石にそこまで来ると兵士達もまともに動き始める。

陣営の中にまで入り込んでいるので、味方に当たる確率のある弓は使ってこないが、槍や戟等の長い武器を使い、馬に乗っている者を落としにかかる。

――しかし。

「な、何だこいつ！？　急に燃え始めやがった！！？」

「逃げろォ！　火のついた馬が暴れ回ってるぞ！！」

彰義軍の兵士達は自身の最後を悟ると、胸の球に火をつけ炎を撒き散らし始めた。

彼等が胸につけている球は真桜が開発した兵器の火種。
以前考輝が司馬懿と戦った時に使ったのと同じ物で、火が引火すると途端に周りに火が燃え広がる兵器だ。

ただ弱点は、燃え広がるスピードが早過ぎるという事。
その早さ故に実戦の場で使う事は難しく、上手く考えなければ味方にも被害を及ばしかねない。

そのため普段は罠として設置して使うものだが、考輝は今回特攻用に使っていた。

その効果は絶大で、所々で起こる小火と、倒せば燃え上がってしまうという恐怖が袁術軍の兵士達を混乱させ、動きを鈍らせる。
その為彼等は数はどんどん減ってはいるが、着実に前に進んでいた。

そして、とうとう考輝と玄鳥を合わせて四騎だけとなったが、袁術の所までたどり着く。

袁術はその時張勲と一緒に馬に乗っていたが、考輝達を見て逃げるのも忘れ、唖然としていた。
まさかここまで踏み込まれるとは夢にも思ってもみなかったんだろう。

そしてその隙に兵士が一人特攻を仕掛け、玄鳥が辺りの兵を吹き飛ばして、無理矢理に道を作る。

その道に考輝は無理矢理捩込むと、袁術に向かって飛び掛かる。

張勲はそこで慌て馬の踵を反して逃げようとするがもう遅い。

考輝に飛び掛かられて馬は倒れ、袁術と張勲は地面に投げ出される。

そして考輝は直ぐさま袁術を地面に組み伏せると、暗器の短刀を彼女の首筋に当てた。

「ヒッ……や、止めるのじゃ！！　妾はまだ死にたくないのじゃ！！」

「……じゃあ俺の話を聞いて下さい」

この時考輝は、自分でも気付かないくらい薄らと笑みを浮かべていた。

その後、袁術軍は直ぐさま彰義軍への攻撃を中止し、彰義軍はなんとか壊滅という最悪の事態は防いだ。

だが馬も物資も兵力も半分近く失い、勝利どころか引き分けですらない。

敗北。

誰もがこの惨状を見て、そう答えるだろう。

そしてこれが彰義軍の旗揚げ以来、初の完全なる敗北だった。

戦い終わって

司馬懿は森の中にいた。

時刻はもう昼だが、森の中は鬱蒼としている為かなり薄暗い。

そのため季節と相俟って、森の気温は結構低かった。

そしてそんな森の中を、何処か目的地があるのかある方向に向かって進んでいる。

だがその足付きはかなりふらふらとしている。

よく見ると彼女は全身に怪我を負っていた。

服を破いた物で一応の止血はしているようだが、それでも血は流れ落ちている。それこそ彼女の通った跡が血で辿れるくらいに。

（お姉ちゃんに……もう、会わす顔がない……）

そんな状態になりながらも、彼女は自分ではなく姉の事を考えていた。

彼女が全身に怪我を負いながらも、自分を殺しにかかってきた蔡瑁達から逃げ切ったものも、その時には既に戦いは終わっていた。

そして彼女が一番恐れていた彰義軍の壊滅はなかったものも、そ

れは彼女ではなく考輝の力があったからだ。

結局のところ、彼女は自分の姉を傷つけただけで戦いは終わってしまった。

そして、その事を知った司馬懿は直ぐさま逃げ出した。

こんな状態では姉の前に姿を晒す事は出来ない。例え姉が生きていようが死んでいようが。

そんな思いがボロボロになった彼女の体を動かしていた。

そしてもう一つ、考輝の役に立とう、という思いもあった。

彼女は逆恨みで考輝を殺そうとしたが、彼の軍には奴隷になっていたであろう姉が所属していた。

兵士も彼女に敬語を使っていたので、酷い扱いを受けている訳でもなさそうだ。

とすると、考輝は姉を救ってくれた恩人と考えられる。

そんな恩人の軍に攻撃を仕掛け、負い目を感じないほど司馬懿は腐った人間ではなかった。

（とりあえず、この前お世話になった水鏡女学院に行こう……。
――そしてあの二人に……彰紅炎への……仕官を、薦……め……
て……）

だが、司馬懿は意識が徐々に遠くなり、地面に倒れこんだ。おそらく血を流し過ぎたのだろう。

それでもなお彼女は前に進もうとするが、全身に力が入らない。

そして彼女はそのまま、様々な思いを抱きながら意識を手放した。

今朝がた戦闘があった近くの森の中に、彰義軍は野営を張っていた。

兵士達は戦後の処理や被害の確認、負傷者の手当てと忙しく働き、昼飯もちゃんと食べれていない者も多い。

しかし、そのように忙しい働きながらも、兵士達の表情は重い。

深夜から半日にも及ぶ戦闘や激務の疲れも溜まっているのだろうが、何よりも先の大敗が響いているのだろう。

ここまでの損害と敗北感を味わったのは、彰義軍は今回が初めてなのだから。

そんな雰囲気の野営の一角の陣幕で、亞莎が机に置かれた大量の書簡や木簡と格闘していた。

それらの書簡や木簡は、今回の戦いの被害の調査の途中報告や、戦いの詳細について書かれたものだ。

そして彼女は今、それらの情報を簡潔に纏める仕事をしている。

「……ふぅ」

暫くすると亞莎は息をつき、身体をぐっと伸ばし始めた。

おそらく一段落ついたのだろう。

そして彼女は目の前にある、今まで作業していた二つの書簡の一つに目を通す。

その書簡は被害を大まかに纏めた物だった。

「『被害の途中報告。

死者は約千人、重軽傷者は合わせて約二千、怪我を負っていない者はほぼ皆無。
兵糧や物資等の被害は少ないものも、馬は数百頭単位で脱走。
将は李典将軍が重傷を負ったものも、現在快方に向かっている。
しかし一方で司馬朗殿の受けた矢傷は深く、一命は取り留めたが後遺症が残るとの事『」

確認の為に書簡を読み上げた亞莎は、読み終えると思わず溜息を吐いた。
自分自身で書いたものに関わらず、読んでて嫌になる内容だ。
しかもこれは途中経過であって最終的な纏めではない。確認が進めば被害総数は更に大きくなるだろう。

亞莎はそう考えると再び溜息をつき、もう一方の書簡に手を伸ばす。その書簡には詳しい戦闘の様子が書かれていた。

「『今朝の戦闘の詳しい報告。
劉表軍は真夜中に我々に夜襲を仕掛け、夜明け前に撤退。予測ではあるが数は五千程。
なお同時刻、孫堅軍も攻撃を受けていたがそちらは別紙を参照。
劉表軍が夜襲を仕掛けてから一刻を過ぎた頃、袁術軍より三千程の援軍が到着。
しかし、率いて来た雷薄と陳蘭の両将は我々を攻撃。その上彰義軍から攻撃を仕掛けられた、と偽りの報告をし、我等と袁術軍を争わせた。

偽りの報告をした両名は現在行方不明。しかし我々と袁術軍が戦っている間に部下達と共に江夏へ向かっている姿が確認されている。証拠はないが、劉表軍と内通していた可能性が高い』」

やはり、こちらの方にもろくな情報が書かれていない。

敗因を突き詰めれば袁術の求心力不足という事になるが、彰義軍が多大な被害を受けた事には変わらない。

唯一の幸いと言えば、当の袁術軍自体の損害は非常に少なく、追撃をされる心配が無い事だ。

流石に劉表軍もそれなりの被害は出しているだろうし、こちらが退くなら危険を冒しはしないだろう。

なので敗走しているのにも関わらず、現地で被害の確認などが出来た。

そんな事を考えながら、亞莎は今の書簡の備考の部分に目を通し始めた。

「『備考だが今回劉表軍を指揮していた客将らしき人物の報告が上がっている。捕虜の話しによれば、その人物が今回の策を考えたらしい。

そして、その人物の名は――』」

亞莎はここで読むのを止めてしまった。
その先に書いてある単語は『司馬懿』。今回負傷した鈴蘭の実の妹だ。

彼女達は洛陽で生き別れとなり、もう一年以上も生死すら分からない状態が続いていた。

そしてやっと見つかったと思えば、今回のような状態で敵同士。
妹の考えた策で姉は大怪我。

なんとも救いようの無い話だ。

なお当の鈴蘭にはまだ司馬懿がいた事は伝えられていない。
傷が塞がったばっかりで余り興奮させてはいけないと、半ばドクタースストップのような感じになっていた。

「……姉妹で戦う、か……」

亞莎はそんな事を考えながら、ぽつりと呟く。

血が繋がってはいないとはいえ、姉妹がいる彼女にはその辛さが痛い程分かった。

そして、もしかしたら自分達も……と考えてしまう。

事実、彼女と義姉のトウ当は別々の軍に所属している。別段ありえない話しでもない。

「……亞莎さん、ちょっといいですか？」

「ひゃ、ひゃい！？！」

そういった事を俯きながら考えていると、亞莎は唐突に正面から声をかけられる。

急な事に声を裏返しながら前を向くと、そこには司馬朗が立っていた。

病み上がりの為、傍らには衛生兵が二人程控えている。

司馬朗は普段と同じ着物を着て、一見いつもと同じように見えるが、顔色は非常に悪い。

それに肩の辺りには不自然に膨らんでいる部分がある。おそらく包帯が巻いてあるのだろう。

ちなみにこの時代に包帯など無いため、考輝がうろ覚えで作った物だ。包帯というよりかは、熱湯で消毒した清潔な布と言った方が良いかもしれない。

熱湯を使う為あまり量もないが。

閑話休題。

「鈴蘭さん……その右腕……」

そして何よりも彼女の右腕は力無くだらんと垂れていた。
ただ力を抜いたぐらいではならない程に自然に垂れ、ぴくりとも動かない。

そして後遺症が残ると聞いていた亞莎は、それがどういう事を意味しているのかが直ぐに分かった。

「……はい。おそらくもう動かないそうです……」

鈴蘭は自嘲するように笑いながら、右腕を掴む。
だがその右腕に、掴まれたという感触は無い。

そんな鈴蘭に、亞莎は何と声をかければよいか分からなかった。
何かを言おうと小さく口を開くが、また直ぐに閉じてしまう。その繰り返し。

「……それはそうと、実は亞莎さんに聞きたい事があったんです」

「……何でしょうか？」

そうこうしている間に、逆に鈴蘭の方から喋り始める。

何か言う事を考えていた亞莎は、特に考えず条件反射的に応える。

だからそれに気付いたのは鈴蘭が次の言葉を発した後だった。

「――樒ちゃん……私の妹が劉表軍にいたって……本当ですか？」

鈴蘭が喜びと悲しみが混ざり合った、困惑したような表情をしている事に。

一方、彰義軍から少し離れた場所に野営を張っている孫堅軍の雰囲気は、彰義軍よりも重苦しかった。

彰義軍よりも損害が低かったのにも関わらず、士気は孫堅軍の方が低い。

その上、僅かではあるが脱走兵が出ている。

周瑜や黄蓋等の将達は、その下がりきった士気をどうにかしようとしているが、なかなか上手くいかない。

だがそれも、彼女が戦死したとなれば仕方ないだろう。

孫堅軍の本陣の陣幕。そこに孫堅はいた。

だが彼女は陣幕の中央に寝かされ、顔には布がかけられている。

そして、もう動き出す事は無い。

彼女の傍らには孫策が無言で座っている。
じっと孫堅の顔の方へ見つめ、表情は恐ろしく無表情だ。その表情からは、普段の彼女の様子など想像する事も出来ない。

彼女の身体に出来た大小様々な傷が、彼女の雰囲気をより重苦しくしているのかもしれない。

「母様――」

孫策は今日何度目か分からない呟きをすると、もう数え切れない

程思い出した、孫堅の死ぬ直前の事を思い出し始めた。

『母様ァァ！！？』

落とし穴に嵌まり、動けぬ孫策に迫る黄祖の槍が貫いたのは、彼女ではなく孫堅だった。

彼女は孫策の前に飛び出すと、空中で槍を受けて身を持って孫策を守った。

娘の危機を直感的に感じとった孫堅は、孫策が落とし穴に嵌まる前から動き出していたのだ。

結果として彼女は娘を守る事が出来たが、その代償はでかい。

彼女は胸を槍で貫かれ、明らかに致命傷を負っている。

心臓には刺さっていないようだが、即死かそうでないかの差だけだ。

槍を抜かれると、孫堅は重力に逆らわずにそのまま地面に倒れ込んだ。
孫策は慌てしゃがみ込むと、孫堅を抱き抱える。
彼女はまだ落とし穴に嵌まっているが、孫堅は目の前で倒れた為に手が届いたようだ。

『母様しっかりして！！　目をつぶっちゃ駄目よ！！！』

孫策は今にも泣き出しそうな怒声で声をかけるが、孫堅は全く応じる事が出来ない。
ただヒューヒューと苦しそうに胸を上下させるだけだ。どうやら、呼吸器をやられてしまったらしい。

そんな二人に対して、黄祖は再び槍を構える。
母が死んで隙だらけの孫策を、今度こそ殺すつもりらしい。

しかし突然に劉表軍の兵士の悲鳴が上がる。
黄祖が慌てそちらの方を見ると、兵士の一人の頭に矢が刺さり息絶えていた。

『貴様等ァァァァ！！！！』

そして今度は怒声が聞こえ、そちらを見ると、怒りで顔を赤くした黄蓋が弓を構えながら走って来ていた。
後ろには孫堅軍の兵達が何十人もいて、その全員も同じように目を怒らせている。

『もう来おったか……。もの共退くぞ！！　――張允、何をしておる！　急げ！』

流石にこれらと当たるのは歩が悪い感じた黄祖は、孫策にとどめも刺さず、直ぐに兵士達を撤退させる。幸いにもまだ遠く、充分逃げられ距離だ。
ただ張允だけは不服そうに目を細め、暫くしてから動き始めた。

だがそんな光景など、今の孫策の目には写っていない。

『祭！！　直ぐに医者を呼んで！！　母様が槍で――』

まだ遠くにいる黄蓋に孫策が大声で叫ぶが、途中でそれは遮られた。当の孫堅によって。
彼女は震えながらも手を上げ、孫策の頬に触る。
驚いた孫策が孫堅の方を見ると、彼女は笑っていた。

そして彼女は頬に当てた手をそのまま孫策の首に回すと、そこを支点に頭を孫策の横まで持ち上げる。

更にもう片方の手を背中に回し、傍から見ると抱き合っているような形になった。

孫堅はその状態で、途切れ途切れになりながらも囁き始める。

『雪蓮……お前を愛してる……心から……後の事……蓮華と……小蓮の事……悪りぃ……けど……任……せ……たぜ――――』

そこまで言った孫堅はゆっくりと目を閉じる。

ヒューヒューという呼吸音は聞こえなくなり、胸も上下に動かなくなった。

『――母様？』

頭では既に分かっている。

でも認められなかった。

『……嘘でしょ？』

抱き着いている母の体温が低くなっていき、冷たくなっていく。

『ふ、ふざけないでよ……』

軽い力で揺らすが全く反応は返ってこない。

それどころか、揺らした事により孫堅の体がバランスを崩し、地面に倒れてしまう。

『イヤ……』

孫策は地面に力無く倒れ伏せる孫堅を見て目を見開く。

そして認めてしまった。確かめてしまった。確認してしまった。理解してしまった。

『イヤァァァァァァァァァァ――――――――！！！！！！』

母親の死を。

「……」

それから先の事は、彼女はよく覚えていない。

ただ感情のままに突撃し、怒りのままに敵を殺し続けた。

そして伏兵に嵌まり、仇を前にして逃げ帰り、孫堅軍は大敗をきした。

そこまで思い出し、孫策は額に手を当ててうなだれる。そこには昨日まではなかった、赤い紋章があった。

それは孫家の当主の証で、このようなドタバタした状況でもしっかり継承されていた。

なお、もしもの時は孫策が跡を継ぐと決まっていたらしく、姉妹が他にもいるにも関わらず後継者問題は起こらなかった。

今彼女の額にある紋章は彼女が子供の頃から欲しがり、いずれ自分も母のようにと憧れた物だった。

しかし、いざ手に入れたとなると全く喜べない。否、喜べる筈もなかった。

「雪蓮様……」

そうやって暫く固まっていると、不意に陣幕の入口から声をかけられる。

ゆっくりとそちらの方を見ると、トウ当が困惑したような表情で立っていた。どうやって声をかけてよいか、迷っていたのだろう。

「彰義殿が自ら弔問としてやって参りましたが……如何しましょうか？」

普通は義勇軍とはいえ、トップレベルの人間が来たならば、最低でも将が迎えるのが普通だろうが、今孫堅軍に手が空いている将はいない。
唯一時間があるのは、周瑜が気遣かって仕事を回さなかった孫策だけだ。

しかし孫策も会えるような心理状態ではない。

それが分かっているから、トウ当はあんな抽象的な聞き方をしていた。

「……私が会うわ。ここに通してちょうだい」

「……分かりました」

そんな中で孫策は自分で会う選択をした。
自分の勘を信じて。

「――本当に、死んでしまったのか……」

陣幕に着き、孫策と口上のような弔問の挨拶をした後、考輝は孫堅を見るなりそう呟いた。
考輝はいつも通りの無表情だが、彼の目には戸惑いの色が浮かんでいる。

何故なら彼の知る男の孫堅が死ぬのは、反董卓連合が終わった後だからだ。
それなのに今は反董卓連合どころか、黄巾の乱すら起こっていない。
相当な時間のズレがある。
だから彼の頭の中には、孫堅が死ぬ事などよぎりすらしなかった。

（……死ぬ時期を間違えて覚えていたか？　だが流石に孫堅ぐらいの大物の死を間違えたりは……。
――そういえばすっかり忘れていたが、ここは三国志以前に恋姫無双だったな……）

そこまで思い至った考輝は内心舌打ちをする。
何せ彼は恋姫に関しては全然詳しくない。孫堅が原作に出ない事すら知らないレベルだ。
他にも恋姫と三国志で大きなズレがあったとすると、下手に三国志の知識を持っている彼は逆に不利だろう。

「……ええ。私を庇って、本当に目の前で死んでいったわ……」

先程の考輝の呟きが聞こえていたのか、孫策は若干自嘲気味にそう言った。顔は苦々しく歪められ、下を向いている。

そこから暫くは、どちらも何も喋らなかった。孫策は下を、考輝は孫堅の方をじっと見つめている。

元々二人とも喋る気が無いのか、雰囲気の重苦しさに押されて喋らないのかは分からないが、そのまま沈黙の時間だけが過ぎていく。

「……ごめんなさい……」

そんな沈黙を破ったのは、孫策の方だった。

そのぽつりと言った呟きは、特に相手を指定している訳ではないが、何となく自分に対してだと考輝は感じていた。

「昨日……いえ今日ね。貴方達が袁術軍に攻められた時、私達はその仲裁に向かうべきだったわ。

怒りに任せて突撃するんじゃなくてね」

確かに孫策の言う通り、彼女達が無理に劉表軍に突撃せず、両軍の間に立っていれば結果は大分変わっていただろう。

最低でも被害はもっと抑えられ、考輝もあんな特攻のような真似はしなかっただろう。

普通ならその事に関して言及する所なのかもしれないが、考輝はただ孫策に感心していた。それも心の底から。

「……もう過ぎた事だ。言いたい事が無いわけではないが、別段お前に何か言うつもりはない。

――第一目の前で母親を殺されたんだ。それで冷静でいるなんて難しいし、お前がとった行動は人として、子としては正しいと俺は思う」

実の母を殺され、それを目の当たりにしていてもなお冷静な判断を保つ。それは口で言う程簡単ではないだろう。

実際普段冷静な考輝だって、もしそうなった場合どんな行動をとるか自信はない。

まして彼の冷静さは借り物のような物なのだから。

「……貴方も、母親を誰かに殺さたの？」

孫策の唐突な質問に考輝は目を見開く。

おそらく孫策は彼の言い回しが、その悲しみを知っているような

ものだったから聞いたのだろう。
もしかしたら持ち前の勘かもしれないが。

だがどちらにせよ、それは図星とまでは行かないが、全くの外れという訳でもなかった。

「……実の親って訳ではないが、母親みたいに慕っていた人なら少し前に殺された」

考輝は少し動揺しながら近くにあった椅子に座る。
それは孫策の横にあった椅子で、孫堅の亡きがらの横に二人で並んでいる形だ。

「洛陽での事だったから、死に目に立ち会えなかったし、まだ墓にも行けてないがな。
――だがそう言う事があったから、お前の今の気持ちは何となくだが分かる」

そう小さく言うと、考輝は陣幕の出入口の方を見る。

そこには長い金髪を風にたなびかせている、あの人が見える気がした。

この世界に家族がいない彼は、彼女――古万は母親と言っても過言でない存在だった。

「……私達って結構似た者同士なのかもね。貴方も意外に割と感情的みたいだし」

孫策はそう言いながら、微笑みを浮かべる。それは彼女の半日ぶりの笑みだった。

そして考輝はそこで初めて自分が泣いている事に気がついた。

左目から糸が落ちるように垂れるその涙は、完全に彼の意識とは隔絶されている。

まるでコップに収まりきらなくなった水が、外に溢れ出るような感じだ。

「……すまない、変な話をした。とりあえず俺は帰る。忙しいところを邪魔して悪かった」

考輝は素早く涙を拭い、手短にそう言うと直ぐに陣幕の出口に向かう。

どうやら無意識とはいえ、人前で涙を流した事を恥じているようだ。

「分かったわ。――それとこれからは私の事は雪蓮って呼んでちょ

うだい」

だが孫策――雪蓮の思わぬ真名の許しに驚き、立ち止まって彼女の方を振り返る。

そこにはいつも通りとは言わないが、確かに笑っている雪蓮の姿があった。

「……じゃあ俺の事は考輝で頼む」

考輝は考輝でぶっきらぼうに短くそう言う。彼はいつも通りの無表情だった。

そしてそのまま振り返らずに、野営の出口まで向かった。

考輝が孫堅軍の野営から出ると、大宛と彰義軍の兵士が何人か待っていた。

追撃の心配はほぼ無いとはいえ、ここはまだ敵地。一応の護衛は必要だ。

「大宛、悪いがちょっと歩きたい。少し遠回りをして戻る」

「……御意」

大宛は短く応えると、黙って考輝の後を追って行く。

兵士達も無駄が嫌いな考輝にしては珍しいな、と首を捻りながらついて行く。

彼のこの行動に別に変な意味はない。

妙に乱れた感情を落ち着かせようとしているだけだ。

だからそれは全くの偶然だった。

「……主……」

「……ん？」

遠回りするために森の奥に入って少しすると、大宛が考輝に地面を指差す。

そこには赤い斑点模様が出来ていて、真っ直ぐに延びていた。

しかもそれは良く見ると血でまだ固まっていない。

つまり近くに怪我人がいるという事だ。

そうと分かった以上ほって置く訳にもいかず、彼等は血がより渇いていない方へ進み、怪我人を捜す事にした。

そして暫く進むと確かに傷を負った人物が倒れていたのだが――――。

「……どうにも今日は予想外の事がよく起こる」

それは偶然だった。

考輝が広い森の中で意識を失い、死にかけている司馬懿を見付けたのは。

戦い終わって（後書き）

やっと学校が冬休みに入りました。
とりあえずこの間に更新スピードを上げたいと思います。

と言うのも、実は受験とか家の都合の関係で、来年の八月から更新が出来なくなるからです。
まだ先の話ですが、この小説を書き始めてもう半年以上。このペースでは完結まで間に合わないと分かって来ました。

なので一月上旬までは最低週一更新で、出来れば二、三する感じで行きます。

いろいろ急にすみません。

P．S　感想頂けると本当に有り難いです。作者のやる気と更新スピードに直結します。

脅しに合って（前書き）

前回は感想を沢山有り難うございます。
お蔭様でほんの少しですが早く投稿ができました。
何とかこのペースを維持して行きたいです。

脅しに合って

考輝は陣幕の中にいた。

時刻はもう夕方近くで日もかなり西に傾いているが、陣幕の出入口に簾のような物が下りていて、日光を遮断している。

その陣幕は小さく質素な造りだが、さほど使われていないのか、わりと綺麗だ。

置いてある物もベッドが一つに机と椅子だけと、簡単な物しかない。

そしてそのベッドの上には顔に大きな火傷がある、金髪の少女が横たわっていた。

全身包帯だらけで意識が無いが、しっかりと息をしていて規則正しく胸を上下させている。

だが少女は手を頭の上で縛られ、ベッドの隅に繋がれて動けないようにされている。

意識が無いのにも関わらずである。

統：９９　武：７８　知：１００　政：９７　魅：８９
剣：Ｓ　槍：Ａ　戟：Ａ　弓：Ａ　騎馬：Ｓ　兵器：Ａ　水軍：Ｃ
特技：神謀（謀略に関して全てが優遇される）

考輝はその少女――司馬懿の何回目かになるのステータスを確認をした後、溜息をつきながら椅子に座る。

だが暫く司馬懿を見ていると、不意に立ち上がり陣幕の入口の方へ向かう。

そして彼が簾のような布の横から外に出すと、夕日に近い日をを浴びながら、退屈そうにしている玄鳥がいた。

「何だ？　見張りやっと終わりか？」

玄鳥はそう言って欠伸を一つすると、眠そうな目を考輝に向ける。余程見張りというものが退屈らしい。

だが考輝は直ぐさま首を振る。

「悪いがもう少しだ。あとこれからは陣幕に誰も近づけさせるな」
「……第一なんで俺に見張りなんか？　さっきもなんか亞莎とこそこそ話してたしよ……なんかヤバイ事でもやってんのか？」
そんな考輝に玄鳥は疑問もとい不満を言う。言葉以前に目が物語っていた。
勿論、何か良くない事をしているのではないかと心配している気持ちもある。
だが流石に何時間も同じ場所の見張りをさせられれば、不満の一つも言いたくはなるだろう。

「……似たような事だ」
だが考輝は特に説明も無しに、再び陣幕の中に引っ込んでしまった。
どうやら長年一緒にいる玄鳥にも、言うつもりは無いらしい。
仕方なく、玄鳥は怠そうに再び見張りを始める。
太陽はどんどん西に傾いていた。

玄鳥との会話を終え、陣幕の中に戻った考輝は早足にベッドに向かい、直ぐ横に立つ。
そして司馬懿の顔を見ながら、小さく喋り始めた。

「……そろそろ起きたらどうだ？　狸寝入りにも飽きてきた頃だろう？」

するとその言葉に反応して司馬懿はピクリと動き、胸の動きも止まる。

そして少しの間の後、観念したようにゆっくりと目を開け始めた。

「ばれてましたか……一体何時お気付きに？」

「本当についさっきだ。
大方寝たふりをして状況を確認していたんだろうが、こちらとしてらさっさと言って欲しかったな。おかげで無駄な時間を使った」

考輝は小さく息をつくと、司馬懿の方を睨む。

しかし司馬懿は全く動じない。縛られているというのに、普通に余裕そうだ。

「それよりもこの縄解いて頂けませんか？　少女一人縛るにしては、きつ過ぎると思うのですが。

――それともそちらの方にご趣味がおありで？」

「そんな趣味は無い。それから怪我をしているとはいえ、お前相手に警戒を怠るつもりも無い」

どうにも話の流れは司馬懿のペースにだった。

どうやら話術は彼女の方が上手らしい。

「それは残念です。貴方とはそういった類の話が出来ると期待しておりましたのに」

彼女はそう言うと、縛られたまま肩を竦めたような動きをして、薄く笑う。

余裕着々といった感じだ。

だが考輝は、司馬懿が何か無理をしているように思えた。心なしか、彼女の笑みも引き攣って見える。

まるで彼女の言葉は、何か時間稼ぎをしているようなのだ。

「――鈴蘭」

だから考輝は、今の彼女が最も言われたくないであろう言葉を口にする。

すると案の定、司馬懿は押し黙って表情も途端に暗くなる。
どうやら彼の見立ては正しかったようだ。

「それがお前の姉の真名。そしてお前は司馬懿。これで合っているな？」

その問い掛けに対し、司馬懿は何も喋らない。
ただ無言で首を縦に振るだけだ。

そして暫くはどちらも口を開かなかったが、唐突に司馬懿が重い口を開ける。

「……お姉ちゃんは……生きていますか？」

彼女の声は非常に震えていた。
その答えを聞くのが怖いのだろう。

「生きている。
――だが、今回負った怪我が原因で、もう右腕は動かないらしい」
対して、考輝の声には恐ろしく感情がこもっていない。まるで機械のようだ。

「……そうですか……」
その声に、司馬懿は最初こそ表情が若干明るくなったものも、また直ぐに先程よりも暗くなる。
自分のせいでとんでもなく大きいリスクを、実の姉に背負わす事になってしまったのだ。
当然と言えば当然の反応だろう。

その後はどちらも口を開かなかったが、また不意に司馬懿が話し始める。
表情はやはり暗いままで、目はどこか遠くを見ていた。

「……皮肉な話ですよね。一年近くも……貴方の事をずっと姉の仇のように思ってきたのに、その貴方が実は姉を助けてくれていたなんて……。
しかも、勘違いして戦った結果がこれなんですから……」

「……一つ聞くが、なんでお前は俺の事をそんなふうに思った？俺はお前とは今回が初対面の筈だが」

どうにも考輝には、それが不可解だった。

戦場で会った時も、彼女は彼にかなりの敵意と殺意を持ち、明らかに彼の事を知っていた。

だが、彼がどう思い出しても、彼女に以前に出会った記憶は無い。

「……一年程前の、洛陽近辺の山城にいた賊を破った事を覚えてらっしゃいますか？　実はあの時、私が賊を指揮していたんです」

考輝はそう言われ、直ぐにその戦いを思い出した。

その戦いは麗羽と一緒に戦い、彼女を助けたという事もあって考輝の印象に強く残っていた。

それに賊の動きも良く、賊にしては異常なレベルだったのを思い出す。

その時は敵の指揮官は分からなかったが、司馬懿が指揮していたとなれば納得だろう。

「……成る程。やっと話が見えてきた」

そして同時に、考輝の頭の中で一気に話が繋がる。

鈴蘭の話では、司馬懿が宦官に頼まれた仕事をしくじり、そのせいで司馬懿は宦官達に追われ、鈴蘭も奴隷として売られてしまったという事だった。

それに今の司馬懿の話を合わせると、考輝が彼女の指揮した賊を破った事で仕事を失敗したのだろう。

逆恨みではあるが、これなら彼に殺意ぐらい芽生えても不思議では無いだろう。

そして考輝は、もう一つ思い出した事があった。

「……とすると、その火傷はもしかして俺のせいか？」

彼はあの時、かなり大規模な火計を使っている。その火力は、森をまるまる一つ焼き払う程だった。

だから彼女がその戦いで火傷を負っている可能性は非常に高かった。

「そうです、別に大して気にしていませんけど」

司馬懿は普通にすんなりと言うが、考輝はちょっと罰が悪そうな顔をする。

当たり前だが、女性の顔を傷物にする事は決して褒められた事ではない。

特に整形手術など存在しないこの時代においては。

「――それで私は、一体どうなるんですか？」

一方の司馬懿は悲壮的な笑みを浮かべた。その目からはある種の諦めと、覚悟の色が伺える。

そんな彼女に、考輝は表情をいつものように戻して再び機械のような声を発した。

「俺の軍門に降ってもらう。その方が鈴蘭も喜ぶし、何よりお前の才はどうしても欲しい」

考輝は一切迷いなく即答した。彼女のせいで多大な被害が出たのにも関わらずである。

彼の頭の中では、司馬懿を恨んで殺すよりも、仲間にした方が『効率』が良いと判断したのだ。

「すみませんが、お断りさせて下さい」

だが司馬懿もまた即答だった。

こんな状態で下手に考輝に逆らえば、命が無いのにである。

断られた考輝はじっと司馬懿の顔を見つめる。

そんな突き刺さるような視線を受け、司馬懿は静かに話し始めた。

「別に貴方に不満がある訳ではありません。むしろ、仕えるならこの上ない良い相手だと思います。

……しかし……私はもう、姉に会うわけにはいかないんですよ……」

正確に言えば、どう姉に会えばいいのか分からないのだ。

彼女はただ姉を傷付け、それから何も出来ていない。一時は助けよと動いたが、結局はそれも叶わず、名誉挽回など全くだ。

だから彼女は何の理由も無しに、今更のこのこ姉の前に顔を出す

など、プライドに近い何かが許さなかった。
本心では、今すぐにでも会いに行きたいと思っているのにだ。

「だから私は貴方には仕えられません。例え、私が死ぬ事に――」

その瞬間、考輝が服の裾から暗器の短剣を取り出し、彼女の首筋に当てる。

咄嗟の事に司馬懿は思わず黙り、冷や汗を一つかく。だがその表情は一切崩れない。

「……お前、状況が分かっているのか？」

脅すような低い声と鋭い眼光。その二つを持って考輝は問い掛ける。

だが司馬懿は依然として態度を崩さない。
むしろこの状況下で薄く笑い始めた。

「……そんな事をしても無駄ですよ。私はもう覚悟を決めています」

「もう一度だけ言うぞ。状況が分かっているのか？」

しかし考輝はもう一度同じ質問をしてきた。これには流石に司馬懿も表情を曇らせた。

彼の物言いでは、彼女自身を傷付けようとしている訳ではなさそうだ。

何か彼女が気付かない、間接的な意味がなければ、同じ質問をしたりはしない。

しかし、彼が脅している事は声と目つきからして間違いない。

――それはつまり、彼女自身でない、何か別のもので脅している事になり――。

「……まさか」

それに気付いた司馬懿は、思わず声を漏らした。

驚きのあまり目は大きく見開かれ、口はぽかんと空いている。

考輝は今、彼女ではなく鈴蘭に刃を当てているのだ。

鈴蘭は今考輝の配下にいる。彼女をどうにかしようとすれば、彼程容易に出来る者はいないだろう。

勿論、彼とて本気で鈴蘭を傷付けようとしている訳ではない。
司馬懿の本心を見抜いているからこそ、こんな事が言えるのだ。

つまるところ、この行動は司馬懿に足りなかった『理由』を無理矢理にでも与えているにすぎない。
傍から見れば、とんだ茶番だ。

だがだからこそ司馬懿はその茶番に乗った。

「部下を脅しの道具に使うなんて……性格、悪いんですね」
そう苦々しく言いつつも、彼女はニヤリと口角を上げた。

「……否定は出来ないが、お前に言われたくはない。
それでどうする？　脅されながら嫌々に仲間になるか？」

考輝もニヤリと笑うと、首に当てた短剣を裾にしまう。
もう意図が充分伝わったからだろう。

彼はそう言うが、司馬懿が選ぶ選択肢は決まっている。彼女自身、他のものを選ぶつもりなどもう毛頭ない。

だがどうしても、一つだけ確認しておきたい事があった。

「……その前に、質問を一ついいですか？」

「構わない」

司馬懿は大きく息をつくと、真剣な表情になる。その顔には、先程とはまた別の覚悟の色が見える。

「貴方はこの乱世で……一体何をなさるおつもりですか？」

「天下統一。それも最も効率の良い方法でな」

考輝の言葉に一切の迷いは無い。そんな物は彼はとっくに捨てている。

だからこそ、彼はいつも通りの無表情でそんな大それた事を言う事が出来た。

そんな言葉を聞き、司馬懿はクスクスと笑い始めた。
何を考えているのかは分からないが、最低でも嘲笑ではないだろう。

「良いでしょう……。その野望に、我が知謀を存分にお使い下さい。
――それに姉を使って脅されれば、断る訳にはいきませんから、仕方ありません」

口ではそう言いながらも、司馬懿の顔は嬉しそうだ。

「私は姓は司馬、名は懿、字は仲達、真名は樒(しきみ)。
この身と真名を、貴方様に捧げましょう」

「俺は姓は彰、名は義、字は紅炎。真名は考輝だ。
くれぐれも謀反など無いようにな」

考輝達はニヤリと笑いながら真名を交換した。正直なんかシュールな光景だ。

なお考輝は歴史において司馬懿がした事をしっかりと覚えている。
彼がクーデターを起こし、彼の一族が天下を魏から奪った事を。

しかし――。

「大丈夫ですよ。考輝様が生きてらっしゃる間は大人しくしていますから」

「……お前、今サラっととんでもない事を言わなかったか？」

そんな事を笑いながら言っている彼女――樒が裏切るようには、何故だか思えなかった。

単なる勘でしかないが、考輝は妙にその事に自信が持てた。

「それはそうと、いい加減この縄を解いて頂けませんか？

……あ、それともこの状態でいろいろ楽しんでみますか？　私生娘ですが様々な趣向に対応が――」

「今解くから黙ってろ」

考輝は樒の冗談を軽く流し、縄を解きにかかる。

……いや、今の彼女の表情を見るに、もしかしたら冗談ではなかったのかもしれない。

ともかく、考輝が縄を解こうと手を伸ばすと、何やら陣幕の外が騒がしい事に気がついた。
ドタバタと何か暴れ回るような音がして、時折彼の知った声も聞こえてくる。

そして一際大きな音が聞こえたかと思うと――。

「考輝様！！　ここに椦ちゃんがいるって……本当……です……か……？」

鈴蘭が入口を覆っていた簾のような物を突き破り、陣幕の中に飛び込んで来て声を上げた。

そして椦を見付けると目を見開き、身体はプルプルと震え、声は小さくなっていった。
見開かた目には、涙が溢れんばかりに溜まっていく。

「……お姉ちゃん……」

対して樒はあまりにも唐突な実姉との再会に、戸惑いを隠せないようだ。

だが鈴蘭はそれに構わず、とうとう大粒の涙を流して彼女は樒に駆け寄って抱き着く。

その時のスピードは明らかにに怪我人の速さではなく、考輝が口を挟む暇すらなかった。

「樒ちゃぁぁん！！！　良かったよぉぉ！！　また会えて本当に良かった！！！」

鈴蘭はまだ縛られて動けない樒に、左手だけで器用に抱き着く。

その間動かなくなった鈴蘭の右腕はだらんと力無く垂れていた。そんな腕を見て、樒は申し訳なさそうな顔をする。

「……お姉ちゃん、ゴメン……私は――」

「大丈夫だよ。分かってるから」

そして樒は謝罪の言葉を言おうとするが、鈴蘭は更に強く抱き着いて喋らせない。

そして打って変わった小さい声で、彼女は耳元で囁く。その声は優しさと温もりに溢れていた。

「分かっているから……言わなくて大丈夫。椦ちゃんの気持ちは……良く分かっているから……椦ちゃんの事は私が一番分かっているから……」

「……お姉ちゃん！！」

椦もとうとう堪らずに、涙を流し始めた。

「……とりあえずお前等出てこい。それでしっかりど事情を説明しろ」

一方そんな姉妹の再会に口を挟む訳にもいかない考輝は、陣幕の入口の方に向いて不機嫌そうに言う。

すると入口の陰から、玄鳥と亞莎が出て来た。どちらも気まずそうな表情をして、考輝と目を合わせないようにしている。

この場所に椦がいる事を知っていたのは、考輝を除けば亞莎しかいない。そして玄鳥には、この陣幕に誰も入れないように言ってあ

った。

それなのに、鈴蘭は樒がいるのを知っていて、この陣幕に入って来た。

それはつまり――。

「すみません……つい教えちゃいました……」

「いや怪我人相手にさ、本気を出すわけにいかねぇじゃん……？」

どちらも何かしらの失敗をしたという事だ。

その事に関して考輝が文句を言おうとすると、玄鳥が慌てて話し始める。

文句を言われる事を何となく悟ったのだろう。

「そ、それにしても鈴蘭の奴性格変わってないか？　てかあいつが抱き着いいる奴だれ？」

急な話ではあるが、玄鳥の言う事も尤もだろう。

実際今の鈴蘭の姿は、普段の冷静で気弱な姿からは想像も出来ない。

「……あいつは司馬懿。鈴蘭の妹だ」

「……そっか」

玄鳥はその言葉だけで察したように微笑む。

鈴蘭が妹をずっと捜していたのは、周知の事実だった為、玄鳥も知っていたのだ。

「あああああああ！！！！！？？！」

そんな中、急に鈴蘭が奇声を上げる。

何事かと三人が鈴蘭の方を見ると、彼女は樒の顔を見てわなわなと震えていた。

当の樒も鈴蘭の奇行の理由が分からず、困惑した表情をしている。

「し、し、し、樒ちゃん！！　そのお顔一体どうしたの！？？」

鈴蘭は震えながら樒の顔の火傷を指差す。

彼女の火傷はかなり目立つと言うのに、今更気付いたようだ。

「いや……その……」

樒は姉の問いに上手く答えられずに言葉を濁す。
流石に考輝のせいだとは言いづらいのだろう。

「すまん……それ俺のせいだ」

それが分かっているから、考輝は自分から話した。
そしてその言葉に鈴蘭がピクリと反応する。

とりあえず考輝は誤解が生まれないように事情を話し始める。

「実は一年前に――」

「バカバカ、バカ！　考輝様の馬鹿！！
女の子にとって顔は本当に大切なものなんですよ！！！　それを……それをあんなふうに！！！」

だがその矢先、鈴蘭が考輝の所までやって来て左手でポカポカと殴り始めた。

それ自体には大して威力はないが、あまりものキャラ崩壊に、その場にいる殆どの者が唖然とする。

「あ、えっと……すみませんでした」

あまりの状況に、考輝ですらテンパっていた。

だが暴走状態に入った鈴蘭は止まらない。

正しくノンストップ状態だ。

「もし榕ちゃんがお嫁に行けなかったら、責任持って考輝様がもらってあげて下さい！！」

「……は？」

「な……」

「へ？」

「……むしろ私的には、責任持って最初からそうしてもらいたいですね」

『!?』

この樒の一言で、場が更に混沌とした事は言うまでもない。

脅しに合って（後書き）

先日友人に言われた一言。

「お前の小説のオリキャラの真名ってさ、女子っぽくない名前が多いよな」

「……」

張燕→玄鳥
丁原→古万
高順→驟雨
徐栄→大宛
スイ固→因幡
司馬郎→鈴蘭
司馬懿→樒

「……本当だ！」

楓やら菫やら椿やらの在り来りの名前が嫌で気をつけていたら……何故こうなった……。

一応全部何かしろの由来があるのですが、それでも何人かには本当に申し訳ないです。特に高順。

それから司馬姉妹の真名の由来が有毒植物って言ったら何か怒られました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8816s/

真・恋姫†無双Withパワーアップキット

2011年12月29日14時03分発行